

白銀の討ち手

主(ぬし)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

舞台となるのは、『灼眼のシャナ』のIfの世界。

零時迷子という特殊な宝具を体内に持つ主人公、坂井悠二。その宝具を狙って彼の暮らす街は度々襲撃を受ける。物語のヒロインであるシャナとその仲間のフレイムヘイズたちと奮戦して追い払うが、キリがない。そしてついに、少年は大きな決断を下す。

——もしも、彼が「家族友人を守るために故郷を捨ててシャナと共に歩む」という道を行くなら。

——もしも、彼が敗北し、零時迷子を失い、この世から消え去ってしまったら。

——もしも、消えかけの彼の前に『贗作』の能力を持つ紅世の王が現れたら。

——もしも、彼がシヤナの体を手にして過去の世界に復活したら。

本作はそんな「もしも」尽くしのハチャメチャ二次創作SSです。TSF（性転換）設定が嫌いな方、説明を読んで下さった時点で「ペロツ……この味は……駄作の『味』だぜ……」「こいつはくせえツッ！駄作以下のにおいがプンプンするぜツ——ツ！」と思つた方はブラウザの戻るを「いいやツ限界だ！押すねツ！」とクリックして下さい。あなたの直感はきつと間違つていません。それでも読んで下さるといふ物好きで素敵でイケメンな方は、どうぞ最後までお付き合い下さいませ。デイ・モールト・グラッツェ！

目次

1 1 1	1 1 0	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4	1 3	1 2	1 1	0 1
勝利	覚醒	螺勢	敗北	過信	着替	犠牲	超人	擬態	膝枕	無毛	変貌
108	92	78	64	54	48	44	37	28	22	13	1

3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	3 1	2 6	2 5	2 4	2 3	2 2	2 1
希望	真実	決着	苦戦	激突	伏線	亡者	絶望	命名	昵懇	入浴	察知	蛇神
337	326	312	296	271	251	226	206	193	183	163	150	126

1—8	成長	512
1—7	学校	498
1—6	因縁	481
【外伝】	アラモ砦の天使	461
1—5	転校	447
1—4	執着	434
1—3	機銃	424
1—2	触手	403
1—1	急転	381
	義足の騎士編 プロローグ	363
	キャラクター設定	353

【外伝】白銀の討ち手S
その①

564

【外伝】白銀の討ち手S
その③

556

【外伝】白銀の討ち手S
その②

0—1 変貌

「——！！」

遠くでシャナが叫ぶ声。何を言っているのかは聴き取れなかったけど、それが悲痛の叫びだということは理解出来た。

背中につめたい地面の感触を感じながら、ぼんやりと上を見上げる。僕の胸に突き立つ柱のような剛槍『神鉄如意』と、それを握る、何百もの紅世の大群を背後に侍らせる猛将——紅世の王、『千変』シユドナイ。先までの死闘によつてあらゆる部位に裂傷を刻まれ片腕は肩ごとゴツソリと失われているが、その彫りの深い顔面に張り付いた余裕の形相が崩れることはない。

ニイと残忍で誇らしげな笑みを浮かべると、シユドナイは『神鉄如意』を僕の胸からずるりと引き抜く。痛みはない。血も出ない。ただ、煌めく砂のようなものが飛散するだけ。ふと視線を自分の四肢に向ければ、指先や足先からも砂が散り始めていた。淡く儂い粒子が宙に広がり、感覚を道連れにして虚空へと消えてゆく。それが己のカケラなのだと思つづくのにそれほど時間はかからなかった。

胸にポツカリと空いた穴にシユドナイが強引に手を突っ込む。バキリ、とくつついたものを無理やり引き剥がすような、悲鳴のような嫌な響きが全身を震わせる。途端に怖気と絶望感が体内を走り狂い、今まで味わったことのない吐き気を感じさせる。

一秒と経たずに、シユドナイによって何かが掴み出される。複雑な機構と奇妙な紋様の刻み込まれた金色の懐中時計——“零時迷子”。

「■■■■——！！」

僕の上で、シユドナイが零時迷子を高く掲げて歓喜に満ちた声で吼える。それに応えんと、幾百もの紅世の王や徒が腹の底から雄叫びを上げる。零時迷子を護り覆う自在法『戒禁』によってその手は痛々しく焼け爛れているが、勝利の興奮に酔いしれるシユドナイにそれを気にする気配はない。

零時迷子という支えを失った僕の体は、より一層崩壊のスピードを速める。もう下半身の感覚が返ってこない。視界も暗転し、全てが夜闇に溶けていく。存在の力も一滴も残されてはいない。死の淵に引きずり込まれるような恐怖はなく、息苦しさも感じない。それとは真逆、むしろ開放感や浮遊感すら覚えた。これは『死』ではない。これは

僕は、消えるのか。

消える。僕という存在が消滅する。坂井悠二は“最初からなかったモノ”とされ、世

界から切り離され、人々の記憶から完全に忘れ去られる。それが代替物（トーチ）の宿命。だから、わかつてはいたし、覚悟もしていたつもりだった。だけど、その時がこんなに早く訪れるとは思ってもいなかった。自分の力と周りのみんなの力を過信しすぎているのだろう。今さら後悔しても遅いけど、やはり悔いてしまう。

どうしてもっと強くなろうとしなかったのか

どうしてもっと知ろうとしなかったのか

どうして……

唐突に、視界が真っ赤な炎に埋め尽くされる。地上に現出した太陽を思わせる灼熱の輝き。何度も見てきた、贅殿にえとのしやな遮那の炎の一閃。歓喜のあまり油断をしていたシユドナイが一挙動遅れて飛びのくが、遅い。回避する寸前で零時迷子を掴んでいた腕ごと爆炎が燃え包む。炎に投げ込まれた胡桃が弾けるような細かい音を立てて、零時迷子が小さく爆ぜた。琥珀色の炎と共にこの世で唯一無二の宝具を成していた破片が飛散し、その内の幾つかが僕の体にも突き刺さる。

「——ッ ■■■——!!」

先までの高揚一転、一瞬の忘我を経た後、シユドナイが背からコウモリのそれに似た巨大な翼を拡げて憎悪に満ちた怒声を張り上げる。しかし、間髪いれずにシヤナが放つ

た炎のカマイタチが禍々しい怒声を空間ごと薙ぎ散らす。限界まで消耗しているはずの炎髪灼眼の討ち手から放たれる一撃必殺の業火に、両腕と零時迷子という目的を失ったシユドナイがたまらず空高く飛び去っていく。幾百といた部下たちもそれに続き、彼らは呆気無く夜の彼方へと消えていった。

大事な贄殿遮那すら放り捨てて、シヤナが必死の形相でこちらに駆け寄ってくる。服は原型を留めないほどに破損し、体中にひどい傷を負い、咳き込む度に唇から血が伝い落ちる。それなのに、足をもつれさせながらもがくように駆ける。僕のために、駆けつけてくれる。

ありがとうと伝えたかったけど、口をパクパクさせるだけで声は出てくれなかった。もどかしくて手を使って何か伝えようと考えたが、肩から先がすでになくなっていく。とに気づいて諦めた。見る見るうちに体が光る粒子と化して霧散し、ついには僕の首から下は塵となってしまった。見るもの全ての色彩が急激に薄れていく。もう、時間がない。お別れの言葉くらい交わしたかったけど、それは許されないらしい。もつとも、消えゆくトーチとなつても今まで仲間たちと過ごせたことを考えれば、それだけで僥倖なのかもしれないけど。紅蓮の髪がシャンデリアのように視界を覆う。輪郭すらぼやけてほとんど見えなかったが、それがシヤナだということはすぐにわかった。

「!!」

絹を裂くような悲痛な叫びが耳朶を打つが、もはや脳まで伝わってこない。

ごめん、シヤナ。何も聴こえないんだよ。何も。

顔に次々と熱い雫が落ちてきて、撫でるように頬を伝い落ちる。僕のために泣いてくれているんだ。あのシヤナが、僕のために。それだけで嬉しい。

精一杯の力を振り絞り、安心させてあげようとしてなんとか微笑を形作る努力をする。肉体から返ってくる感覚がないから自信はないけど、たぶんできているはずだ。変な顔になってなければいいのだけど。

「……!!」

僕を見るシヤナの表情がより苦しげに歪む。微笑むのに失敗したんだろうか。いや、きつと成功したから、シヤナはより悲しんでいるんだ。最期くらい、君を笑顔にしてあげたかったのに。僕は力不足だった。何もかも、足りなかった。後悔してもしたりない。でも、もう取り返しは、つかない。目に映るもの全てが真っ白に染まっていく。さようなら、シヤナ。それと……ごめん。一緒にいられなくて、ごめん。

僕という存在が消えていく。

もう何も聴こえない。

見えない。

感じ、ない——

「ダメ、イヤだ、行かないで悠二！悠二に伝えたいことがいっぱいあるの！してほしいことも、してあげたいことも、一緒にしたいことも、まだまだたくさんある！行かないで、悠二、悠二い——!!」

バカな僕は、最後の最後まで、彼女の思いに応えることができなかった。

——ああ、本当に、僕はバカだ。大馬鹿者だ。結局僕は、シヤナに出会って、彼女に護られ始めてから、何も成長していなかった。シヤナという強大な城壁に護られながら、己の非力さを垣間見ることが忘れて安寧を貪っていた。修練を重ね、共に死地を乗り越えて闘いながらも、どこか彼女の庇護に甘えていた。こんな結末になって当然だ。だからこうして死んでしまうことに……って、あれ？僕今、考えてる？思考してる？つまり……生きてる!?! いったいどうして!?!

『生きているんじゃない。かろうじて存在しているんだ』

っ!?だ、誰だ!?

『紅世の王、《贗作師》 テイレシアス』

紅世の王?なんでここに……いや、そもそもここはどこなんだ?僕が生きているわけじゃないというのは、どういうこと?僕はたしかに消えたはずなのに。それに、なんなんだろう、この感覚は。肉体の感覚がない。手足の感覚もないし、視覚や聴覚もない。意識だけがふわふわと宙に浮いているようで、まるで幽霊になったみたいだ。

『ほお、人間のガキのくせに意外に冷静だし、感のいいやつだ。その通り、お前はたしかに死んだらしいが、どうやらお前の存在の力はたいそうしぶといらしい。消えかけながらも紅世と現世の狭間に引つかかっているとは。よほど現世に未練があるのか、特殊中の特殊なのか、はたまた何かの宝具にでも導かれたのか……。とにもかくにも、なかなか珍しい奴だ』

な、なんだか小馬鹿にされてるみたいだな……。ともかく、僕がこんな風になってるのはたぶん僕が宝具ミステスの器テスだったからなんだと思う。

『ミステスのことを知っていると、お前、紅世や徒ともからのことも知っているのか?これはさらに珍しい。ふらついていていた甲斐があつたというものだ』

まあ、ね。僕が持っていた宝具が原因で、いろいろワケの分からない目に遭ってきたし。紅世と関わり続けた人生の最後の最後に遭遇するのが紅世の王なんて、僕の運命も

皮肉の連続だよ。それももう終わってしまったけど。ところで、あなたはここへ何をしに？

『さつきも言ったが、俺は「贋作師」だ。現世にあるという、ミステスに宿つたとびつきり珍しい宝具を検分してその贋作を作つてみたいと思つてやつてきたんだが、すんでのところで破壊されたらしい。あの胡散臭い連中のおかげで全てが台無しだ。あれほどの宝具はもう二度と拝めないだろうに。価値のわからんクソツタレどもめ』

ご、ご愁傷さまでです。でも、どこかで聞いた話のような……。

『ふん、済んでしまったものは仕方がない。で、お前が宿していた宝具というのはいったい何なんだ？まだその辺にあるのか？せつかく現世まで足を運んだんだ。土産くらい持つて帰らんと腹の虫が収まらん』

ああ、僕の中に入っていたのは零時迷子つて宝具だよ。零時になったら持ち主の存在の力を完全に回復させるつていう宝具で——

『なに——!!?!?』

わっ?!い、いきなりなんだよ？

『零時迷子だ?!?おまえ、零時迷子を宿していたミステスなのか?!?』

そ、そうだけど、それがどうかしたの？

『どうしたもこうしたも——……ふむ』

テイレシアス、さん？

『お前、記憶力はいい方か？』

ひ、人並み、かな？ シヤナと一緒に行動しているうちに鍛えられてはいたし。

『シヤナ？』

ああ、〃炎髪灼眼の討ち手〃のことだよ。〃天壤の劫火〃 アラストールと契約したフレイムヘイズさ。

『なんと〃炎髪灼眼の討ち手〃と行動を共にしていたというのか。ということは、かの有名な〃炎髪灼眼の討ち手〃と数々の紅世の王たちとの戦闘を目撃したか？ 目撃したな？ ばつちりと？』

は？ まあ、ばつちりと。

『宝具も見たな？ 多くの宝具を。よく覚えているか？』

瞬間記憶みたいな漫画みたいな能力は持っていないけど、危機的状況だったから宝具の形状や特徴はよく覚えてるつもりだ。……でも、それがいったいどうしたつていうんだ？ この紅世の王はなにをそんなに興奮しているんだろう？ 目には見えないけど、腕組みをして何事かを悩んでいる姿が目には浮かぶようだ。

『……契約ができれば、多くの宝具の記憶を手にしたフレイムヘイズに……いや、トーチのカケラなんぞでは契約は不可能……しかし、力の質は類を見ないほどに強力。知識も

戦闘経験もある。いちいち最初から鍛えなくともいいし便利だ。身体さえ施せば、あるいは……』

もしもーし？あのー、テイレシアスさん？

『……お前、名をなんと言う？』

と、唐突だなあ。名前は坂井悠二だよ。さかいゆうじ。

『サカイユウジ、言われなくともわかってるだろうが、お前はもうすぐ消える。俺が今ここでふつと息を吹きかけただけで、埃にまみれた蜘蛛の巣のように、その意識すらあつという間に虚無に溶けて自分にも誰にも認識できなくなる。跡形もなく、だ』

……わかつてるさ。よくわかつてる。

『現世に遣り残したことは？未練はないか？』

……あるに決まっている。あるに決まっているじゃないか。伝えたいことが、したいことが、してほしいことが、一緒にしたかったことが、たくさんある。

『もう一度やり直せるとしたら？』

———なんだって？

『俺と契約を結ぶことでもう一度現世に戻ることができるとしたら？ユウジ、お前はど
うする？』

そんなの、決まってる！戻る！戻って今度こそシヤナを護ってみせる！！

『よくぞ言った、ユウジ。しかし、お前はトーチ、しかも消えかけのカケラだ。つまり、普通の契約はできない。つまり、フレイムヘイズにはなれない。』

『その通りだ、お前は頭がよく回る。ますます便利だ。だが、俺の真名を理解してはいなかったようだ』

“贗作師”——まさか、僕の体を贗作できる？

『お前は本当に頭が回るな。ますます気に入ってきたぞ。お前を見つけたことを僥倖に思えてきた』

教えてくれ、僕は何をすればいい？

『焦るな。まず、もつとも鮮明に記憶に残っている人間を思い浮かべろ。フレイムヘイズでもいい。とにかく、出来る限り細部にまで徹底的に思い浮かべろ。その対象が強力であればあるほど、お前の新しい体も強力になろう』

決まっている。——シヤナ。炎髪灼眼の討ち手、紅世に関わる全ての者が畏怖の念を抱く、最強のフレイムヘイズ。そして——僕のもつとも近くにいてくれた、一番記憶に残っている少女。

『よし、いいぞ。イメージが固まってきた。次は、』

次は？

『覚悟しろ』

!! は？あ、あれ？なんか周りが白く燃えているんだけど……あちちち！熱い、熱いって

1—1 無毛

「だから熱いって——ひぎいッ!？」

あまりの熱さに思わず女の子のような高い悲鳴を上げて飛び起きてしまい、さらにちようど頭の上にあつた送風用らしきパイプに思いつきり頭突きをしてしまった。衝撃が頭蓋の中をクワンクワンと響かせる。思わぬ激痛に、悶絶して額を押さえながらしばらくゴロゴロと床を這い回るしかなかった。

「いいいいつつ——……ん……?？」

なぜか身体がやけに軽く小さく感じる。髪の毛もえらく長いらしく、背中に擦れる長髪は腰の辺りまで伸びているようだ。絹のような見事な肌触りに、それが自分の髪であることを忘れそうになる。

「何をやっている。せつかく作つてやった肉体をいきなりぶつ壊す気か?？」

唐突に、胸の辺りから地鳴りのような低い声が聴こえる。その声は、さつきまで会話していた紅世の王、《贖作師》テイレシアスの声だった。

「テイレシアス……さん?なんでそんなところに?……あれ?？」

声が、変だ。数年前にとつくに声変わりを遂げたはずの自分の声の面影はまったく見

られず、鈴音のようなソプラノの声となっている。僕の声というより、シヤナの声に近かった。新しい身体だからなのだろうか。だとしたら、男の容姿と似合わなくてとてもかつこ悪いのだが……治るのだろうか。

「お前がイメージしたフレイムヘイズの紅世の王の神器がペンダントの形態だったから、俺もこうなったんだ。あの頑固ジジイと一緒になのは腑に落ちんが……」

ブツブツと何やら呟くテイレシアさんは、確かにアラストールとそっくりの形をしていた。僕がシヤナの姿をイメージしたから、テイレシアさんもアラストールのようにペンダント状（シヤナはコキュートスと呼んでいた）になったらしい。するとこの声質の変化もその影響を受けているのかもしれない。喉仏を確かめようと首に触れるが、そこにあるはずの固い肉の突起はなく、細い首だけがあった。肌触りは絹のようにきめ細かい。うなじの辺りにまで指を滑らせると、明らかに今までの自分のそれとは違う、柔らかでそれでいて線のしつかりした柔肉の感触が返ってくる。指の腹で首筋をなぞれば、極限まで無駄を廃した雌獅子のような強靱な筋肉までもハツキリと感じ取れる。自身の変貌ぶりに、自分が紅世の王と契約したことを改めて実感させられる。これが、『フレイムヘイズになる』ということなのか。

しばし手の平を握ったり閉じたりして指先の感覚を確かめてから、胸の内から生まれたい疑問を僕と契約した紅世の王にぶつける。

「それでここはどこなんだ？ 現世だということとはわかるんだけど……」

言いながら周りを見渡す。薄暗く、よどんで湿った空気が漂う空間。感覚だからたしかではないが、どこかのビルの中のようだ。周囲を見渡して観察すると、窓らしきところが木板で封印されていた。そこら中には共通点のない多種多様な物品が埃を被つて放置されている。もう使われなくなつて久しいようだ。しかし、この部屋はどこかで見ることがある。忘れたくても忘れられない、僕が初めて戦つた紅世の王が根城にしていたデパートの造りに似ているような……？

「さあな、知らん」

「そんな無責任な……」

「喜ぶべきだろう。それはそうと、そんな姿で一般人に見られると今後の行動にも影響が——つと、誰か来たようだぞ」

「そんな姿つて——へ？」

反射的に意識を聴覚に集中する。鼓膜が僅かな空気の振動——足音を捉える。今までの僕では絶対に聞き取れないような微かな音だ。それだけではなく、その足音がどこから来ているのか、こちらからどのくらいの距離にいるのか、どこへ向かっているのか、どんな体型の人間なのかまで感覚で理解できる。

「す、凄い……！」

思わず感動してしまう。それくらい、新しい身体の性能は最高だった。これでシヤナを護れる。それどころか一緒に並んで戦えるかもしれない。もしかしたら、いつもダウンスさせられてばかりだったヴィルヘルミンさんも見返すことだって、できるかもしれない。

「出来栄えに感動してくれているところを悪いが、誰かさんがすぐそこまで来ているぞ。いいのか？」

テイレシアスさんの声にハツとして立ち上がる。驚くほど軽い身体は重さなど感じさせずにわずか一挙動で立ち上がることができた。床の冷たさが直に足裏に伝わり、背筋がひやつとする。裸足のようだ。僕は消える時に靴を履いていなかっただろうか？

不思議に思つて足元を確認しようとしたところで、ボタンと目の前の暗闇が四角に切り取られた。眩しい光が目を刺す。

片手で光を遮り、眼を細めてそこにいる人間を見る。光で眼が眩んでハッキリと見えないが、その人間はなぜかじつとその場に立ち尽くしているようだ。かかしのように硬直し、動きの気配がない。殺気も感じない。どうやら、敵ではないようだ。

「あ、あ、あ……！」

勝手に声が出てしまった。今度こそ真正正銘、僕の声だ。でも、何かがおかしい。僕は声を出した覚えなどないし、その声は目の前の人間が発しているように聴こえる。

「……………」

虹彩が瞳孔を瞬く間に調節し、超人的なスピードで視界を光に馴染ませる。相手の顔がハッキリとしてくる。さっそく眼前の人間が何者なのかを確かめようとして――

「は……………」

そこには、僕がいた。

顔を真っ赤にして目を真ん丸くした坂井悠二が、空気を貪る金魚みたく口をパツクンパツクンさせながらこちらを凝視していたのだ。

「ハ、これはどういうこと？」

小首を傾げて胸元の紅世の王に尋ねる。目の前に現れたのは僕の偽物なのか。それにしては人間的すぎるし、自分で言うのもなんだけど、まんま僕と同じ間抜け面をしている。が、テイレシアスが答えるより先に目の前の坂井悠二が上擦った声で叫んだ。

「それはこっちの台詞だよ！ な、な、なんで裸なんだよ、シヤナ!?」

開口一番、ワケの分からないことを言い出す僕ではない坂井悠二。

「裸？ シヤナ？ さっぱり意味が分からない。こいつは本当に僕なのだろうか？ いや、そもそも僕がここにいるのだから、やっぱりこいつは僕の偽者だ。そうに違いない。だとしたら何の目的で――」

「あー、とりあえず自分の姿を見てみる」

「へ?」

首元から掛けられた呆れ声に、首を曲げて自身を見下ろす。鉄球がそのまま地面に落ちるように、何の障害もなく目線がストーンと足先に落ちる。

「別に何も無いじゃ……何も無い?」

言いかけて、もう一度自分を見る。胸の辺りが申し訳程度に膨らんで柔らかな曲線を描いていたが、凹凸と言えればそこだけだ。少しはついていたはずの筋肉は姿を消し、肌は驚くほど真つ白に、お腹の辺りは滑らかな陶器のようになっていた。首を傾げながらもその下にある男の象徴に目を向けて——目を、向けて……目を……

「な、な、ない!? ってか、そもそも僕服着てない!」

「今さら気づいたの!?! いいから早く何かで隠してよ、シャナー!」

僕そっくりの目の前の人間が体を翻して後ろを向く。さつきからシャナシャナって、いったいなんのつもりなんだ? でも今はそんなことを気にしている場合ではない。応急処置として手で股間を押さえて陰部を隠しておく。やはりナニもない。あつたものがないということがこれほど不安だとは思わなかった。まるで大事な恋人をなくしてしまったような喪失感に泣きそうになる。

「ちよ、ちよつと……これっていったいどういうことなんだ!?!」

「覚悟しろ、と言ったろう。なぜ目の前に坂井悠二がいるのかは俺にもよくわからんが。

お前、双子だったのか？」

僕の質問にテイレシアスさんがさも平然とズレた答えを返す。

「違う！だいたい覚悟って言ったって、だ、大事なところがなくなっちゃうなんて誰が想像できるか！」

僕のひとつと慟哭のような問いかけにテイレシアスさんはあっさりど、

「その程度の変化なものか。ほれ、その鏡を見てみる」

なんてのたまった。言われるままに、壁に立て掛けてある罅の入った姿見を覗き込む。そこには、

「……シャナ？」

艶やかに濡れ光るストレートの黒髪。派手な主張はせず、しかし流麗なラインを描くしなやかで小柄な肢体。見る者全てに強く清冽な印象を与える、稚気と美貌が共存する容姿。紛れもない、炎髪灼眼の討ち手の姿だった。

最後の別れの記憶が鮮烈に沸き上がる。もう会えないと諦めていた少女に再会できたことに涙腺が途端に疼く。懐かしさと恋慕が一緒くたになって胸をいっぱいにし、僕は弾かれるように彼女の元に駆ける。

「シャナ！いたのなら早く言ってくればいいのに！会いたかった——えっ？」

彼女の肩に手を伸ばそうとして、その指先がこつんと姿見に当たった。目の前のシャ

ナも同じように手を突き出して呆然とこちらを見つめている。お互いの指の腹があべこべの世界を隔てて重なっている。シヤナの微笑みかけた顔が秒を追うごとに凍りつき、片方の頬がピクピクと痙攣する。

「——はは、は。まさか、」

乾いた笑いを漏らしながら自分の頬や腕を触る。目の前のシヤナも、引き攣った笑いを浮かべて僕と同じ場所を触る。僕が左を向くとシヤナが右を見る。シヤナの顔から下を見るとシヤナもこちらの顔から下に目をやり、

「……ッ!!」

つるつるだった。誰がなんと言おうと、つるつるという表現しか例えようがない。これ以上は言えない。言えば現実を認めてしまう。

一気に体中の血液という血液が脳天に昇る。あまりのシヨックに髪の毛がぶわつと逆立ち、身体もビシリと硬直してしまうが、視線はそこに釘付けになってしまつて離せない。一糸纏わぬ少女の穢れのない無垢なそれに張り付いた視線はまるでアロナルフアで接着されてしまったかのような。しゅごー、しゅごー、と濁流のように血管を行き来する血液の流音が聴こえる。

「おい、大丈夫か？」

胸元から響いてくるテイレシアスさんの心配そうな声に、僕はハハハと笑いながら、

「もう無理DEATH」

バツタリとその場に倒れこんでしまったのであった。うろたえて必死にわめき散らすもうひとりの僕の声が聴こえる。薄れゆく視程の隅で、急ぐあまりなにかに蹴躓いて自分で自分を背負投する坂井悠二の姿が踊った。僕って、こんなに情けなかつただろうか……。

1—2 膝枕

「——ストール、なんで何も言わないのさ？今のシヤナは明らかにおかしいよ。ていうか、アラストールの声も何だかおかしいような……」

「——るな、これはアレだ。仕様だ」

「——がわからないよ。二人揃って頭でも打ったの？」

頭の上から話し声が聴こえる。一方は僕の声だ。知らずに寝言を言ってしまったのか。うつすらと目を開ける。貧血を起こしたように頭がクラクラする。えーつと、何があつたんだっけ？たしかテイレシアさんに新しい身体を作ってもらって、それから、それから……

「あ、シヤナ。気がついた？」

「ひゃい!？」

ずい、と視界を僕の顔が覆い隠す。自分自身に顔を覗き込まれるという心臓に悪い出来事にびっくりして思わず変な悲鳴をあげてしまった。少しでも距離を開けようと頭を反らせると、頭の下に硬くもあり柔らかくもあるゴムみたいな変な感触を感じた。これはまさか……!?

「ああ、ここには枕になるようなものがなかったから、膝枕をするしかなくて——つて、立ち上がっちゃダメだつて!!」

「へ?うわわわわっ!?!」

男に膝枕をされるといふ気色の悪いシチュエーションから一刻も早く脱しようとする身を起こそうとして、狼狽した坂井悠二にぐいと押さえつけられる。自分自身の意外な腕力にドキリとさせられたのも束の間、ようやく自分がシヤナの姿になってしまつていふことと、何も身に纏つていないことを思い出した。身体の上には詰め襟の学生服がかけられている。この肉体が小さいおかげか、上着だけでも下腹部までなんとか隠せていた。服の裾から伸びるスラリとした白い太ももに、それが自分の脚であるにも関わらず頬が熱くなつていく。

「ちよ、ちよつとあつちを向いてろ!今すぐ!!」

「わ、わかつたよ」

僕——なんかややこしいからこれからは暫定的に“悠二”と呼ぶ——に後ろを向かせてから、急いで学生服を羽織つて前のボタンを留める。それほど背が高いわけではない悠二の上着でも、せいっぱい伸ばせばなんとか太もも半分までは隠すことができた。なぜ僕がシヤナの身体になつていいのかわからないが、シヤナの裸を安易に見せびらかすわけにはいかない。それが悠二であっても、だ。

「一体全体、これはどういうことなんだ？」

さつとペンダントを掴むと、低めた声でテイレシアスさんを問い詰める。テイレシアスさんは悪びれた様子など一切なく、むしろ呆れたような口調を返してくる。

「お前、俺が『誰かを思い浮かべろ』と言った時、シヤナというフレイムヘイズを思い浮かべたろう」

その通りだ。『思い浮かべた対象が強ければ強いほど新しい身体も強くなる』。だから、シヤナを思い浮かべた。コクコクと頭を上下に力強く振って肯定を示す。

「そのせいだ。誰しも自分自身の姿を鮮明に思い浮かべることとはできない。なぜなら客観的に自身を見ることはほとんどないからだ。それゆえに、お前の肉体をお前の記憶に従って作ろうとしても、不安定で壊れやすく脆い体しかできなかつたろう。元々ミステスだということもあるしな。しかし、他人の姿なら鮮明に思い浮かべることができる。」

「そういうことは早く言ってくれよ！」

ぼろぼろと涙を流しながら抗議する。『誰かを思い浮かべろ』と言われた時に予想すべきことだった。なんで想像が至らなかつたのか。こんなことなら、気に食わないがカムシンの姿でも思い浮かべるべきだった。

「聞かれなかつたからな。しかし、なぜ坂井悠二がもう一人存在するのかが腑に落ちん。

嘘をついているようには見えんし、人形というわけでもない。それに……」

「……ああ、間違いない」

少し意識を集中すれば感じとることが出来る。背後の坂井悠二の内から小さく響く、秒針が時を刻むような存在の力の揺らぎ。間違はなく、僕がかつて蔵していた零時迷子の鼓動だ。

「お前も気付いたか。零時迷子を蔵しているということは、この坂井悠二は間違はなくお前自身だろう。この事態は俺の介入によるものではない。どうなってるのか……」

「ね、ねえ、シヤナ？まだ？アラストールとなにをポソポソ話し合ってるのさ？ていうか、アラストールの声もいつもと違うっていうか」

こちらに背を向けて正座している悠二が気まずそうに話しかけてくる。その声は狼狽しきっていた。僕も背後でシヤナとアラストールが小声で相談していたらかなり不安になると思う。とりあえず敵意はまったくくないようだし、さすがにこの状況が続くのは可哀想だ。

「その話はまた後で。今はこの坂井悠二から話を聞き出そう」

「うむ」

短い作戦会議を終えると、僕は長い髪の毛を背後にさつと払ってから悠二の前に回りこみ、見下ろす形で悠二と目を合わせる。

「えーっと、さっきのことは忘れてくれないかな」

「へ？」

僕の願いに、悠二がぼかんと口を開ける。瞬間、イラツとした感情が湧いてくる。僕はこのんなに飲み込みが遅かったろうか？笑顔を崩さないように努めつつ、僕はもう一度同じことを繰り返す。

「だから、さっき見たこと、聴いたことは全部まるごとまるつとごりつときれいさつつぱり！忘れてほしいんだ」

「で、でも——」

ビキリとこめかみに青筋が走る。シャナは僕を見ていつもこんな気持ちになつていたのか。怒りに身を任せて肉体に意思を委ねる。感情の流れるままに細腕は振り上げられ、手が背中に回される。カチャ、と冷たい何かを掴む感触。そのまま流れるようにそれを引き抜くと、悠二の首にピタリと押し付けた。

それは、圧倒的な存在感を放つ、この小さな肉体に有り余る大太刀。見まごう事なき贄殿にえとのしやな遮那しやなだった。なぜこれを使ったのかはわからないが、それも後で考えることにした。ないよりもあつた方がいいし。

「ひい!？」

悠二がマヌケな悲鳴をあげる。自分の情けないところを見せ付けられている気がし

て、さらに機嫌が悪くなる。

「忘れて、くれるかな？」

顔を近づけてニツコリと微笑む。涙目でガクガクと壊れたオモチヤみたいに頷く情けないかぎりの自分を見て、僕は深い深いため息をついた。

1—3 擬態

「まだお願いがあるんだけど、いいかな?」

「う、うん、別にいいけど。ところでシヤナ、今日はいつもと口調が違うね。なんだか別人みたいだ」

そんな悠二の疑問に、僕はギクリと表情筋を引き攣らせた。つう、と汗まで背筋を伝い落ちる。ここでもばか正直に「実は僕はシヤナの姿をしているけどシヤナではなく君と同じ坂井悠二なんだ」とでも答えようものなら事態がさらにややこしくなりそうだと。とりあえず、今はシヤナのふりをしておいた方がいいだろう。いそいで対策を導き出すと、僕はシヤナの口調を思い出してそれを再現する。

「う、うるさいうるさいうるさい!この変態悠二!!」

「えええええ!!?なんでそうなるの!?!」

少し不自然だったろうか。まあ、シヤナはいつも無茶苦茶だし、いいよね。頭の中でシヤナの怒り顔をトレースし、ふんつと眉間に力を込めてムツツリ顔を作ると、シヤナがいつもそうするように腕を組んで偉そうにふんぞり返ってみせる。こうすると、もはや股がスースーしてとても心許ない。

「しゃしゃしゃ、シヤナ!!今はそのポーズはダメえええええええ!!!」
 「ひえ?」

突然、悠二が慌てふためいて学生服の前の裾を引っ張った。僕の小さな身体がシーソーのように簡単に前のめりにされてしまう。

「みみみ、見えちゃうよ!その——し、下が!穿いてないんだから!」

見える?僕がふんぞり返ると見えちゃうものっていったいなんだ?穿いてないって……。

「……っ!!」

膝から力が抜けてその場にぺたりとへたり込む。恥ずかしい。見られたのはシヤナの姿をした身体であつて僕の身体ではないはずなのに、それでも人間の一番の弱点であり恥部であるそこを見られるのはかなりの抵抗がある。

「……ごめん。浅はかだった」

「気づいてくれたのならいいよ。あははは……」

横を向いて頬をぽりぽりと掻く悠二。頼むからニマニマした顔をするのはやめてくれ。そういうとこだぞ。自分は気が付かれていないと思つていても女の子は気がついてるんだぞ。いや僕は女の子じゃないんだけど。

ゴホン、と咳をついて話を切り替える。悠二も居住まいを正してきりつと表面上はマ

ジメな顔をする。皮一枚下は相変わらずニヤニヤしているのがバレバレだけど。

「ゆ、悠二、ちよつと変なことを聞くけど……現時点、この世界はどうなってる？例えば、襲撃してくる敵とか、零時迷子のこととか」

悠二は不思議そうな顔をしたが、何かのテストだとも思ったのか、マジメに応えてくれる。

「つい先週に『探耽求究』ダンタリオンっていうおかしな紅世の王が街を襲ってきた。街はめちやくちやにされちゃったけど、カムシンとかが派手に暴れまわってなんとか敵は撃退した。零時迷子は無事。……それがどうかしたの？」

——なんだって？

「すると今は、高校一年の夏？」

「そうだけど。ねえ、シヤナ、今日はホントにどうしたの？おかしいよ！」

いよいよ悠二が本気で心配してこちらの顔を覗き込んでくるが、その声は耳に届かない。目まぐるしく渦を巻いて思考が繰り返される。悠二の言うことが本当なら、今この世界は、僕が消えた時よりずっと前だということになる。高校一年なんてとつくに過ぎていたはずだし、戦局はもつと大きく、複雑になっていた。それに応じて僕は高校を卒業するより前にとつくに街を出た。それが僕の知る現在だ。だが、たしかに今僕が足を記しているこの世界が過去だというのなら、僕以外に坂井悠二が存在することにも納得

がいく。でも、どうして過去なんかへ？テイレシアさんは介入していないと言っていた。じゃあ、何が起きた？

「シヤナ？黙りこくつちやってどうかし、」

「悠二!!」

「うわ!!なななに!?!」

いきなり立ち上がった僕に悠二が驚いて派手に尻餅をつく。可哀想なまでに不様に見えるのは、僕がシヤナの身体を手にしたからか、それともシヤナの感情を勝手にトレースしているからか。どちらを考えても僕自身が情けなくてるので考えないことにする。

「はあっ!」

板で封印された窓に近づくと、それを一息にハイキックで蹴り破る。宙に見事な弧を描く蹴りが自然にできたことに自分でも驚く。シヤナの肉体に長い鍛錬の結果染み付いた格闘技などの動きは、僕にもある程度再現ができるのかもしれない。差し込んでくる熱い太陽の光を背に、悠二に向かって人差し指を突き出して釘を刺しておく。

「今ここであつたことは絶対に忘れるのよ!誰にも話しちゃダメ!たとえそれが私でも!!いい!!」

「なんでシヤナにも……?」

「わかったかと聞いているの！どうーゆーあんだすたん！」
「い、イエス、ママ！」

過去に飛ばされた可能性が出てきた以上、歴史に無暗に影響を与えることは避けるべきだ。タイムパラドックスが起こると時間の流れが崩壊する、なんて話を聞いたことがあるし。ハートマン軍曹じみたの僕の怒声にびしりと敬礼の姿勢をとった悠二を背に、僕は窓枠に片足を乗せる。

「シヤナ、どこに行くの？ゆっくり休んだ方がいいんじゃない？」

「お前には関係ない。変態悠二」

背後の声に振り返らずに応える。変態と言われたことに反論できないのか、悠二はぐうと変な声をあげて押し黙った。故意ではないとはいえシヤナの大事なところをバツチリ見たのだから反論できないのは当然だ。自分に言うのもなんだけど、いい気味だ。

顔を出して窓の下を見る。どうやらここはビルの上階だったらしく、地上の人間がミニチュアのように小さく見える。周囲を見渡して、このビルに既視感を覚えた理由を悟る。かつて『狩人』フリーアグネが根城にしていた廢ビルの旧依田デパートだ。フリーアグネを僕とシヤナが討滅したあとはマージョリーさんの隠れ家になる予定の、御崎市で一番高いビルだ。

ゴウゴウと耳元を唸りを上げて強風が吹いた。かなり高い。落下死を想像して思わ

ずゴクリと息を呑む。贅殿遮那が出せたのだから、きつとあれも出せるはずだ。その証拠に、シヤナの身体は『できる』と僕に伝えてくる。あんまり長くこの状態でいると悠二が余計に怪しむ。自分で言うのも自画自賛するようでおかしいけど、坂井悠二には妙に鋭いところがある。その鋭敏さで窮地を切り抜けたこともしばしばあるからこそ、これ以上詮索されるとボロが出てしまいかねない。のんびりと覚悟を決める時間はない。

「一か八か！うおりやあああああ!!」

シヤナが絶対に口に出しそうにない掛け声を上げると、僕は窓から身を乗り出して空中へと舞い降りた。

「い、いつたいなんだっただ……あ、シヤナ、服は?」

悠二が急いで窓へ走り寄り、身を乗り出して階下を見下ろす。そこには、真つ逆さまに地面へと墜落していく少女の姿があった。

「ひゃああああああ!!落ちるううううう!!」

ジェットコースターなど比較にもならない、内臓全体を震わせる浮遊感覚に手足をばたばたさせて戸惑う。学生服がめくられて恥部が丸見えになってしまうのを手で押さえつけて防ごうとするが、そうすると今度はお尻が丸見えになってしまう。悠二からズボンも

奪っておけばよかった。いやいや、そんなこと考えてる暇か！

「当たり前だろうが。なぜ飛び降りたんだ？ 吊鐘を鳴らすにはまだ早いだろう」

今までだんまりを決め込んでいたテイレシアスさんがようやく口を開いた。契約相手が今にも地面と激しくキスしそうだというのに、その声はひどく落ち着き払っている。まるで僕がこの状況を乗り越えることができるかと確信しているかのようだ。確信してくれるのは嬉しいけど、その根拠を知りたい。今すぐ！

「シヤナみたいに炎の翼を出して飛ぼうと思っただけど、ちつとも出てくれなくて！ どうすればいいんだ!？」

「やれやれ、そんなことだろうと思っただぞ。いいか、自分の感覚と体の感覚を同調させる。その身体のモデルに出来ることはお前にも再現出来る」

生麦生米生卵を連呼できそうなほどの早口で問いただした僕にテイレシアスさんは落ち着き払って助言を与えてくる。感覚を同調させろと言われても、どうすればいいかわからない。でも地面は一秒ごとに恐ろしいスピードで迫って来る。旧依田デパートは40メートル程度の高さしか無い。ということは落下にかかる時間は4秒もないはずだ。人形のようなだった眼下の人間はもはや輪郭も判別出来るほどに迫っている。出来るかどうかは関係ない。やるしかない！ 覚悟を決める！

すう、と息を吸って精神を落ち着かせ、全身の神経に感覚を行き渡らせる。やがて訪

れる痛みの予想を五感外に押し出し、意識の流れを内面へと向かわせる。ざわざわと震えていた心が静けさを取り戻す。ビュウビュウと吹いていた風の音が遠のき、消える。精神が波一つない月下の湖面と化す。シヤナとの訓練で精神制御の術はしかと身についていた。

シヤナが翼を広げるイメージを脳裏に思い浮かべる。真つ赤な紅蓮の炎が左右に大きく拡がり、猛々しく凜々しいシヤナの姿を炎色に彩る。炎の翼が力強く大気を叩きつけ、強大な揚力を生み出す。そんなイメージを自分に重ねて――

ちり、と火の粉が背中から溢れ出る。

「ツツ出る!!」

カツと目を見開いた瞬間、背後で激しい燃焼音を弾けさせて爆炎が顕現する。荒れ狂う炎は一瞬で左右に別れ、羽ばたき一つで揚力を掴む。間一髪で鼻先をアスファルトが掠める。炎の疾風と化して通行人の間隙をすり抜け、驚愕の声を遥か後方に置き去りにして地面すれすれを滑るように飛翔する。気がつけば、暴風に弄ばれていた長い黒髪も燃え立つ焰色に染まっていた。まるで雄々しい獅子の鬣のようだ。翼を羽ばたかせようと意識すると、翼もそれに従って揚力を掴む。どうやら僕は本当に、炎髪灼眼の討ち

手”シヤナになってしまったらしい。

「上出来だ。お前は筋がいい」

テイレシアスさんの褒めの言葉に照れを含んだ笑みを返して翼を一際大きく羽ばたかせ、僕はなだらかな曲線を描きながら蒼穹の空へと舞い上がった。

突如吹き荒れた疾風に人々が悲鳴と悪態をつく中、一人の男が呆然と宙を仰ぎ見ながら眩く。

「見えた」

1-4 超人

「凄い！凄い！これがシャナなのか！」

機械的な補助ではなく、この身のまま空を自由に飛べるということがこんなに素晴らしいことだとは思ひもしなかった。水圧に匹敵するほど強烈な空気圧を物ともせず、僕は太陽を直指して飛行速度を増し続ける。フレイムヘイズの身体は常人と比べ物にならないほど強靱だと知ってはいたが、まさかここまでとは。シャナに吊り下げられて風のように空輸されていた昔とは比べ物にならない、自身のみ力で風を切り裂く爽快感に僕は興奮を抑えられなかった。

「それで、これからどうする気だ？」

「——え？何か言った？」

「これからどうする気だ、と聞いたんだ。お前、少し興奮し過ぎだぞ」

テイレシアスさんの掣肘に、「わかったよ」としぶしぶ炎の翼を正面に強く羽ばたかせ、速度を相殺する。レシプロ機からジェット機もかくやという段階にまで至ろうとしていた身体は、たったそれだけでピタリと空中に静止した。

「わ……………」

もう少し飛んでいたかったが、足元に広がる光景にその名残惜しさはすぐに吹っ飛ばされた。どこまでも続く純白の雲の大地と、その切れ目から垣間見える色とりどりの街の景観。人工物が有機的に配置され、街全体が一体の生物の体表のように忙しく扇動している。見慣れていたはずの生まれ故郷を上空から一目で見渡せる壮観に、僕は神の目線を得たかのような全能感すら覚えてしばらく絶句していた。

「人の話を聞かん奴だな、お前は」

と、呆れ果てた様子のテイレシアさんの嘆息交じりの声に、僕は慌てて意識を胸元のペンダントに向ける。

今さら気づいたのだが、テイレシアさんの神器はアラストールの『コキユートス』と似ているようであったと同じデザインではなかった。黒い宝石の周りを金色こんじきのリングが囲うアラストールのそれとは違い、こちらは白銀色しろがねを基調とした卵形のペンダントに金色の装飾が施され、その中心に眼下に広がる雲海のような純白の宝石が埋め込まれている。アラストールと対象的な色彩になったのは、そう意図した結果なのだろうか。ともかく、贋作者も自分自身の姿（デザイン）にはある程度のオリジナリティを求めるのかもしれない。

「自分で空を飛ぶのは初めてだったものだから、つい」

笑いながら頬を掻く。こんな時、アラストールなら、きっとキツイ叱咤の言葉を突き

つけただろう。だけど、テイレシアスさんはそうはしないという感触があった。まだ出会って一時間ほど——過去に飛ばされたのだから正確な時間は不明だけど——しか経っていないが、テイレシアスさんはアラストールよりも遥かにフレンドリーだ。だから、多少のお茶目は許容してくれる気がした。趣味が贗作作りなのだから、堅物のアラストールより自由人であると予想できるのは当然と言えば当然だが。

「まったく、浮かれすぎだ、坂井悠二」

こんな具合だ。アラストールとマルコシアスを足して二で割つたらこんな感じになるのかもしれない。アラストールを「怖くて厳しいお父さん」だとするなら、テイレシアスさんは「年の近い不良オジサン」でも例えられるだろう。

「あはは、ゴメン。『これからどうするのか』だったよね？」

「なんだ、ちゃんと聴いているんじゃないか」

正直、自分でも驚いているのだが、聴覚を始めとするこの身体的能力は常人とは恐ろしく桁違いだ。見聞きした情報を瞬時に記憶し、僕が意識するより早くフィルタリングして必要な音だけを探り出してくれる。さらに、激しい気流と気圧差が支配する雲の上に乗っているという常人なら即意識を失いかねない過酷な環境にあつても、地上に足を付けている時とやら変わりなく呼吸し、瞬きができる頑強さ。これが『フレイムヘイブズ』。異能の力を振るい、あり得ない事象を意のままに操る紅世の王と契約した、この世

のバランスを保つ超常の戦士。その肉体は、僕が想像していたものより遥かに格上だった。両手をぎりぎり力強く握り締め、自分が手にした身体の優秀さを確かめる。

(……とは言え、せつかく手に入れた新しい体が女の子の、しかもよりによつてシャナの体であるということは非常にいただけないんだけどね……)

これ以上思考を深めると頭が痛くなりそうだったので、軽く頭を振ってテイレシアスさんとの会話に集中することにした。

「とりあえず、悠二の言質の裏をとろうと思う」

「ほう、あの坂井悠二の言葉は嘘だというのか？」

その声に僕を咎める含意はなく、むしろ面白がっているのが半分、感心が半分といった雰囲気を含んでいた。慎重を期す僕の姿勢に好感を抱いてくれたらしい。

「まだ完全にあれが僕だと信じたわけじゃないからね。十中八九、僕みたいだけど」

「たしかに、あのヘタレっぷりはお前そのものだったな」

見事に的をついた笑いを含んだ言葉にぐうと息詰まる。反論できない。たしかにこれは坂井悠二だった。零時迷子の存在も、たしかにあの悠二の体内から感じ取ることができた。

「でも、僕を欺く何者かの仕業だという可能性がなくなったわけじゃないし、何よりも情報量が少なすぎる。とりあえず今は情報収集が先決だと思うんだ」

シヤナの声でまったくシヤナらしくかぬことを言う自分に言いようのない違和感を覚えながら、今後の方針を提案する。テイレシアスさんは黙ってそれを聴く。彼はアラスツールのように命令はしてこない。もちろん、アラスツールの命令が不快だったわけではない。アラスツールの命令はいつも適確だった。僕がシヤナとよく接するようになってからは時々無茶も言ってきたが、その反面、テイレシアスさんは僕の意見に耳を傾け、たまに助言をしてくれるタイプのようだ。僕にはこういう紅世の王の方が相性が良いかもしれない。

僕が黙っている中、テイレシアスさんも、ふむと何かを考えあぐねている。会ったばかりの紅世の王が何を悩んでいるのか、なんとなく想像がついた。彼は最初に「現世に現界した」「俺は介入していない」とたしかに言っていた。そして僕と同じように混乱もしていた。つまり、僕らを過去に飛ばしたのは彼の意味や能力によるものではない。その原因を彼なりに探っているのだろう。

「……俺もお前に賛同しよう。お前の言う通り、今、俺たちが持っている情報はあまりに少ない。こうして空に浮かんでいるより、この世界を探索してみた方が有益だろうな」
どうやらテイレシアスさんも同じ結論に達したらしい。空を見上げると、太陽はちょうど真上にある。じりじりと照りつけて来る熱線は、今の僕には『生』の実感を与えてくれるようで心地良かった。

「太陽の位置から考えて、今はピッタリ正午だ。とりあえず、夕方までは情報収集に励もう。この身体ならそれまでに市内をある程度は回れる。それからあらためて身の振り方を考えようと思う」

「適確な状況判断かつ素早いプランニングだ。お前はいい師に鍛えられたらしい。だがその前にやるべきことがあるんじゃないか？」

「へ？」

再び速度を得ようと滑空の姿勢に入ったところで、突然の不可思議な質問が投げかけられる。「やるべきこと」の見当が皆目つかない。何か忘れていただろうか？ まったく要領を得られずに首を傾げる僕にティレシアスさんは無い鼻を鳴らして、

「そんな格好で人ごみを出歩くつもりか？ お前は優れているように見えて愚鈍だな、このとんちんかんめ」

「……あ、」

その言葉でようやく、自分が素肌の上に学生服一枚というあられもない姿をしていることに気づいた。まずやるべきことは、

「服を手に入れなくちゃ……」

「そうだ。女物の服を、な」

自分の未熟さとこれからしなければならぬことの情けなさを思い知らされて、ガッ

クリと頭を垂れながら僕は夏の御崎市へとゆらゆらと降りて行った。

1—5 犠牲

僕こと坂井悠二は、もしかしたら生まれて初めて幻覚というものを見たのかもしれない。

御崎市を中心にそびえる廃ビル、旧依田デパートの上階。そのの、さつきまで木板で封印されていた四角い窓辺から遙か白い雲を眺め上げながら、僕は先ほどのわかには信じられない出来事を思い出していた。

数ヶ月前に倒した紅世の王—— “狩人” フリアグネが根城にしていたここには、あいつの遺した収集物が文字通り山のように残されていた。フリアグネは世に知れた珍品の収集家で、とにかく珍しいものを集めまくっていた。当然、その中には宝具も多く混じっている。それらはこれからの戦いを優位に進める切り札になるかもしれない。そんな情報を “弔詩の詠み手” マージョリーさんから聞かされた僕らは、数日かけて使えそうな宝具を探し出すことにした。しかし、フリアグネは整理整頓がうまい方ではなかったのか、手元に置けばそれで満足する性格だったのか、何もかもがぐちゃぐちゃに積み上げられていた。もしもフリアグネがゲーマーだったなら確実に積みゲーの山に囲まれていたに違いない。膨大な量の珍品を一つ一つ手にとって存在の力を流し込

み、宝具かそうでないか、役に立つのか立たないのかを見分ける作業は非常に難航し、現在まで収穫はない。そして今日も、あるかないかわからない宝具の搜索を進める予定だった。今日は現地集合とのことだったので、早めにここを訪れ、シヤナよりも早く宝具を発見して今日こそ鼻を明かしてやろうと張り切っていたのだが――

張り切つてドアを開け放つたそこには、裸のシヤナがいたわけで。

「……なんで裸だったんだろう……?」

服だけを消す宝具とか? そんな漫画みたいな宝具なんかあるのだろうか。いやいや、まさか。お互いの人格を入れ替える、なんて宝具くらいにありえない。もしかしたらこの足元に転がっている万華鏡みたいなガラクタこそ、もしかしたら、

「悠二、なにをぼーっとしているの?」

「わあつ、シヤナ!?! な、なんで背後から!?!」

呆然と窓の外を見ていた僕の背後から、つい10分ほど前にこの窓から飛び立ったばかりはずのシヤナが声をかけてきた。もちろん、ちゃんと服を着ている。その服装はレモン色の半そでブラウスと同じ色の薄手のミニスカートだ。その頼りないブラウスは、陽光の差し込み具合によってはボディラインを透かしてしまいそうなほどに生地が薄

い。その姿に思わずさつき目撃したシャナの裸体を重ねてしまい、鼻血が出そうになるのを汗ばんだ手の平で顔をバチリと押し潰すことで防いだ。

「……………どうかしたの?」

「この暑さで溶けるほどもない脳みそが溶けたのか、坂井悠二」

綺麗な形をした眉毛を片方だけ吊り上げて訝しげな表情を浮かべるシャナと、彼女の胸元から聴こえる地鳴りのような重く低い声。いつものシャナたちそのものだった。さつきまではいったい何がどうしたのだろうか?もしかしたら、僕より早めに来たシャナはここで何かおかしな宝具を見つけてしまい、その作用で少しおかしくなっていたのかも知れない。それが恥ずかしくて飛び出していったのか。ならば、今のシャナたちの態度は「なかつたことにしろ」という暗黙の訴えなんだろう。

自分をそう納得させると、僕は苦笑いを浮かべながら「なんでもないよ」と言っておく。シャナが首を傾げて不思議そうな顔をするが、それも演技に違いない。誰にだって失敗はある。例えばそれがシャナやアラストールでも。僕にできるのは、シャナの名誉を護るために何もなかつたかのように接するだけだ。

「さ、さーてー!じゃあ、使えるものを探そうか!」

「むりやりテンションを高くしているように見えるのだけど……まあ、やる気になっっているのは悪いことじゃない。それじゃあ、悠二はそっちのガラクタを探して。私はこつ

ちを探すから」

「イエス、ママ！」

「……………」

今日のごとは、シヤナのためにも胸のうちに仕舞い込んでおこう。そうしよう。でも……………つるつるだつたなあ……………。

「ねえ、アラストール。悠二がニヤニヤしてて気持ち悪い」

「もしや、本当に脳みそが溶けたのではあるまいな？」

「千草は、『壊れたものは斜め45度の角度から思いつ切り叩けばいい』って言ってた」
「うむ。あれの母親の千草殿が言っているのなら、間違いは無いだろう」

旧依田デパートの上階から、鈍い音と、カエルが潰れたような少年の悲鳴が聞こえた。

1—6 着替

「あれ？」

「どうした、坂井悠二」

「今『ぎにやあー！』っていうカエルが潰されたみたいな悲鳴が耳に入った気が……」

「わけがわからん」

「はは、僕もそう思う」

苦笑しながら、僕は服を探す作業を再開する。ここは、市内で一番大きなホームセンターの屋上倉庫だ。コンテナほどの倉庫の中に整然と積み上げられた段ボールの中には売れ残った在庫処分待ちの商品がぎっつちりと詰められている。

「よくこんな場所を知っているな。お前、コソ泥でもしていたのか？」

「違う！前に学校の行事で、このホームセンターを調べたことがあったんだ！」

それはすまなかつたな、と悪気に思っている様子なんてまるで無いようにカラカラと笑うテイレシアスさんを放って、学生服の袖で額の汗を拭う。上空からの太陽の熱波を容赦なく浴びる倉庫の中はひどく暑くて、サウナのようにだった。そういえば、池たちと同じグループでここを調べた時も、たしかこのくらい暑かったっけ。あの時はさすがの

クールキャラの池も暑さでメガネを曇らせてフラフラしていた。それを田中や佐藤がからかって、吉田さんは心配して、池が照れてさらに顔を真っ赤にしていた。

「……あれ」

楽しかった昔を思い出して、思わず笑いがこみ上げてきて——そして、涙が溢れてきた。

ここに僕の居場所はない。この時間にはこの時間の坂井悠二がいて、僕が知る大切な人たちは、僕を知らない。彼らが慕うのは坂井悠二であって、僕ではない。僕がどんなにみんなを想っても、その想いは決して届きはしない。それは、シヤナにも当てはまる。僕がこの世で一番大切に想う少女に、僕は僕として認識さえ、してもらえない。涙と汗が頬の表面でないまぜになって伝い落ち、ダンボールにマール模様を記していく。

「……坂井悠二。俺から助言をするならば……お前はこの地を離れた方がいい」

テイレシアスさんの助言も、アラストールと同じくらい適確だった。僕は本来ならここにいてはいけない存在だ。無用な混乱を生じさせるだけだ。何より、一度捨てた故郷に再び腰を据える気には到底なれない。いるべきではないし、いる必要もない。ここには強力なフレイムヘイズが何人もいて、敵から零時迷子を護っている。頬を濡らす涙をさっと拭うと、僕はコクリと頷く。

「僕も、そう思う。街を見て回って僕の記憶と合致したなら、準備して、この街を離れる」

淡々と、それだけ告げた。テイレシアスさんの返事は、「そうか」だけだった。それは、今の僕にとってでは最高にありがたい気遣いだった。それからしばらく、薄暗い倉庫の中に、黙々と服を探す音だけが響いた。

「うう……」

泣く。ひたすら泣く。鈍く光を反射する倉庫の扉に映り込む自分の情けない様相を目にして目の幅いっぱい涙が流れる。

そこに映っているのは、薄水色のチャイナドレスとその上に学生服を着たシヤナだった。身体を包む薄手の生地、余裕はなく、ピッタリとフィットして身体の曲線を際立たせる。側面を見れば、ももの付け根辺りまでスリットが入っていてかなりきわどい。見ただけで張りのある肌だとわかる白い太ももに、思わず歯型を入れてしまいたい衝動が湧いてきて生唾を飲み込んでしまう。どこからどう見ても痴女だ。もちろん、着たくてこんな服を着たわけではない。……もちろん。

「な、なんでこんなものしか残ってないんだよ。前に来たときはもつとたくさんあったのに」

タイト過ぎて小さいお尻の丸みにまでくっついてくるドレスを後ろ手に引っ張って

少しでも生地を伸ばそうとするも、すると今度は胸に食い込んできささやかな双丘と先端の突起が目立ってしまう。

いったいどんな巨悪の意志が働いたのか、何十という着衣がありながら、この矮躯で着れるちようにどいい服がこれしか無かったのだ。残っているものは男性用4Lといったシャナの小さい身体には大きすぎる服ばかり。おそらく、最小サイズの女性用コスプレ衣装かなにかだったんだらう。もしくは、デザインナーが変態だったのか。これならダンボール6箱分も売れ残っていたのも頷ける。チャイナドレスだけではあまりに恥ずかしいのでとりあえず上に学生服を着てはいるが、後々悠二に返さなければならなくなる。そうなると、チャイナドレスだけで行動しなければならなくなるわけで。

「ぶははははーよく似合っているぞー」
「黙っててくれー」

テイレシアスさんの喜悦極まる爆笑に一喝して、人差し指でペンダントをぺちりと弾く。こんな服を着る羽目になったら誰でも泣きたくなる。母さんには息子のこんな恥ずかしい姿は絶対に見せられない。靴はミリタリーチックなカーキ色のブーツしかサイズが合致するものがなかった。ブーツを履いたチャイナドレス少女って、まさに漫画のようじゃないか。

しかも、しかもだ。どんなに探しても、段ボール全てをひっくり返しても……男性用

の下着は発見できなかった代わりに、女の子用の下着なら段ボール二つ分もあつて選び放題だった。何者かのどす黒い意志が働いているとしか思えない。どの道、丈があまりに短いチャイナドレスでは履きなれたトランクスなんか穿けるはずもなく、僕は今まで感じたことのない背徳感と罪悪感を感じながら、一番生地が多くて肌が隠れる白いシヨーツを選ぶと、片足立ちになりながら慣れない手つきでそろそろとそれを穿いたのであつた。

「唯一の救いは、ブラジャーが必要なかったことかな」

「それを本人の前で言ってみろ。おもしろいことになるぞ」

「ははは。そうなつたら僕らはナマス斬りのうえに丸焦げにされちゃうだろうけどね」

はっはっは、と笑つていたテイレシアさんは、僕が冗談を言つておいた白いリボン氣づいて黙つた。シヤナなら本気でやりかねない。さつき見つけておいた白いリボンを手にとると、長い髪をまとめておさげにする。髪を結つた経験はなかったので多少手間取つたものの、なんとか後ろでまとめることができた。腰まで伸びる長髪というのは、見ていると本当に綺麗だけど、いざ自分の身になるととても重い。いつそのこと切つてしまいたいと思つたものの、それはシヤナに申し訳ない気がしたのでやめておいた。準備を終えて最後に扉を覗き込むと、おさげ髪のチャイナドレスを着た美少女がこちらを覗き込んで来る。

「紅世の王の俺がこんなことを言うのもなんだが、けっこういい感じだぞ。完璧な美少女だ」

「嬉しくない」

「お前は本当におもしろいな。いい反応をする。俄然、お前に興味が湧いてきたぞ」

まったく褒められている気がしないお褒めの言葉にうな垂れながら倉庫の扉を閉めると、僕は硬いブーツ底でトンと地面を蹴った。途端に背に炎の翼が顕現する。超常の力の塊である炎の翼は重力を簡単にねじ伏せ、僕の身体を一瞬のうちに天高く舞い上がらせた。茹だるような生暖かかった空気が疾風と化して身体中の汗を吹き飛ばす。学生服一枚で出歩くのもチャイナドレスで出歩くのも、感じる恥の大きさに違いは無いと思う。ずっと空を飛んで探索したいところだけれど、存在の力をリセットして元の量に復活できる『零時迷子^{永久機関}』を失った僕の存在の力には限界がある。むしろ贗作の身体である分、シヤナのそれに比べて限界値が下がっている可能性もある。御崎市に、なるべく人に出会わないような道なんかあったらどうかと、僕は人ごみだらけでわいわいと活気付く眼下の街の賑やかさを呪った。

1—7 過信

知り合いに会うことは避けねばならなかったし、何よりこの格好で人ごみを歩く趣味はなかった。比較的人気の少ない裏通りを記憶から呼び出して移動することにした。パチンコ屋だったり、夜間に営業を行うそういうお店が立ち並ぶ裏通りは、夜になると看板から迸るネオンの光で昼間のように輝いているが、今はそびえるビルの影で薄暗く、通行人も少なく閑散としている。僕のような学生はお呼びじゃないエリアだ、人知れず移動するには絶好の通路だ。

だけど、こういうところには僕とは違った理由で堂々と表通りを歩けないような人たちも集まるわけで。

「なあ、その格好、もしかして誘ってんの？ だったら俺たちと一緒に——」
「誘ってませんお断りしますさようなら」

もう何度目かもわからない怪しげなお誘いを速攻で拒否してさらに歩を速める。ただでさえ暑いのに、わけのわからない男たちと一緒に歩けるわけがない。見た目はこんな露出狂一步手前の女の子だけど、中身は立派な男なんだ。

纏わりつくような暑苦しい視線から一刻も早く逃げ出そうと顔をうつむけて歩幅を

広げる。と、先ほど話しかけてきた若い男たち——といっても高校生か大学生くらい——の顔から日蝕のようにさっと笑顔が消え、代わりに下卑た別の笑顔に変わった。仲間同士で目配せして何かを確認するとハイエナのように素早く僕の周囲を取り囲む。その目は僕の顔ではなく身体を舐め回すように縦横に蠢いている。その視線に慣れてきた自分の順応力の高さに心の中で拍手しつつ、視覚以外の感覚で周囲を探る。幅3メートル、長さは30メートルほどの室外機に挟まれた裏路地は、僕と男たち以外に人影はない。

「……なんのつもり?」

一応聞いておく。こういう輩が裏通りで女の子を囲んでやることと言えたいいてい決まっているのだけれど。

「別にヤラしいことしようってわけじゃない。ただ、こんな危ないところを女の子一人が出歩くのはよくないからお兄さんたちが保護してあげようと思っさ。なあ?」

リーダーらしき正面の男が仲間同意を求め。示し合わせたように、全員がヘラヘラと笑いながら相槌を打つ。チラと横目で周囲を観察すれば、20歳を過ぎているであろうリーダーを除いて、ほとんど全員がまだ幼い顔立ちだ。その内の一人はかなり若く、この世界の坂井悠二とほぼ同年のように見えた。少し目を凝らせば、孔を開けたばかりらしい耳のピアスホール周辺が充血しているのが痛々しい。どうやら初めて集

団で少女を襲う行為に参加するらしく、強がって笑顔を作りながらも全身に緊張が見て取れる。

(僕は、こんな奴らを護るために故郷を捨てたのか?)

頭の芯が急激に熱くなるのを感じる。「戦う」という選択肢を浮かべた瞬間、戦闘回路のスイッチが叩き込まれ、心臓がポンプとなつて筋肉に血液を送り込む。元の身体より一回り以上小さいサイズの肢体のせいで一挙一投足に違和感が絶えなかつたが、こうして地上を移動している間にほぼ馴染むことができた。今なら、フレイズヘイズの膂力でこいつらを懲らしめてやることだつて容易いはずだ。それに、自分の意識と肉体のサイズ感を完璧に適合させないと、これから先、自分の身を護ることだつてきつと覚束ない。むしろこれをチャンスと捉えるべきかもしれない。

以前の、シヤナに出会う前のひ弱な僕なら、こんな状況に陥れば言われるがままにジャンプして有り金を一銭残らず差し出していただろう。だが、今は違う。僕はシヤナになつたんだ。

「他はともかく、アンタはもうお兄さんつて歳じゃない。昼間つから子どもをくだらないことに引き込む前に、ちゃんと仕事したら?」

「……あ?」

気にしていたのだろうか、男の表情から気取つた笑みが消えた。その顔にもはや理性

はない。まさに獲物を威嚇するハイエナそのもののようにこちらを睨み据えながら、僕を挟んで男の正面、つまり僕の後ろにいる男たちにじろりと目配せをする。そんな微かな動作すら見逃さず、僕は思わず口元に余裕の笑みを浮かべる。

(やめたほうがいいのに)

ふつと鼻で小さく嘆息をする。この不利な状況に追い込んでなお余裕を崩さない獲物は初めてなのだろう。リーダーの表情に困惑の色が過ぎるが、もう後戻りはできないと踏んだのか、わかりやすいほど大きく頷いて仲間合図を送る。それに重なるように背後から二人が一步踏み出す足音が聴こえる。その一步がこちらに飛び掛るための踏み込みであると理解した瞬間、僕は己を竜巻に変え、タイトスカートを翻しながら死神の鎌のような廻蹴を放った。まるで背後の目で見ていたかのように、ブーツの頑健なつま先は狙い通りに男たちの鼻をかすった。一瞬後、眼前を切り裂いた突風に目を白黒させる二人の鼻に一筋の赤い線が走る。一方の鼻にぶら下がっていたはずのピアスが遙か遠くのマンホールに跳ね、場違いに澄んだ音を響かせる。数秒の沈黙。

「な……なんだ？ コイツなにをした？」

「え？ 鼻が……え？」

慌てふためく男たち。僕の動きが速すぎて何が起きたか理解できていないようだ。再び、今度は大きく溜息をつく。

「——はッ！」

視線がこちらに集中した瞬間、ブーツの踵で地面を思い切り踏み叩く。アスファルトの舗装がクツキーのように粉碎され、バラバラになって粉末を飛び散らせる。食い込んだ足を引き抜くと、そこにはチャイニーズアターに飾られたハリウッドスターの足型そっくりの窪みが深々と穿たれていた。底が堅いブーツを選んで正解だった。「ひい」という息を呑む微かな音すらこの身体の聴覚は逃さない。脅しは成功したようだ。

「ど、ドツキリかなにかかよ?」

「さ、撮影とかされてんじゃねえの? ユーチューブに投稿するとか……」

今どきの若者は自分の目で見たことすら真実と捉えることができなのか。とは言え、僕が初めてフリアグネの手下である燐子りんねに襲われた時だって目の前の出来事が信じられずに足を動かすことも出来なかったのだから、他人のことをとやかく言えた義理じゃない。普通の人間なら、理解を超えた事態には足がすくむものだ。懐かしい記憶を脳裏にチラ見しつつ、啞然と立ち尽くす男たちにトドメの言葉を投げつけてやろうと口を開きかけて、

「次は貴様らの頭蓋だ。踏み潰してやるから跪いて頭を差し出せ」

胸元からドスの効いた凶悪な声が発せられた。その声を僕のだと勘違いしたのか、男たちは一気に顔面蒼白となって後退る。そして、

「「ば、化け物——!!」」

逃げ去っていった。失礼な奴らだ。シャナがアラストールの声で喋っていた僕
のシャナへの思いは何も変わらないというのに。

「うるさいうるさいうるさあーい! (アラストール)」

「悠二い! (アラストール)」

「強く、なつてよお……! (アラストール)」

おええええ! 前言撤回! これは絶対にダメだ! 混ぜるな危険!! ごめんアラストール、
でもこれは受け付けられない!!

「ひ、ひっ……」

「ん?」

妄想を振り払って微かな声の方に視線を転じると、そこには腰を抜かした最年少の少
年がいた。凹んだ道路と僕の顔を交互に見比べては、冬の海で凍えているように上下の
歯をガチガチとぶつける。シャナたちフレイムヘイズと長く一緒にいたため、爆炎が吹
き荒れ、建造物が紙くずのように吹き飛ばすような戦いを見慣れた僕と違い、年下の少女
がアスファルトを易々と踏み寄り、シャナのように冷然と見下ろす。つかつか
と少年の前まで歩み寄り、シャナのように冷然と見下ろす。

「お前、今いくつだ?」

「じ、16歳、です」

やはり。16の夏休みに悪い大人たちとつるんでうちよろすとは、こいつのためにも周りのためにもよくない。僕はシヤナが説教する様子を思い出すと、射抜くような鋭い視線で少年を睨みつけ、靴底でもう一度路面をズダンと踏み鳴らす。

「こんなところでウロチョロしてる暇があつたら、学校行け！」

「はいっ!!」

手足をバタバタさせながらすたこらさつきと退散する少年。シヤナの眼光は普通にしても鋭いから、睨みつけられた人間は蛇に睨まれた蛙状態となる。僕もそうだった。シヤナに凄まれて一喝されたら、教師でさえ思わず後ずさりしてしまう。まだ彼女と初めて出会った頃、体育の授業で横暴な教師を懲らしめたことがあった。「邪魔よ」、その一言であの教師は背筋を震わせていたものだ。それほどの迫力なのだから、相手が年端も行かない少年ならなおさらの効力だ。これであの少年が道を外れずに生きていけばいいのだが。

良いことをしたという満足感と圧倒的な力を得た優越感に、僕はうんうんと何度も頷く。

（今の僕には力がある。常人とは比べ物にならない、*“炎髪灼眼の討ち手”*という極上の力が。この力があれば、元の時間に——シヤナの隣に帰る方法だって、きつと探し

出せる)

希望が見えてきた。そう思えるくらい、フレームヘイズへと進化した僕は力に満ち溢れていた。

「テイレシアスさん、さつきはありがとう。おかげで、あいつらを懲らしめることができ
た」

「俺もああいう人生の間違った楽しみ方をしている奴らは好かん。俺のように高尚で有意義な趣味を持つべきだ」

贗作作りが高尚な趣味かどうかは引つかかるものを感じるけど、言わないでおいた。しかし、本当に自由人な紅世の王だ。苦笑しながら、ようやく見いだせた希望に向かうように歩みを再開する。この御崎市は、僕が過去に過ごした御崎市となら変わりなかった。ミサゴ祭りの最中に襲来した紅世の王ダンタリオンとその配下の“燐子”ドミノのせいで崩壊しかけた街は、人々の手によって順調に復興を遂げている。その破壊の痕跡と復興の様子は僕の記憶となんら変わりなく、この世界の坂井悠二が証言した時系列を完璧に裏付けている。やはり嘘は言っていないようだ。

このまま特に異常を発見できなければ、ここを離れよう。慣れ親しんだ街を再び後にするのは寂しくないとさえ嘘になるが、ここに僕がいるときつとおかしなことになつてしまう。

(シヤナ……)

一目でいいからシヤナに会っておきたかった。僕の大事なシヤナ。僕を選び、僕が選んだ少女。会って話をしたい。言葉をかまし、その美しい双眸を見つめたい。でも、そんなことをしたら間違ひなくおかしな事態が起きてしまう。時間の流れが狂って取り返しの付かないことになりかねない。未来が変わって僕が消えてしまう、なんてことになったらシヤレにもならない。御崎市には知り合いが多いし、マージヨリーさんのようなフレイルムヘイズだってこの先次々に訪れる。自分で言うのもなんだけど、僕は嘘が上手い方ではないから、付け焼き刃の舌先で誤魔化し続けることなんて不可能だ。

(——それに、)

消滅寸前に心に焼き付いたシヤナの泣き顔が瞳の裏に浮かび、無意識に胸元をぎゅつと抑える。僕が愛したシヤナとこの時間のシヤナは同じではない。同じシヤナで、けどまったく異なるシヤナ。

(どんな顔で会えば、いいんだよ)

感情の整理がつかない。シヤナを目の前にしたとき、自分がどんな行動を起こすのか、自分自身でも想像がつかなかった。何より、この姿で顔を合わせればさらに複雑なことになってしまうことは目に見えている。諦めるしかなかった。気付いたら、御崎市駅の裏側を通り越し、御崎市の東端に向かおうとしていた。後ろ髪を引かれる思いで街

の中心部を振り返る。気づけば時刻はもう夕刻に差し掛かっていた。夏の夕暮れ。太陽がしぶとく空に居座ろうと世界に爪を立て、爪痕が蜃気楼となつてゆらゆらと揺れている。諦めの悪い太陽に、僕は心のなかで「もう諦めなよ」と語りかける。異常は発見できなかった。もう、僕がこの街にいるメリットはない。

湿り気を帯びそうになつた目尻を誤魔化すようにゴシゴシと拭い、力強く顔を上げる。大丈夫だ。必ずシヤナの元に戻る。余裕が出来れば、この時間のシヤナたちをこつそり支援することも出来るかもしれない。だつて僕には、誰よりも信頼していたフレームヘイズの、シヤナの身体があるんだから――

「それはそうと、坂井悠二」

「ん、なに？」

唐突にテイレシアスさんが話しかけてきた。僕は何事かと上機嫌に返事をして、

「お前、まさか自分が紅世の徒や燐子どもと戦える、なんて勘違いはしていないよな？」

その一言に、絶句した。

1—8 敗北

テイレシアスさんの台詞を理解できず、僕はその場に凍りついて立ち尽くしていた。

(僕は、戦えない……?)

僕の根底を揺さぶった紅世の王の言葉を中心に何度か反芻する。しかし、思い当たる節はない。そんなバカな、と笑い飛ばしたかった。だが、テイレシアスさんの口調はとて冗談を言っているように思えなかった。シャナの振るう神通無比の大業物、贄殿遮那も持っているし、炎の翼も難なく出せる。さっきだって、この細身の脚でなんの苦もなくアスファルトを粉碎した。この身は人の何倍もの速さと膂力で敵を圧倒するだろう。そこらの燐子ならば、簡単に返り討ちにできるといふ自負に満ちている。だといふのに……戦えないというのは何故なのか？

僕が理解できずに黙っているのを見て、テイレシアスさんは「やはりな」とため息をつく。

「案の定、わかっているはいないようだな。お前はその身体を過信している。いいか、坂井悠二。お前はシャナなのか？」

「え……？」

僕がシャナか、だつて？たしかにこの身体はシャナそのものだ。それがいったいどうしたところか？

「テイレシアスさん、それはいつたい、」

どういふこと、と続けようとした瞬間——唐突にそれは起こつた。

ズン、という腹の底に響く重低音と、それに続いてやつてくる震動。空気が氷結し、あれほど凶悪だった夏の熱気が突如降りた暗黒の帳に遮断される。巨大な半球に覆われるように周囲が暗黒の天に包まれる。驚愕のうちに見上げれば、街の一角を囲つた闇空には見たことも無い紋様がプラネタリウムのように刻まれ、濃灰色に燃える炎がその紋様を怪しく照らしていた。賑やかだった街の喧騒がピタリと途絶え、息苦しいほどに陰鬱な静謐が広がる。道行く老若男女は完全に静止してマネキンと化す。まるで時が止まったかのような、世界から隔離されたという直感。手を差し出せば感じ取れそうなほどの緊迫感が大気に満ちている。僕はこの現象に何度と無く遭遇したことがある。これは間違いない、

「封絶!?!」

「そのようだな」

「封絶」——結界の内部を世界の流れから切り離すことで外部から隔離、隠蔽する因果孤立空間を作り上げる、紅世の住人の自在法。これが展開されたということは即ち、フレイムヘイズが戦闘を始めるか、あるいは紅世の徒ともからが人間を襲つて存在の力を喰らい始めるということに他ならない。この状況に、僕の記憶がありえないと叫ぶ。悠二は確かにダンタリオンらによる襲撃から一週間程度しか経っていないと告げていた。この街の様子も、破壊から立ち直り始めてわずかしか経っていないことは明白だった。僕が知っている限り、この日、街に堂々と封絶が張られたという事実は無かつたはずだ。さらに、封絶は使い手によつてそれぞれ紋様や炎に特徴がある。この封絶は僕の知っている誰のそれとも一致しなかつた。つまりこれは、僕の全く知らない何者かによる封絶。僕の知っている過去とは異なる事態が起きている。僕の出現によつて未来への時間の流れが変わってしまったのか。封絶から降り注ぐ檻のような凶悪なプレッシャーが飽和状態になりつつある思考をさらに焦らせ、こめかみが痛む。

「この封絶……まさか……!」

「ああ、お前が考えている通りだろう」

周囲を見渡せば、この封絶の目的は嫌でも察しが着いた。休日の街には大勢の人間が千単位でひしめき合っている。存在の力を効率よく奪うのなら最適のタイミングだ。

この場所に偶然居合わせただけで人々は外の世界の住人に喰われてしまう。家族が、

恋人が、友人が、理不尽によつて亡き者にされる。平井ゆかりさんのように。——僕のように。握りしめた手の甲が乳白色に染まる。

(止めなきやならない!)

封絶を外から発見するのはフレイムヘイズでも難しい。そもそもが隠蔽工作のために創られたものなのだ。自在法に秀でているマージョリーさんなら見つけられるだろうが、「こんな暑い日にわざわざ外に出るなんてアホらしい」なんてボヤいて今ごろは佐藤の家で呑み潰れているだろう。なら、僕以外に駆けつけられる者はいない。全身の筋肉が使命感に火照り、引き絞られた弓のようにぎわめく。敵の存在を察知して臨戦態勢へ移行しようとしているのだろう。瞳の奥で炎が燃え、総身に力がみなぎつて来る。

(心配ない。戦える。シヤナなら、戦える)

そう確信すると、僕は封絶の中心へと駆け出した。踏み込んだ一步目は道路の舗装を踏み砕き、二歩目は店舗の屋根を穿つ。速く走ろうと意識すればするほど、顎が地面に触れるか否かと姿勢が低くなっていく。硬直する人々の間を紙一重の差ですり抜け、速度を寸毫たりと落とすことなくビルとビルの隙間をまたたく間に駆け抜ける。この身はまさに狂乱する疾風と化し、人々に害を為す悪食^{あくじき}を倒さんと猛獣の如く疾駆する。速い、速い。でも、まだ速くなれる。絶大な信頼を寄せていたフレイムヘイズと同じ力を手にして、僕は武者震いに似た感覚を覚えた。

「……いいだろう。あくまで戦うというのなら好きにするが良い。敢えて止めはしない。だがな、坂井悠二。お前に忠告しておこう。俺はお前を気に入っている。しかし、お前がヘマをすれば俺は即座にお前を見限る」

「なっ!?!」

慄然として屋根から脚を踏み外しそうになるのをなんとか堪える。初めて聴く冷たい声で、紅世の王はなおも続ける。

「俺には大儀も使命もない。己の欲が満たされるのなら、人喰いにもなる。俺がお前と契約したのは、そうすることで俺の欲が満たされると踏んだからだ。お前と心中する気など毛頭ない。それをゆめゆめ忘れな」

「……わかりました」

その忠告は、僕に対する最終警告を孕んでいるように思えてならなかった。当然だ。彼もまた、今から戦おうとしている理不尽の権化の一人、紛れもない『紅世の王』なのだ。アラストールのように悪道に落ちた紅世の王たちを討滅することを目的としているわけでもなく、マルコシアスのようにひたすら戦闘を目的としているわけでもない。彼の目的は、多くの宝具の贗作を創ること。僕はそのために利用されているに過ぎないし、フレームヘイズとは本来そういうものなのだ。一方は人間の復讐心を、一方は紅世の王の力を利用し、結果的に世界のバランスを保つ。だから、紅世の王は人間が役に立

たないと分かれば簡単に切り捨てて、別の有望な人間を見つける。あらためて、自分が既知の常識から逸脱した外なる世界の『王』と契約したことを思い知らされ、頬を汗が伝い落ちた。

「おう、あれだな、この封絶の主は」

その声に、正面に意識と目を凝らす。優れた視力は500メートルほど離れた空中に浮かぶ異変を容易に発見した。立ち並ぶビルを背景に、灰色の衣を幾重にも纏った女性が宙にピンで縫いとめられたかのように静止していた。ローマ彫刻を思わせる、優美なウエストラインを誇示する美貌の白人女性。その両手はまるで古代西欧の巫女が天からの祝福を望んでいるかのように優雅に拵げられている。しかし、彼女が見上げているのは暗黒の空であり、彼女の上空に描かれた自在式には次々に人魂のような光が吸い込まれていく。それが街の人たちの存在の力だと気づいた瞬間、

「やめろおおおお!!」

半身を捻るように背に手を回し、短い柄を掴んで一気に引き抜く。身の丈ほどもある分厚い刀身を持った大太刀『贄殿遮那』が稲妻のような鋭い輝きを放つ。贄殿遮那を一段に構え、僕は最後の跳躍を全力で実行すると眼前の敵へと一跳びで斬りかかる。僕に気づいていないのか、灰色の巫女は身じろぎ一つしない。刀身が彼女の細身を袈裟斬りにせんと翻り、

クスト

「ッ!？」

刹那、女の顔に浮かんだ亀裂のような微笑みに背筋を悪寒が走った。本能が警戒を呼びかけ、五感を超越した第六感が背後からの攻撃を察知する。後方へ向き直れば敵に背後を見せることになる。回避の余裕はない。こんな時、シヤナならどうしたか。――
答えはすぐに出た。

流水の流れを変えるように存在の力を自分の肉体ではなく衣服に浸透させ、変異させる。瞬間的に学生服が紺色から漆黒に染まり、太ももまでしかなかった裾が全身を隠すほどに広がる。学生服を基礎にすることで再現した『夜笠』だ。「ほう」と感嘆の息がペリダントから聞こえたが今は笑顔を返す余裕はなかった。シヤナが使う本来の夜笠は、アラストールの翼の皮膜を部分的に召喚して外套にしているものだ。テイレシアスさんに翼があるかどうかは知らないがそれを尋ねる余裕がなかったので咄嗟の判断で創ったのだ。眼球が血走るほど夜笠に意識を集中させ、ギリギリまで強化する。直後、衝撃が総身を揺らす。すぐ背後で爆弾が爆発したかのような激震。

(もう一人いたのか！)

いつまでも止みそうにない炸裂音が連続して耳朶を突く。このねちっこい意図を隠さない打擲ちやうちやくはただの遠隔攻撃ではない。別の敵が隠れていたのだ。気が付かなかつた浅はかな自分への怒りをが募る。シヤナなら、きつと気がついていてた。一度押し負けそうになるが、齒を食いしばってその場でなんとか堪える。

「ぐうッ——だああッ!!」

倍返しにする気迫で疑似夜笠を叩きつけ、背後からのもう一人の強襲者を弾き飛ばす。視界の端に吹き飛ぶ濃灰色を捉えつつ、勢いを殺さず身体を回転させて贄殿遮那を横に一闪。存在の力を集めていた女を斬り付ける——が、剛剣の刀身は何もない空間を横薙ぎにするだけだった。女も自在式も姿を消している。

「くそっ!」

ぜえ、と大きく息を吐く。周囲を油断なく警戒しながら呼吸を必死に整える。おかしい。シヤナなら、さっきの襲撃なんて軽々と跳ね返して息も乱さずに一瞬で二人とも切り伏せることができたはずだ。こんなはずでは、と不安にさせる焦燥感が足の裏から腰への這い登ってくる。

——当たり前じゃないか。

ふと、心のどこかで別の自分があざ笑った気がした。その声を頭を振って否定する。(まだこの身体を上手く使いこなせてないだけだ。大丈夫だ、すぐに慣れる。慣れてみ

せる！)

「ふ、ふ、ふ、ふ……あははははははは!!」

女性特有の甲高い笑い声がビル群の間で反響する。しまった、これではどこから攻撃が来るかわからない。一旦態勢を立て直そうと翼を拡げて、

「——させないわ」

「うあツ!」

今度ばかりは自分の身に何が起こったのか理解できなかつた。視界の隅に雷のような光を視認した瞬間、横腹を強烈な衝撃が襲った。重く鋭い爆発音が鼓膜をつんざき、身体をくの字にひん曲げる。一拍置いて襲いかかるあまりの激痛と息苦しさに炎の翼を維持できなくなり、身体が急激に浮力を失う。くるくると錐揉みしながら落下し、そのまま頭から眼下の家屋に墜落した。瓦屋根をぶち破り、基礎の柱を破壊してフローリングにハエたたきのように叩きつけられる。

「——……ツ!」

鉄槌を食らったかのようなダメージに目眩がする。苛烈な刻苦に意識が溶融しそうになるのを歯を食いしばってなんとか踏み止まる。夜笠に目をやると、横腹の部分が完全に溶けてなくなっていた。坂井悠二だった頃の肉体なら今の攻撃だけで胴体を挟まれてバラバラに吹き飛んでいただろう。想像してゾッとする。

「ぐう、あ、えううつ……い！」

立ち上がろうと四つん這いになって四肢に力を入れるが、口から嗚咽と涎が漏れるばかりで立ち上がることができない。肋骨に守られていない腹部を狙われたせいで、内臓にダメージが及んだに違いなかった。ボタボタとこぼれ落ちる涙と涎がフローリングを汚していく。呼吸すらままならず意識が朦朧とする中で、僕は自分の弱さに歯噛みする。まだシャナの力を少しも引き出せていない。シャナがこんな不様にやられるはずがないのだから！

「——」
テイレシアスさんはずっと沈黙したままだ。もうすでに僕を見限り始めているのかもしれない。どんどん焦りが募る。

「まだ、まだあ……い！」

ふらつきそうになるのを踏みこらえ、贅殿遮那を杖のように支えにして緩慢な動きで立ち上がる。シャナの身体は回復能力も高いはずなのに、まるで追いついていない。この肉体^{ハート}が贗作で創られたものだからか。いや、きつと中身^{ソフト}のせいだ。情けない。

「なあにい？」「炎髪灼眼の討ち手」がこんな弱かったなんて拍子抜けだわ。せつかくここまでお膳立てしてあげたのに。これなら私一人でも出来たじゃない」

ぎくりとするほど近くから発せられた酷薄とした声に、反射的にそちらを睨み上げ

る。そこには、さっきの濃灰色の巫女が衣を揺らめかせながら悠然と浮かんでいた。その張り付いたような無機質な笑顔が作り物の能面のようで、思わず背筋がぞつとする。(僕をシヤナと勘違いしてる。この封絶は、シヤナを誘き出すためのものだった。そして敵はこいつだけじゃない。ならば目的は、)

「狙いは零時迷子か!」

「正解よ、可愛い。炎髪灼眼の討ち手”さん。あなたが都合よく一人で行動していたからわざわざこうやって誘い込んだのよ。私じゃ勝てないと思つてたから時間稼ぎくらいの予定だったんだけど……どうやら楽しめそうね。ふふ、なんて素敵なボーナスなのかしら」

袖を口元に当ててクスクスと愉悅に微笑む。人間離れた艶を宿す肌が、この女が紛れもない紅世から来た化物だということを表している。零時迷子を狙っているということは、こいつも『仮装舞踏会』の一人の可能性が高い。だとしたら。僕の胸に槍を突き刺す『千変』シユドナイの姿を思い浮かべ、唇を噛む。

(『仮装舞踏会』の幹部であるあいつも来ているかもしれない。ここにいないということ、シユドナイは零時迷子を直接狙う気か!)

「お前なんかは構っている暇はない!そこをどけ!さもないと……!!」

姿勢を低くして、爆発的なまでの力を脚部に溜める。紅蓮の髪が一層灼熱の輝きを増

し、眩い火花が散る。灼熱する火炎となった僕に呼応して周囲に散乱していた木製品が火だるまとなり、瞬く間に赤熱する炭と化す。この距離で全力の一撃を与えれば、どんな紅世の王とて無傷では済まない。敵はもう一人いるようだが、この間合いなら邪魔が入る前にこいつを真つ二つにできる。一人を片付けることさえ出来れば、きつと勝機は見えてくる。そうだ、シヤナならそうして。シヤナなら、それが出来るはずだ。

常人なら聞いただけで震え上がるような怒気を孕んだ僕の警告に、しかし、目の前に浮かぶ女は「おお、怖い」とそよ風に吹かれたかのような笑みを浮かべる。柄をガチャリと握り直し、贄殿遮那を最適な構えに整える。顔面に貼り付いた笑顔のまま女が大きく首を傾げる。

「さもないと、どうするのかしらあ？」

そんなこと——決まっている!!

「斬るッ!!」

脚部の力を解放する。地面がクレーター状にえぐれ、火薬に押し出された弾丸のように僕の小さな体躯が射出された。炎の翼を逆Vの字にしてさらに加速し、突き出した贄殿遮那の先端が巨大な爆竹のような轟音と共に音速の壁を突き破る。自在法を含めたあらゆる力の干渉を受け付けけない特性、いかなる攻撃であろうと絶対に破壊されることがない耐久性を併せ持つ最強の法具、贄殿遮那に殺せないモノはない!

ふと、女の手にいつのまにか長大な弓が構えられていることに気づいた。でも遅い。あと1秒もせず、その弓ごと斬り伏せられるのだから。構えられた矢と贄殿遮那が寸分足らずの精確さで互いの切っ先を衝突させる。その瞬間、雷のような閃光が辺りを包み――

「そん、な」

信じられなかった。信じたくなかった。

無限に思える一刹那の中、あつてはならない光景に自分の目を疑った。

どうして、吹き飛んでいるのが僕の方なのか

どうして、相手は無傷で、笑っているのか

どうして、この手に握る贄殿遮那が、砕けているのか――

視界がぐるぐると回転してどこが上でどこが下なのかもわからない。何度も頭に鈍痛が走る。何かにぶつかって跳ねたのか、回転がさらに不規則になる。神経が断線し、本格的に意識が遠のいていく。切りさいなまれた疑似夜笠が力を失ってはためく。奇

妙な静寂しじまが身を包む。聴覚が働いていない。三半規管も麻痺している。猛烈な勢いで迫る地面に、天に向けて突き立つ木柱を視認する。先の戦いの余波で破壊された家屋の残骸がその恨みをはらさんと、槍騎兵のようにこちらに矛先を向けている。引き伸ばされた知覚の中で、鋭いそれらがゆっくりと近づく。避けられない。

だから言ったのに、と心のどこかで誰かが蔑んだ気がした。

僕ではシヤナのようにには戦えないのか。しよせん、僕はこの程度なのか。

(ちくしように)

目をぎゅつと瞑り、この小さな身体に槍が突き刺さる痛みから目を逸らし——

「……？」

ふわりとした柔らかい感触を後頭部に感じた。暖かい。誰かに包まれているかのようだ。今度こそ本当に死んだのかと、ゆっくりと重い瞼を開く。

「なにやってんのよ、チビジャリ」

そこには、長身の美女、フレイムヘイズ、弔詞の詠み手、マージョリー・ドーの姿があった。

1—9 螺勢

「ったく。このクソ暑い日に派手にどんぱちやつてると思ったら、ちびじやりがこんなザマだもんね。偶然通りかかった私に感謝しなさいよ？」

ふん、と鼻を鳴らしながら、「弔詞の詠み手」として名高いフレイムヘイズであるマージョリーさんが僕を優しく地面に横たえさせてくれる。見てみると、広太のピンストライプが流れる優美なレディーススーツにはなぜかすかに皺が寄り、白い頬はほんのりと朱に染まって、額にはわずかながら汗が滲んでいる。

「ひゃーっはっはっは！本当は封絶の中でお前がピンチっぽいことがわかったから大慌てで助けに来ただけだな！我が愛しのゴブレット、マージョリーはツンデレってやつでイデデデデデ」

「おだまり馬鹿マルコ！」

オシャベリなマルコシアスが口を滑らせ、怒り心頭のマージョリーさんにマルコシアスの入った本型の神器『グリモア』の表紙をガリガリと引つ掻かれる。いつもの、でも僕にとつてはとても懐かしい光景だった。額から流れる血に片目を潰されながら、僕は思わず口元を綻ばせる。

「ありがとうございます、マージョリーさん」

息も絶え絶えにお礼を言った僕の顔を見て、二人がピタリと動きを止めた。マージョリーさんの手からマルコシアスがドサリと落ちる。何かおかしなことを言ったのだろうか？

「ち、ちびじやり!?! あんた頭を強く打ちすぎたの!?! 落ちてたメロンパン拾い食いの!?! すぐペツしなさい、ペツ!」

マージョリーさんが目を白黒させながら心底心配そうな顔で僕の肩を掴んで揺らす。よく考えたら、マージョリーさんから見たらあの傲岸不遜なシヤナが“さん”までつけて丁寧にお礼を言ったことになるのだから、驚かない方が無理だろう。僕だってシヤナがそんなこと言ってきたら自分の正気を疑う。ガクガクと揺らされながらこんなことを考えられるということは、少し余裕が出てきたのかもしれない。

と、マージョリーさんの動きがピタリと静止する。言葉を失ったその視線は、僕の手の贅殿遮那へと注がれて固定されていた。無残な姿と化した贅殿遮那を見て目を全開して混乱する。

「どういふこと? ちびじやりがここまで追い込まれて、そのうえ贅殿遮那までこの有り様。アラストール、説明を——」

かつて最悪のミステスとして紅世の王たちに恐れられた『天目一個』の核を成してい

た大太刀が無残に折れて醜い断面を晒していることが信じられないのだろう。僕自身も信じることができないのだから、当たり前前だ。

「待ちな、我が早とちりな乙女、マージョリー・ドー」

足元からのマルコシアスの堅い声に、マージョリーさんが怪訝な顔をして「なによ？」と目を向ける。嫌な予感がした。

「こいつ、〃炎髪灼眼の討ち手〃じゃねえ。契約している王もアラストールじゃねえな」
「……なんですつて？」

そう呟いてこちらを振り返ったマージョリーさんの目つきは、射殺するような鋭いものに変わっていた。空気が一気に剣呑なものへ変わり、重力となって押し掛かってくる。バレた。このまま正体を明かさずにいらればと思っていたけど、それは無理そうだ。

「アンタ、何者？見たところフレイムヘイズらしいけど、どうしてちびじやりとそっくりな姿をしてるわけ？」

上から押し潰してくるような咎める視線に、僕は耐え切れずに俯く。どう説明すればいいのだろう。テイレシアスさんは押し黙ったままだ。面倒くさいことに顔を突っ込みたがる性格ではなさそうだし、「自分でなんとかしろ」と暗に告げているのだろう。とはいえ、僕の身に起こったことを正直に話したって信じてもらえないとは思えない。当の僕からしても、突飛すぎて信じられない。しかし、このまま黙っていてももつとマズイ

ことになりそうだ。辿々しくなっても正直に話してみよう。

「ぼ、僕は……」

「僕う!?なにそれ、ぜんっぜん似合わない一人称ね!なんか寒気がしてきたわ!」

マージョリーさんが素っ頓狂な声を上げる。その声にさえ僕はびくりと肩を震わせてしまう。その様子を見て、マージョリーさんは金細工のような美麗な金髪をくしゃくしゃと搔くと天を仰いで嘆息した。さっきまでの重圧はもう感じない。剣呑な敵意は別の方向に向きを変える。

「まーいいわ。敵じゃないみたいだし、悪意もなさそうだし。ていうかメチャクチャ弱そうだし。暫定ちびじやりモドキ、あんたの正体の追求は後回し。今は、」

前髪を書き上げ、中指でメガネをくいつと整えると、不敵な笑みを浮かべて空を睨み上げる。

「あのザコを片付けるのが先ね」

「——!」

マージョリーさんの鋭い視線を追従して上方を仰ぎ見る。そして、絶句した。灰色の炎を侍らせて浮遊するそいつは、さきほど贄殿遮那を砕いた紅世の王だった。強靱無比の贄殿遮那が破壊されるほどの爆圧を至近で浴びたというのに傷一つすら負っていない。マージョリーさんの露骨な挑発を受けてもまったく表情を変えないそいつは、楽し

みが増えたとばかりに下弦の三日月のような笑みを浮かべる。耳まで裂けた愉悦の笑みに底知れぬ恐怖を感じて身体が勝手に後退る。

「わざわざ『弔詞の詠み手』まで来てくれるなんて、今日は運が良いわあ。でもね、お楽しみを邪魔しないでほしいのよ。ね？」

雌狐のような妖艶な視線がこちらに向けられる。笑っているのに笑っていないような空虚な笑顔を向けられて、僕はお楽しみというものが何を意味するのか直感的にわかかってしまった。

「気の強い可愛い女の子をじわじわと翫って翫って殺すのって、大好きなのよねえ。特に、あなたみたいな生意気な娘を」

「ひっ……」

それは脅してもなんでもない、心からの本音だった。それがアイツの本性であり、欲求であり、存在意義なのだ。きつとあの頭の中で、僕は何度も恐ろしい殺され方をしてる。残酷な言葉を紡ぐたびに蠢く真つ赤な口腔は、視界を逸らした瞬間に飲み込まれそうな錯覚を与えてくる。

「時間をかけて、丁寧にゆっくりゆっくりと殺される。陵辱の限りを尽くされ、肉体と精神のどちらが先に死ぬか観察されながら殺される。殺しては蘇生させ、殺しては蘇生させを繰り返して永遠に慰み者にされる……まだまだ考えてるのよ。ねえ、どれがいい？」

ねえ、どれがいいかしら？ねえ、ねえ！」

それが己の生き甲斐だと言わんばかりに恍惚の表情で叫ぶ。能面のように感情の機微すら見せなかつた顔に初めて浮かんだ生きた表情は、ひどく醜いものだった。初めて向けられる欲望の対象への下卑た眼差し。激しい嫌悪感が吐き気と共に胃から逆流し、喉を震わせる。こいつは狂っている。本能が、こいつに関わってはいけないと警告してくる。

「聞いたことあるわ。そういう危ない趣味を持った紅世の王の名前」

「へえ。『弔詞の詠み手』に知られているなんて、私も有名になったのねえ」

端然な美貌を忌々しげに歪ませ、マージョリーさんが吐き捨てる。その冷ややかな視線に射抜かれながら、紅世の王が心底嬉しそうに手を合わせてころころと笑う。が、その眼は僕から少しも離れない。眼力で獲物を縛る蛇のように、ガラス玉のような目玉が僕を一瞬足りとも見逃すまいと見据えている。

「ええ、有名よ。少女のフレイムヘイズを惨殺することに執着する紅世の王なんて、アンタしかいないわ。『螺勢^{らぜ}』キュレネー」

真名を呼ばれた紅世の王——『螺勢』キュレネーが、不気味に、そして嫣然に微笑んだ。生気を感じられない屍蠟のような肌をした手に、どこからともなく現れた長大な弓が握られる。鳶が絡み合ってきたような黒色の弓に光の矢が構えられ、マージョ

リーさんの眉間にその照準を当てる。マージョリーさんは眼を逸らそうとはせず、キュレネーを睨み続ける。まるで眼を逸らしたらそれで勝敗が決まるかのように。

「光栄だわ、〃弔詞の詠み手〃。でもごめんなさい。私、あなたみたいに熟れちゃった果実に興味はないの。もう少し若ければよかったのに」

ギチギチ、と呪詛のような唸りを上げて矢が引き絞られる。キュレネーが矢を握る指を放せば、その瞬間に勝負はつく。だというのに、マージョリーさんの背中からは一切の怯えも気後れも感じられなかった。

「言ってくれるじゃない。いいわ、相手をしてあげる」

口端を歪めて獐猛な笑みを浮かべ、口調から冗談めかした雰囲気が消える。突き出した手先をくいと引いて「かかってこい」のジェスチャーを向ける。転瞬、三度目の雷光が世界を金色に染めた。僕を狙ったものとは段違いの破壊力を内包した一撃がマージョリーさんに命中し、怒号と衝撃波が周囲のありとあらゆるものを吹き飛ばす。僕への攻撃が銃弾だとしたら、爆弾に匹敵するような容赦のない一撃。それなりの寿命を経た街路樹が瞬時に燃焼し、灰と帰していく。それでも、彼女の背後にいた僕には余波すら届かない。粉塵と黒煙が吹き荒れる中、眼前でゆつくりと獣が立ち上がる。ずんぐりむつくりとした着ぐるみじみた巨大な群青色の獣。〃弔詞の詠み手〃がその身に纏う、武器にして鎧——『トーガ』だ。爆撃にも匹敵する攻撃を物ともせず、トーガが片腕

を振り上げる。キュレネーは避けられない。避けるには、あまりに近すぎた。

「熟れた女の良き、その身で味わいな！この変態女ア!!」

大気を切り裂き、空間をも切り裂く灼熱の爪が、唸りを上げてキュレネーを頭から股下へ一直線に切り裂いた。あまりに呆気ない終わり。怨嗟の叫びを上げて散り散りになりながら消滅していくキュレネー。奈落のようにぽっかりと空いた口からはたしかに絶命の悲鳴が聞こえるのに。

それなのに、どうして嗤っているのか——

「なによ、ほんとにただのザコじゃない」

「ひーつははははは！大人の女の魅力の勝利だな、我が無敵なる主、マージョリー・ドー!!やっぱり女は少々年食つてた方がイデデデデ」

「うっさい馬鹿マルコー」

マージョリーさんが拍子抜けしたと大きく吐息する。傍から見ている僕にも、それはマージョリーさんの圧倒的な勝利に見えた。でも、違う。胸の奥、心臓の内側から這い上がってくるこの焦燥感が、まだ終わっていないと僕に告げている。最初に僕がキュレネーに斬りかかった時、もう一人の敵が背後から襲ってきた。アイツはなぜ現れないのか。坂井悠二としての思考力が戻ってくる。

「マージョリーさん、まだです！もう一人いるんです!!」

大声を張り上げると肋骨が痛むが、気にして入れなかった。疑似夜笠で弾き返した際に一瞬だけ視認した敵の姿を懸命に思い出す。

「それに——封絶が解かれない！」

「——なんですって？」

主を失いあるじエネルギーの供給が途絶えた封絶はやがて結界を維持できずに消滅するはず。しかし、この封絶はその予兆を一向に見せない。それどころか、濃灰色の気配はより濃さを増して圧迫感を強めてくる。

「たしかに様子がおかしいぞ。注意したほうがよさそうだ」

「そうね。嫌な臭いがあるわ。ドギツイ化粧の変態女の臭いがプンプンする」

炎の獣トウがグルリと首を回して周囲を警戒する。マージョリーさんは、零時迷子を欠いた今の僕より遙かに存在の力を鋭敏に察知できる。そして、紅世の王は強大になればなるほど僅かな動作でも察知されやすい。封絶という狭小空間で、どうやって彼女の警戒を掻い潜っているのか。

（キュレネーがこの封絶の主だったことは間違いない。この封絶を維持していた力は討滅されたキュレネーのものだ。現に、今も封絶の中はアイツの力で溢れて……）

不意に、昔に戦った紅世の王との戦いが脳裏に蘇る。その名は「壊刃」サブラク。かつて、あの「万条の仕手」ヴィルヘルミナさんをも敗退させた、圧倒的な戦闘力と恐る

べき耐久力を誇る最凶の殺し屋。どんな達人にも察知されることなく接近し、不意打ちの初撃で致命傷を負わせてからじりじりと廻り殺す。希薄な存在の力しか持たない奇妙な身体はどんなに切り裂いても復活し、ジワジワとフレイムヘイズを追い詰める。その正体は、街全体に染み込むほどに巨大な化け物だった。自身を街と同化させ、チョウチンアンコウの触手のように囷となる人形を使ってフレイムヘイズを消耗させながら一撃で倒すタイミングを探る、陰湿な戦い方をする紅世の王。

(あの時も封絶の中にサブラクの気配が満ちていた。察知から逃れるために自分自身を広げていたんだ。そう、存在の力を強力な一体に集中させずに、敢えて薄れさせれば、察知されなくなる。もしも、キュレネーも同じような相手だとしたら?)

坂井悠二ほくの思考力は、危機的状况になるほどそれを油として鋭敏に回転する。思考回路のなかで、脳裏に浮かんだ一つの可能性とキュレネーの真名がパズルのピースのようにピッタリと合致する。背後から襲ってきた敵の色は、キュレネーと同じ濃灰色。そもそも、別の敵ではないとしたら? 「螺勢」の真名の意味は—— 「螺旋の軍勢」だとしたら?

その仮説に悪寒を感じた瞬間、僕は叫んでいた。

「気をつけてください、マジヨリーさん! キュレネーは一人じゃないんだ!!」

「なに——」

果たして、その先に続けようとした言葉はなんだったのか。マージョリーさんの言葉は、突如として全方位から浴びせられた超音速の矢の弾幕に遮られた。一本や二本じゃない、無数の矢が網状となって覆い被さる。何の前兆も見せずにトーガに着弾した矢の群れは爆音と同時に次々に爆裂し、天を焦がすほどの大火柱をあげる。作り出す衝撃波は相乗効果によって威力が倍增され、先のそれとは比べ物にならない爆炎の瀑布となつて襲い掛かってくる。今度は、僕を護つてくれるものはなかった。津波のように迫り来る炎の壁。脚に力を込めるも立ち上がれない。逃げられないと悟ると、僕は頭から疑似夜笠をかぶつて膝を抱き、身を小さくした。一瞬後にこの身を飲み込む灼熱の嵐。まったく成す術なく、僕の矮躯は木の葉のように宙空に吹き飛んだ。疑似夜笠の表面がバターのようになじり、炎熱が内側まで浸透してくる。オーブンに閉じ込められたように皮膚の表面をギリギリと焼かれ、鋭い痛みが神経を走り狂う。やはり、僕如きが作つた即席の夜笠ではシャナのそれのように十全の機能は果たせない。それはこの身体にも言えるかもしれない。僕如きがシャナの身体を使ったところで、シャナの能力を十全に発揮させることなんて――

「あぐッー」

背中から堅い何かに衝突した。あまりの衝撃で身体がその何かにめり込む。耐久値の限界を超えた疑似夜笠がバチバチと音を立てて収縮し、ついに二元の学生服へと戻る。

その服も、眼も当てられないほどに破れ、焦げ、大部分を消失している。呼吸のたびに肺が痛み、心拍のたびに心臓が痛み、考えるたびに頭が割れるように痛む。額から流れ落ちる大量の鮮血で両の視界が朱色に霞み、口の中は喉から這い登ってきた不快な鉄の味が満ちている。自分がめり込んでいる物体が何なのかと疑問に思つて横目で確認する。それが輝きを放つ白銀のメルセデスベンツだったことに、「もったいないな」とどうでもいいことを考えた。

「マ、マージョリーさんは……？」

ガラガラと地面を伝う微かな震動を感じて顔を上げる。視線を投げたその先で、岩ほどの瓦礫がガツンと高く蹴り上げられた。そこから、逆巻く暗雲を背に、スラリとしたメガネの美女——マージョリーさんがひよいと姿を現す。着込んでいた上等そうなレディーススーツはどころどろが焼け焦げている。何を探しているのかマージョリーさんは慌てて惨状と化した周りを探るようにぐるりと首を回し、こちらに気がつく。と陸上選手も目を見張るスピードで走り寄ってきた。フロントガラスに身体半分をめり込ませている僕を見下ろしてギョツと色を失ったが、弱々しく呼吸をしていることを確かめるとホツと胸をなでおろす。

「どうやら死に損なつたみたいね、ちびじやりモドキ」

心配してくれていた。マージョリーさんの優しさに触れて、痛みが少しだけ和らいだ

気がした。お礼を言おうと口を開きかけたところで、ハッと空を見上げる彼女の表情が戦慄に染まっていることに気づく。その瞠目の視線の先にあるものは何かと僕もまた空を大きく仰ぎ見て、

「「「「「——ねえ、驚いてくれたかしら?」「「「「「」」」」」」」

自分は狂ってしまったのか。いや、むしろ狂ってしまった方がまだ何倍もマシだった。こんな絶望を味わうくらいなら、さっさと狂ってしまったていればよかったんだ。頭上には、最初に見た姿となら変わりのないキュレネーたちの姿。数十、数百。そんなものじゃない。視界の隅から隅までを埋め尽くす、灰色の炎の軍勢。全員の手に掲げられているのは全て同じ形状をした長大な弓。これこそが、「螺勢」キュレネーの正体なのだ。全員が同じタイミングで弓を構え、完璧に同調した動作で弓を引き絞る。ギチギチギチギチ、ギチギチギチギチ。その音は、地を這う悪鬼の呻き声に聴こえた。精神に錯乱をきたした人間の悪夢に閉じ込められたような光景に、僕は声も出せない。

「今日は派手な一日になりそうだな。我が不幸なる戦姫、マージョリー・ドー」

「このクソ暑い日に、冗談じゃないわよ……」

瞬間。すぐそこに太陽が出現したかのような凄まじい雷光。一斉に弾かれた光の矢

が避けようのない豪雨となり、僕たちに降り注ぐ——

1—10 覚醒

何度地面に叩き伏せられ、何度宙に吹き飛ばされたのか。もう覚えていない。荒波に翻弄される小船のように不様に叩きのめされ、地面に壁にと藁屑のように全身を打ち据えられる。映画で見た戦場のシーンそっくりの灼熱地獄となった故郷の街の惨状の前に、無力な僕はただ身を小さくして攻撃から逃れるしかなかった。贄殿遮那に残されていた刀身には蜘蛛の巣のように激しい亀裂が走り、美しかった刃は刃毀れし、出来の悪いノコギリじみた惨めな姿を晒している。僕のような未熟者に振るわれたせいで。かつては美しかったその刀身が、シヤナの身体を使っても満足に回避することすらできずに縮こまっている自分への皮肉に見えてひどく滑稽だった。

「伏せなさい、ちびじやりモドキ！」

目の前に高速で飛来してきた矢の雨と群青の炎の爪が交差し、溶け合い、爆散した。衝撃波が音と共に押し寄せ、砂礫が視界を土色に染める。僕がこうしてまだ生きていられるのは、僕を背後にしてひたすらキュレネーの攻撃に堪えているマージョリーさんのおかげだ。でも、防戦一方のそれがいつまでもつかわからない。現にマージョリーさんが打ち落とし損ねた矢が幾度となく僕に目掛けて飛来してくるようになってきた。い

や、こぼれ球なんかじゃない。最初から僕を狙っているんだ。敢えて直撃させず、ジワジワといたぶっているんだ。そこまでは冷静に思考できても、そこから先に至ることが出来ない。心が、諦めてしまっているからだ。

「あはは、いつまで護りきれるかしら？」

「——ちいつ！しまった！」

キュレネーの嗜虐的な台詞にマーゾヨリーさんが齒噛みする。その激情を狙われた。ガツと大きく開かれたトーガの爪の間をすり抜けて、一際強力な光の矢が飛来してくる。蛇のように身をくねらせて獲物に襲いかかる、陰湿な追尾弾。身体がほとんど自動で反応し、防御のために贄殿遮那を正眼に構える。視界を占拠する眩い閃光と衝撃が着弾を報せ、痺れて感覚のない腕がビリビリと打ち震えて、

「——あ、」

ついに、贄殿遮那が砕け散った。痛みに霞む視界の中で亀裂が柄にまで達し、ばきりと音を立てて割れる。僕にとってシャナの強さの象徴だった無窮の大太刀が乾いた金属音を響かせて地に散逸する。なんて、呆気無い。心身両方の支えを亡くした身体が膝から崩れ落ちる。反射的に差し出した両手両膝が地面を打ち、辛うじて横たわることを防いだ、それだけだった。幾度も衝撃に晒されて疲労の限界を超えた手足にすでに感覚はなく、全身の神経を引き抜かれたような虚脱感が五体に重く押し掛ける。すぐ正面で

マージョリーさんが必死に敵の攻撃を捌いているというのに、それが遠い場所で見えているかのように感じる。もはや戦う気力などなかった。身体中の傷から発せられる痛みが現実の質感を伝えていたが、それすら他人事のようにぼんやりと遠のいて危機感すら湧いてこない。完全に、状況に屈していた。

「———こんな、はずじゃ、」

疲労と絶望に忘我しながら、ふと足元に散らばる贗殿遮那の残骸を視界に入れる。碎けていても優美な曲線を魅せつける美しい造形が、どんな状況下にあっても諦めなかったシャナの横顔と重なる。しかし、カラリと音を立てて転がった刀身の中身は、あろうことか空洞だった。僕が贗殿遮那そのもののように思い込んでいた宝具は、模造刀にも劣る偽物だったのだ。外見だけそっくりに真似ても、中身が伴っていない、役立たずの出来損ない。

「ちびじやりモドキッ！」

再びトーガの脇をすり抜けて、獲物をいたぶる矢が着弾する。それは俯く僕の眼前の地面を抉り、当然のように爆散した。自己憐憫の砂粒さりゅうに沈みかけていた僕には回避の選択肢すら浮かばなかった。炸裂した大音響に肌を泡立たせる暇すらなく、膨張した空気に跳ね飛ばされて後方に吹き飛んだ。今までに倍する激痛が身体中をズタズタに切り裂き、肺腑が叩き潰されて呼吸が不可能になる。僕に向かって叫ぶマージョリーさんの

声がゆつくりと遠ざかっていく。時間が弛緩し、流れる視界がスローモーシヨンのようにゆつくりと過ぎ去る。

ふと、それらの色彩が急激に精彩を失っていくのを知覚した。ボロ布のようになった肉体から意識が剥がれていく感覚。直後、ショートしたかのように瞳から光が失われる。忍び寄る死神の冷たい屍衣が肩に触れた気がした。自分の死すら疑うほどの冷たい世界に足を踏み入れる。耳が詰まったような完全な静寂がまたたく間に五感を塗りつぶして、

（——この空っぽの贄殿遮那は、お前自身だ）

　　這い登るような、零れ落ちるような、声がした。広い空洞を伝わってきたような反響を伴って、坂井悠二の声が響く。

（こんなものが、贄殿遮那であるはずがない。名を語ることすらおこがましい駄作だ）

　　暗黒の意識の中で、真つ黒な坂井悠二の輪郭がゆらりと揺れ、叱りつけるように声を荒げる。吹きすさぶ風鳴りのような、掠れて虚ろな声音だった。大気が重油と化したよ

うな世界の中で、臃げな輪郭の脚がこちらに向かつて踏み出される。明らかに異常とも思える事態だったが、不思議と驚きはなかった。僕は一再ならずそうしているように、その声の主に平然と問いかける。

(なら、もつと精度の高い贗作を創ればいいのか?)

真つ黒な自分が「否!」と世界を揺らす。暗闇を踏みしめ、一步近づく。

(どんなに優れた贗殿遮那の贗作をもつてしても、眼前の敵は淘汰できない。そも、坂井悠二にはこれを振るうスキルが足りない。経験値が足りない。才能が足りない)

(なら、どうすればいい?僕がシヤナのように敵を駆逐するには、どうすればいい?)

漆黒に燃える坂井悠二が嘲笑する。

(シヤナのように?それこそが間違いだ)

周囲より一際濃い闇が、影を掻き分けて眼前まで近づいてくる。必然、シヤナの身体となった僕は接近してくる彼を見上げることとなる。

(それは驕りだ。お前の紅世の王が問うたはずだ。「坂井悠二はシヤナか?」と)

僕の知らない別の坂井悠二が目の前に仁王立ちし、威厳さえ伴った気迫で圧倒してくる。

(坂井悠二はシヤナか?否、お前はお前だ。シヤナの戦い方を模倣する必要はない。こんなところで躓いている暇はないぞ。シヤナの肉体を持って、坂井悠二の戦いをせよ。

!!)

張り上げられた胴間声に意識が弾かれる。暗黒の世界がモノクロへと変わり、色彩が復活する。その狭間に、この世の闇を凝縮したかのような黒い炎を見た気がして――

「……ッ!？」

頬に冷たいアスファルトを感じた瞬間、地面から身体を引き剥がす。その反動で五体余す所なく激痛が走り狂い、先ほどの黒い炎も幻覚も意識の外へと蒸発し、思い出せなくなつた。しかし、何者かが告げたその言葉^{セリフ}だけは頭蓋の内にとつかりと焼き付いていた。

—— シャナの肉体を持って、坂井悠二の戦いをせよ ——

その言葉を脳内で繰り返すたび、濁っていた思考が急激に冴えていく。より鋭く、より明晰に。精神が凍えた湖水のように冷え切り、鏡となつて周囲一帯の全景を鋭敏に映す。体勢を立て直し、キュレネーの姿を視界に捉える。敵は複数、索敵能力は高い。すべて遠距離攻撃^{レンジ}タイプで射程は広範囲かつ狙撃能力も極めて秀逸。近接戦^{インファイト}を挑むのは不利。ならば!と一つの活路を導き出す。坂井悠二にしか思いつかない戦い方を。しかし……。

(武器がほしい！僕が望むアレがあれば……！)

臍を噛み、ぎりど両の拳を握り締める。この手には得物がない。敵を倒すための手段が足りない。手に入れなくてはならない。どうやって。目当ての武器になりそうなのはないかと必死で周りを見回す。その時、遠心力に振られたペンダントが肋骨にあたって軽い金属音を立てた。

そこでようやく、僕は今この段階に来てなお、自分と契約した紅世の王の力を行使していないことに気づいた。

今までの僕はシャナの力を再現して^{コピー}いたに過ぎない。出来もしないことをしようと無駄に足掻いていたに過ぎない。今、この身を紅蓮に染めている赤の炎は、この紅世の王本来の色ではない。まだ一度たりとも、この紅世の王はその力を解き放つてはいない。この紅世の王が持つあの能力を使いこなしていない。閃きとともに腹の底に熱が灯るのを感じながら、口元の血を乱暴に拭い、勢いよく胸のペンダントを掴んで顔の前に掲げる。

「テイレシアス」

「なんだ、坂井悠二」

久方ぶりに聴く紅世の王の声は、自らへの呼び捨てに対する憤怒や当惑など一切感じさせず、むしろそれを待ち望んでいたかのような力強さに満ちていた。それに応えるよ

うに、僕は双肩に力をこめて吼える。

「力を貸せ、テイレシアス！我が紅世の王!!」

「——ははっ！遅い、遅いぞ、いつまで待たせるつもりだ!!我がフレイムヘイズ!!」

歓喜にわななく怒号とともに、轟ゴウと白い爆炎の竜巻が僕の身体を包み込んだ。長い夜の果ての暁光のように煌々と輝く白い炎が総身をくまなく包み、あらゆる負傷を癒していく。全身が爆発しそうなほどに熱くなり、この小さな肉体を構成する一分子に至るまで苛烈にして清浄な力が漲つてゆく。張り裂けんばかりのエネルギーが身の内でぐんぐんと高まり、瞳の裏が熱くなる。頭の芯まで熱に痺れ、不可能などないと錯覚するほどに自信が満ち溢れてくる。この、自分まで炎と化したような胸ときめかせる灼熱の感覚を、シャナも味わったことがあるのだろうか。

繭のようにボクを包み込んでいた白炎が消える。視界に映るのは、トーガを失い生身となったマージョリーさんの姿と空を覆いつくすほどの矢の大群。自分が成すべきことを瞬時に把握したボクは両の手に一丁ずつ握ったそれを矢の雲に突き出し、引き金トリガーを引いた。

↓
↓
↓

「い、の——!!」

群青の炎弾を横薙ぎに連射する。直撃すれば、そのへんの紅世の徒なら簡単に消滅させうる破壊力を持った炎弾は、しかし光の矢の群れと真正面から激突して盛大に引き分けた。爆音と衝撃が地を揺らし、飛び荒ぶ瓦礫が人工物も天然物も残らず粉碎する。だが眼を逸らすわけにはいかない。壁のように視界を覆っていた粉塵を突き破り、さらに数を増した光の矢が弾幕となつて襲いかかってくるのだから。

「こりゃあ、ちよつくらやばいんじゃねえのか、我が戦場の花、マージョリー・ドー！」
 マルコシアスがわかりきったことを叫ぶ。こんな状況、どうみたって不利だ。前に進めず退却もできず、そのうえ満足な反撃ができないなんて、最悪だ。ジリ貧とも呼べない。

「わあつてるわよ!《キツネの嫁入り天気雨!》っは!」

「んなら俺が言いたいことも察してくれてるんだらうが——《この三秒でお陀仏よ》っとー!」

『屠殺の即興詩』を紡ぎ、目にも止まらぬ高速で自在式を組み上げる。当代でも五本の指に入ると称される自在師の達人によつて10体のトীগアの分身が宙空に生まれ、旋風となつて舞い上がる。

「これでも——食らつとけ!!」

突如、トーガが高空で破裂したかと思うと、それらは無数の炎の豪雨となって矢群と敵群に降り注がれた。その比類なき破壊力はまさに高射砲による絨毯爆撃、もしくはクラストー爆弾そのものだ。先の爆音と衝撃を遥かに凌駕する圧倒的な大爆炎が地上に現出し、自然の摂理をねじ曲げんばかりに燃え上がる。さながらそれは核爆発のように、ビルほどもあるキノコ雲を空へ屹立たせた。

「ツチクシヨウ!!」

これだけの威力を持った攻撃を用いても、手応えは感じられなかった。正確には、本体を仕留めたという手応えが。接戦するマジヨリーには、キュレネーの正体とその仕掛けが否応なく理解できた。敵は分裂という特殊能力を有しているのだ。何千体というキュレネーのなかでどれが本体なのか察知しようとするたびに、そんな余裕など与えはしないとばかりに波状攻撃の連打を受けている。数分前から延々と繰り返される猛烈な攻め技の応酬は、マジヨリーの体力を確実に削り取っていた。消耗戦では、数が多いキュレネーが圧倒的に有利だ。いや、頭の冷静な部分では理解できているのだ。このギリ貧の状況を打破する道がたった一つあることくらい。

「つたく、いつたい何匹いやがるのよ……!」

「……なあ、我が情深き守護者、マジヨリー・ドー」

いつにないマルコシアスの低められた声に、マジヨリーはピクリと眉を震わせる。

この紅世の王が何を言うかはすでにわかっていた。

「わかっただろ、あのチビ助を守りながら戦ってたらやべえってことは。今さら命の優劣がつけられねえ歳でもなし、さっさと決めた方がいいんじゃないやねえのか」

マルコシアスに説教をくらうのは久しぶりだった。そのことに無意識に苦笑しながら、一度背後を振り返る。そこにいるのは満身創痍でもはや立ち上がることにすままならない、*「炎髪灼眼の討ち手」*に酷似した謎の少女。きめ細やかな肌は傷だらけで血に染まり、その瞳にはもう戦意は感じられない。おそらくは新人の^{ルキキ}フレイムヘイズ。どんな^{ゆえん}理由があつてちびじやりにそっくりな少女がフレイムヘイズになったのかは知る由もないが、今回の戦闘が初戦だということは拙い戦い方を見れば分かる。たまにいるのだ。まだ自身のフレイムヘイズとしての力に慣れぬまま戦いに望み、相手が悪く脱落してしまうフレイムヘイズが。あの少女もまた同じだ。武器は折れ、心も折れ、もはや死を待つばかり。あのザマでは、この戦いを運良く生き延びても次はない。自分が助けてやる意味なんてないかもしれない。そう、このゾリ貧の状況を打破する道はたった一つある。このちびじやりモドキを見捨てて撤退すればいい。そうすれば自分だけは助かる。

「だけどね、」

「あん？」

頭上から攻撃の気配。未来予測に匹敵する歴戦の第六感を駆使してそれを察知すると、瞬時に特大の炎弾を作り出して撃ちだす。轟く爆音の向こうに、一瞬だけ、過去の自分を垣間見る。マージョリーは、人間だった時から、誰かを見捨てることが苦手だった。とてもとても、苦手だった。

「ちびじやりにそっくりな奴を見捨てたら、さすがに後味悪すぎんのだよ!!今夜の酒が最悪にマズくなのだよ!!」

もう何度目かわからない爆音に負けなくらいの怒鳴り声を張り上げる。間髪いれずに牙を剥かんと襲い来る矢の進行方向に灼熱の火球群を撒き散らして迎撃する。まさに百花繚乱の狂い咲きとも言うべき群青と灰の瀑布が、電柱を次々と基礎ごと地面からもぎ取って捻り切る。あのちびじやリモドキは、なぜか他人のように思えなかった。よく見知っている誰かのような気がしたのだ。フレイムヘイズ屈指の殺し屋と謳われる自分にしては甘すぎる決断だったが、後でうじうじと後悔するよりマシだ。

「ヒー、ハー!そう言うと思つてたぜ、我が勇敢なる猛者、マージョリー・ドー!!」

マルコシアスの軽薄で爽快な——けれども、契約者を心から誇りに思っている笑い声に叱咤され、気合十分とばかりにトーガの両の爪をガシャンとかち鳴らせる。死にかけたことなんて今まで数え切れないくらいあった。今よりもつとひどい状況に陥ったことも数知れない。でも、今もこうして生きている。今回だって、生き残る。苦しい今

を変えたいのなら、今、全身全霊を尽くすのだ。

「あのちびじやりモドキも今夜の酒に付き合ってもらわよ！未成年だろうがなんだろうが知ったこっちゃないわ！私が酔いつぶれるまで勝利の美酒のお酌をさせるんだから!!」

裂帛の気合を込めて再び屠殺の即興詩を紡ごうとして——突如視野を染めた凶悪な雷光に瞠目した。間近で榴弾が炸裂したような、全身を叩きつける激痛。その一撃で、身に纏っていたトーガは呆気なく散逸した。視程の端で、謎の少女が真正面で発生した爆風に拐われるのを視認する。咄嗟に手を伸ばそうとするも、自身にその余裕がないことを思い起こして中断した。

「こんの……舐めんじやないわよー」

吹き飛ばされる直前、地面にハイヒールを突き刺してその場に踏みとどまる。間髪入れずに炎を操作して気圧差の断裂壁を作り、時間差で襲ってきた衝撃波を防ぐ。気化したアスファルトの悪臭とそれ以上に不快な気配に顔を歪め、飛来してきた矢の延長線上に佇む気配の主を射殺さんばかりに睨みつける。

「ねえ、『弔詞の詠み手』。あなたは十分に戦ったわ。もう諦めたら？大丈夫、あなたの頑張りに免じて、その娘はなるべく痛くない方法で殺してあげるから。ね?」

視線の先で余裕綽々と微笑むキュレネーの台詞に、思い切り唾棄してガツンと天に向

かつて中指を立てる。

「ふざけるんじゃないわよ、変態女！あんたの裁縫針なんて、いくら当たったってこっちは痛くも痒くもないのよ！」

「……ああ、そう。じゃあ、貴女の首は剥製にして飾ってあげるわ。胸と脚は肉付きよくて美味しそうだから、あとで舌鼓を打つことにしようかしら」

マージョリーの堂々とした返答に、対するキュレネーはまったく意外そうな反応をしなかつた。それどころか、ニチイと酷薄に嗤ってみせた。キュレネーはマージョリーのその反骨こそを欲していたのだ。彼女もまた弓矢を使う狩人を自負する者として、より手強い獲物を狩る喜びを甘受しようとしていた。一体の笑みは伝播し、空を埋め尽くすキュレネーの分身全員の口が音を立てるように耳まで一気に裂けていく。ザン、と一斉に構えられる光の矢。齒軋りして防御の方法を考えるが、鍛えられた直感はそのようなものはないと冷酷に告げていた。

「それじゃあ、御機嫌よう。次は私の胃袋で会いましょう、〃弔詞の詠み手〃」

全てのキュレネーの指が矢羽から放される。全周囲どの方向に身をかわそうとも逃げ切ることではできない死の雨が降り注ぐ。言うまでもなく、絶体絶命だった。これまでかと臍を噛み、それでも最期まで眼は逸らすまいとキュレネーを睨みつけて――

突如背後で巻き起こった竜巻に、愕然と眼を見開いた。轟々と周囲のあらゆるものを

巻き上げて天を突く、白い炎の竜巻。この唸りを上げて逆巻く爆炎があの少女から発せられたものだど理解するのに数秒の時間がかかった。今までの少女のそれとは比べ物にならない存在の力に、怯えるかのように大地がビリビリと震動する。

ふつと、唐突に竜巻が音もなく消え失せる。轟風を巻き上げて、傷が全て癒えた少女が姿を現す。刹那、その小さな両手から灼熱の轟砲が轟き、火線の雨が飛来する矢の全てを一本残らず迎撃した。

その姿は、マージョリーの知る「炎髪灼眼の討ち手」とまるでかけ離れたものだった。

——力強く羽ばたく、雲海のように白い炎の翼。

——艶やかに風に流れる、燦然と純白に燃えたつ長髪。

——凜冽にして透明、しかし断固とした闘志を宿した雪色の双眸。

だが、それらよりもマージョリーを驚かせたのは、少女の両の手に握られているその武器だった。少女の手に余る巨大な銃把の上部で回転弾倉は煙を上げ、過熱する銀色の銃身は大気を陽炎のように揺らめかせている。鞘に収められた短剣のような形状をした二匹の鉄の魔獣を、マージョリーは識っていた。かつてマージョリーがまだ普通の人

間だった頃に兵器として普及し始め、数百年を経て戦争の主兵器へと進化した、同じ人間を殺すためのヒトの知識の結晶の一つ。紛れもない、『拳銃』だった。

「はははははっ！拳銃を使うフレイムヘイズとききたか！お前は本当におもしろい奴だ！！」

少女の胸元から響く、大地を底から揺すり上げるような喜悦極まる笑い声。マージョリーが初めて聴いた、少女の紅世の王の声だった。その大声に返答するかのように、少女の口元に不敵な微笑が浮かび、

「『贗作師』 テイレシアスがフレイムヘイズ、 『白銀の討ち手』 —— 推して参るッ！！」
覇気に満ちた宣言と共に、光の尾を引いて空へと天翔けていった。

1—1—1 勝利

決まりきっていた結末を覆し、満身創痍だったはずの少女が白銀の尾を引いて力強く飛翔する。その姿は、その場にいる全員に等しく驚愕を与えた。わけても、対峙するキュレネーの驚きこそ最たるものだった。『炎髪灼眼の討ち手』がその身を純白に燃やし、近代兵器を握っているからだけではない。少女の持つ拳銃こそ、キュレネーがもつとも忌み嫌う武器だったからだ。

キュレネーは自他共に認める弓の名手である。古くは人類発祥の時代、キュレネーが紅世に生まれ出でる遙か昔に発明され、遠く地平線の彼方にある敵すら悉く射殺すこの兵器を、キュレネーは心底愛していた。その思い入れようは、彼女が少女をいたぶることに捧げる熱意に負けずとも劣らぬものだった。だが、あの『銃』は、その栄光の歴史を薄汚い鉄錆と硝煙で瞬く間に塗り替え、一方的に弓の時代に終わりを突きつけたのだ。たかが数百年の歴史しか持たない、火薬の唾を吐いて喚きたてる醜い鉄の塊に、数万年の雄大な歴史を持つ彼女の愛する弓の領域は無残に汚されたのだ。暗澹と蟠り沸騰していく怒りに、キュレネーの顔が鬼面のように歪み、憤怒に燃える。もはや、獲物を楽しみながら鬪り殺すという余裕など彼女の頭にはなかった。銃弾風情が自分の矢

を撃ち落とすなど断じて許容できない。キュレネー本人も気が付かない内に、彼女は「白銀の討ち手」に対する認識を虐待する対象から抹殺すべき敵へとスライドさせていた。そのくらいに許せなかった。眼前の敵が握るあの獣が、あの銃が！

「お、の、れえええええええええ!!」

もう「炎髪灼眼の討ち手」だとか「弔詞の詠み手」だとか、そんなことはどうでもよかつた。あの憎き機械仕掛けの獣を一刻も早く自分の視界から消し去りたい。この弓で、この矢で、鉄屑にしてやりたい。ついに臨界点に達した怒りに、キュレネーの分身たちが眼を見開き牙を剥いて腹の底から湧き上がる激情に咆哮する。攻撃の狙いを「弔詞の詠み手」から外し、キュレネーたちは一斉に矢を放った。憎悪と狂気を孕んだ魔の矢群が目覚めたばかりのフレイムヘイズ「白銀の討ち手」に四方から襲いかかる。キュレネーは知っていた。銃には弾丸の制限があることを。装弾には時間がかかることを。少女が握る『リボルバータイプ』と呼ばれる回転式拳銃は、そんな制約の多い拳銃の中でも特に撃てる弾丸が少ないことを。

——だからこそ、目の前の光景が信じられなかつた。

↓
↓
↓

二丁の拳銃を左右に構え、前方に突き出し、交差させ、縦横無尽に猛然と連射する。銃口から撃ち出された鋭い弾丸は人間の使用するその何倍もの初速で音速の壁を貫き、飛来してくる矢を精確に迎撃していく。回転式弾装が空気をねじ切らんばかりに激しく回転し、光弾の嵐を吐き出す。普通の拳銃ならばとづくに弾切れしているだろう。だが、シリンドラーの中に無限に弾丸を生み出していくこの贗作は、通常のそれではない。

「無限拳銃——そうか、フリアグネの『トリガーハッピー』の贗作か！」

契約者の意外な発想に喜び驚くテイレシアスの呵呵大笑に肯定の笑みを返して高速で引き金を引く。その通り。この拳銃は、ボクが初めて遭遇した紅世の王、*“狩人”*フリアグネの有していた対フレイムヘイズ用宝具『トリガーハッピー』の贗作だ。徒と討ち手への復讐に燃える人間によって作られたこの拳銃型宝具は、撃つ意思さえあれば無限に弾丸を放ち続けられるという破格の能力を有している。

テイレシアスの固有能力は、アラストールのような強力無比な断罪の炎でもなければ、マルコシアスのような高度な自在式支援でもない。『記憶にある宝具を再現して創り出す』という贗作の力だった。敵が遠距離攻撃に特化しているなら、こちらは中距離攻撃で距離を詰めつつ、相手がもつとも攻撃しにくく、こちらがもつとも攻撃しやすい間合いに移動すればいい。その戦い方に一番相性のいい武器がこの二丁の『トリガーハッピー』だった。

拳銃など握ったことのないはずの身体は、舞い踊るように空中で身体を捻らせ、肉体の一部であるかのように自由自在の角度から弾丸を射出し続ける。シヤナの強靱な肉体は反動を難なく打ち消し、精密射撃を可能としてくれる。撃ち続ける間も『トリガーハッピー』から絶え間なく流れ込んでくるのは、頭がショートしそうなほどの情報。万華鏡を覗き込んだかのように、この拳銃を使っていた者たちの戦闘方法が視_みえる。『贗作師』テイレシアスの固有能力は、単にそっくりな贗物を造るものではない。それに染み付いたかつての使い手たちの記憶さえも模倣し、共感し、再現する。さらに！

「まだまだア!!」

気合に満ちた声で吼えると、存在の力を『トリガーハッピー』に流し込み、思い描くイメージを押し付けていく。途端、『トリガーハッピー』がメキメキと音を立てて生き物のように銃身_{バルレル}を巨大化させ、回転式弾倉_{シリンダー}を一回りも二回りも肥大化させる。『零時迷子』を埋め込まれたトーチとなっていた僕は、存在の力を感知し、その流れを操作する術_{すべ}を段階的に身につけて、ある時点からはシヤナよりも長けるほどに成長していた。『零時迷子』を失ったことで感知能力は失われてしまったが、存在の力をイメージ通りに操る感覚は今も魂が覚えている。鈍銀に輝く鉄の表面にはレーザーのような輝きを経て複雑な自在式が刻み込まれ、存在の力が隅々まで駆け巡っていく。その過程で『トリガーハッピー』の対フレームヘイズ用の能力は切り捨てられ、破壊力のみを優先した宝具へ

と変化する。華奢だった『トリガーハッピー』はその形態を激変させ、次の瞬間には精緻にして繊細、かつ大胆で力強い魔銃へと生まれ変わった。シヤナの身体なら、この銃の反動にだって堪えられる。力を出し惜しみして勝てる相手じゃない。シヤナの身体をもつて、坂井悠二の戦いをせよ！

再び引き金を引く。鉄槌の如き撃鉄が巨大化した弾丸の雷管を叩き潰し、超常の火薬が炸裂する。バレル内部で小爆発が起きたかのような威力に腕が折れんばかりに激震するが、シヤナの腕力で無理やりねじ伏せる。轟音と爆炎を従えて射出された砲弾とも言うべき巨大な弾丸が、虚空に鮮やかな火線をひいて光の矢の群れへと真っ向から突進する。轟く爆音。爆発は他の矢の群れも巻き込み、誘爆し、空中で炎の大輪を狂い咲かせる。——それでも、存在の力を凝縮された弾丸の猛進は止まることを知らない。

音の壁を軽々と突き破った弾丸は、ついに一人のキュレネーの脳天に突き刺さり、抉り、粉碎した。灰色の絡まった肉片が派手に飛び散ったかと思うと、鈍色の炎となつて塵と消える。一瞬の忘我を経て、キュレネーたちが怒りに任せて激昂する。千を超える怨念の叫び。常人ならその狂氣にあてられただけで絶命しかねない呪詛を、それに負けない豪快な笑いが吹き飛ばす。

「はははははッ！はははははははッ！！お前を見つけて幸運だった！！お前を選んで正解だった！！生まれてこのかた、ここまで俺の力を使いこなせた者と出会ったことはなかったぞ

!!我がフレイムヘイズよ!!」

テイレシアスの頼りがいのある豪笑に、ボクも口端を不敵に釣り上げて応えてみせる。渴望を満たす歓喜と感動に打ち震える声はまるでボクを急かしているようだった。もつと踊れ、もつと戦え、もつと俺を魅せてみる、と。上等だ。もつと激しく踊り、もつと激しく戦い、もつと激しくお前を魅せてやる!

純白の翼を一際強く羽ばたかせる。超常の翼はフレアを迸らせて猛烈な推進力を生み出し、ボクに神速のスピードを賦与してキュレネーの軍勢へと肉薄させる。常人には視認すら出来ない戦慄の矢が群れを成して迫るが、知ったことではない。ボクはもう常人ではない。人型をした修羅、フレイムヘイズなのだから。

「くそくそくそくそつーなんで、当たらない!」

キュレネーの焦燥が耳朶を掠る。その声すら置き去りにして、ボクは神業的な体捌きで矢を回避してゆく。土砂降りより激しい即死の矢群が鼻先を掠め、肩口を擦過するが、そこまでだ。キュレネーたちが一様に目を剥き、ありえないという困惑の表情を浮かべる。戦闘機マの空中戦闘機動ニューバを連想させる回転で矢群をすり抜けるように肉薄し、一気に必殺の間合いに突入する。その距離、わずか10メートル。遠距離用の長弓ロングボウが苦手とし、拳銃がもつとも効果を發揮する中距離射程。瞬間的に思考を停止してしまったキュレネーたちには、ほんのコンマ秒単位の隙ができていた。ボクにはそれで十分だつ

た。『トリガーハッピー』の銃口を突き出し、引き金を引く。表面に刻み込まれた強化の自在式が紫電を散らして白く輝き、銃口が眩いばかりのマズルフラッシュを迸らせる。今までとは桁外れな反動に、総身が痙攣したかのように震える。

(だけど、シヤナの身体なら堪えられる！シヤナがボクを支えてくれる！)

胸中に叫び、その勢いを引き受けた銃口が立て続けに炎を爆ぜる。骨身を激震させる反動と同時に、一発ごとに感じる確かな手応え。激しい爆炎と閃光がキュレネーたちを飲み込み、一瞬世界を白く染め上げた。鼓膜を破りかねない轟音が封絶内に木霊する。だがボクは攻撃の手を休めない。炎と煙と閃光が入り混じる周囲に次々と弾丸を撃ち込んでいく。手応えの連続にも容赦はしない。今までキュレネーに苦しめられてきたフレームヘイズたちの無念をも晴らすように、徹底的に撃ちまくる。シヤナの肉体ですら筋肉が悲鳴をあげるほどの連撃で、度重なる閃光に視野はかすみ、鼓膜も麻痺する。観測が意味を失う領域の瀬戸際に位置する極限の戦闘。気がつけば、あれほど苛烈だった反撃は返ってこなくなっていた。

「——まだ、だな」

テイレシアスの低い声に頷き、油断なく銃を構え直す。酷使された銃身は白熱して大気を焼き、砂漠の蜃気楼のような陽炎を揺らめかせている。自分の存在の力で作り上げた贗作だからか、『トリガーハッピー』の限界に近いことは感覚で理解できた。如何に強

化を施した宝具とは言え、贗作は贗作だ。強度はオリジナルには遠く及ばない。それは贗殿遮那の崩壊で学習済みだった。キュレネーの軍勢は倒したが、こちらに向けられる刺すような殺意はまだ衰えず感じられる。まだ最後の一人が残っている。間違いない、それが「螺旋の軍勢」キュレネーの本体だ。

はたと、自分に向けられていた殺意が逸れるのを感じた。「なぜ」と頭で理由を考えるより先に第六感が警告を発した。脊髄反射的な思考でキュレネーの狙いを察知すると、翼を大きく捻り高速で飛翔する。まるで瞬間移動したかのように、ボクは呆然と戦闘を見上げていたマージョリーさんの前にアスファルトを砕いて降り立つ。

「ちびじやりモドキ、なにを……!?!」

驚愕するマージョリーさんの疑問に答えぬまま身を翻し、腰を落として身構え、『トリガーハッピー』を交差させて即席の盾とする。遙か彼方で輝く雷光。腕に走る衝撃。猛威に軋みを上げる魔銃。そして、

「ぐっ……!」

ほんの一瞬の間に、トリガーハッピーは跡形もなく砕け散った。バレルは折れ、シリダーも跡形もなく弾け飛ぶ。

「あは、あははははーやった、やったわ!ぶっ壊してやった、くず鉄にしてやった!あははははははは!!」

キュレネーの哄笑が響き渡る。どうやら、マージョリーさんを囮にしてこちらの武器を壊すことが目的だったようだ。そして、その目論見は成功した。あの台詞から察するに、銃に何かの恨みでもあるらしい。悔しいが、キュレネーの罠にまんまと引つ掛かってしまった。でも、こうしなければマージョリーさんを護れなかったのだから、後悔はない。握っていたグリップの欠片を放り捨て、空になった両手にちらと視線を落とす。今日一日で消耗しすぎた存在の力は、もう限界だ。宝具を贗作できるのも、おそらくあと一回。

「なかなか性に根の腐った奴だな。で、どうする？」

楽しみに問うてくるテイレシアス。胸のペンダントに心配するなという視線を向け、精いっぱい格好良く笑ってみせる。実は、最後の一手はすでに考えていた。キュレネーの性格なら、本体は必ず逃走するに違いないと踏んでいた。本当ならもつと近づいて投擲したかったが、この距離でもいけるはずだ。なんとたつて、今から作ろうとしている贗作は、他ならぬ奴の宝具なのだから。

「マージョリーさん、すみません、少し離れてもらえますか？」

「は？え、ええ……」

呆気にとられながらも数歩後ずさつてくれる。マージョリーさんが危険な圏内から出たことを確認した後、一度痺れた手を振ると、ボクは目を閉じて体内に残った存在の

力がある宝具のイメージに収束させていく。この胸に突き立ったあの槍の感触を忘れるはずがない。ボクの命を奪ったその威力、その能力を、忘れることなど出来るはずがない。皮肉なことに、だからこそ、この贗作は真オリジナルに迫った完成度を誇る。燃え盛る白銀の炎がイメージ通りに凝縮し、結合し、己を形作る。手を握ると、冷たい、しかし硬く確かな質感が返ってくる。完成だ。

「ちよつと、それつてまさか——!?!」

「おいおい、マジかよ嬢ちゃん!?!」

この槍を見たマージョリーさんとマルコシアスが驚愕の声を上げる。二人が驚くのも無理はない。これは、大命の遂行時にしか使われないとされる、仮装舞踏会が所有する最強の宝具の一角なのだから。銃を破壊できたのがそんなに嬉しいのか、いまだ笑いつけるキュレネー。こちらの手に武器はなく、マージョリーさんも疲労困憊なのだから、もはや追撃はないとキュレネーが決め込むのも当然だろう。距離がかなり離れているからか、遠くからでもはつきり聞こえるヒステリックな哄笑は見事に油断しきつていた。遙か遠方にいるのだろうその背中中、シャナの視力を持つてしても視界には映らない。だが、そんなことはこの槍には関係ない。姿が見えないなんてハンデはこの槍にはないにも等しい。槍の柄を両の手で握りしめれば、使い手の無双の技術が流れ込んでくる。

「さあ、締めを飾ろう。我がフレイムヘイズ！」

凱歌の如きその声に弾かれるかのように、この身を弓にして槍という名の巨大な矢を極限まで引き絞る。

「ああ、我が紅世の王！これで——ラスト終幕だッ!!」

裂帛の気合と共に踏み出された極限の一步が硬質のアスファルトを穿ち、ボクという弓から槍が放たれる。槍がこの手を離れる瞬間、命じる。「命中せよ」、と。

それで、勝負はついた。

† † †

しかと見た。この目で。あの銃が不様に碎け散り、鉄屑と化すさまを、この目で!!

嗤い声が聞こえる。それが自分のものだと気づいて、キュレナーはさらに大きく嗤った。自分の分身である螺旋の軍勢は失われてしまったが、二度と作れないわけではない。しよせんは分身だ。人間どもから存在の力を集めれば、またすぐに軍勢は復活する。一体ずつ、一体ずつ、今まで通り根気強く増やしていけばいい。より多くの存在の力があれば、軍勢の数はさらに増やせる。今回は時間稼ぎが目的だったから、油断していただけだ。次は、今日より一桁は多い軍勢で攻めて、あのフレイムヘイズどもを絶望

とともに蜂の巣にしてやる。特にあの“白銀の討ち手”は、屈辱を何万倍にもして返してくれる。

復讐を誓ったキュレネーは凄絶な笑みを浮かべて一際大きく高笑いすると、踵を返して退却の一步を踏み出す。が、

「——え、？」

どす、と唐突に足元に突き刺さったのは、見たこともないほどの大槍。思わず次に来る攻撃から身を遠ざけようとして、身体が動かないことに気づく。手で空中を掻くようにジタバタともがくが、一向に前に進めない。理由はわかっている。しかし、認めたくはなかった。

「あ、あ、あ、が、あぎ……ッ!？」

槍を掴む。何の脈絡もなく自らの腹を貫通し、この場に縫いとめている槍を。

槍の竿を伝って地面に滴り落ちる紅蓮の花を呆然と言葉もなく凝視する。いくら信じたくなくても、それはキュレネー自身の血だった。どうやって?どこから?どうして?多くの疑問が浮かんでは薄れていく意識とともに消えてゆく。暗転し、二度と這い上がってこられない消失の海へ沈んでいく意識の中、キュレネーはこの無骨で剛健なフォルムをした剛槍に見覚えがあることを思い出した。持ち手の意思に従って変幻自在にその大きさを変え、持ち主が望まない限り折れも曲がりもせず、攻撃力・破壊力におい

ては贄殿遮那をも超える類稀なる能力を持つ宝具——

これは、仮装舞踏会の將軍にして最強の紅世の王、*“千変”* シュドナイの宝具『神鉄如意』ではなかつたか、と。

そこに思い当たった次の瞬間、キュレネーの意識は舞い散る火の粉となって消滅した。

† † †

はあ、と深く大きな息を吐く。それと同時に、後光のように輝いていた純白に燃える髪が元の黒髪に戻る。存在の力を使い尽くしてしまったからだ。炎のように全身を駆け巡っていた力の源が断ち切れたことで、一気に負荷を受けた関節が悲鳴の金切り声をあげる。指先を動かそうとするだけで思わず呻き声を漏らすほどの痛みが頭蓋を貫通して脳天を突き抜ける。

「初戦はまずまず、だな。なあに、これから成長すればいい」

テイレシアスが偉そうに言う。自分だつて楽しんでいたくせに、と苦笑して指先でペチリとペンダントを弾く。だけど、その通りだ。初戦はまずまず。改善点はたくさんあるけど、成長の余地も大いにある。

「ち、ちびじやりモドキ、あんたいったい何者なわけ？」

痛む身体に鞭を撃って首だけで振り返る。見ると、マージョリーさんが警戒と困惑の眼差しでこちらを睨んでいた。ふと、マージョリーさんにならボクが坂井悠二であると伝えてもいいのではないかと思つた。クールに見えて実は情の深い彼女なら、誰にも他言せず、ボクの身に起こつた荒唐無稽な話も信じてくれるのではないかと。

「マージョリーさん、ボクは——あえ？」

突然、視界がぐにやりと奇妙な形に歪み、切り替わつた。頬に冷たい土の感触を感じる。倒れた、と知覚するのにそれほど時間は必要なかつた。どうやら、とつくに身体は限界に達していたようだ。精神力だけで今までもつていたのだろう。

「はは……シヤナみたいにかっこよくは、終われないもんだね……」

脛が鉛のように重くて、とてもじゃないが支えきれない。もう一步も動けない。疲労による眠気の波が押し寄せてくる。

「ここまで頑張つたんだから、もう眠つても、いいよ、ね……」

「ああ、ゆっくり眠るがいい。我がフレームヘイズ、*“白銀の討ち手”*よ」
力強く優しい声を遠くに聴きながら、ボクはまどろみの中へ落ちていった。

「結局、なんだったのよ、こいつは？」

疲れ果て、腕の中でスヤスヤと眠る少女を眺めながら、マージョリーが呆れたように呟いた。たしかにフレイムヘイズは人間の常識など足蹴にし、ありえない事象を簡単に作り出す、人の世から逸脱した存在だ。しかし、この少女はフレイムヘイズの常識すら足蹴にしてみた。何もないとどこから自身の力だけで宝具クラスの武器を創造し、ついにシユドナイの宝具『神鉄如意』までも作り出し、その威力を存分に発揮してキュレネーにトドメを刺した。いくらなんでも無茶苦茶すぎる。

「ん……」

艶やかな黒髪を靡かせながら幼子のように寝返りを打つ少女に、マージョリーは自分の腿に肘をつけて嘆息する。顔かたちは「炎髪灼眼の討ち手」にそっくりだが、根本的な部分が違う。外見は同じだがエンジンが異なるスポーツカーのようなものだ。力の性質も、戦い方も、そして性格も、何もかもが異なっている。

「んで、やっぱりあんたは何も話さないわけ？」

「俺の口から話すことは何もない。語るべきは我がフレイムヘイズだ」

少女の胸元にある王——こいつの神器もアラストールのそれに酷似していてややくこしい——に声をかけるが、返ってくるのは最初と同じ返答で、マージョリーは

再度嘆息する。アラストールほどではないが、妙に堅物な性格をしているようだ。おまけにこの少女をかなり気に入っているらしく、台詞の「我がフレイムヘイズ」が強調されている。

(このちびじやりモドキは何を好んでこんな変な紅世の王と契約したのやら。つて、私も人のことは言えないか)

肩からぶら下げた相棒にちらと視線を落とし、胸のうちに少女への暖かい親近感が浮かぶのを感じた。これからの行動は、この胸の暖かさに委ねればいい。

「私はちびじやりモドキを助けて、ちびじやりモドキも私を助けた。だから貸し借りなし。私はさっさとお暇させてもらうわ。……つて言いたいんだけど、」

「こつちにもいろいろと聞きてえことがあるんだよなあ」

マージョリーの言葉を引き継ぐ形でマルコシアスが声を荒げる。戦えれば他のことはどうでもいいというのがモットーの彼だが、今回のことはさすがに見過ごせなかった。紅世の王からしてみても、先の戦闘は常識から逸脱したものだっただけだ。返答も待たず、少女を抱き上げてひよいとマルコシアスに飛び乗ると、そのまま空中へ舞い上がる。

「ちよつとこの娘借りるわよ。悪いようにはしないわ」

「構わんさ、〝弔詞の詠み手〟、〝蹂躪の爪牙〟。お前たちが信用できるフレイムヘイズ

だということはよくわかつている。我がフレイムヘイズとは長い付き合いだからな」

ますます変な奴だった。普通、紅世の世界の住人は同胞を軽々しく信じたりしない。同じ目的の元に協力することはあっても、それは自己の欲望や目的を果たすために最短の道のりであると判断した結果である。数百年もずっと紅世の王や徒を狩っていた自分は、彼らと人間では思考や情念に決定的な差があることを誰よりも理解していた——と思っていたのだが。

（長い付き合いですって？ 面白いえば、このちびじやりモドキも私のことを知っていた様子だったわね。どこかで会ったことがあるのかしら？）

しばし眠りこける少女の顔を覗き込んで記憶を探ってみるが、思い浮かんだのは生意気な本物のちびじやりだけだった。やれやれと金色の髪を掻きながら、片手で自在式を組み上げて惨状と化した街を瞬く間に破壊される以前の状態に復元させる。並みのフレイムヘイズが足元にも及ばない芸当を指先ひとつでこなすと、マジヨリーはそのまま街を飛び去った。向かうは、己の根城の、勝利の美酒である。

そして、何事もなかったかのように世界が活動を再開する。

直上から降り注ぐ熱い日差しがアスファルトに反射して人々を上下から照りつける。

ある青年は友人と共に笑い転げ、ある女兒はあまりの暑さに泣き叫ぶ。先ほどまでの凄惨極まる激戦の時間などなかったかのように、街は元の喧騒を取り戻した。その裏通りで、つい先ほど叱り付けられた16歳の不良少年が呆然と地面に仰向けになっていた。その鼻穴からは、だらりと血が流れている。

「……なんで？」

小柄な少女に化け物じみた脅力を見せ付けられ、混乱しながら当てもなく遁走していた彼の目の前に、唐突に地面に突き刺さる巨大な槍が現れたのだ。結果、彼は柱のような槍に顔をぶつけて派手に転び、アスファルトに背を預けて空を見上げることとなったのだ。じんじんと痛む鼻柱を押さえながら半身を起すと、槍は彼の眼前で背景に溶けるように消えていった。学のない彼には、この理不尽な現象の理屈にまったく思い当てることができなかった。たしかに現実の痛みに痺れる鼻を押さえ、少年は雲一つない真つ青な空を見上げて一言だけ呟いた。

「学校、行くこうかな……」

2—1 蛇神

(ここは……?)

気がつけば、いつか見たことのある光景がそこにあつた。

青々と生い茂る木々の間から陽光が降り注ぎ、無数に折り重なる葉々を艶やかに煌めかせる。穏やかに吹く風がさわさわと葉擦れの音を鳴らし、鼓膜を優しく撫でてゆく。暖かく柔らかな日向の匂いを肺いっぱい吸い込めば、何とも言えない安らぎが胸の内に満ちる。瞬間、嗅覚を通じて海馬が刺激されたのか、ここがどこなのか明瞭に把握できた。

(思い出した。ここは、欧州の森だ)

御崎市を離れ、『零時迷子』を狙う追っ手を振り切りながら国々を渡り歩き、途中で欧州の深い森に身を隠した。この光景は、まさにその森だ。記憶が戻るに連れ、身体の感覚も取り戻す。動くようになったばかりの首を左右に巡らせてその姿を探し求める。

(シヤナが隣にいたはずだ)

たった今まで触れ合うように寄り添っていたシヤナの姿が、なかった。一步踏み出

し、見慣れた後ろ姿を探す。鬱蒼とした緑は大地を呑み込み、シャナの小さな身体を隠すように視界を遮っている。「もう会えないかもしれない」。その言葉がポツリと脳裏に浮かんだ途端、ゾクリとした絶望感が背筋を這い登った。そういえば、さつきまで夢を見ていた気がする。シャナと離れ離れになる、自分が自分でなくなる、世界から切り離される、奇妙で恐ろしい夢……。思い出そうと記憶の皮膜に手をかけた途端、総身がぶるりと痙攣する。

(しよせん夢だ。忘れてしまおう)

「思い出すべきではない」という直感ともつかぬ感触を胸に、不安を払うように頭を振ってから周囲に耳を澄ませる。

——悠二、どこなの？

「っ、シャナ!？」

いつも聴き馴れた少女の声——けれども、今はなぜか堪らなく愛おしく感じるシャナの声。心細げに僕を呼ぶ声、心に響き、その度に切なさの波が押し寄せて胸を強く締め付ける。早く会いたい！その瞳を見つめ、この腕で抱きしめたい！きつと「いきなり何するの」と怒られるだろう。気持ち悪がられるかもしれない。それでも、今はシャナ

をこの手で感じたたくて堪らないのだ。シャナの姿を求めて声のする方に走る。生い茂る草木に腕を突っ込んで身体を食い込ませ、記憶に絡みつく獏とした不安を振り払うように一直線に駆け続ける。シャナを護るため、同じ道を歩むために鍛えてきた双腕が視界を確実に開いてゆく。ふとその視界に、燃えるような紅色が混じった。

「シャナー！」

茂みから飛び出すと——そこに直立していたのは、剣だった。紅蓮に燃え立つ長髪は美しく飾り立てられた柄を連想させ、一切の無駄を排除した引き締った体軀は流麗な刀身を思わせる。木漏れ日を受けて凛々しく佇む後ろ姿は、まさしく伝説の地に突き立てられた秘剣だった。その気位の高い美しさにしばし見蕩れた後、軽く頬を叩いて表情を引き締め歩を再開する。彼女の立つ一帯だけ鬱蒼と地面を覆う茂みがない。まるで自然すら彼女に近づきたくを躊躇っているかのようで、そんなシャナの傍らに立てる自分の幸せを再実感し、誇りに思う。

「悠二はどこ？どこにいるの？会いたいよ、悠二」

こんなにすぐ近くまで近付いているのに気がつけないなんて、シャナらしくない。どうしたんだろう？一抹の疑念がこめかみを過ぎたが、ふわりと鼻先を掠めた香りに瞬く間に吹き散らされた。豊かな長髪が軽やかに風に舞い太陽のフレアのように視界を風ぐ。人工的に合成されたものではない清廉な身の内から生じる甘い体臭が、身体を前

に前にと突き動かす。

(やつと会えた。もう、絶対に離さない!)

手を伸ばせば触れることのできる距離まで一気に近づく。目と鼻の先まで迫れば、一度は絶望に染まりかけた心が癒され、熱い喜びで満たされる。失われた半身を取り戻した充足感を味わいながら、はやる心を抑えて驚かさないようにその華奢な肩にそつと手を伸ばす。あと、ほんの数センチ。

「シヤナ—— 「シヤナ、僕はここだよ」

「え？」

唐突に、無遠慮に、頬を掠めてずいと横合いから突き出された逞しい腕が僕より先にシヤナの肩を掴んだ。突然の出来事に思考も感情も追いつかず、ただ呆然と腕の持ち主へ視線を流す。その腕にも、その横顔にも、嫌というほど見覚えがあった。シヤナと戦うために鍛え、傷だらけになった腕。シヤナを護るために経験を重ね、精悍になつてきた顔貌。ありえない。しかし見間違えるはずがない。だつて、こいつは——

「悠二！」

僕が口を開くより早く、シヤナが嬉々として振り返る。しかし、その瞳に映っているのは僕ではなく、もう一人の悠二だ。僕の存在など見えていないかのように、長髪を振り乱して僕ではない悠二の胸に顔を押し付けて抱きつく。その表情は恋焦がれる待ち人に会えた年頃の少女そのものだった。突き放されたような心許なさに襲われて呆然

とする中、激しい抱擁を力強く受け止めた悠二が困ったような柔和な笑みを浮かべる。
「二人にしてごめん、シヤナ。もう離さないよ」

あらゆる刻苦を癒す抱擁力を秘めた声がシヤナの耳元で囁かれる。他人を慮れる余裕を手に入れた者だけが発せられる声は、もはや平凡な少年だった頃のそれではない。直向きに、実直に、健気に、シヤナのために培ってきた力と知識と経験が少年を数年で男へと成長させたのだ。その過程を本人として見てきたはずの自分が、今は他人の視点で悠二おのれを見ている。血の気が失せた四肢の感覚がなくなり、まるで幽霊にでもなったかのような気分おのれに襲われる。

「ま、待てよーお前はいつたい……っ!?」

反射的に掴みかかった手が悠二の身体を少しの抵抗もなく擦りぬけ、スクリーンに投影された立体映像を掴もうとしたかのように虚しく空を切った。虚を突かれて二人を見やるが、静かに抱き合っている二人はすぐ近くで滑稽に慌てふためいている人間などまるで眼中にないようだった。いや、違う。そもそも、この二人は僕という存在を観測できていないのだ。意識的に無視しているのではなく、そもそも意識されていない。世界そのものから拒絶されているという直感にも似た疎外感が喚起され、自分がこの場の第三者ですらないことを思い知らしめてくる。「なぜ」という疑問が頭の内を支配するが、答えなどわかるはずがなかった。ただ、手を伸ばせば届きそうな、けれども完全に

隔てられた二人の姿が目の前に突きつけられていただけだ。あまりに理不尽な事態に混乱は極限に達し、声一つ身動き一つできなくなる。地面が崩れていくような感覚に襲われながら、ただ皿のように見開かれた瞳だけが二人の逢瀬を映す。幾年もの旅を経て浅黒くなった悠二の掌がシヤナの頭を撫でる。喉を撫でられる猫のようにされるままがままの幸せそうな笑顔が心に刺さる。

(僕だけの笑顔なのに)

羨望が憎悪に転じ、僕は血が滲むほどに臍を噛む。まるでわざと銜^{てら}つているかのような二人のやりとりをまざまざと見せつけられたことで、心を焦がす嫉妬の炎がじくじくと焼け付くような痛みを押し広げ、胸の内側をイバラのように苛む。この世界は、この坂井悠二は、いったい何なのか。幻覚というにはあまりにリアルすぎるし、現実というにはあまりに現実離れし過ぎていた。

「さあ、行こう。シヤナ」

少年の優しさと有無を言わさぬ男らしさを感じさせるその言葉にシヤナが静かに頷き、二人が同時に歩み出す。腹の底に冷たい戦慄が満ちる。

(——待て!!)

奪われる、という最悪の悪寒が電気ショックのように全身を震わせ、募りに募った焦燥感が硬直していた肉体を無理やり引き剥がした。奥底から衝き上げてくる激情が神

経を刺激し、声に鳴らない制止の声を上げる。全身を軋ませながら一步を踏み出し、
(!?)

その一步を嚙矢としたかのように、突如として世界に異変が走った。つい先ほどまで目の前にあつたはずの二人の背中が急速に遠ざかり、背景の森林がノイズのように掻き消えてゆく。掻き消えた後には闇より昏い虚無しかない。夜陰とは根本的に違う底抜けに昏い暗黒の炎が本性を現し、穏やかだつた世界を瞬く間に燃焼させて二人の姿をゆつくりと呑みこんでゆく。頭の片隅に残つた理性が、ここが異常な世界であることを察知するが、沸騰する焦燥に圧殺された。激変する世界に本能的に後退りしそうになつた一步目を強く地面に押し付け、さらに強い二歩目を踏み出す。曙光に吹き散らされることを知らない暗黒の海原をもがくように突き進む。

(シヤナが奪われる。僕のシヤナが、盗られてしまう!)

取り戻さなければ。世界を塗り潰していく暗黒の中、その一心だけが足を動かす原動力だつた。この世界が何なのか、あの坂井悠二が何者かなど関係ない。シヤナさえいれば、そんなことはどうでもいいことだ。恐怖を恐怖と捉えてしまう前に、とにかく踏み出した。一步一步が意志の勝利だつた。空回りをしているかのように一向に縮まらない距離を、それでも届いてみせると懸命に駆ける。ヘドロのように粘性をもつた闇に足がもつれて何度も地面に顔を擦りつけそうになるが、シヤナの姿から視線を外すことは

一度もなかった。見失ってしまったらもう二度と見つけれないと理解していたからだ。音もなく燃え尽きてゆく世界の中、激しくなつてゆく呼吸音だけを空間に響かせて崩れ落ちる地面を走り抜ける。

「シヤナ——!!」

小さな背中に叩きつけるように叫ぶ。手を伸ばし、膨大な暗黒の掌に塗り潰されてゆくシヤナに全力で手を伸ばす。しかして、その手に掴んだのは、

「まだ、駄目だ」

ズルリ、と眼前の闇から突き出てきた手が、僕の腕を掴み返した。突然の不意打ちに自分の目を疑う間もなく、その手の異常さに総身が激しく栗立つ。超質量の暗黒物質が凝縮したような、光すら飲み込む底知れぬ闇の手。触れた箇所から感じるその絶望的な冷たさに、内心で激していた怒りや焦りは一瞬で吹き散らされた。いや、「冷たい」などという生半可な言葉では圧倒的に足りない。全身の活力を残らず压榨してしまうような、満ち足りることを知らない虚無のカタマリが手の形をして僕の腕に張り付いている。閉じた口腔内に声にならない呻き声を響かせ、得体のしれないソレから逃れようと半狂乱になつて腕を振る。だが、黒い手は吸い付いて一体化したかのように離れる気配

がない。

「今のお前では、届かない」

なおももがき続ける僕に辟易したかののように、虚ろな声音こわねと共にやおら黒い腕の持ち主が姿を表す。暗黒の水面に静かな波紋を立てながら眼前に現れたソレは、底のない奈落のように黒い——

「なんで、僕が、」

それは坂井悠二自身だった。驚愕に目を見開く僕を睥睨しながら、真つ黒な坂井悠二の瞳が嘲笑うかのように愉悦に歪む。漆黒に塗り込められた顔面に鼻梁などの凹凸は一切無い。闇を切り取ったように黒に映える銀色の角膜には一筋の血管すら認められない。作り物じみた無機質な眼球に、蛇のそれを惹起させる瞳孔がぐりぐりと蠢いている。およそ同じ顔とは思えない異常さと不気味さに怖気を覚えるより先に、墨汁で描かれたような輪郭を揺らめかせて黒い坂井悠二がぐいと掴んだ腕を引き寄せた。反射的に両足に力を込めるが、たたらを踏んだだけに終わった。こちらの必死の抵抗など意にも介さず一方的に懷まで引き寄せられたことに当惑する。

（身体の大きさも筋力も変わらないはずなのに、なんで……!?!）

引き剥がそうと身を振るが、努力は一向に実らない。どんなに力を振り絞って暴れても僅かな身動きしか許されず、ついには身体を逸らされて腕の中に抱え込まれる格好に

されてしまう。再び愕然とする僕を見下ろす黒い双眼がさらに笑みに歪む。鼻先が触れるほどの距離で、世界を縦に割る亀裂のような瞳孔がこちらの瞳を射貫いてくる。

「そんな身体では、シヤナの元には永遠に辿りつけない」

鼓膜を通り抜けて脳髓に直接噴きかけるような声は何の感情も温度も帯びてはいなかった。すぐ耳元で発せられたはずなのに広い空洞を渡ったような反響を伴う声が説明しようのない違和感を増幅し、三半規管を乱して吐き気を催させる。精神を乱暴に掻き回されるなか、唯一、そんな身体という科白セリふだけが疑問となつて脳裏にこびり付いた。比するも何も同じ身体を持っているのに、なぜそんなことを言うのか。黒い坂井悠二から濃密に発せられる異様な空気に押しひしげられながらも抗弁しようと必死に頭を回転させる。

「なにを言つて—— ……え？」

走り始めた思考が、ようやく一つの疑念を擲い上げる。そうだ、なぜ今まで気がつかなかったのか。感情のほんの小さな機微すら逃さず見抜く鋭い双眸が意のままの展開に冷笑を浮かべるのを見ながら、心中で呆然と眩く。

(なんで見下ろされてるんだ?)

同じ坂井悠二のはずなのに、どうして僕の方が一方的に見下ろされているのか。なぜ、膂力でも簡単に負けて組み伏せられようとしているのか。全ての答えは、黒い

坂井悠二の二つの奈落に映っていた。

どこまでも遠く深い闇を孕んだ瞳に映る僕の姿は——シヤナとそっくりの少女だった。

「あ、あ、ああああああ……!!」

刹那、記憶の皮膜が乱暴に剥がされ、記憶の奔流が破壊的な勢いを持つて海馬に叩きつけられた。僕は——ボクは、敗北したのだ。シウドナイに殺され、消滅し、シヤナを残してこの世を去った。そして完全に消え去る寸前で紅世の王テイレシアスと契約し、フレイムヘイズとなり、シヤナを模した身体を手にした。それから御崎市を襲っていた紅世の王キユレネーと戦闘になり、一度死にかけ、マージョリーさんに助けられ、白銀の討ち手として開眼し、そして……。忘却のダムに堰き止められていた膨大な情報が脳裏に次々と浮かび、像を結んではあつという間に過ぎ去つてゆく。それらに頭皮ごと髪を引つ張られて後方に吸い込まれるような錯覚と目眩を覚えながら、ボクは吹き荒ぶ記憶の嵐の中に一人の少女の姿を幻視した。

焼け果てた地面に伏せ、長髪を振り乱して泣き叫ぶ一人の討ち手。虚空に向かつていなくなつたボクの名を叫び続ける、炎髪灼眼の少女。この悪夢のような世界で、唯一輝きを放つ希望。如何なるものを犠牲にしても辿り着かねばならない終着点。

「シヤ——」

「シヤナの元へ戻りたければ、アレを手に入れなければならぬ」

無意識に伸ばしかけた手を記憶の渦ごと跳ね飛ばし、眼をカツと見開いた黒い坂井悠二がこちらの瞳を強く深く覗き込む。絶対的な啓示を与える「神」の声が魂を揺さぶるのを知覚し、ボクはゴクリと息を飲んだ。身のうちに生じた声が熱を持って眩く。「こいつは帰る方法を知っている」と。

「……アレって、なんだ？」

シヤナの元に戻れる、という魅力的な言葉のせいだけではない。心の一部が、圧倒的な存在感を放ち、確信以上の響きを持つて自分を導こうとするこの黒い坂井悠二を信用しかけていた。今のボクには、なぜだかこのおぞましい闇の獣が願いを叶える神にすら見えてきていた。訝しげな、だが小さくない期待を孕んだボクの問いに、こちらを直視する蛇のような双眸がぬらと満足気に光を放つ。その眼に宿るのは怨念の光だけではない。容赦のない強力無比な意思の波動が漲り、見る者に畏敬と畏怖の念を抱かせる暗黒の炎が奥底で爛々と燃えていた。目論見が上手くいったと言わんばかりの亀裂のような笑みが顔面を横一線に引き裂き、闇を凝集した暗い口腔が目の前でゆっくりと開いてゆく。

「お前がよく知っているものだ。常にお前と共にあつた唯一無二の宝だ。お前を戦いに巻き込んだ根源だ」

「なっ……!?!」

言いながら、掴んだボクの腕を自身の胸に押し当てる。タールに似た粘度の高い液体に挿し込むように、一瞬わずかな抵抗を感じさせて腕は黒い坂井悠二に吸い込まれた。溶け朽ちた肉をズブズブとかき分けて進むような不快な感触が肌を滑り、生理的な嫌悪感と拒絶感に身体が身も世もなく震え出す。歯の根が合わぬほどの震えは、しかし、指先がそれに触れた瞬間にピタリと止まった。詳細な形状など覚えていない。触れたくらいでは判断できるはずもない。だが、わかる。長い間、ずっとボクの中にあつたからこそ、この魂がしかと覚えているのだ。これこそ、ボクをシャナと引き合わせ、幾多の戦いの原因となり、ボクを死に誘った宝具なのだから。

「零時、迷子」

そう呟いた瞬間、眼前の黒い坂井悠二の気配が膨張した。その身体がぐぐつと膨れ上がるやまるで蛇が脱皮をするように表皮が裂け、隙間という隙間から凄まじい存在感が迸る。風船のように醜く膨れ歪んだ鬼面に禍々しい笑みが浮かんだのを最後に、それは坂井悠二の姿をあっさり脱ぎ捨てた。耳障りのする音を立てて千々に散逸する皮の内側に鱗のようなものが垣間見えたが、一瞬だった。目の前で爆裂したそれはあつという間に元の身長を通り過ぎ、とぐろを巻く度になおその大きさを倍加させる。気がつけば、それは数瞬のうちに見上げるほどの——顕現したアラストールに匹敵するほどの

——巨大な黒蛇の姿となっていた。

「う、あ……」

まさしく蛇に睨まれた蛙のように戦慄し絶句するボクを遥か高みから睨み据え、途方も無い巨躯を持った蛇が吠える。

「然り!! 零時迷子を手に入れなければ、お前は元の世界に戻れない!! シヤナに再び会いまみえることはできない!!」

鎧のように全身を隙なく覆う無数の鱗をカチカチと鳴らせ、闇よりさらに濃い漆黒を纏った大蛇がぐんと首を曲げて顔を近づける。逃げ場のない恐怖に抗う間もなく伸し掛られ、全身に絡みつかれて、ようやくボクは悟った。こいつは真正銘の魔物だ。天を裂き、地を飲み込む、凶悪な邪神なのだ。

「行け、往け、逝け、白銀の討ち手よ! 存在してはならぬ忌み子よ!! 今一度、零時迷子をその手に掴むのだ——!!」

視界を埋め尽くす醜面がさらに近づく。喰われる、と直感した身体が凍りつき、ついには正気が失われる。膨れ上がる恐怖が声になってボクの喉を震わせ——

「うわあああああッッ——ひぎいッ?」

恐ろしい悪夢に魘されて飛び起き、ちょうど頭上にあつた分厚い本に思い切り頭をぶ

つけた。あまりに頑丈な装丁のせいでぶつけた額が割れるように痛い。思わず額を押えて転げまわり、そのままガクンと床に落下する。床より一段高いところに寝せられていたらしいと直感で悟るが、床は思いの外近かった。派手に背中を打ち付けた拍子に、ふぎや！という潰された猫のような情けない声から肺から吹き漏れた。衝撃に次ぐ衝撃によつて目眩と涙でグニヤグニヤと歪む視界に、焦点が定まらなくても美人だとわかる金髪の女性がひよいと映り込む。

「なーにやってんのよ、ちびじやりモドキ」

「ひーっひやひやひや！嬢ちゃん、なかなか石頭だなー」

聴きなれた呆れ声が降ってくる。痛む箇所を摩りながら何とか焦点を結ぶと、片眉をあげてこちらを見下ろすマージョリーさんの呆れ顔がくつきりと視野に浮かんだ。ゆるゆると動き出した頭が状況を飲み込もうと軋みながら回転を始める。

「マージョリー……さん？」

「この絶世の美女が、いったい他の誰に見えるわけ？つたく、ひどく麗うなされてたと思つたら今度は身体を張つたギャグをかましてくれるんだから。ほら、いつまでも床に寝てるんじゃないわよ」

ぶつきらばうな口調とは裏腹に、優しく抱き上げられて元々寝かせられていたソファに座らされる。まるで羽毛の山のようにふわりと全身を包み込む上質の座り心地に、硬

直していた筋肉がゆったりとほぐされる。極限まで鞣された革の手触りが、このソファが最上級のものであることを教えてくれる。

「ほら、使いなさい。すっごい汗よ」

マージヨリーさんがボクの隣にどつかと腰を下ろし、タオルを放つて寄越す。受け取つて、ようやく自らの全身が澎湃と汗で濡れていることに気付いた。下着はおろか、靴下すらグシヨグシヨに濡れて肌に張り付いている。おそらく先程まで見ていた夢のせいだろう。よほど恐ろしい夢を見たのだろうが、なぜかその内容を思い出すことはできなかつた。手を伸ばそうとすると遠ざかる。とても大事で、とても恐ろしい夢だつた気がするのに。さつき頭をぶつけたせいかもしれない。洗いたてらしいふかふかのタオルで汗みずくの顔を拭くと、久しぶりに匂う柔軟剤の豊かな匂いが鼻腔をくすぐり、悪夢の余韻が徐々に鳴りを潜め始める。汗に濡れて顔に張り付いた黒髪の房を払いのけて茫洋とした眼差しで見渡すと、そこは見慣れた友だちの家だつた。まるで老舗のバーのような、決して広くはないけれど厳かで落ち着ける空間。かつてマージヨリーさんの宿となつていた、離れの一室だ。

「ここは、佐藤の家……?」

「せーかい。つて、どうしてあんたがケーサクの家まで知つてんのよ」

ぎくり、と思わず肩を震わせてしまう。しまった。見知つた友人の家を目にしたこと

で、思わず口を滑らせてしまった。あはは、と苦笑して誤魔化そうとするが胸の内まで刺すような追求の眼差しは消えない。

「え、えーつと、さつきは頭ぶつつけちゃってごめんね、マルコシアス」

「いいつてことよ。もつとひでーこと毎日やられてるからな。それよりも、早く正体明かしちまった方が身のためだと思うぜえ？」

「う……」

テイレシアスは相変わらず黙りこくつたままだ。信頼して見守っているのか、積極的に手助けはしない主義なのか、こういう時のテイレシアスはちつとも役に立たない。ボクは目を伏せてしばし逡巡する。マージョリーさんに事の成り行きを話して、果たして信じてもらえるのか。そもそも、話すことで未来を変えてしまわないのか、と。前者は未知数だ。ボクの身の上起こったことは、現実離れをしている紅世の者たちをしてもさらに常識を逸脱したものだ。後者に至っては、『螺勢』キュレネーの出現によって、もはや取り返しのない付かないほどに変わってきていることは明白だ。「蝶々の羽ばたき一つが、やがて地球の裏側でハリケーンを引き起こす」という『バタフライ効果』——通常なら無視できると思われるような極めて小さな差が、やがては無視できない大きな差となる現象——が発生したのかは定かではないが、少なくともボクが知っている時間軸とは別の支流に進みつつある。ボクが悩んでいる間も、マージョリーさんは相変わ

らずボクが応えるのをじっと待つている。……つま先がガツガツと引つ切り無しに床を叩いているが。

しばらく悩んだ後、僕はマージョリーさんに全てを話すことにした。こんな荒唐無稽な話を信じてくれる人は他にいないだろうし、数百年も戦いの世界に身をおき、さらに誰よりも自在法に詳しいマージョリーさんなら、もしかしたら僕たちが過去に来てしまった原因がわかるかもしれない。都合のいい期待だろうが、何もしないよりはマシだった。それに、イラついてハイヒールの踵が床に食い込んでいる様を見れば、何も話さないままでは解放する気がないのは火を見るより明らかだった。

「わかりました。全てを話します」

「まったく、待たせすぎよ！ほら、ちやっちやと話しなさい！」

「あと一秒遅かったら我が美しき女豹の餌食になってただろうぜえ！さあ、早く話しなさい！」

がーっとまくし立てられる。ボクはまた苦笑する。どんな話でも、マージョリーさんとマルコシアスなら笑って受け止めてくれそうな気がした。ボクは一度軽く息を吐くと、嘘を言っていないとわかってもらうために無理やり笑顔を作って、静かに話し始めた。

「ボクは、坂井悠二なんです」

ボクとシヤナが仮装舞踏会の軍勢と戦い、負けたこと。

ボクが『千変』シユドナイに殺され、零時迷子を奪われ、消えてしまったこと。

消えかけのボクを『贋作師』テイレシアスが助けてくれたこと。

目が覚めたら過去の世界に来てしまったこと。

この世界にはこの世界の坂井悠二がいるから、自分はこの街を去ろうと考えていたこと。

マージョリーさんは最初は信じてくれなかったらしく厳しい目つきで睨んできたが、だんだんと穏やかな顔になり、黙って聴いてくれた。呆れてもはや聞き流しているだけなのかもしれないと思ったが、最後まで話すことにした。しかし、話が終わってもマージョリーさんは口を開こうとはしない。やはり、信じてもらえないというのはボクの甘い幻想だった。ボクだつていきなりこんな話を聞かされても信じられない。当然だ。

「……やつぱり、信じてはもらえませんよね。すいませんでした、変な話を聞かせちゃつて」

うな垂れて呟く。失意はあつたが、誰かに話しておきたいという気持ちはあつたから後悔はしていない。ボクはまだ痛む体に鞭を打つてゆつくりとソファから立ち上がる、懐かしい部屋を後にしようと扉へ歩く。

「どこ行くのよ、ユージ」

背後からかけられる、懐かしい声。もう二度と聴けないと思っていた、ボクの名前を呼ぶ声。振り返れば、マージョリーさんの微笑があつた。胸が締め付けられ、熱くなる。「信じて、くれるんですか？」

声が震えてしまう。男なんだから堂々としていなくちゃダメだと自分に言い聞かせるが、込み上げてくる感情は抑えられない。マージョリーさんがやれやれと苦笑してボクに近づき頬をそつと撫でる。心からの、優しい手つきだった。

「これでも何百年も生きてきたんだから、人を見る眼には自信があるの。——だから、嘘をついている人間がこんな涙を見せるはずがないってことも、わかんnoよ」

マージョリーさんの言葉でようやく、ボクがいつのまにか涙を流していたことに気づいた。全身の熱が鼻の奥に集まり、ツンとするものが視界をじわりと滲ませた。悲しくもないのに、なんで……。恥ずかしくなつて手の平で拭うが、涙は止まってくれない。胸の内から沸き起こるこの気持ちと同じように、次々と溢れてくる。手の平では抑えられなくて袖で拭うが、それでも涙は止まらない。

「ユージ。今くらいは、泣くのを我慢しなくてもいいのよ」

頭を優しく撫でられる。もう限界だった。マージョリーさんに抱きついて子供のように泣いた。溜まった涙が溶け流れていくのを感じる。情けなくて恥ずかしかつたけ

ど、嗚咽は止まってくれなかった。僕が泣き止むまで、マージョリーさんはずっと抱き締めてくれていた。

「……す、すいません。恥ずかしいところをお見せしちゃって」

泣きすぎて赤く腫れた目を隠すように俯いて頬をかく。

「こっちはちびじやりがわんわん泣いてる姿を見て新鮮だったけどねえ」

そんな僕の髪の毛をマージョリーさんはワシワシと掻き乱して笑った。本当に気持ちのいい人だ。

「ううっ、泣けるじゃねえか！ちくしょう！」

マルコシアスが分厚い表紙を震わせて咽び泣く。アラストールに戦闘狂と誹議される彼だが、実は涙脆いところもあるのだ。はたと、自分の胸元からも微かな噁り上げる音が聞こえた。

「テイレシアス、もしかして泣いてる？」

テイレシアスは無言だったが、小刻みに鼻から息を吸い込む小さな音が返ってきた。その珍しい一面を見てマージョリーさんと顔を見合わせて笑う。

「しっかし、あんたも凄い力を身につけたもんだね。シウドナイの神鉄如意まで作るんだから、さすがの私も驚いたわ」

ばしばしと肩を叩かれる。褒められているような気がして、なんだか背筋がくすぐつたくなる。照れ笑いを浮かべて、

——そうだ、シユドナイ!!

「ま、マージョリーさん! シャナが危ない! キュレネーは時間稼ぎで、本当は零時迷子が目的だったんです! シユドナイが……!!」

くそつ、今までどうして忘れていたんだ!? 自分の不甲斐なさに腹が立つ! 今すぐ駆けつきたいけど、もう僕に力は残されていない。おそらくマージョリーさんも同じだろう。いったいどうすれば……!? しかし、マージョリーさんは目を丸くして不思議そうにマルコシアスと目を合わせる。マルコシアスのどこが目なのかはわからないが。

「『螺勢』の奴が、シユドナイが来るって言ったの?」

「え? い、いえ……」

そういえば、キュレネーは零時迷子を狙っていると言ったがシユドナイが来るとは言っていないかった。

「あんな性格だから当然といえば当然だけど、『螺勢』は一匹狼よ。基本、フリーランスだって聞いている。誰かに雇われて組むことは少なからずあったけど、組織とつるむことはないわ。大方、『零時迷子』を狙う他の紅世の王と組んだんでしょ。仮装舞踏会パルマスケはたしかに紅世最大の組織だけど、それでもそこに従わない奴らは大勢いる。『螺勢』がちび

じやりを足止めして、その間に他の奴が、えっと、この時間のユージを襲うって寸法だったんでしょうね」

マージョリーさんも、ボクが二人いることに多少混乱しているらしい。それは仕方ない。自身、自分が二人いることにはまだ混乱している。シユドナイが出てこないことがわかって少し安心する。でも、シャナたちが襲われることに変わりはない。そんな不安を隠そうとしないボクにマージョリーさんは相好を崩して、

「ちびじやりの分、あんたが戦った。足止めされているはずのちびじやりっていう計算外の戦力がいれば、零時迷子は奪えない。それに……」

一度言葉を区切ったマージョリーさんが静かに眼を閉じて意識をここではないどこかへ飛ばす。キイン、と普通の人間には捉えられない波長の音が鼓膜を小さく揺らめかせた。自在法……この感じは一種のリーダーのようなものだろうか。ただし、並大抵の自在師では到底真似できないような超広範囲かつ超精密な索敵自在法であるということとは今まで蓄えた経験から理解できた。おそらく御崎市全域を探ったであろう大規模な自在法は、ものの1秒で完了した。次の瞬間すつと開けられたマージョリーさんの瞳は安堵の色に満ちていた。

「ちびじやりも、この時間のユージも、無事だったわ。襲ってきた敵はついさつき倒された。あんたがちびじやりたちを救ったのよ」

「……ボクが、救った？」

呆然と発した言葉にマージョリーさんが頷く。今までずっと誰かに守られてばかりだったボクが、シヤナたちを救った。マージョリーさんはそう言ってくれた。

——ああ、そうか。ようやくボクは、誰かを救えるほどに強くなれたのか——

シヤナとそっくりの小さな身体を抱き締めて、もう一度静かに涙した。

2—2 察知

話は数分前に遡る。

稀代の自在師マジヨリーの索敵による分析は悉く的中していた。“螺勢”キュレネーは仮装舞踏会には所属しておらず、先の戦闘は仮装舞踏会とは何の関係もないものだった。紅世に数多ある宝具の中でも秘宝中の秘宝、持ち主の存在の力を回復し続ける超常の永久機関『零時迷子』を求める者は仮装舞踏会だけに限らない。彼もまた、零時迷子を狙う紅世の王の一人だった。

「——なぜ、こうなった？」

一見すれば、線の細い中東風の美青年——紅世の王が一人、“風雲”へりべが呆然と呟いた。彼がその虚ろな眼を向ける遠く先では、次々と火達磨と成り果て落ちてゆく配下の熐子たちの雨が降り注いでいた。作戦はごく単純で、だからこそ完璧なはずだった。強力な助っ人として雇った“螺勢”キュレネーが“炎髪灼眼の討ち手”を誘き寄せ、時間を稼ぐ。その間に一人になった『零時迷子』を宿すミステスを自分の熐子たちが襲撃し、混乱に乗じて殺し、中身を奪う。遠距離からの圧倒的な物量攻撃を得意とするキュレネーならば、自在法を苦手とし近接戦を得意とする“炎髪灼眼の討ち手”相手

に十分な時間稼ぎができる。それを見越してからか、監視を続けたこの数日間、炎髪灼眼の討ち手”はほとんどミステスの傍から離れなかった。だからこそ、キュレネーからの「作戦通り、炎髪灼眼の討ち手”を封絶内に誘い込んだ」という報告が入った時は激しく心が躍った。そのすぐ後にあの「弔詞の詠み手”までもおびき寄せられたと聞いた時など、あの唾棄すべき少女虐待趣味の変態女を抱擁してキスしてやりたいとさえ思った。その時、天はまさにこのヘリベを味方したのだ。『零時迷子』を手に入れるべきはこの自分であり、断じて仮装舞踏会のような得体の知れない薄汚い連中ではあつてはならない。『零時迷子』はこのヘリベのためだけに存在する。永遠の命と力を持って、紅世も、人の世も、余さず手中に収めてみせる。この世に生を受けた瞬間から征服欲の塊であつたヘリベは、ただそれだけを胸にいざ零時迷子を宿すミステスへと自慢の軍勢を待らせて襲い掛かつたのだ。

だが……結果はどうだ？ここより遥かに離れた場所でキュレネーが足止めをしていないはずの「炎髪灼眼の討ち手”は、キュレネーとの戦闘による疲労も負傷もまったく見えず、まるで無傷の状態で自分の前に立ちはだかつた。無論、そこまで頭が回っていなかったヘリベではない。万が一、キュレネーが下手を打って瞬殺されたり、他のフレイムヘイズが加勢に来てても目的が達成できるように、今までに集めたありつただけの存在の力を注ぎこみ、優に二百を超える燐子の大群を作つておいたのだ。燐子一体一体にも、

“狩人”フリアグネには及ばずともかなりの強化が施されている。並のフレイムヘイズなら一溜まりもないだろう。さらに、彼はその真名が示すとおり風のように俊敏に動き雲のように瞬時に姿を消す能力に長けていた。戦いを有利に進めるのは力ではなくスピードであると確信する彼にとつて、この力はまさに天からの授かり物だった。燐子たちにフレイムヘイズの相手をさせ、巧みにミステスから離し、その隙に自慢の俊足でミステスを搔つ攫うなりその場で殺して宝具を奪つてしまえばいい。誰よりも戦術に長けているとも自負していた彼は、つい先程まで自信に充溢していた。

「シヤナ、左翼が怪しい！先頭集団じゃなくてその後続に全力攻撃をー」
「わかったー」

ミステスが指示を出し、それに背中で応えた炎髪灼眼の討ち手が空中で大太刀をぶんと振り回して巨大な炎刃を一閃する。伏兵だった虎の子の燐子たちが、行動を起こす前に潜んでいた街の一角ごと焼き払われる。断罪の爆炎は断末魔の叫びすらこの世に残すことを許さず、彼らを原子の塵までも殺しきった。30体の燐子を焼殺して余りある熱波と衝撃波の爪が、そのまま伏兵の後方のビルで今か今かと出番を待っていた本命の伏兵に容赦なく襲いかかる。一瞬の出来事に、自分たちは奇襲を仕掛ける側だと盲信していた燐子たちが対処出来るはずもなかった。突然己を包んだ炎と、何が起こったのかわからないとぼかんと口を開ける仲間の表情を文字通り目に焼き付け、そして完全に消

滅した。この瞬間、ヘリベが有する精銳の燐子は全て失われた。

(そんな、馬鹿な)

フレイムヘイズがミステスの指示に従っていることがすでにヘリベの理解の範疇を超えていたが、それより彼を驚愕させたのはミステスの恐るべき戦術能力であった。ヘリベが気の遠くなるような時間をかけ頭を捻って導き出した必勝の陣形を悉く看破し、逆にこちらの手駒を次々と奪っていく。伏兵を用意すればすぐさま暴かれ、囷を使えば容易に見抜かれた。気がつけば、燐子の数は当初の10分の1になり、彼にはもはや打つ手は残されていなかった。まるで、チェスの試合で赤子からまんまと手玉にとられたような当惑と焦燥、何よりも屈辱に心を苛まれ、親指の爪をヒステリックにがりがりとなみ千切る。

(あのミステスはいつたいなんなんだ……!?)

「ヘリベ様!」

思考の接ぎ穂をなぎ倒し、キュレネーの動向を監視させていた想像上の獣を模した燐子が血相を変えて傍らに降り立った。その青ざめた顔にぞつとする予感が背筋を走り、肌を泡立たせる。

「キュ、キュレネーが敗れました!」

「なんだとおツ!」

聞きたくなかった報告の中でも最悪のものを突きつけられ、ついに平静の箍が外れたヘリベが血走った眼を剥いて叫ぶ。役立たずのキュレネーは「炎髪灼眼」を無傷のまま逃がし、あまつさえ「弔詞の詠み手」にあっけなく敗北したのだ（白銀の討ち手の出現を知らないヘリベにはそう思えた）。

（キュレネーめ、どこまで私の期待を裏切れば気が済むのだ！やはり奴など頼ったのが間違いだつた。もつと優秀な紅世の王を加勢にすればよかつたのだ！）

今となつては悔やむことしかできない。全力の「炎髪灼眼」を相手にするには今の手駒では分が悪すぎる。正面きつての戦いには自分は不向きだ。その相手がかの「天壤の劫火」のフレイムヘイズなら尚さらだ。もはや『零時迷子』を奪うどころか、己の身の安全すら危うくなつた。戦いでは攻め際以上に引き際が肝心だと心得ているヘリベは、どんなに怒り狂つても理性でそれがわかつていた。

「ヘリベ様、我々はどうすれば!？」

「うるさい役立たずどもめツ!!いいから貴様らは特攻よろしく炎髪灼眼と戦つて死ねばいいんだよ!!」

端正な顔を直視できないほど醜く歪め、怒鳴りつけた燐子の腹を激情に任せて蹴り飛ばす。曲がりなりに紅世の王の一撃をまともに受けた燐子は獣の悲鳴をあげて絶命した。

(こうなったら燐子どもに時間稼ぎをさせて逃げるしかない。まだ私の居場所までは見抜かれていない。堪えられない屈辱だが、撤退は致し方ない)

燐子たちだけに聞こえる念声で足止めを命じ、未だ炎を荒れ狂わせる炎髪灼眼から目を離して踵を返す。その背中に、苦杯を喫したことによる憤りは見えなかった。燐子を蹴り殺したことで鬱憤を晴らしたヘリベの頭の中では、すでに次の作戦の案が幾つも構築され始めていた。

「次こそは必ず『零時迷子』を奪ってみせる」

幾つかの案を優先案に絞り込み、彫りの深い顔に不敵な笑みを浮かべたヘリベは逸走せんと背の翼を大きく展開する。

——翼の感覚が、返ってこなかった。

大気を掴む感覚の代わりに神経を伝わって返ってきたのは、極太の火箸を背中に突き刺されたかのような凄まじい激痛だった。白目を向いて歪んだ視界の両隅に自分の翼だったものが音を立てて落ちる。肉の焼けた臭いが鼻を突く。生物の焼けたソレではなく、紅世に属する者の肉が焼ける臭い。

「いいぎつ!?!うが、あああああ!?!」

何の前触れもなく襲ってきた堪えようのない激痛にもんどり打って地面に倒れる。上下左右とぐるぐると回る視界に、圧倒的な迫力と熱気を放つ大太刀が見えた。刀身を

滑るように視線を上げれば、紅蓮に燃える髪と瞳を持つ少女と目が合う。

「炎髪、灼眼」

呆然と呟いたヘリベは、知らぬ間に炎髪灼眼の討ち手が背後に現れたことをようやく悟った。なぜ自分が隠れていた場所がわかったのか、痛みにもだえるヘリベには想像もつかなかったが、炎髪灼眼の背後からミステスの少年が姿を現したことで理解に至った。

「そ、そうか！ミステス、貴様が……ッ」

「陣形が次々に変化していたからね。その度に誰かが命令を与えてるって気づいたんだ。パターンを見切れば、燐子たちに命令を出す親玉には何が見えて何が見えていないのかがわかってくる。そして、指揮官が戦いをどこから俯瞰しているかが絞り込めてくる。最後に燐子たちが何かを逃がそうとするように一斉に襲いかかってきたから、必然的に、燐子たちがもつとも厚い壁を形成したその後ろ、逃がすべき親玉であるあなたの位置がわかったんだ」

自信に裏打ちされた口調でそう告げたミステスの洞察力にヘリベは唾然とした。極短時間でここまでの確に戦況を読み当てるなど、人間業とは思えない。このミステスは、百幾年の時を生きた紅世の王である自分を一枚も二枚も上回る稀代の戦術家だったのだ。一縷の望みをかけて念声で燐子と呼ぶが反応は一つもない。二百を超える燐子

の軍団はたった数分の間全滅させられたのだ。

「シヤナ、長居は無用だ」

遠雷のように低い声——「天壤の劫火」アラストールの無慈悲な断罪宣言に、そのフレイムヘイズ「炎髪灼眼の討ち手」が無言で大太刀を上段に振りかざす。痛みというものに慣れていなかったヘリベに、冷静な思考も即座の行動もできるはずがなかった。頼みの綱の燐子は全て灰と化し、切り札だったキュレネーは死んだ。絶望と諦観に囚われ痛みに明滅する視野を炎の太刀が一閃する。そして、ヘリベの夢は潰えた。

† † †

「なんだったのよ、こいつ」

「ヘリベめ。最期まで身の程を知らん奴だ」

まったくね、とアラストールに相槌を打ったシヤナが、たった今敵を袈裟斬りにした大太刀——贄殿遮那を外套状の夜笠に突き入れる。質量的に絶対に収まりそうにない大太刀を、アラストールの皮膜であり底無しの許容量を持つ夜笠はマジックのように吸込み、すっぽりと収納した。それと同時に燃え盛る業火のような長髪は平常時の黒髪に、輝く紅蓮の瞳も黒真珠のように冴える瞳に戻る。最後に夜笠から買ってきたばか

りのメロンパンをひよいと取り出して夜笠を消すと、パチンと指を鳴らして封絶を解く。途端、行き交う人々の活気と夏の熱気がわつと押し寄せる。自分がよく知る日常に戻ってきた安心感に、悠二はふうと安堵の息を漏らした。

「いきなりの襲撃だったね。シャナが駆けつけてくれなかったら今頃危なかったよ。ありがとう、シャナ」

諸用（と言つてもただのメロンパンの調達だが）があつたシャナと少しだけ別行動を行つていた僕は、突然紅世の王と彼に付き従う燐子の大群に襲われたのだった。そこへ元々すぐに合流する予定だったシャナが駆けつけ、ものの数分でこれを撃退したのだ。一応自分も手伝いはしたが、シャナであれば自分がとやかく口出しをせずともあつという間に討滅していたに違いない。結局はシャナのおかげで助かったのだ。

本心からそう思っている悠二がにこやかに礼を言う。シャナに絶大の信頼を寄せているが故の無防備で柔らかな笑顔だ。本人は気づいていないが、その爽やかな笑顔はシャナにとつて拳の一撃に匹敵する威力を有している。ボディーパーローに匹敵する微笑みをいきなり向けられ、シャナの白い頬がほんのりと朱色に染まる。直後、クラスメイトである吉田一美がこの少年に恋をしているという事実を思い出し、我知らず小さな拳がぎりと音を立てて握られる。

「あ、え、えと、さっきの勝利は、悠二がいてくれたから、その、こ、こんなに簡単に勝

てたわけで、だから、だから……」

「これからも一緒に戦ってほしい」という肝心の台詞は言葉にならず言外に虚しく霧散した。勇気を振り絞って悠二の功績を褒めてみたが、やっぱり恥ずかしくて声がだんだんと小さくなっていく。言葉尻を濁らせて言いよどむシヤナの少女らしい恥ずかしげな仕草は、しかし人類史上稀に見るほど恋愛情事に疎い悠二の目にはただの異常にか映らなかつた。頬を赤らめて俯くシヤナの小さな顔を不思議そうに覗き込み、

「シヤナ? 聴こえないよ、なんて言ったの? もしかしてメロンパンの食べ過ぎでお腹の調子が悪くなった? えーつと、一番近いトイレは……」

それはシヤナに対する最大の屈辱と言つても過言ではなかつた。大事なことを伝えられない臆病な自分への恥ずかしさ、こちらの気持ちに気づいてくれない鈍すぎる悠二への怒り。爆発するそれらが小さな体軀をブルブルと奮わせる。

「うるさいうるさいうるさい!! 悠二のバカアツ!!」

激情に身を任せて悠二の懐に飛び込み胸元を掴むと、足を払うと同時に背負い投げの要領で思いつきりぶん投げる。シヤナの身体能力の足元にも及ばない悠二の体は簡単に宙を舞う。

「ええええええ!!? なんでええええええ!!?」

周りの好奇の視線も気にせずぎやあぎやあいつも通りのケンカを繰り広げる二

人を眺め、アラストールもいつもの如くため息をつく。そのため息にはすっかり保護者然とした貫禄が垣間見えている。

(やれやれ。この娘はもつと素直になれないものか。とは言え坂井悠二が鈍すぎるのも考えもの……いや待て！我はなぜ二人の仲が良くいくことを望んでいるのだ!?)

うぬぬ、とアラストールが自問しかけた時、

「……？」

微かに、いつかどこかで感じたことがあるような紅世の王の気配を察知した。先のヘリベとの戦闘のせいで気づくのには時間がかかり、その間にかかなり微弱になってしまっていたが、なぜかアラストールの胸に強く引つ掛かつて離れなかつた。普段なら気付くことすら出来ないほどの希薄な気配に、この時はひどく心を刺激された。

(この気配は、フレイムヘイズと契約した王か？この街はフレイムヘイズが多い。馴れ合いを好まず多くの敵を討滅することを生き甲斐とするフレイムヘイズなら、この街に用はないだろう。早々に立ち去るやもしれぬ。しかし、この気配は、どこかで……?)

まるで忘れかけていた記憶が掘り返されていくような言い知れぬ感覚に、アラストールの思考は過去への潮流に押し流され始める。400年も昔の、今となつては懐かしい欧州のあの^{シヤ}大戦で^ナ嗅いだ炭化した木々の匂いが蘇ってくる。この気配は、何百年もずつと昔——そう、まだこの少女ではなく彼女がアラストールのフレイムヘイズだった頃

に会ったことがあるような——。

「どうしたの、アラストール？」

ハツと意識を過去の水底から急浮上させれば、シヤナと悠二が怪訝そうな表情で自分を見つめていた。察知したことを二人に教えるべきかどうか逡巡してもう一度気配を探るも、すでにそれは母なる空気に漫然と溶けきってしまった後だった。強力な紅世の王や彼らと契約したフレームヘイズは、それぞれの炎や性質の違いから、激しい動作を行う際には決まって特有の気配を放つ。経験豊富で力の強い王は、それだけ生じさせる圧迫感オーラも比例する。紅世において神の位置にあるアラストールは敵性のある紅世の者の気配を全て諳んじていたが、今感じたものはどれにも当てはまるものではなかった。少なくとも、存命している紅世の者たちのそれとは合致しなかった。

「……いや、なんでもない」

わずか一秒のあいだに思考を完結させ、アラストールは不必要に焦って二人に報せることではないと判断した。それにフレームヘイズ側であれば、「弔詞の詠み手」マージョリー・ドーの際のように利害不一致で争うことにでもならない限り問題はない。

「そう。それならいいんだけど」

「急に黙っちゃうから、何かと思ったよ」

「貴様の情けなさに絶句したのだ」

「ひ、ひどい！」

杞憂に過ぎない、とアラストールは新たなフレイムヘイズのことを頭から切り捨てた。そのフレイムヘイズが、他でもない前大戦での因縁深き盟友“白銀の討ち手”だとも気づかずに――。

2—3 入浴

「しゃわー……ですか？」

「そう、シャワー。ほら、こつち来なさい」

唐突にバスタオルを押し付けてきたマージョリーさんが、猫にするようにボクの襟首を掴んでソファから引つ張りあげる。男だった頃よりずっと軽くなった矮躯は簡単に宙に浮き、片方だけブーツを履いた足がぶらぶらとブランコのように揺れる。そのままされるがままの形でどこかへ運搬されながら、先ほど告げられた「シャワーヲアビナサイ」という台詞を理解しようと頭の中で反芻する。

（しゃわー……しゃわー……ああ、シャワーのことか。たしかにボロボロだし、さっぱりした方が精神的にもいいかも——ってちよつと待った!!今のボクの身体はシャヤじゃないか!!）

「いいです！遠慮します！」

気づいてじたばたと抵抗するが、蓄積した疲労で満足に動かない身体では長身のマージョリーさんに逆えるはずもなかった。力の入らない手足をパタパタとばたつかせながら、ずるずると浴室へ引つ張られていく。傍目から見れば風呂呂に入るのを嫌がる猫そ

のものに見えただろう。

「まあ、アンタの気持ちもわからなくもないけどね。中身は男のままなわけだし。でも汚いカッコで私の部屋にいられると迷惑なの」

「その通りだ、我がフレイルムヘイズ。俺の贖作した肉体が汚れたままなのは、俺の精神衛生的にもよくない」

「テイレシアスは黙ってて——うひゃっ！」

胸元のペンダントを睨みつけようと視線を下ろした途端、チャイナスカートのスリットから覗く太ももが目飛び込んできた。しなやかな筋肉の張りと適度な肉のふくよかさが理想のバランスで共存し、細身ながらむちむちとした絶妙の質感を見せ付けている。未成熟でありながら同時に完成された艶めかしさを放つ脚がボクの緊張を感じ取ってピクリと震える。激しい戦いの余波でさらに深くえぐれたスリットは太ももの付け根まで露わにしてしまっていて、もはや服の意味を為していない。興奮の熱が腰のあたりからむらと立ち昇り、頬がかつと火照るのを感じる。

（うわわっ。ま、まずい。ひじょーにまずい！）

理性の危機を感じて慌てて視線を左右に振れば、今度はところどころ破れた衣服の間から清純な生命力に満ちた純白の肌が垣間見えてしまった。その中に小振りな膨らみが混じるのを見て、思わずゴクリと喉が鳴る。

(見えた！…ってバカー！自分の身体に興奮してどうするんだ！)

なんとか己を律しようとして叱りつけるが、脳裏に焼き付いた映像は勝手に脳内の永久保存フォルダに保存された。シヤナと旅をした数年間、互いに好き合っていることを認めるところまではいったが、肉体的な進展は結局なかった(ヘタレなどと言わないで欲しい。彼女の胸元に常に父親が居座っている状態でどうしろというんだ)。転生した直後に鏡でシヤナの身体を見てしまった時でさえ興奮のあまり気絶してしまったのだから、身体に直接触れて洗うなんてしたらどうなるのか……。もしかしたら暴走してしまいかねない。だって、洗うためにはいろいろ触らないといけないし。その、いろいろなトコロを！

「男なら覚悟決めなさい。大丈夫、アンタがその身体でナニしても私は気にしないから。男の子なら当然よね。ほら、着いたわよ」

「なななななな、ナニもしませんヨ!？」

「声の上擦ってるわよ」

ああ、ついに到着してしまった。佐藤の家は御崎市でもかなり裕福な層に入るので、脱衣所からしてスケールがでかい。悔しいけど、ここだけでボクの部屋がすっぽり入ってしまいそうだ。無駄に広いだけでなく、部屋の各所や、壁に据え付けられた姿見や大きな洗面台にも下品にならない程度の鍍金^{メッキ}装飾が施されている。その脱衣所の奥には

あからさまに豪華そうな風呂場へと続く大きな檜製の引き戸がどつしりと構え、こちらを手招きしている。視線がそこに釘付けになり、再び喉が鳴る。

(あそこに入ったなら、ボクはいつたいたいどうなってしまうんだ……!?!)

勘弁して下さいという懇願を載せた涙目の視線をマージョリーさんにぶつけるが、返ってきた返事はタオル、シャンプー、石鹸その他女性が必要とするお風呂道具一式が揃ったプラスチックの籠だった。

「はい、可愛い顔したってダメなものはダメ。ちびじやりの身体を汚いまま放つておいてもいいっての?」

「そ、それは……。あ、そうだ! テイレシアス、清めの炎を使えばいいんじゃないか!」
『清めの炎』とは、フレイムヘイズのための解毒・洗浄用の自在法のことだ(主導権は王が持っている)。以前、シヤナはアラストールにこの自在法を使ってもらって衣服と身体の不浄を消していると言っていた。マージョリーさんもひどい二日酔いはマルコシアスに回復してもらっていたはずだ。だったら、同じ紅世の王のテイレシアスにもできるはずだ。最大級の期待の視線をペンダントに向ける。頼む、テイレシアス。ボクはお前を信じてるぞ!

「はっはっは。俺は贋作の趣味に特化した紅世の王だからして、そういうどうでもいい自在法は一切使えんだ」

「自慢げに言うな——!!」

胸を張るように堂々とのたまったペンダントを両の手でぎりぎり握り締める。この偏屈な人外を信じたボクがバカだった。目の前で行われるコントに見切りをつけたマーシヨリーさんがやれやれと鼻を鳴らしてばんばんと手を叩く。

「はい、そこまで。無駄な抵抗しないの。さつさと入んのよ。着替えはあとで届けさせるから」

「ちよ、ちよつと待つ——」

びしゃん

って——」

行ってしまった……。ふと壁にはめ込まれた姿見を見る。埃と煤にまみれた布切れ寸前のチャイナドレスと原型をとどめていない学生服を着たシヤナが、いかにも心情複雑そうな顔をこちらに向けていた。たしかに傷は全部癒えたけど、さんざん地面に転がったせいで身体中が土に汚れ、黒ずんだ血の痕も肌にくびり付いている。顔にはさっきの涙が隈みたいに残っていてパンダみたいでマヌケだ。このままにしておくのはシヤナに悪いし、何より不潔なのはボクも好きじゃない。テイレシアスが清めの炎を使えない以上、これから元の身体に戻るまでの間をこの身体で生活していくのなら入浴は必ず通らなければならない道だ。

(そ、それに、自分の身体を洗うことに負い目に感じる必要なんて、ないじゃないか!)
気合を込めて内心に決意を叫ぶと、心の平穩を保つべく大きく数回深呼吸をして、そのまま着ていた服を破らんばかりに一気に脱ぎ捨てる。そして姿見が視界に入らないように歌舞伎役者のように頭を傾けながら浴室へと足を踏み入れる。見なければ大丈夫、理性は保てる。下を見ないようにして身体を洗えば、なんとかなるさ。——そんな風に考えていた時期がボクにもありました。

「……ちくしよー」

頭上からは惜しみなくお湯を吐き出すシャワーヘッドがぶら下がっている。その湯の滝の向こう側には、湯気で四隅が曇っている正方形の大きな鏡。佐藤の家にはこんなところにまで鏡があるのか。しかも、よりによって身体が良く見える目の前に!嫌がらせのように隅までピカピカに磨きぬかれている水シミ一つ無い鏡を前に、自分の思慮の浅はかさに涙していると、

「どうした、洗わんのか?」

地鳴りのように低い声が胸元から聴こえてきた。思わず俯こうとして、つるりとしたビードロのように白く輝く小ぶりの双丘が視界に飛び込んで慌てて顔を上げる。テイレスアスを首にかけたまま入ってきてしまった。もともとこの身体を創ったのはテイレスアスだから見せるのは恥ずかしくないはずなのだが、誰かに見られながら身体を洗

うなんて気まずいことこの上ない。脱衣所に置いてくればよかった。

「あ、洗うともき。言われなくとも！えいっ！」

バルブを思い切り捻ってシャワーの湯量を増やし、頭のとっぺんから熱い湯を浴びる。少し肌にはりつく程度の温かさが心地いい。男だった頃はもつと高い温度を好んでいたのに、この身体だともう少し低い温度を好むようだった。腰まで伸びる長髪が水分を吸ってじわじわと重さを増してゆく負荷に戸惑いを覚える。これも、男だった頃は味わったことのない感覚だった。髪の長い女の子は苦労しているんだな、と他人事のように感心し、「これからは自分も同じ悩みを抱えるんだ」と気がついてしゅんと気分が萎んだ。額に貼り付く長い前髪を人差し指でずらし、マージョリーさんから貸し与えられた籠のなかをゴソゴソと漁る。聞いたこともない名前が記された高そうなボトルを一通り観察したあと、シャンプーらしきものを手に取ると大量に手の平にぶちまけて、髪の毛にべちゃりつつける。そしてそのまま一気にガシガシと洗い始めた。自分で身体を洗い始めてこの方ずつと続けてきたやり方なのだが、ティレシアスは気に入らなかつたよう。「こらこら」と呆れたような声を上げた。

「乱暴にしたら髪の毛が痛むぞ。髪は女の命と言うだろう。もつと丁寧に洗え。せつかく創つてやったんだ。戦いで拵える傷は致し方ないが手入れくらいは気を使ったらどうだ」

（何が女の命だ！早く済ましてしまいたいのに、こつちの気もしらずにこの偏屈な紅世の王は……！）

だけど、その言には一理あることは認めざるを得ない。例え贗作であつてもシヤナの身体を粗末に扱つて見窄らしい姿を晒す真似はボクもしたくない。苦虫を潰したような顔で唇を尖らせつつ、ボクは渋々ながらティレシアスの指示に従うことにした。ティレシアスはこと贗作の手入れにかけては非常に凝り性で、それはこの時も十全に發揮された。

「この身体は元がいいから手入れのし甲斐がある。お前も女の端くれになつたのなら、それを喜ぶべきだ」

「元がいいのは認めるけど、女の端くれは余計だ。で、どうすればいいの？」

「まずは頭頂部から始めるんだ。爪ではなく指の腹で頭皮をマッサージするように丁寧に」

何が面白いのか愉快そうにほくそ笑む（ように見える）ティレシアスに指示されるまま、指先で揉むように地肌から毛先へと洗髪を始める。根気と時間をかけてじっくりと丹念に撫で洗い、一度お湯で綺麗に洗い落とす。そしてもう一度これを繰り返す。一度目で大体の汚れを洗い落とし、二度目で細かい汚れを落とすためらしい。二度目になると慣れたもので、御崎市にいた頃に流行つていたバンドの曲をリズムカルにハミングす

る余裕があつた。これが終わると次はトリートメントなのだが、長髪を肩に流してから指先で梳くようにすり込むのはさすがに抵抗があつた。テレビのコマーシャルで女性が髪を洗う際のポーズそのままだったからだ。しかも、時々鏡に映り込むシヤナの裸身が視界に入るのでさらにやりにくい。シヤナがいそいそと髪の手入れしているようだし、それがやけに色っぽく見えてしまうからだ。目のやり場に困りながらも行程を一段落させ、最後にトリートメントをざつと洗い流す。綺麗サツパリ流してしまうと効果が薄れるらしい。

「ふう、やっと髪が終わつたあ」

「仕上げに蒸しタオルで包むのを忘れるなよ」

「う」

言われた通り、一度お湯に浸した後よく絞つたタオルを用意して、まだトリートメントが染みたままの長髪を頭の上でお団子を作るように包み込む。蒸しタオルで包むことで毛髪の内部まで栄養が行き届き、表面のキューティクルの輝きを良くし、さらに頭皮の血行も増して髪艶がさらに増すらしい。いったいどこでこんな知識を拾ってくるのか。こういう知識を覚えるくらいなら自在法の一つや二つを覚える努力をしたらどうなんだ。

「よし。頭はまだそのままでもいい。次は身体だな。どうもお前に任せるのは頼りないか

ら俺が教えてやろう。よく覚えておけよ」

「う、うん。頼んだ」

ついにこの時が来た。度を越えた緊張に三度目の唾を呑み込みつつ、タオルに石鹼をこすりつける。

（この身体はボクの身体なわけだからどうしようがボクのはず……変に負い目を感じる必要はない。洗うためにいろいろ触るのだから不可抗力なんだし、じろじろと見なければ罪悪感だつて感じる必要もない。シヤナに負い目に感じることもない。大丈夫だ、問題ない。さあ、気合いを入れる坂井悠二！お前の精神力が試されているぞ！）

熱に浮かされたようにぐるぐると駒のように回る思考を無理やり収束させ、とつくに泡だらけになっていたタオルをグシャリと握り締める。

「お願いします！ティレシアス先生！」

「うむ。まずは――」

.....

「そこはデリケートなところだからタオルではなく指で洗え」

「わかった——ふああっ!？」

「言い忘れていたが敏感なところだから気を付けろよ」

「遅いよ!」

「……ッ!……んっ……うくっ!……」

「声押し殺している方が艶っぽいぞ」

「やかましい!」

.....

.....

.....

泡が目に染みないようにぎゅつと瞼を瞑ったまま手探りでシャワーのバルブを探す。指先に感触を見つけてえいやと捻れば、熱いお湯が頭上から滝のように流れ落ちて頭や肩を打ち据え、タオルを外した髪と全身を勢い良く伝い落ちてゆく。

「ああ、ようやく終わった……」

まるで長く激しい戦いに勝利した戦士のように腹腔の奥底から息を吐いて脱力する。いや、たしかにボクは戦いに勝利したのだ。自分という最大の敵に。戦いを制した己の強靱な精神力を讃えながら何気なく横目で鏡を見やると、頬と耳たぶを桜色に染めた少女の顔が映った。自分との戦いのさなかに偶発した不可抗力のアクシデントによって白い肌はほんのりと朱色に染まり、憂いを帯びたように見える瞳はとろんと恍惚に溶けている。そば濡れた髪が火照った頬に張り付いていて、やけに扇情的だ。

(これは本当にボクなのか……?)

気の強いシヤナなら絶対にしらない、あたかも異性を誘うような表情に、自分の顔だというのも忘れて思わず目が釘付けになる。

(な、なんて顔をしてるんだボクは！これじゃ本物の女の子じゃないか！)

ハッと理性を取り戻すと、バシバシと頬を叩いて緩んだ表情を引き締める。これ以上の空間にははいけない！ボクのアイデンティティがピンチだ！危険が危ない！急いで全身を拭くと早足で脱衣所へと飛び出す。慌てていたボクに、脱衣所に誰かがいるなんて気づけるはずもなかった。



「……なあ、なんで俺たちがこんな買わされなくちやいけないんだ？」
 「さあなあ。でも、姐さんが買つて来いつて言つたんだから、きつと必要なものなんだろ」

佐藤家の幅広な廊下を、この家の実質的な主である佐藤啓作とその親友である田中栄太が何ともいえない表情をしながらとぼとぼと脱衣所まで歩いていく。啓作の手には大きな無地の紙袋が、栄太の手には小さなピンクの紙袋が握られている。栄太の袋には近所の女性用下着専門店のロゴがでかでかと記されている。夕刻頃、マージョリーの一分の子分を自負する彼らは、例によつてマージョリーの手助けをするために、テニスコート二つ分は優に超える庭園で大剣型の宝具『フルトザオガ吸血鬼』を振り回す特訓中であつた。そこへ、いつのまに帰つてきていたのかマージョリーが現れ、労いの言葉でもかけてくれるのかと思いきやとんでもないことをのたまつたのだ。

「あんたら、ちよつと女の子用の下着を買つてきてくれない？」

何の冗談かと思つたが、あいにくとそうではなかつた。尊敬するマージョリーの頼みは無碍にできるはずもなく、陽が傾いて世界を赤く染める街を二人は泣く泣く閉店間近の下着専門店へと走つたのである。大柄な身体つきの栄太だけだつたならば、「女の子用の下着をください」と口にした途端に追い出されていたかもしれない。口達者で、とりあえず美をつけてもいいほどには顔のいい啓作が共にいたため、変質者を見る視線を

向けられながらもなんとか買うことができた。啓作はしきりに「この下着は妹のものであつて決して悪用はしない」という旨を女性店員に弁解していたが、店員の貼り付いたような苦笑いは最後まで消えることはなく、彼らの多感な思春期の記憶には重大なトラウマが刻み込まれることとなった。

「俺、しばらくあの店の近くを出歩けないぜ。気に入ってるCDショップがあんのによお」

「ああ、俺もだ。俺の馴染みのスポーツショップ、あの下着屋のすぐ隣なんだぜ。これからどんな顔で行けばいいんだよ」

言つて、二人して身体が萎みそうなほど深く息を吐く。夕日が差し込む木目の廊下をぐつたりとした表情で歩く彼らの背中は、本当に萎んだかのようにとても小さく哀れに見えた。

「あれ、誰か風呂に入つてないか」

「そういえば、家に入った時に下手くそな鼻歌が聴こえてたな」

脱衣所に足を踏み入れると、浴室の中から水音が聴こえてきた。マジヨリーかとも思ったが、彼女はさきほど風呂場に紙袋と下着を持って行けと指示したら離れでそのまま何か考え事を始めた。ああなつた彼女はしばらく動かない。ということ、今、シャワーを浴びているのは間違いなく別の人間だ。床を見ると、派手に損傷した学生服や

チャイナドレス、そして女用の下着が乱暴に脱ぎ捨てられて散乱している。ボロボロになつてはいるが、よく見ると学生服は御崎高校の男子生徒用のものだ。しかし、他の衣類は女用のものだ。放り捨てられた使用済みらしい下着から気まずそうに視線を逸らし、二人は顔を見合わせる。学生服を持ち上げて名字が刺繍されているはずのネームの部分を探したが、ちようど破れていて見当たらなかつた。思えば、この下着のサイズの指定もおかしなものだつた。マージョリーは「中学生用でいいわよ。チビだから」と言つていた。そのサイズの下着を身につけ、かつ彼らと面識のある人物といつたら一人しか思いつかない。

「……シヤナちゃん?」

「まつさかあ。なんでシヤナちゃんがうちでシャワー浴びるんだよ」

啓作の即座の否定に、思い付きを言つてみた栄太も「そうだよなあ」と考えをあらためて首を傾げる。シヤナとマージョリーの関係が、犬猿の仲とまではいかにないにしろ決して良い方ではないことは二人もよく知つていた。

「まあ、後で姐さんに聞けばわかるし、今は戻ろうぜ」

「そうだな。今日は心身ともに疲れたし」

疑問は募るばかりだつたが、とりあえずトラウマを負つた心を癒したかつた二人は渡された紙袋と下着をその場に置いていそいそと退散することにした。

がちや。

背後で浴室の扉が開かれる音。一日中、戦うための特訓を繰り返していた二人はつい条件反射的に振り返って身構えてしまい、

「あ

こちらを見て呆然とするシャナの、一糸まとわぬ裸身を前に、死を覚悟した。

† † †

「あ

飛び出した脱衣所には、佐藤と田中がいた。こうやって顔を見るのは何年ぶりだろうか。ボクが御崎市を旅立つ際、二人が盛大に悲しみ、涙ながらにエールを送ってくれたことを思い出す。その応援に、旅で疲れたボクの心は何度も救われたのだ。懐かしさがこみ上げてきて目尻が熱くなる。久しぶりに会う友人たちに思わず声をかけようとして、はたと二人が顔面蒼白になって戦慄の表情に固まっていることに気づいた。なぜと思考を巡らせ、それがシャナの姿をしたボクの裸を見てしまったからだという答えに行き着く。たしかに、シャナの着替えを見てしまったボクは半殺しにされたことが何度もある（誓って言うが故意に覗いたわけではない）。怒りに燃えたシャナに贄殿遮那を鼻

先に突きつけられたことなど数知れない。二人が恐怖に怯えるのは当然だ。もちろんボクはそんなことはしないが。無言のシャナホッがよほど恐ろしいのか、二人は彫像のように凍りついて動かない。このまま寿命を削り続けるのは気の毒なので、なるべく恐怖を与えないようにゆつくりと後ずさりして浴室へと戻る。扉を半分ほど閉めて、その隙間から顔を出し、

「あの、できれば少しの間、部屋の外に出てもらえるとありがたいんだけど……」

ボクの頼みに二人は首が外れるのではと思うほど頭を上下に揺らし、ドタドタとどこかへ走り去っていった。友人からシャナがどう思われているのかがよくわかってボクは少し苦笑する。脱衣所に出てみると、二人が置いていった大小二つの紙袋が目に入った。これがマージョリーさんの言っていた着替えだろう。ありがたい。チャイナドレスはもう修繕のしようがないし、もしできたとしても着たくなかった。代わりの服が手に入るのは大助かりだ。小さい方の紙袋を拾ってみると、それには買ったばかりの女の子用のショーツやキャミソールが入っていた。佐藤の家に女の子用の下着が常備されているわけはなく、基本的にめんどくさがり屋のマージョリーさんが買ってくるはずもない。とすると、

「二人には悪いことをしちゃったな」

きつとマージョリーさんに買って来いと言われたのだろう。男二人で女の子用の下

着を買わされる羽目になった二人の心境は想像もつかないが、おそらくは多大な精神的被害を受けたに違いない。

(後でお礼を言っておこう)

ビニール袋を破ってショーツを取り出す。「12〜15歳用」と書かれたパッケージには苦笑いをするしかなかった。片足を入れ、ふくら脛まで持ち上げたところでもう一方の足も入れて引き上げる。服一式を失敬した時に一度経験したはずなのだが、やはり馴れない。穿いてみても、どうも面積が少なくて心細い感じがする。ゴムがきゅつと恥骨を締め付けてくるのに違和感を感じて、姿見の前で何度も位置を整える。

「こうしていると立派な少女にしか見えんな」

「うぐつ!」

テイレシアスの容赦のない突っ込みが心に突き刺さり、身体をくの字に曲げて苦しむ。自尊心とか男の矜持とかさういったものをぎゅつくりと抉られた気がした。ショーツを整えるのをやめ、さっさとキャミソールを頭からかぶる。シルクなのだろうか肌触りはとても気持ちいいが、生地がかなり薄い。一ミリもないんじゃないだろうか。夏とは言え、これでは風邪を引いてしまいそうだ。

「前後ろ逆だぞ」

「……わ、わかっているよ! 女の子用はわかりにくいんだ!」

「リボンの飾りがついていてる方が前だ」

「だからなんでそんなに詳しいんだよ……!」

ほ、ほんの少し手間取ったが、無事に下着類は攻略した。これから延々とこれを繰り返すことになるのかと思うと頭が痛くなってきたが、精神衛生を考えてこれ以上は考えないことにした。後回し後回し!

「さて、次は服か。でも、ずいぶん大きいなあ」

無地の紙袋を持ち上げる。服にしてはかなり重みがある。生地が多いのだろうか。ガサガサと中を漁り、袖の部分を見つけるとよいしょと引つ張り上げる。ざつと音を立てて封入されていた服が姿を見せる。

しばしの思考停止後、どこかで見たような服を静かに袋の中に戻して目頭をぐいぐいと揉む。きつと疲れているんだろう。うん、きつとそうだ。そうに違いない。もう一度、今度はえいやつと一気に引つ張り上げて目の前に掲げる。

「……………」

どこかで見たような紺色の給仕服の上に、やつぱりどこかで見たような白いフリフリのエプロン。袋の底には、白いフリフリのヘッドドレスまである。紛れもなく、万条の仕手” ヴィルヘルミナさんの普段着のメイド服だった。なんでこの服が、このサイズ

で、ここにあるんだ。って、マージョリーさん、ボクにこれを着ろというんですか!?

「て、テイレシアスさん、服の贋作を作るなんてことは……?」

「存在の力はまだ回復途中だ。諦めてメイド少女になることだな」

無情な返事に、ボクはがっくりとうな垂れるしかなかった。

2—4 昵懇

「どうしてこんなことに……」

友人の家の廊下をメイド服を着て歩きながら、釈然としない面持ちで呟く。ボクに非はないはずなのに、一歩進むたびに得も言われぬ罪悪感ばかりがズシズシと背中にかかってくる。よりによって友人の家をメイドのコスプレして歩くなんて、どういう羞恥プレイなのか。

（なんで、こんな後ろめたい気持ちにならなければいけないんだ……。でも、ヴィルヘルミナさんの服がこんなに重かったなんて知らなかったな）

歩く度に大事なものを失っていくような喪失感から意識を逸らし、着ている給仕服を見下ろす。見た目はシンプルだが、触れてみれば特殊な素材を複合させて厚く作られていることがわかる。この手触りからして、おそらくアラミド繊維を幾重にも編みこんでいるようだ（シヤナとの旅の間に、こうした戦いに必要な知識や経験を散々叩き込まれた）。そのため、この服は見た目以上に重みを帯びている。脛まで伸びるロングスカートも一見すると足の動きを邪魔してしまいそうで、実は形状記憶素材で出来ているので生地が過剰に足に絡まることはない。とは言えスカート自体にまだ慣れていないので、

一步一步を慎重に踏み出さないと足がもつれて転んでしまいそうだ。唯一の救いは、寸法がシヤナの身体に完全にフィットしていることだ。サイズが合っていなければ満足に歩けもしなかつただろう。

(ヴィルヘルミナさんはよくこれであんなに動けるな。それにしても、どうしてここにこの服が?)

偶然、そっくり同じメイド服が佐藤家にあつたということはないだろう。佐藤家の維持管理を行っている世話係の人たちはこんな仰々しい服は着ていない。仮にそうだとしても、サイズが小さすぎる。少女メイドを侍らせるような趣味は佐藤にはなかつたはずだ。たぶん。とすると、やはりヴィルヘルミナさん当人が持ち込んだ物だと考えるほうが自然だ。記憶を掘り返してみれば、ヴィルヘルミナさんがこの地に来た当初の理由は、『探耽求究』ダンタリオンによって破壊された御崎市の事後処理のためだった。時期的には、すでにこの地に彼女が訪れていてもおかしくはない。

(シヤナと合流する前に、ここにも寄つたのだろうか? マージョリーさんとは昔から仲が良かったらしいし、ダンタリオンに襲撃された御崎市の事後処理をヴィルヘルミナさんに要請したのもマージョリーさんだったはずだから、そう考えても不思議はない)

では、なんのためにシヤナにびつたり給仕服をここに置いていったのか? もしかしたら、お揃いの服をシヤナに着てもらいたくて持つてきた方がいいが、恥ずかしくなつて

マージヨリーさんに預けたのかもしれない。特注仕様のシヤナ専用メイド服がその証左だ。

（あの「万条の仕手」が、ねえ）

そこまで考えて、彼女の鉄面皮という表現がびつたりの無表情な顔が思い浮かぶ。『とむらいの鐘』とフレイムヘイズ兵団による史上最大の戦争——『大戦』において、初代「炎髪灼眼の討ち手」マティルダ・サントメールの背中を護り、兵団を勝利へ導いた勲功を誇る、紅世においては知らない者のいない古強者。それが「夢幻の冠帯」ティアマトーのフレイムヘイズ、ヴィルヘルミナ・カルメルという女性だ。口数の少ないティアマトーがそうであるように、契約者である彼女も、必要と不必要を極めて冷静に取捨選択できる。時には坂井悠二という『零時迷子』を宿したミステスを「今後に支障を来す危険性がある」と一方的に断じて容赦もせず簡単に破壊しようとしたこともある。そんな彼女が、まるで子煩悩の母親のような可愛げのあることをするだろうか？ 顔を赤くしてマージヨリーさんに給仕服を押し付けるヴィルヘルミナさんの姿を想像しようとして失敗する。

「あはは、まさかね」

「どうした、何の話だ？」

よろよろとして危なっかしいボクの歩調に合わせて振り子のように揺れるティレシ

アスが不思議そうな声を上げる。スカートに足を取られそうになるたびに左右に激しく振れるテイレシアスが少し気の毒に思えた。ティアマトーが頭頂部のヘッドドレスの神器にいるのはヴィルヘルミナさんなりの心遣いなのかも知れない。二人とも寡黙だが、互いに信頼しあっているのはよくわかるし。

「ちよつと、ある人のことを思い出して——」

言いかけて、はたと思う。共に戦ったことで信頼関係は構築したものの、ボクはこの紅世の王のことを実はほとんど何も知らないのだ（契約してまだ一日も経っていないのだから当たり前と言えばそうだが）。趣味が贗作だということ以外、彼の過去も信条もまだ掴めてはいない。それに、

『俺には大儀も使命もない。己の欲が満たされるのなら、人喰いにもなる。俺がお前と契約したのは、そうすることで俺の欲が満たされると踏んだからだ』

かつて放たれた冷酷な台詞が脳裏に響き、腹底をじわりと冷やす。探りを入れるというわけではないが、一度テイレシアスの『在り方』を確かめておくべきかもしれない。彼が本当に、目的のためなら人間の存在の力を奪うことも是とする紅世の王なら……ボクはこれから何度この王と衝突することになる。これでは、連携どころの話ではない。契約する紅世の王の力を引き出せないフレイムヘイズが敵と渡り合えるかどうかは、すでに己の身で体験済みだ。キュレネーに負わせられたダメージの記憶が蘇り、身体中に

ズキズキとした疼痛が走る。

(もし、ボクの説得を聞いてくれなかったら……どうすればいいんだ)

忘れていた懸念が風を受けた炭火のように盛り返し、全身をさざ波のようにざわりと震わせる。

「どうした。まだ、疲れが抜けないのか」

「——えっ」

不意にかけられた訝う声にハツとして顔を上げる。上げて、先ほどから周りの景色が変化していないことに気付く。思考が深まるうちに、その場に縫い付けられたように俯いて歩みを止めてしまっていた。だが、無意識のうちに立ち止まっていたことよりも驚くことがある。

(今の言葉……すごく温かかった)

こちらの状態を心配する、不安げに曇った声音。その根底に、背を優しく摩する掌のような柔らかな体温が宿っているのをはつきりと感じる。遠かった存在がぐぐつと手の届く位置まで近寄ったような印象を胸に感じつつ、緊張を押し隠して口を開く。遠まわしに問うても仕方がない。真っ直ぐに、思いをぶつける。

「テイレシアス、お前は——人を食べたこと、あるのか？」

その問いだけでボクが抱いている疑念を察したのだろう。「ああ、そのことか」と軽く

応えるテイレシアスの口調は、不思議とこちらを氣遣うような苦笑を孕んでいた。まるで幼子の無邪気な質問に応える親のような、とてもたおやかな微笑み。人外とは思えない予想外の人間っぽさに胸を打たれ、みぞおちの奥で心臓がとくとんと震える。

「心配するな。人間の存在の力を食ったことは、ない」

「——だ、だったら、『目的のためなら人喰いも厭わない』って言ったのは？」

意外な、そして望んでいた答えに驚いて、思わずさらに確かめる。胸中に滞留していた不安が霧散し、代わりに安堵感が満ちてゆく。

「あれはお前を炊きつけるための方便だ。宝具は、人間と紅世の者が共同制作することで初めて誕生する。俺はモノ造りに長けた人間という種族には一目置いているつもりだ。世話になってたガヴィダのオヤジも人喰いにはうるさかったし、俺の高尚な趣味を理解できるのは人間の方が多かった。そもそも、肝心の宝具を創る人間がいなくなつては俺の生甲斐に支障をきたす。……それに、紅世の連中よりも人間といった方が……その、楽しいんだ。だから俺は、人喰いはしない」

一息に言った後、「損な役回りだ」と鼻を鳴らして嘆息する。それがテイレシアスなりの照れ隠しなのだと気付いて、ボクは自然に相好を崩していた。この王は要するに、偏屈で自由で、どうしようもなく人間が好きなのだ。

「うん、わかった。答えてくれて、ありがとう。テイレシアス」

もう、テイレシアスへの恐れは跡形もなく払拭されていた。人食いを止めるように釘を差したらしい『ガヴィダ』という人物（？）に感謝しながら、ボクはこの必要以上に人間じみた気性をした紅世の王に大きな親しみを感じてクスリと微笑んだ。胸に下がる美しいペンダントの輪郭を指先でそつとなぞる。

「ボクは、お前のフレイムヘイズになれて、よかったよ」

「……ふん、当たり前のことを言うな」

それきり黙ってしまったペンダントは、夕日を反射して紅潮しているかのように見えた。

ここで終わっておけば、いい話だったのだが。

——ゾクゾクツ

「ふひひやつ？」

暖かな夕日の下で互いに昵懇の仲を確信している中、やにわに奇妙な痺れが背筋を走ったのだ。

「今のは悲鳴なのか？」

「う、うるさいな。ていうか、なんか、身体が変なんだけど……」

お尻の辺りから腰部まで何かが急に這い登ったような、ざわざわとしたむず痒さを覚える。下腹の内側が膨張しているかのようにはざわざわと疼く。下腹部の筋肉が恥骨を圧迫するようにぎゅうつと強く収縮し、意識してもいないのに太ももの内側がくつついて内股になつてしまう。こんな情けない格好はしたくないのに、引き剥がそうとしても内ももの肉がふるふると波打つばかりで離せない。離してしまえば取り返しがつかないことになるぞ、と訴えているかのようだ。

(な、なんなんだこれ？力が抜けていくみたいだ)

足に力が入らない。奇妙な疼きは止まる気配を見せるところかささらに強くなり、膝が震えてまともに立つことすら危うくなってくる。心臓が早鐘を打つ。全身が上気し、吐く呼吸は荒くなり、額には玉のような汗が浮かんでくる。ヘソの裏に爆発寸前の熱溜りが生まれたようだ。太ももを擦り付けるように内股にして抑制していなければなにかが漏れ出てしまいそうな危機感に背筋を怖気が走る。マグマのように膨張するそれを身体全体で抑制するように腰をくの字に折り、下腹を両手でぎゅつと押さえ付ける。

「テ、イレシアス？こ、これは、いった、い……う？」

こんな感覚は生まれて初めてだ。まさか、テイレシアスの創つてくれたこの贗作の身体に問題があるのか？

ずくずくと下腹部で暴れ回る熱流に翻弄されるボクに対し、テイレシアスはなぜか合点がいった様子で至つて冷静だった。

「たしか、さつき水不浄の前を通り過ぎたな」

「水不浄つて、と、トイレのこと？ あつたけど、なんで？」

テイレシアスが何を言おうとしているのかを理解するのに数秒の時間を有した。そしてその時間は、事態を深刻化させるには十分な時間だった。さらに増した圧迫感に全身がぶるぶると痙攣する。

「まさか、これつて、」

「悪いことは言わん。ここで粗相をしたくなければ、さつきと戻つて駆け込め」

顔の筋肉がひくひくと引き攣る。道理で、この感覚の検討がつかないはずだ。ボクはまだ、この身体でしたことがないのだから。そういえば、保健体育の授業だったかで、女の子は男に比べてその臓器が小さいから溜められる量も少ないとかなんとか教えられたような。もはや重心すら整えられずにフラフラと身体を揺らめかせながら、踵を返して来た道を再び戻る。普段は羨望の眼差しで見っていた佐藤家の無駄に長い廊下が、今は憎らしくて仕方がなかった。下半身の筋肉を堪えることに費やししながら意志の力を振り絞つて一步を踏み出し、

「ああ、それから、馴れないメイド服に気を付け

「ふぎやつー」

……るべきだった

と思うぞ」

裾を踏みつけたせいで、思いつ切りずっこけてしまった。毛皮の絨毯にされたトラのように四肢を放り出して床に口づけをする。

(い、痛い……。でも、なんとか大丈夫だった)

セーフ。よくやった、ボクの下腹神経。痛む額を左手で、下腹部を右手で抑えて廊下の奥を見れば、トイレはまだ見えない。

解放までの距離は、果てしなく遠い。

2—5 命名

「や、やつと着いた……」

マージョリーさんの待つ離れ家に辿りついた頃には、ボクはすでに精根尽き果てていた。ぐったりと力なく扉にもたれ掛かる。ボクの胸と扉に挟まれたティレシアスがぐもつた声で呆れる。

「水不浄で長いこと手間取るからだ。もう日が暮れてしまったぞ」

「し、仕方ないじゃないか。初めてだったんだから」

慌てて駆け込んだトイレで、ボクは多くのものを失った。尿意とともに男として大事な色々なものを一緒にトイレに流してしまった気がする。

(シヤナ、ごめん)

心の中でシヤナに謝っておく。罪悪感に苛まれるような感じがわしいことをしたわけではないのだが、そうしなければいけない気がしたのだ。疲れた視線を窓の外に向ければ、夕日は半分ほど地平線にその身を隠し、空は深い濃紺に染まりつつある。長かった一日も、もうすぐ終わる。

この一日で、ボクの状態は天地がひっくり返るほどに変化した。シヤナの姿になり、

フレイムヘイズとして戦い、『白銀の討ち手』として辛くも勝利した。その後は浴室とトイレで……いや、ここからはやめよう。精神衛生的によくはない。ふるふると頭を振つて余計なことを意識の外に飛ばし、離れのドアノブに手をかける。年季の入ったそれを回す直前、悲鳴に似た懇願の声が入り込んで手を止めさせた。

『マージョリーさん！どうか穏便に事が済むようにシヤナちゃんを説得してください！』

『俺たちまだ死にたくないッス！』

佐藤と田中の声だ。声と内容からして、かなり焦っているらしい。何事かと思い、ドアを開けて足を踏み入れる。途端に、バーカウンターに座るマージョリーさんに必死に嘆願していた二人が、怯えた犬のような悲鳴を上げてマージョリーさんの背後に回りこんだ。

「ごめんシヤナちゃん！わざと覗いたんじゃないんだ!!」

「あれは故意じゃない！事故なんだ！」

呆気にとられるボクに、マージョリーさんはくつくつと忍び笑いを浮かべる。どうやら、マージョリーさんはボクがシヤナではなく坂井悠二であることを二人に教えていないらしい。ボクもその方が助かる。なるべくなら、ボクが坂井悠二であることは言わないでおきたい。二人はいい奴だから、きつと心からボクの境遇を悲しんでくれるだろ

う。だからこそ、一生懸命に頑張る二人の心に影を落とすようなことはしたくなかった。

「別に怒ってないよ。気にしないで」

二人に笑顔を向ける。これは本心だった。男同士で裸を見られても大して恥ずかしくないし。シャナの裸を他人に見られるのは少し癪な気もするが、そこは自分の不覚だと割りきろう。今度は二人が呆気にとられる。目が飛び出すのではないかと思うくらい目を見開いて顔を見合わせる。その様子があまりに滑稽なので、思わずボクもクスクスと忍び笑いをしてしまった。

「お二人さん、その嬢ちゃんは『炎髪灼眼の討ち手』じゃないぜ」

マルコシアスが大笑しながら二人に告げる。目を点にして混乱する二人に、ついに我慢の限界になったマージョリーさんがスラリとした美脚をバタつかせて派手に笑い転げた。もしかして、ボクのために黙っていたのではなく、二人の反応を見て楽しむためだったのかもしれない……。とりあえず二人に近づき、下着を買ってきてくれたお礼をしておく。

「ボクのためにいろいろ買ってきてくれて、ありがとう。それと、混乱させちゃってゴメン」

はあどうも、と心ここにあらずといった感じで返事をする二人。ボクの態度と口調か

ら、シヤナではないことを理解できてきたみたいだ。まだ少し混乱気味の田中が太い首を傾げていると、佐藤がボクの顔を食い入るように凝視する。切れ長の目が疑問符を浮かべていた。嫌な予感がする。

「じゃあ……君は、誰？」

「え」

し、しまった！大事なことを考えてなかった！！

なんとさえばいいのだろう。こんな時こそ自慢の頭脳を働かせて妙案を導き出すのだ、坂井悠二！

……

……

……

だめだ思いつかない！だからと汗が流れる。えーと、その、と言い淀みながら何かいいアイデアはないかときよるきよると視線を彷徨わせると、やれやれと呆れ顔のマージョリーさんと目が合った。「お願いします助けてくださいお願いします」という哀願をこれでもかと込めた視線を向けると、彼女は「仕方ないわね」と言うように小さく息を吐いて二人に振り返り、

「紹介が遅れたわね。この娘の名前はサユよ。私の知り合いで、なりたてはやはやの新

米フレイムヘイズ。ほら、挨拶しなさい。サユ」

と一息にまくし立てた。お膳立てしてやったんだから早くしなさいという視線に背を押され、ボクは田中と佐藤に向かって咄嗟に頭を下げる。気心のしれた友人たちに変なお芝居をするのは果てしなく気まずい。

「よ、よろしくお願いします。サユ、です」

深々と頭を下げたところで、自然に両手が下腹の前で重ねられていることに気付いた。これでは、本当にメイド少女のようじゃないか。このメイド服にはそういう呪いじみた自在式でも組み込まれているのだろうか。自分がどんだん元の『坂井悠二』から離れていつているような気がして激しく後悔する。苦い感情を飲み込んで頭を上げると、一応は納得した様子の子の二人が顔を赤くして気まずそうに頬をかいていた。初対面の女の子に情けない姿を見せてしまった、というわかりやすい表情だった。

「えっと、よろしくサユちゃん」

「にしても、シヤナちゃんとそっくりだね。姉妹……ってわけじゃないだろうし、何か理由があるの?」

いきなり核心を突いてくるとは、さすが佐藤。親友の池速人ほどではないが、こいつも変に鋭いところがある。こんな時は、すべてが許される切り札を使うしかない。

「し、仕様です!」

ぼかんとする二人。当然の反応だろうが、今のところ都合のいい言い訳はこれしか思いつかない。後でもっとマシなものを考えておこう。

そういえば、なんでマージヨリーさんはボクの名前を「サユ」にしたんだろうか。……もしかして……『坂井悠二↓さかいゆうじ↓さ　ゆ　↓サユ』!? 実に単純な命名方式が頭に浮かんで、マージヨリーさんをじとつとした視線で見つめる。マージヨリーさんが手をプラプラと振り、いいじゃないの考えてあげただけありがたいと思いたいと視線で応えた。もう少しひねってくれてもよかつたと思う。

こうして、ボクの「サユ」としての日々が始まった。

† † †

この手にある丸みを帯びたグラスになみなみと注がれた液体を呆然と眺める。透明感のある薄紫色の液体——『ワイン』からは、鼻孔を圧倒するほどの芳醇な葡萄の香りが漂ってくる。

「あの……これを呑めと?」

ひくひくと頬を引き攣らせる。隣では、マージヨリーさんがボクのグラスより一回りは大きなゴブレットに注がれたワインをがぶがぶと飲み干している。そのスタイルの

いい身体のどこに入っているのかと不思議に思ってしまうほどの飲みっぷりだ。『宛がないのなら、今日はここに泊まって行きなさい』というマージョリーさんの提案によって、今日は佐藤家に泊まらせてもらうことになったのだが（家主である佐藤も了承してくれた）、夕食の代わりに出てきたのはチーズやピーナツなどの簡単なおつまみと大量のワインボトルだった。なんでも、マージョリーさんは毎晩のようにこんな生活を繰り返しているらしく、佐藤と田中も時々付き合わされているんだとか。栄養バランスが心配だ。部屋の隅に置かれた空のオーク製のワイン樽はすでに飲み干してしまったものの残骸というから未恐ろしい。肝臓が壊死を超えてついに進化したんじゃないかと思えるくらいかっぱかっぱとワインを胃に流し込み始める三人を横目に、僕はワインに映る自分の引き攣った顔を眺めることしかできなかつた。自慢じゃないが、ボクはアルコールにとことん弱い。試しに呑んでみたチューハイ一缶でひっくり返った苦い経験が頭をよぎり、頬を汗が伝った。

「そうよ、呑むの。呑む以外の選択肢はない。あんたのせいで今日は散々な目に遭ったんだから、晩酌くらい付き合いなさいよ」

「ひゃーっひゃっひゃっひゃっ！こうなったら覚悟を決めるしかねーぜ、嬢ちゃん！」

すでに酔いが回っているらしいマージョリーさんの据わった目とマルコシアスの追い討ちにたじろぐ。この身体は、以前の坂井悠^ホ二とはスペックが月とすっぽんのように

違うわけだし、ボクの経験は当てはまらないのかもしれないが……そもそも、この華奢な体軀ではアルコールに強い弱い以前の問題だと思う。それは佐藤と田中もわかるのか、グラスのワインを飲み干した佐藤が笑いながら、

「マージョリーさん、さすがにサユちゃんは飲めないんじゃないですか？ 未成年だし」

と早々に赤くなつた顔でフォローしてくれる。ありがとう佐藤。

「そうそう。カクテル用のオレンジジュースならありますし、無理させて飲ませるとフレイムヘイズでも身体壊しちゃいますよ。未成年なんだから」

上に同じく、ワインを呷りながらフォローしてくれる田中。こちらは大柄な体格のせいかまだ顔色は普通だ。感謝するよ田中。だけど、お前らも未成年だろ！ しかし、二人の言などマージョリーさんは意に介す様子も見せず首を振る。

「フレイムヘイズなんだから、酒くらい飲めるわよ。ほら、ぐいーつといきなさい、ぐいーつと」

などと無茶苦茶なことを言いながら自分のグラスいっぱい注いだワインを自らぐいーつと呷る。見れば、彼女の前に置かれたワインボトルはすでに空と化していた。その呑みっぷりに絶句して、ボクは再びまだ一口もつけていないワイングラスを覗き見る。シャナそっくりの少女が不安そうな顔を浮かべ、薄紫の水面を介してこちらを見つめていた。シャナそっくりの少女——「白銀の討ち手」サユとして、あらためて佐藤

と田中に自己紹介をしてから納得してもらった後、ボクはひたすらマージョリーさんからの質問攻めにあっていた。二人の手前、ボクがこの姿になったこと、過去に戻ってきたことには触れなかった。代わりに、ボクの討ち手としての能力について多くのことを問いつ質された。能力の概要、行使の原理・方法、同時に行使した際の最大限界数、贖作された宝具の維持限界時間、などなど。

“白銀の討ち手”に付与される特殊能力——目にしたことのある宝具を自身の存在の力を消費して創り出す——すなわち『贖作』は、長い年月を討ち手として過ごしてきたマージョリーさんの目にも破格の能力に映ったらしい。少なからず紅世と関わっていたボクからしても、やはりチート級の能力に思える。戦いの局面に応じて無限の選択肢を有しているわけだから、使いこなせば無敵とも言える。ただし、自分がその能力者となってみれば、そう上手い話でもないことを身に沁みて理解できた。まず、大前提として、贖作は大量の存在の力を必要とする。強力な宝具になればなるほど、存在の力もたくさん必要になる。そして、存在の力の供給を一旦カットしてしまうと、贖作した宝具は砂の城のように消えてしまう。空気を入れ続けないと萎んでしまう風船みたいなものだ。お世辞にも使い勝手がいい方ではない。そして、ダメ押しとして、シヤナを模倣して創られたこの肉体は本家よりも存在の力の貯蓄限界量がわずかに少ない。というわけで、有り体に言えば『贖作』という能力は燃費が悪いのだ。

マージヨリーさんの度重なる質問に、まだフレイムヘイズとして開眼して間もないボクはしどろもどろになりながらも、先の戦闘で得た経験を思い出しながら拙い言葉で何とか答えた。ボク自身、未だ『贗作』について完全に理解しているわけではなかったの
でいい学習になった。スベックを把握出来れば、戦術も自ずと見えてくる。これも、シヤナとの旅の間で学んだことの一つだ。

もちろん、契約している紅世の王、*「贗作師」* テイレシアスについても質された。彼の過去、思想信条、これからの行動方針など。これらの質問にはテイレシアス自身が答えた。ボクも初めて知ることなのだが、テイレシアスは紅世に誕生してからまだ2000年足らずしか経っていない、比較的*「若い」* 紅世の王なのだそうだ（それでも人間からしてみたら遥かに年長だが）。さらに、テイレシアス曰く、「周りの連中が生まれた瞬間から生きるために戦いを始める中、自分だけはなぜか贗作にしか興味がなかった」らしく、戦いにも身を投じることはなかったそうだ。そのため、老練の紅世の王にはテイレシアスとの面識どころかその名前を知らない者も珍しくないという。宝具を贗作するうちに、宝具を生み出す人間という存在に興味を持ち、彼らを殺す人喰いを嫌うようになり、一時は同族殺しも厭わないと決意をしたが、テイレシアスの能力を使いこなせる人間がまったく現れなかったのほぼ諦めかけていた。そこへ、何の因果かボクという*「多くの宝具を見てきた人間」* が現れたので、消滅寸前だったにも関わらず喜び勇ん

で契約したらしい。

ちなみに、テイレシアスは今何をしてるのかというと、

「おい、もう少しワインをくれ」

「はいはい、わかったよ」

バーカウンターのの上に置かれたペンダントの上に、指で掬ったワインを一滴垂らす。ゆっくりゆっくりと目には見えない速度でワインがペンダントの宝石に染み込んでいく。

「……その状態でも飲めるんだね」

「飲もうと思えばな。しかし、この酒はなかなか美味だな。お前も飲んだ方がいいぞ。

この芳醇としていてそれでいて爽快な味わいは……」

ぺらぺらとえらく饒舌になって語りだすテイレシアスと、それに「おお、わかりますかテイレシアスさん！」と意気投合して共に語りだす佐藤と田中。みんな酔ってきているようだ。なんだかカオスと化してきている気がする。

(き、きつと大丈夫さ。お酒くらい、大丈夫)

フレイムヘイズとなった人間は肉体が強化されるのだし、もしかしたらアルコールにも強くなっているかもしれない。ボクだけがシラフのまま取り残されても酔っぱらいから面倒なことを押し付けられそうだし、こうなったら覚悟を決めて飲むしかない！

「よしー」

短い掛け声をあげて、一気にワインを呷る。マージョリーさんがにんまりと破顔して頷き、二人も歓声を上げてパチパチと拍手をする。舌の上にもろやかなワインが流れこみ、喉へと向かう。

刹那、強烈な味覚に舌が痺れる。たしかに芳醇でありながら爽快で清浄な味だった。これでもかと言うほど手間をかけられて醸造されたことが容易に想像がつく。不純物の香りも風味も一切感じさせない清純な口当たりは奇跡と呼ぶに相応しい。これは、かなり美味しいワインなのだろう。

——お酒が飲める人にとっては。

「びッッッ?!!」

頭蓋の中身が倍に膨れあがったかのような錯覚に打ちのめされ、声にならない悲鳴を上げる。喉が焼け付くように熱い。味覚が強烈過ぎて、まるで舌の上で爆弾が爆発したみたいに、嗅覚も視覚も触覚も散り散りに霞んでしまう。ああもうダメだこれ以上は *qwse drft gy fujico ip*……!!

「あちゃー。だからやめたほうがいいって言ったのに……」

「あーあ、ぶつ倒れちゃいましたよ」

「なによ、つまらないわねえ」

「ひゃーひゃつひゃつひゃつ！飲みっぶりだけはなかなかだつたぜ！」
「情けないぞ、我がフレイムヘイズ」

きゆう、と机に轟沈したボクの頭の上から落ちてくる呆れ声の数々。反論したかったが、こめかみがガンガンと痛んでそれどころではなかった。フレイムヘイズになったからといってアルコールへの耐性は強くはならないようだ。そういえば、シヤナの身体の成長は12歳で止まっていると聞いたような気がする。いくらなんでも、12歳にお酒を飲ませちゃダメでしょ……。

2—6 絶望

フライパンに料理酒をぶちまける。強火で熱したフライパンにボウと青い炎が浮かび、チーズを包んだ豚バラ肉と細かく刻んだニンニクを包む。途端、芳醇な酒と蒸発する肉汁、そして焦げたニンニク特有の芳ばしい香りが桜が咲くようにふわっと匂い立ち、小さな厨房を満たした。焼き過ぎないように気をつけながら、ニンニクの香りを染み込ませるように肉の全面をミートフォークでフライパンの表面に軽く押し付けていく。厚いばら肉に巻かれたカマンベールチーズがとろりと溶け出し、ジュウと食欲をそそる音を立てた。もうそろそろだろう。味見のために、一番小さい肉巻きを菜箸で摘んで口に入れる。予想以上の熱さに思わず小さな悲鳴をあげる。

「はひひっ。はふ、うん、いい感じに出来た」

奥歯で噛めば、熱い肉汁が染み出して焼けた肉の味が口腔内に膨れ上がる。しっかりと染み込んだニンニクの香ばしさとジューシーな脂が上手く互いを引き立てている。さらに強く噛めば、中のカマンベールチーズが溶け出してチーズのまろやかな味を楽しませてくれる。次々に味覚を刺激された脳が歓喜に打ち震えるのを感じる。うん、上出来だ。表面に適度に焦げ目をつけたところで火を止めて、あらかじめ用意しておいた大皿

にひっくり返す。

ピピピッ

「ん、グッドタイムिंग」

タイムिंगよく、背後でレンジの加熱終了を告げる音が呼ぶ。古そうだが性能は良いレンジを開ければ、しつかり加熱された冷凍食品の厚切りブロッコポテトの山がホクホクと美味しそうな湯気を立てていた。それらを手早く一口サイズに切り揃えた後にバターをたつぷり塗りつけ、先ほど完成したばかりのチーズ肉巻きの隣に盛り付ければ完成だ。皿を持ち上げる直前、どうせならミントでも添えて見た目綺麗に装うべきかとも考えたが、あの三人はそういうことに拘らないから別にいいかとそのまま持つていくことにした。皿を持って厨房から出ると、カウンターでマージョリーさんと佐藤と田中が目をキラキラと輝かせていた。料理を見た田中がシンバルモンキーみたく拍手しながら大げさに喝采する。

「うおっ、うまそう！サユちゃん、それなんて料理!？」

「見たまんま、豚バラ肉のカマンベール焼きとバタージャガイモですよ。どうぞ、召し上がれ」

でん、とカウンターに皿を載せる。酒の肴用として冷蔵庫の中に放り込まれていた食材から作った有り合わせの料理なのだが、おつまみを調理するという習慣がなかった三

人にはご馳走に見えるらしい。肉でカマンベールチーズを巻いて焼くだけなんだけどなあ。

なぜ、ボクが三人のおつまみを料理する羽目になつていいのかというと、「酒が呑めないのなら何か気の利いた食べるものでも作りなさい」というマージョリーさんのお達しで、ほとんど使われた形跡のない厨房に追いやられたからである。予想通り、面倒なことを押し付けられたわけだ。

(こっちはまださっきのお酒のダメージが残つてるんだけどなあ)

「うー！ まー！ いー！ ぞおおおつっ！！」

「もぐもぐ、はふはふ、むしやむしや。うおオン！ 俺はまるで人間火力発電所だー！」

まだちよつぱり痛むこめかみに指を当ててこつそり肩を落とすボクの前で次々と料理が消えていく。お酒そつちのけでハムスターも裸足で逃げ出すほど口に頬張つているのを見る限り、けつこう気に入つてもらえたようだ。美味しそうに食べてくれる三人の表情を見ていると、ボクも満ち足りた充足感を胸に感じた。悪酔いのせいで重石を飲み込んだように重かった身体がふつと軽くなる。自分が作った料理で誰かが喜んでくれることがこんなに嬉しいとは知らなかった。新しい発見だ。

「なかなか良い腕してるじゃない。きつと良いお嫁さんになれるわよ」

ニヤニヤとこちらをからかう笑みを見せるマージョリーさん。一瞬、シヤナそつくり

の自分がピンクのエプロンをつけて新妻のように家事に勤しむ姿を想像してゾツと鳥肌がたつ。嬉しくない、ちつとも嬉しくない。

「ハハハ、アリガトウゴザイマス」

ここにおいてもマージョリーさんにイジられるだけのような気がするので、厨房に戻って使った食器類を洗うことにする。佐藤家の使用人たちによつて常に清潔に保たれている設備だが、自分で汚した物はきちんと綺麗にしておくべきだ。今のボクの背丈では足が床に届かないバーチエアーからひよいと飛び降り、軽やかに着地する。お尻に敷いて乱れてしまったスカートの皺を丁寧に伸ばす。借り物なのだし、ヴィルヘルミナさんそつくりのメイド服ということもあるので杜撰な扱いはできない。去り際に、物欲しうにしている（ように見える）ペンダントにワインを一滴落としてやるのも忘れない。紅世の王にも二日酔いがあったりするんだろうか。テイレシアスは人間臭い奴だし、少し心配だ……つて、なんだこの生温かい視線は。

「な、なんですか？その顔は」

ふと自分に向けられた視線の源に目をやれば、マージョリーさんがいかにも愉快そうなニマニマとした赤ら顔でこちらを見ていた。もう完全に酔っ払いと化している。

「その格好が板についてきたみたいね。よく似合ってるわよ？」

「うぐ」

ぐさり。頬を膨らませてモグモグと口を動かしながらマージョリーさんが心を抉つてくる。給仕服を着て料理をしていれば嫌でもそう見えるのだろうか、直に指摘されるとやはりつらいものがある。身体という入れ物が変わったことで、人格という中身まで変質してきているのかも知れない。心当たりは……片手では数えきれない。

「その件については、放っておいてください。そういえば、この服はヴィルヘルミナさんの服ですよ。なんでこれをマージョリーさんが？」

話を逸らす意図が半分、純粋に興味があったのが半分の質問を投げかける。

「ああ、それね。あいつ、ちびじやりに着てほしかつたみたいだけど恥ずかしくて渡せなからつてここに置いていったのよ。あの時は迷惑だと思つてたけど、ちょうどよかつたわね」

顔を赤くしてマージョリーさんに給仕服を押し付けるヴィルヘルミナさんの姿を想像しようとして、やつぱり失敗する。ヴィルヘルミナさんにもそういう可愛いところがあるのか。意外だ。すこぶる意外だ。

「ヴィルヘルミナはちびじやりの育ての親みたいなものらしいじゃない。あんた、その姿でその服着て、あいつに会つたら、たつぷり可愛がつて貰えるかもよ？」

たしかに可愛がつてもらえそう。主に拳を使つて、だが。よりによつて、シャナの恋の対象であるボクがシャナそっくりになつて現れて、しかもシャナに着て欲しかつた

お揃いの服を着ているとなれば、いくらヴィルヘルミナさんの鉄面皮と言えど大魔神の如く憤怒の顔に激変するだろう。想像するだけで震えだしそうになる。

「お、お断りです。って、聞いてないし」

酔っ払い特有のスルースキルを発揮して再びワイングラスを叩っていたマージョリーさんに「呑み過ぎないようにしてくださいね」と確実に無駄に終わりそうな注意をして、ボクは厨房へと戻った。

✦ ✦ ✦

カウンタートーテーブルの上を一頻り片付けた後、テーブルに突っ伏してイビキをあげながら寝ている三人にタオルケットを被せる。マージョリーさんの肩にタオルケットをかける、彼女の傍らに鎮座する丈夫な装丁の巨本——マルコシアスが代わりに礼を言う。

「すまねえな、白銀の嬢ちゃん」

「いいよ。これも恩返しだから。でも……よく呑んだね、ホントに」

飲み始めてから2時間は経っただろう。空のワインボトルの山を眺めてぼりぼりと頬を搔く。この三人の胃はどうなっているのだろうか。マルコシアスに一言断って、

テーブルにあったペンダントを首にかけて庭に出る。夏の夜独特の蒸し暑さと涼しさが入り混じった風にしぼし目を閉じて酔う。懐かしい、御崎市の夏の空気だ。地面を叩いて一息に屋根の上に飛び上がり、段差の部分に腰を下ろす。空を見上げれば、満天の星空と見事な満月が夜空を彩っている。それを膝を抱えてぼうつと眺める。屋根の上は風が少し強かったが、生地が厚い服のおかげで寒くはなかった。視界の隅に、風を受ける旗のように靡く艶やかな黒髪を認める。月明かりを滑らかに反射する長髪に、「蒸しタオルの話は本当だったんだ」とどうでもいいことを考えた。今の髪質だけなら、シヤナに勝っているかもしれない。

「坂井悠二。俺はこれからお前のことをなんと呼べばいい？」

声を発した微かにワインの香りをさせるペンダントを手に取り、掌に広げる。律儀に聞いてくれたティレシアスにボクは微笑む。

「サユ、でいいよ。今日からボクの名前はサユだ」

「わかった。我がフレイムヘイズ、サユ」

短く静かな応答。でも、ぎこちなさはない。この時間には、この時間の『坂井悠二』がいる。後からやってきたのはボクの方なのだから、名前くらい変えるべきだ。だけど、慣れ親しんだ自分の名前を捨てるのはやはり辛いものがある。ボクがボクでなくなってしまうような空虚感に苛まれ、膝の間に顔をうずめる。

(どうにかして、元の時間に戻れないだろうか)

ボクが消えて涙を流すシヤナを思い出して、どうしようもない切なさが込み上げてくる。シヤナともう一度会いたい。今なら胸を張って言える。ボクはシヤナのが好きだ。ずっと一緒にいたい。ずっと一緒に背を預け合って戦いたい。———だけど、もう遅い。ボクが恋をしたシヤナは、ここにはいない。悔恨と慙愧に歯噛みする。どうしてあの時、という後悔ばかりが胸を締め付ける。

「———戻れるとしたら、お前は どうする?」

不意に、契約の際と同じ台詞が手元から聞こえた。その質問の意味がわからずにはしばらく呆然とする。

「戻れる、って……まさか、元の時間に?」

ああ、という押し殺したような短い返答。停滞していた思考がだんだんと追いついてくる。戻れる。元の時間に戻れる。シヤナの元へ、帰ることができる。テイレシアスの言葉の意味を認識した途端、ざわと肌が粟立つ。胸のうちから湧き溢れてくる歓喜に総身がガクガクと震える。顔をあげ、テイレシアスをぎゅつと握り締める。

「どうすればいい? 教えてくれ、テイレシアス! どんなことだってボクはやってみせる

!

元の時間に戻るのなら、ボクはなんでもしよう。どんな苦勞も試練も厭わない。どんな犠牲も払ってみせる。フレイムヘイズとなったこの身は不老だ。やらなければならぬことにどれほど長い時間がかかろうとも、またシヤナの隣に立てるのなら幾十年、幾百年かかろうと構わない。

「……………」

「……………テイレシアス?」

期待に目を光らせるボクとは対照的に、テイレシアスはなぜか話すか否かと思案しているようだった。それほどに難しいことなのだろうか。数秒して、テイレシアスが重い口を開く。

「今日一日、お前の身体を調べ直していて、わかった。俺たちがこの時間に飛ばされたのは、十中八九『零時迷子』の影響だ。消えかけのお前の中に、極めて小さな『零時迷子』の断片が混ざっていたらしい。時の事象に干渉し、所有者の存在の力を完全回復させる永久機関である『零時迷子』なら、断片だけでも俺たちをタイムスリップさせることが可能だろう。こちらの世界に現界する際に時空をねじ曲げられたと考えれば、辻褄が合う。あれが破壊された時、お前はすぐ傍にいたんじゃないか?」

コクリと頷いて肯定する。たしかに、『零時迷子』はボクの目の前で壊された。あれが

シヤナの炎弾で破壊された様子を思い出す。スローモーションのような世界のなか、『零時迷子』が激情の炎に包まれ爆発する。そしてそのカケラが幾つか、消えかけのボクの身体に深々と突き刺さった。

「そうか、あの時の……!」

ボクの中に偶然混ざってしまった『零時迷子』のカケラの作用でこの時間に来てしまった、ということか。たしかに合点がいく説明だ。そして、原因がわかったなら、対処の仕方も自ずと導き出させる。要は、ボクの中にある『零時迷子』のカケラを利用して、元の時間に戻ればいいわけだ。来れたのだから、帰ることもできるはずだ。突如射してきた一縷の光明に引つ張られるように立ち上がり、自然に空を仰ぎ見る。天から蜘蛛の糸がするすると伸びてきている様子すら幻視できそうだった。

「ねえ、テイレシアス! ボクの中の零時迷子を使うにはどうすればいい!」

できるならば、今すぐにも取り掛かろう。希望に打ち震える肉体は、目的を達するための手段さえわかればすぐに実行できるほど熱を帯びていた。理性で抑えておかなければ今にも走り出してしまいそうだ。……だが、テイレシアスの様子はおかしかった。まるで余命間もない病人にその事実を伝えなければならぬ医者のような、陰鬱な雰囲気満ちている。とてつもなく嫌な予感がした。聞くな、聞いてはならないと直感が叫ぶ。だが、聞かなければ前には進めない。ボクは息を飲んで、テイレシアスに先を

続けるように視線で促す。

それが絶望の幕開けになるとは知らずに。

「お前の中に、すでに『零時迷子』はない」

「……え？」

「いかに奇跡の永久機関と言えど、それはあくまでも完全な状態での話だ。断片と化したの稼働は無理があったのだ。俺たちをこの時間に飛ばした際、『零時迷子』は全ての力を失って消失した。入浴中、お前の身体をくまなく走査したが、カケラ一つとも残っていない。元の時間に戻るには別の『零時迷子』を使用しなければならない。つまり——」

別の『零時迷子』……？次に来るであろう言葉を予感し、跳ね上がった心臓がドクドクと早鐘を打つ。言いようのない悪寒が肺もろとも胸を貫き、呼吸が凍りつく。問うてはならなかったのだ。聞くべきではなかったのだ。

「待ってくれ、テイレシアス。そんな、まさか、」

ガクガクと膝が震える。芽生えたばかりの希望を重い絶望が塗りつぶしていく。そこへさらに追い討ちをかけるように、テイレシアスが一切の感情を欠いた声で告げる。

それはあまりにも残酷で、あまりにも過酷な試練——

「この時間の坂井悠二を殺し、『零時迷子』を奪うしかない」

美しかった双眸から光が消える。精神が砕け散り、四肢から力が抜け、絶望に忘我して屋根に膝をつく。指から滑り落ちたペンダントが屋根に当たって小さな金属音を立てた。自分殺しをしなければ目的が達成されないと告げられたサユの、心が折れた瞬間だった。

‡ ‡ ‡

夏だというのに、空気が沈鬱に冷え切っているように感じる。凍えたように震える歯がガチガチと音を立て、内奥から鼓膜を叩く。なんて、皮肉。大切な人のところへ帰るために、その人から大切なものを奪わなければならないなんて。自分を殺さなければならないなんて——

(そんなこと、冗談じゃない！)

軋みを上げ始めた心を叱咤して、認められない、認めてはいけないことを真つ向から否定する。

「坂井悠二を殺したら、未来の坂井悠二であるボクも消える！このまま坂井悠二がボク

と同じ末路を辿るまで待てば、結果的に元の時間に戻り、シヤナと会えるはずだ！」

「違うな。今日の戦闘も、『白銀の討ち手』の存在も、お前の記憶にはないはずだ。この時間は俺たちが元々存在していた時間とは繋がらない、枝分かれした別の時間——平行世界に属する過去の過去なのだ。だから、この時間の坂井悠二を殺しても、お前に影響は出ない。異なる時間軸に属する坂井悠二がお前と同じ末路を辿るといふ保証も、ない」

「……ッ」

ボクの言葉は呆気なく呑まれた。なんとか反論しようと齒噛みして思考を巡らせるが、導き出される答えはテイレシアスのものとまったく同じだった。とりとめなく渦巻く頭の冷静な部分が、テイレシアスの話を肯定する。反駁しかけた口が無為に閉じられ、形にならず体内に閉じ込められた動揺が汗となって全身から噴き出す。人工音声のような抑揚のないテイレシアスの声が頭の中で繰り返され、冷たい霜のように軋む心に染み通ってくる。

『この時間の坂井悠二を殺しても、お前に影響は出ない』

それはできない、やってはならないと理性が訴える。この時間の坂井悠二にも生きる権利がある。何かを護るために戦い、共に歩みたい誰かを選び、その人と生きる権利がある。自分の目的のために他でもない坂井悠二がそれを奪っていいはずがない。そん

な権利は存在しない。そう必死に心に叫び、言葉の鎖で縛り付けるように自分に言い聞かせる。

だというのに、胸に沸き起るのはシャナの笑顔だけだった。数年にわたりシャナと築き上げてきた記憶が、大切な思い出の数々が、胸のうちを瞬く間に埋め尽くしていく。

——今のボクお前なら、シャナを退けて坂井悠二から零時迷子を奪うことができる。

(な、)

いつのまにかシャナを倒すための戦術を考え始めようとしていた自分に、他でもない自分自身が怯えた。自分の冷静さが信じられなかった。たしかに迷い、心は涙を流して葛藤しているのに、一切斟酌することなくそれとまったく同時進行で『いかに戦うか、いかに殺すか』を思考し始めている。感情がどんなに拒否しようと、別のドライブが目的を達しようとするシステムを稼働させ続ける。誰かが勝手にボクというコンピュータを操作しているように、頭の中で戦闘のシミュレーションが開始され、試行錯誤が繰り返されていく。やめろ、止まれと念じても、シミュレーションは止まらない。大切な人を確実に行動不能にする算段は、着々と、滞りなく、完成度を高められていく。『シャナならどう動く』。『シャナならどう反応する』。彼女を知り尽くしたボクだからこそ算段でき

る対策が数限りなく列挙され、彼女を苦しめる作戦が幾筋にも枝分かれして洗練されていく。数え切れないほど繰り返されたシミュレーションで、ついにこの手に握る銃が高速で飛翔するシャナを捉える。冷酷に細められた視界のなか、速やかに引き金を引き、放たれた銃弾が彼女の細い四肢を穿ち、鮮血を散らせる――

「はは、は、あはははははは……」

ひどく乾いた、空虚な嘲笑が漏れる。それが何に對しての嘲りなのかは自分でもわからなかった。顔の表皮に罅割れたような笑みを貼りつけ、己の有り様をただ嘲笑う。ボクは、なんなんだ？ シャナを想いながら、シャナを傷つけて坂井悠二を殺そうと考えているボクは、いつたいなんなんだ？ ボクはいつから、こんな冷酷な人間になったんだ？ いや、元からそうだったのか？

底抜けに虚ろな喪失感に押し潰されそうになる。これは何を失った喪失感なのだろうかとしばらく自問した末、ああ、そうかと理解する。きつと、感情だ。悲しいとか、そういう人間として大事な感情をボクはなくしてしまったんだ。ぷつぷつと、何かが吹っ切れてしまった気がした。汗も、気づかぬうちに溢れ出していた涙も、ピタリと止まっていた。

「……これからどうする？ 我がフレイムヘイズ」

黙然としていたテイレスシアスが相変わらずの低い声で問う。その声音には後悔の色

が混じっていた。酒を呑んでいたのは、悩み苦しむ契約者に無情な選択肢を与える勇気を得るためだったのだと、今さらになつて気付いた。足元に落ちているペンダントを枯れきった眼差しで一瞥する。枯れた笑みはすでに霧散し、後には乾いた涙の筋を見せる無表情が残るのみ。

「……ああ、そうだね」

気づけば、夜空の星は黎明の青灰色に掻き消され始めていた。それは美しい景色のはずなのに、ボクの目にはただの自然現象にしか映らなかつた。周囲の世界から自分が遠のいていく感覚。視界に映るもの全てが、虚しい。

心はこんなに重いはずなのに——しかし、身体は驚くほど軽い。

さあ、零時迷子を手に入れる。

すぐ耳元で、あの声があった。戦いの最中に——そして、悪夢の中に出てきた黒い坂井悠二の吹き荒ぶ風鳴りのような声が、意識の空白に強く響く。

己が為したいことを、為せ。その力が、今のお前にはある。

その声が持っていた違和感——広い空洞を渡るような距離を感じる響きはなくなり、耳元にまで迫った気配が蛇のようにじわじわと絡みつき、締め付ける。肩口から息を吹きかけるような至近から、全てを見透かす暗黒の気配が怪しく囁く。

お前の望みを、叶えろ。お前だからこそその望みを。それこそ、余の望み——

「ボクの、望みは——」

† † †

「ん、ぬああ〜」

窓から差し込んできた眩い朝日に、田中栄太がだらしのない呻き声を上げながら目を醒ました。その気配につられたのか、隣で寝ていた佐藤栄太とマージヨリーも苦しげに呻きながらゆつくりと上体を起こし始める。肩に暖かい布を感じる。いつのまにか、全員の背にはタオルケットがかけられていた。靄がかかったようにはつきりしない頭で状況を把握しようとして、途端に万力で締め付けられるような二日酔いの激痛に襲われて顔を顰める。栄太も同じように顔を歪めて額を抑えている。しかし、マージヨリーだけ

は、あふと健やかな欠伸を漏らして背伸びをしていた。

「いつも思うんすけど、姐さん、あんなに飲んでよく平気っスね」

ズキズキと刺すような痛みには堪える二人にマージョリーは「鍛え方が違うのよ」と平然と言い放つ。実はマルコシアスに清めの炎で体内のアルコールを消して貰っていたのだが、体面を保つために二人には黙っている。

「見栄っ張りな女はモテないぜ——ひでぶツ！」

「うるさいのよ、バカマルコ。……あら？」

ふと周りを見渡し、この場に一人足りないことに気づいた。

「サユは？」

「ったく……。嬢ちゃんなら、夜中に出てったぜ。そこの手紙を残してな」

マルコシアスの即答。紅世の王である彼は人間である契約者と違い、睡眠による休息を必要としない。驚く少年二人をよそに、こうなることをある程度予想していたマージョリーは落ち着いてテーブルに置かれた手紙を手を取った。あの坂井悠二のことだ。これ以上迷惑は掛けられないとこっそりと立ち去ったのだらう。

「やけに吹っ切れたような感じだったな。ちっとばかり奇妙なくらいに」

「ふうん。何か思いついたのかしらね」

手紙の内容は、いかにもマージョリーの知る坂井悠二らしい内容だった。戦闘でマー

ジョリーが悠二を何度も助けたこと、倒れた悠二を運んだこと、荒唐無稽とも言える話を信じたこと、世話を焼き、名前を与えたこと。それらに対する感謝の言葉がこれでもかというほど並べられていた。佐藤啓作への一宿一飯の恩や、恥を忍んで下着を買ってきた田中栄太への感謝の言葉も忘れられていない。おまけに、「お酒の呑みすぎはやめた方がいいと思います。未成年に呑ませるのも控えた方がなおいと思います」という生意気な忠告まで添えられていて、マージョリーは思わず噴き出してしまった。外見はどんなに変わっても中身は変わらないな、と。

だが、文章の最後に何の脈絡もなく綴られていた短い言葉を目にとると、マージョリーは途端に眉を顰めた。

たった6文字のその言葉に冷淡で虚ろな様子が感じられ、しかしその正体に皆目見当がつかずに無性に不安を煽られる。

「姐さん、どうかしたんですか?」

「あの、サユちゃんが何か……?」

二人が不思議そうに問うが、マージョリーの耳には入らなかつた。何の推察も根拠もない。だが、長い年月を掛けて練磨された第六感が言い知れぬ不安に怯え、叫んでいた。何かが起きる、と。

その手紙の最後に記されていた言葉は、

『ごめんなさい』

3—1 亡者

肌に粘つくくまとわりつく夏独特の大気が、御崎市全体を満たしていた。熱線のように照りつける日差しはじりじりと影の角度を変え、時刻は午前から午後へと変わろうとしている。

「きゃっ!?!」

そんななか、公園で日課の飼い犬の散歩をしていた吉田一美は、突如重く響き渡った破砕音に驚いて身を竦めた。慌てて音の根源に視線を転じれば、炎天下だというのに真つ黒な外套を羽織った給仕服姿の少女が、白銀の棒をアスファルトに突き立てていた。不可解な紋様の刻み込まれたそれは、ほんの一週間ほど前にカムシン——フレイムヘイズ「儀装の駆り手」が、この世の歪みを調整・修復する『調律』の際に使用した宝具『メケスト』に酷似していた。肉付きの薄い少女が、その華奢な腕では到底持ち上げられそうにない長大な棒を片腕だけで軽々と引き抜く。地面に穿たれた深い穴に一瞥を向けた後、周囲の奇異の目も気にせずに緩慢な動作で踵を返す。

その可憐な横顔に、一美は見覚えがあった。見紛う事なき、尊敬する人間でもあり、恋の仇敵でもあるクラスメイト、シヤナだった。かつて校舎裏で「あなたには絶対に負け

ない」と宣言したことを思い出す。さらについ先日、恋する少年に告白し、完全に対等な関係——ライバルになったことを思い出す。

(ここで逃げたら、ダメ)

意地の炎が燃え上がるのを感じる。燃烧するそれをそのままエネルギーに変えて腹底に気合を込めると、一美は挨拶でも交そうと一步踏み出し、

「シヤナちゃ——」

そして、異変に気づいた。

一言で言えば、亡者であった。

成長すれば絶世の美女となることを約束された幼くも凛々しい容姿は、紛れもなく一美の記憶どおりの少女だ。しかし、その瞳が、まるで別人のものだった。枯れきり、陰鬱に凍りついた瞳は死人のそれを連想させ、一美の歩を強制的に止めさせた。少女が纏う底冷えするような冷気に、全身の熱が瞬時に吹き消された。一美に忠実な大型犬の飼犬でさえも、怯えて身を縮こまらせている。

(違う。アレはシヤナちゃんじゃない)

途端に背筋を走った緊張に息を飲みながらも、喉元までこみ上げた得体の知れない恐怖を押し戻し、正体を探ろうと少女を必死に凝視する。カムシンと出会い、微力ながら

も戦いに参加し、想い人への気持ちを確認たるものにしたことで、一美の精神力は以前の何倍にも強くなっていた。

視線に気づいたのか、少女の双眸がぐりとこちらへ向けられる。そのたった一瞬の一瞥は、一美には永遠に感じられた。

(なんて、悲しい瞳)

奈落のように昏い眼球は何も映してはおらず、光すら飲み込んでしまいそうな闇色に染まりきっていた。その瞳に感情の機微が過ぎたように見えたのは、果たして一美の気のせいであったのか。一對の洞穴にほんの一刹那だけ宿った優しい光は、まるであの男の子のようで――

「あつ!?ま、待って!」

瞬き一つにも満たない一瞬だけ視線を交わし、少女は一美から逃げるように去っていく。幽鬼のような少女の奇行を咎められる者は誰一人としておらず、一美がはつとして少女を追いかけた時にはその小さな姿は人ごみの中へと消えていた。

(今のは、いったい)

あまりに突飛な光景を目の当たりにして、一美は混乱の極みに陥っていた。果たして今の出来事が幻覚だったのか、それすら判別がつかない。どうしようもない胸騒ぎに総身を凍えさせられ、一美はただただ呆然とその場に立ち尽くすしかなかった。だから、

彼女の足元に穿たれた穴が小さな紫電を発しても、気付けなかった。

† † †

「悠二、これお前にやるよ」

田中がなにやら大きな皮製の袋を渡してくる。長さは一メートルほどで、幅は30センチ程度。厚さはそれほどなく、扁平な形をしている。

「なんだよ、これ——うわっ!」

長大なそれは持つとかなり重く、思わずひっくり返って尻餅をつきそうになるのを脚に力を入れてなんとか堪えた。厚い布で何重にも包み込んでいるようだが、手触りでそれが大剣であるとわかる。持ち手は片手ほどの短さしかなく、バーベルを持っているかのような錯覚をさせる重量はおよそ人間用ではない。

「これ、『吸血鬼』じゃないか」

『ブルートザオガー』とは、かつて御崎市を襲った紅世の王の一人、*“愛染自”* ソラトが所持していた剣型の宝具だ。存在の力を込めれば、この剣に触れている相手に多大なダメージを与えることができるという接近戦において並外れた特性を持つ。ソラトを倒した後は、田中と佐藤が訓練に使っていたはずだ。昼過ぎに二人に呼び出されて何事

かと佐藤の家まで出向くと、豪勢な佐藤家の門前で待つていた田中と佐藤に突然『ブルートザオガー』を渡されたので、僕は戸惑いを隠さずに二人を交互に見る。

「やっぱり、俺たちじゃこれを使うのは無理だ。存在の力つてのも全然使えないし、これはお前かシヤナちゃんを使うべきだと思つてさ」

「姉さんに頼み込んで訓練に使わせてもらつてたけど、さすがの俺も振るうだけで精一杯だしさ。武器として使うのは、諦める」

と、それぞれ後ろ頭と頬をボリボリと搔きながら苦笑する佐藤と田中。一見照れ笑いのように見える表情には、剣を扱うことが出来なかつた無念と恥が見え隠れしている。佐藤は、かつて大いに荒れていた時期があり、派手なケンカも何度となく経験し、常に相手を屈服させてきた。一見ヤサ男のような細身ながら、腕っ節の強さは同年代でも上位に位置する。田中もまた、ドッジボールでシヤナと渡り合えるほどの筋力と俊敏さを兼ね備えた、誰もが認める天才スポーツマンだ。今まで積み上げてきた体力と経験がまったく通用しない事態は、二人にとつては悔しいことこの上ないのだろう。だからこそ、その事実を潔く認めて、この剣を満足に扱うことができる人物に譲るといふ合理的な行動を実行できた二人が、僕には眩しく見えた。

（とは言え、僕もこれを使えるかと言われればまったく自信はないんだけど）

この剣はそもそも人間が振るうことを想定して造られていないし、特性を発揮するに

は存在の力を流しこむ必要がある。シヤナとの訓練で、存在の力を操る練習もしているが、成果といえればシヤナの呆れ顔のバリエーションが増えたくらいだ。持ち上げただけで全身の骨を軋ませるこの重量も克服しなければならぬ。

条件の不利具合で言えば、僕の置かれているそれも二人と大して変わらない。

(まあ、これからじっくり鍛えていこう)

だというのに、僕の心には余裕があつた。毎朝、毎晩と行われるキツイ鍛錬の繰り返しは、確実に自分の力を高めている。シヤナには遙か遠く及ばないとはいえ、実戦で鍛えられたシヤナの指導によつて筋力や反射神経や剣術の腕も、緩やかだが上達の一步を辿っている……と思いたい。これを続けていけば、いつかはブルートザオガーも扱えるようになるだろう。心の何処かで「それは油断ではないのか」と叱咤する声が聞こえたが、杞憂だと切り捨てられた。事実、「愛染他」「テイリエル」と「愛染自」「ソラト」を撃破し、ついこの間は「探耽求究」「ダンタリオン」の野望を看破し、打ち砕き、追い払った。そして昨日も、襲つてきた紅世の王をシヤナと協力してもの数十分で見事に撃破してみせた。

(シヤナといれば、何も恐れることはない。そう、シヤナといれば)

数々の勝利の経験に裏打ちされた余裕は、未だ尾を引いて僕の心にこびりつくように滞留していた。大事なことを見落としている、という直感に似た蟠りを残して。

「当分は僕も使えないと思うけど……。でも、もらっておくよ。ありがとう、二人とも」
何はともあれ、手元に強力な武器が増えるのはいいことだ。二人の想いも一緒に貰い受けたのだと思うと、剣の重みがさらに増した気がした。不快ではない、力強い重みだ。
「……………」

はたと、僕の顔を見る二人が眼を丸くしていることに気づいた。何かついているのだろうか？

「な、なんだよ？」

「あ、いや、なんかサユちゃんに似てるなって思ってたさ」

「俺も同じことを思ってた。顔は全然似てないけど、どこか似てるんだよな」

初めて聞く名前に、僕ははてと首を傾げる。

「サユって、誰のこと？」

「悠二は会ったことないのか？この街に来た新しいフレイルムヘイズの女の子だよ。シャナちゃんそっくりなんだ」

「えっ!？」

まるで初耳だった。そういうえば、昨日の襲撃の後、アラストールが何かを察知したような様子を見せていたが、それと何か関係があるのだろうか？それにしても、シャナにそっくりというのは驚きだ。フレイルムヘイズとして育てられたが故の特殊な人格はと

もかく、容姿だけならシヤナは超をつけても足りないほどの美少女だ。気高い精神そのものが形を持ったかのような整った精悍な顔立ち、流れるように流麗で靱やかな体軀は、並大抵のアイドルなど鎧袖一触してしまふ。それほどの美少女が同じ御崎市にもう一人存在するなど、奇跡としか言いようがない。

「その、シヤナにそっくりなフレイムヘイズの女の子、まだ御崎市にいるの?」

「いや、もう立ち去ったみたいだぜ。控えめで大人しいし、料理も上手いし、姐さんも気に入ってたみたいだし、すっげえ良い娘だったんだけどなあ」

田中が心底残念そうに肩を落とす。その肩に手を乗せながら、

「また食べたかったよな、サユちゃんのチーズ肉巻き。くそ、思い出したら腹減ってきた」

と、名残惜しそうに中空に遠い目を向ける佐藤。先ほどまでの取り繕ったような表情はどこへやら、その口端からはだらしなく涎が落ちそうになっている。とりあえず美をつけてもいい美顔が台無しだ。逆を言えば、それくらい美味しい料理だったのだろう。チーズ肉巻きというと、カマンベールチーズを肉で巻いて焼いた簡単な料理のことだろうか。まだ父さんが海外へ単身赴任する前に、家族で行ったキャンプでチーズ巻肉と蒸かし芋の夕食を一緒に作ったことがある。作り方はとても簡単なので、「それなら僕も作れるけど」と言おうと思つたが、十中八九、「男の手料理なんざ誰が食うか」と拒否さ

れるので口に出さず飲み込んでおいた。

（二人の話を聞く限り、性格はシヤナと全然違うみたいだな。一先ず、安心だ。シヤナみたいないなメチャクチャな女の子が増えたりなんかしたら——）

「——ふっ！」

「えっ、うおわああつ?!」

心中でそう独りごちていると、出し抜けに背中に密着感と鋭い呼気を感じて反射的に振り返る——が、時すでに遅し。視界の隅に艶やかな黒髪が舞ったことを視認した次の瞬間には、僕の身体は鮮やかな二撃を浴びて宙で一回転していた。流れる視界に映り込んだのは予想通りの人物だったので、いきなりの攻撃に少し混乱しながらも落ち着いて受身を取る。背中が地面に叩きつけられる寸前で顎を胸に押し付けながら両手を振り下ろし、地面を叩いた反作用で衝撃を殺す。剣山を掌で思い切り叩いたような激痛と鈍い衝撃が神経をびりびりと引き攣らせる。

「いっつっつ……い、いきなりぶん殴るなんてひどいじゃないか、シヤナ」

噂をすればなんとやら。痛みに顔を蹙めながら見上げると、そこには小振りな唇をへの字に曲げたシヤナが憮然とした表情で突っ立っていた。その後ろには、昨夜この街に到着した、シヤナの古い知り合いというヴィルヘルミナさんの姿もある。フリルのような装飾など見られない濃紺一色の丈長ワンピース、シミ一つない純白のヘッドドレスと

エプロン、清楚な編み上げの長靴。それらを『メイド服』と呼ぶには、メイドに関してぶっ飛んだイメージが定着してしまった日本では質素すぎた。しかし、ヴィルヘルミナさんが身に纏えば、まるで由緒正しい貴族の家令のように気品に満ち溢れて見える。つまり、そのくらい美人なのだ。さながら女性の化身といった風貌はどうしたってひと目に立つ。メイド服を着ていればなおさらだ。もちろんのこと、彼女もフレイムヘイズであり、“万条の仕手”という二つ名で紅世の徒や王たちに怖れられている指折りの猛者なのだという。

「ど、どうも……」

「……………」

黙っていても周囲を圧倒する強者の風格に気圧されるように会釈するが、返ってくるのは刺すような視線のみ。僕のが気に食わないという意味がわからさまに感じられる。

（昨日の会議で、何かあったのかな）

昨夜、突如来訪したヴィルヘルミナさんに僕が追い払われた後、シヤナとヴィルヘルミナさん、そしてアラストールとティアマトーによるフレイムヘイズ同士の会議が行われた。その中で何が話し合われたのかは見当もつかないが、立ち去る前の雰囲気から、シヤナがヴィルヘルミナさんに強く物を言えないということは察することが出来た。

また、シヤナがヴィルヘルミナさんに向ける表情が家族に向けるそれに似ていることから、彼女がシヤナと強い信頼で結ばれていることもわかった。

（親子のようなものなのかもな。だとすると、ヴィルヘルミナさんにとって僕は「娘についた悪い虫」ってことになるのか!?!）

このままだと「未熟者はこの娘に近づくな」と言われかねないので、痛みを押しして急いで立ち上がり、威儀を正す。

「悠二が嫌なことを考えていそうな気がしたから。それに、今のは打撃じゃなくて？法（しゅつぽう）よ。いい加減、この程度の套路（とうろ）くらい受け流せるようになりなさい」

「うぐっ」

『考えていそうな気がした』という理由で攻撃してくるなんて理不尽だ。……まあ、事実なんだけど。ちなみに『法』というのは、八極拳における投げ技の呼び名らしい。柔道のように相手を華麗に投げ飛ばすのではなく、素早く突き倒すような攻撃だ。先ほど背後に感じた密着感と呼気は、相手の身体に肩と上腕を密着させて攻撃を打ち込む八極拳独特の構えだったようだ。一撃目に背中に強烈な掌底を喰らい、浮き上がったところで瞬時に二撃目の？法で投げられたのだ（こうして二つ以上の技を繋いだ連撃を『套路（とうろ）』という）。シヤナは中国拳法にも精通しているので、たまに剣術以外の鍛錬として体術も教えてくれる（ちなみに、シヤナに体術を教え込んだのもヴィルヘルミナさんらし

い)。しかし、格闘技の経験などほとんどない僕は、攻撃を受けた後にようやく自分が何をされたのか理解できる程度のレベルなのだ。況や、受け流すなどという高度な芸当など到底出来るはずもない。

(まだまだ、精進が必要だなあ)

シヤナの足手纏いにならないように努力は続けているつもりだが、先はまだまだ長いようだ。唐突なタイミングでその事実を突きつけられて肩を落としていると、

「ヴィルヘルミナの前なんだから、悠二ももう少し良い格好見せてくれてもいいのに……」

針先のように小さな声で、シヤナが何事か呟いた。小さすぎてよく聞き取れなかったが、僕の名前を言ったらしい。

「何か言った、シヤナ?」

「——ツ!? な、なんでもない! バカ悠二!!」

「な、なんでそうなるんだよ!？」

「うるさいうるさいうるさい! 悠二が弱すぎるのがいけないのよ!」

「うぐぐぐ」

怒り心頭なのか、顔を真っ赤にして言下に吠えるシヤナの形相に思わずたじろぐ。それを言われては反論どころかぐうの音も出ない。僕はシヤナをここまで怒らせてしま

うような醜態を晒してしまったのだろうか。いや、考えようによつては僕はシャナの弟子のようなものだし、よりによつてシャナの恩師の前で孫弟子の僕がシャナの顔を潰すような情けない姿を晒したことに憤慨しているのかもしれない。ちらりとヴィルヘルミナさんの様子を覗えば、感情のなかつた硬質の目に怒りの色がメラメラと浮かんでるのが見て取れた。

(や、やつぱり僕が未熟だから怒つてるのかな)

ちりちりと肌を刺す除を含んだ視線に全身から汗が噴き出す。ふと、その視線の中に面白くないものが二人分混じつた。

「……なにがおかしいんだよ」

こちらをニヤケ顔で見物していた佐藤と田中をじろつと睨むと、二人は慌てて逃げ出す。

「俺たちは玻璃壇のどこに行くから！じやあな！」

「さよなら、シャナちゃん、ヴィルヘルミナさん！」

そう言い残すと二人は足早に路地角へと消えた。さすが鍛えてるだけあつて速い。最近、マージョリーさんに『玻璃壇』——「狩人」フリアグネが遺した、御崎市全体をリアルタイムで監視できるミニチュアシティのような巨大観測宝具——の詳細な使い方を教わっているらしい。戦闘や異常事態が発生した場合はそれを使い、現場に

いるマージョリーさんを間接的にサポートする役割を担うのだそうだ。

（直接戦いに参加できなくても、他の方法で役立とうとしてる。僕も負けられないな）
「ねえ、悠二。それはなに？」

シヤナが、肩に背負ったブルートザオガーの皮袋を顎で指す。見れば、シヤナの両手には洗剤などの日用消耗品が詰まった袋がぶら下がっていた。どうやら買物物の帰りだったようだ。

（一、この状態でさっきの套路をやったのか）

逆を言えば、両手が塞がった状態でも簡単に吹っ飛ばせるのが今の僕の実力ということだ。再度突きつけられた決定的な実力差に内心で歯噛みしつつ、これ以上醜態を晒さないように、大剣をさも軽々しく扱っているかのように平然を装って答える。

『ブルートザオガー』だよ。二人から譲って貰ったんだ。僕も、早くこれを使えるようになって、シヤナとずっと一緒に戦えるくらい強くないとね」

「……ふええっ!？」

「……!!」

後半は決意が半分と見栄が半分だったが、言った途端にシヤナの頭がボンツ!と爆発した———ように見えたので思わずビクリと後ずさる。同時に、今までピクリとも動かなかったヴィルヘルミナさんの眉根にビクリと稲妻のように皺が走り、剣呑なオーラが

殺気のレベルにまで一気に跳ね上がる。

(え、なんだこの反応!?ま、マズイこと言っちゃったか!)

小さな声で「馬鹿者め」と呆れたように呟かれたアラストールの声が聞こえた気がした。

「ゆ、悠二のくせに大口叩きすぎ!私と共闘なんて、百年早い!!」

頬を紅潮させたシャナにぶいっとそっぽを向かれてしまう。たしかに、未だ存在の力すら使いこなせていないのに、シャナと刃を揃えるなんて大言壮語に過ぎる。これは怒られても仕方がない。……殺気を向けられるほどではないと思うけど。

「ご、ごめん、シャナ。……ところで、ヴィルヘルミナさんの後ろにあるそれはいつたい……?」

ヴィルヘルミナさんの背後に鎮座している小山のような背囊バックを指差す。高山登頂用らしき丈夫そうな厚手の背囊は明らかに許容量をオーバーして膨らんで、今にも音を立ててはち切れそうだ。時折通りすぎる通行人も、拷問のように酷使される背囊とメイド服の西洋美人の不思議なコラボに奇異の目を向けている。しかし、シャナは「ああ、これ?」とんでもないかのように流し目で一瞥するだけで済ませた。その仕草はそれがシャナにとって見慣れた光景なのだということを物語る。

「ヴィルヘルミナも私と一緒に住むことになったの。だから、二人分の生活必需品を買

い揃えておくことにしたのよ」

「だからっていつぺんに買い込まなくても……」

フレームヘイズとは言え、この巨大な背囊はさすがに一人では持てないのではないだろうか。ヴィルヘルミナさんのシルエットを完全に隠すほどに膨らんだ背囊は彼女の体重の優に3倍はありそうだ。僕が不安げに見るなか、ふんと鼻を鳴らしたヴィルヘルミナさんが慣れた動作で背囊を背に担ぐと、まるで重さなど感じていないかのようひよいと立ち上がってスタスタと進み出す。バレリーナのようなしなやかな動きだが、いかにも「こんなの重くなんてありませんよ」と言うような背中がなんだか僕への当て付けのような気もする。いやいや、それは自意識過剰だろう。ヴィルヘルミナさんの歩みに合わせて背囊からガチャガチャと騒々しい音が耳朶を叩く。彼女の後ろ姿を一般人が見たなら、巨大なりユックサックに足が生えていると錯視するに違いない。

「ミステス風情が、フレームヘイズを舐めるものではないであります」

「心配無用」

呆気にとられる僕に、刺すら感じる硬い声質の女の声が二人分投げかけられる。もう一人の声は、純白のヘッドドレスから発せられていた。ヘッドドレス——神器『ペルソナ』に意思を表出させる紅世の王、『夢幻の冠帯』ティアマトーはいつも短い台詞しか口にしないらしい。二人とも寡黙なのに、これでよく意思疎通が成立するなどと感心して

しまう。足の生えた背囊のお化けと並んでメロンパンを齧りながら去っていくシャナが、不意にこちらを振り返り、不機嫌そうな目に睨んでくる。

「悠二、なにしてるの」

「へ？」

「悠二も手伝うに決まってるでしょ。ついでに掃除も済ませるんだから」

「まさか、フレイムヘイズ二人に働かせて自分は一人でのんびりと過ごすつもりであつたわけではあるまいな？」

咎めるようなアラストールのドスの効いた声に凶星を突かれ、思わず息を飲んで押し黙る。言外に、「昨日の襲撃を忘れたのか」という叱責を感じとったからだ。昨日の、燐子の大群を引き連れた紅世の王による襲撃は、明らかに僕とシャナが離れたタイミングを狙つてのものだった。僕の零時迷子のミステスとしての鋭敏な感知能力によつて気配をすぐに察知し、連絡用の付箋（マージョリーさんから譲つてもらつた、自在式を用いて作られた一種の無線機）によつてシャナに伝えることで即座の反撃・討滅に成功した。

（今は敵の気配は感じないけど、きっとそういうことじゃないんだろうな）

敵の気配がないことはアラストールもわかっているだろう。カムシンが調律を行つたことで御崎市内のトーチはほぼゼロとなったため、徒や王が人食いを隠蔽するために

トーチを作ればすぐに露呈して、討滅される。そも、シヤナとマージョリーさんに加え、ヴィルヘルミナさんという強力なフレイルムヘイズたちが待ち受けるこの街にノコノコとやってくる敵がいるとは思えない。要するに、アラストールは「差し迫った脅威はないが、用心を怠るべきではない」と忠告してくれているのだ。

(……でも、僕がシヤナの家に上がりこんでも大丈夫なのか?)

間違つて下着が仕舞つてある棚を開けてしまつてシヤナに袋叩きにされる、なんて展開が待つていそうで激しく不安だ。それだけでなく、ヴィルヘルミナさんからの風当たりが強くなつていく一方だと言うのに。

「悠二、早くして」

「わ、わかつたよ。今行く」

このまま迷つていても仕方がない。名誉挽回の機会を貰ったんだとポジティブに考えよう。『ブルートザオガー』の袋を担ぎ直すとシヤナの後を追おうと足を踏み出し、

「——え？」

視界の隅に映る違和感に、歩みを止めた。

両脇を高い堀に挟まれた狭小な暗闇に、その影は佇立していた。

——そう、まさに影としか形容できない風体だった。

外套を頭からかぶったような異様な風体は浮浪者のようであったが、それが総身にまわりつかせる闇はこの世のものとは思えない負の波動を感じさせた。背丈はシャナとちよūdō同じくらいだが、凜と強い輝きを放つシャナとはまるで正反対の空気を孕んでいる。何者なのかと眼を細めて凝視するが、見れば見るほどにその影は細部がぼやけ、ますます不鮮明になっていく。いくら眼を凝らしてもその容姿は正確に捉えられない。輪郭はぼやけ、霞み、時には二重にも三重にもぶれて見える。普段なら何キ口も離れた敵の気配すら生々しく察知できる『零時迷子』由来の鋭敏な感覚も、今は目の前で霞を必死に掴もうとしているかのような錯覚に目眩すら覚える。

だが、その眼だけは——外套の隙間からこちらを見据える暗黒の双眸だけは、爛々と不気味に燃えていた。

人が人を見たとは思えない、禍々しい意思を漲らせる二つの眼球。それに睨まれていくだけで、喉元に刃を当てられているような怖気と危機感が去来する。あらためてその異様さを痛感し、悠二は息を飲んだ。

(「いつは違う」)

経験ではなく直感で悟る。そこにいるのが、人間ではないということ。しかし、影

からは紅世の住人の気配も、フレイムヘイズの気配も感じられなかった。もしそうであれば、すぐそこにいるシヤナたちが黙っていないはずだ。これは悪い幻覚なのではないか、と目頭をぎゅつとつまんでからもう一度影を見ると、

「あ、あれ？」

影は、最初から存在していなかったかのように、忽然と姿を消していた。

「そんな、たしかに……」

影の正体を確かめようと暗がりを覗こうとして、

「悠二ィー！」

「え——あだアツ!？」

甲高い怒鳴り声と共に飛んできたヤカンが頭にあたって跳ねた。くわんくわんと頭蓋の中で反響音が鳴り響き、三半規管がしつちやかめつちやかになつて情けなくその場に倒れこむ。再び地面に這い蹲りながら、もう一度暗がりに目をやる。そこは、何の変哲もない薄暗く狭い、ただの路地だった。あれほど感じていた張り詰めた冷たい空気は跡形もなく霧散し、周囲には重く暑い夏の大気が満ちている。いや、そんなものは最初からなかったのか。

(気のせい、だよな)

どうやら、本当に幻覚だったようだ。天井の染みを長時間見ていたら顔の形に見えてくるようなものだろうか。だとしたら、そんなものにビクビクしていた自分は物凄く恥ずかしい奴なのでは……。

「なにしてるの、置いてくわよー！」

まだ耳鳴りが収まらない頭を抑えて立ち上がると、シヤナが今度は鍋を投げようと振りかぶっていた。しかも土鍋だ。そんなものを投げられては、今度はコブどころではすまない。

「行くよ、行くってばー！」

慌てて転がっていたヤカンとブルートザオガーを拾って走る。異様な影の存在は、すぐに頭から忘れ去られた。

† † †

悠二たちが立ち去ったのを見計らったかのように、突如裏路地の暗闇が揺らぐ。闇が表面を波立たせたかと思うと、しゅるりと布の擦れる音と共に翻った。そこから、じわりと滲み出るように、少女が現れる。給仕服メイドを着込んだ年端も行かぬ少女は、しばし悠

二たちが立ち去った方向を何の感情も見出せない表情で見つめていたが、すぐに眼を逸らして白銀の棒をアスファルトに突きたてた。長大なそれは、一美が公園で目撃した宝具『メケスト』の忠実な贗作だ。そして、少女が身を隠していた外套は、紅世の徒、号呀、ビフロンスの持つ隠密用の宝具『タルンカツペ』であった。その紅世の徒は、やがてシヤナと坂井悠二が対決することとなる敵であったが、もちろんこの時間の坂井悠二はそんなことは知る由もない。知っているのは、少女だけだ。ゴリツと鈍い音と共にメケストが引き抜かれる。アスファルトに穿たれた深い穴に、微かな紫電が走る。機能し始めた証拠だ。

「まだ、足りない」

少女が掠れた暗い声で呟く。目的を確実に達成する算段は、着々と滞りなく実行されていた。仕上げももうすぐ完了するだろう。後は、時間を待つのみだ。ずるずると身体を引きずるように、少女は再び暗闇へと戻っていく。再び布の擦れる音。次の瞬間には、少女の姿は闇に溶け完全にその姿を消していた。

† † †

「姐さん、これってなんですかね？」

マージョリーから玻璃壇の使用方法を教わっていた佐藤啓作は、ふと今までそこに存在しなかったはずの光が点滅していることに気づいた。マージョリーが「あん？」とさも面倒くさそうに眉を顰めながらその光点を一瞥する。御崎市の全景をミニチュアのようにして投影する監視用の宝具『玻璃壇』。その玻璃壇に映る中央公園の辺りで、目を凝らさなければ見過ごしてしまいそうな小さな光が点滅していた。

「ああ、カムシンの『調律』の跡でしょ。『探耽求究』がいじつて台無しにしちゃったやつが残骸がいくつか残ってるのよ。気にしなくても、すぐに消えるわ」

「でも、これついさっきまでなかったんですよ。変ですよね？」

そう言われるとたしかにそうである。歪められた現世の姿を正しく修正するために、カムシンによつて地脈に手が加えられて作られた自在式は、ほとんどがすでに自然消滅している。それが再び勝手に活性化するなどありえない。誰かが再び操作したのならありえるだろうが、そんな技術を持ったフレームヘイズは限りなく少ない。

「あんたが見過ごしてたんじゃないのお？」

「ひーっはっはっはあつ！酒の飲みすぎで脳みそまでアルコール漬けになっちゃったのかもな!!」

それを言われると啓作は反論できない。事実、まだ二日酔いの痛みは抜けきつておらず、時折こめかみに刺すような痛みが走る。ううむと唸りながら、啓作は自分の不甲斐

なさを情けなく思った。

「でも、姐さん。その、俺も同じような光を見つめちゃったんすけど……」

気まずそうな栄太の声に、二人がぎよつと振り返る。栄太の指差す場所、ちようど啓作の家の近くで、弱々しいけれどもたしかに光が点滅していた。これにはさすがの樂觀的なマージョリーも不可解に思った。よく見渡せば、そこらじゅうで小さな光がチカチカと同調して点滅している。調律の影響が抜けきつてないのかもしれない。カムシンがしくじることなどありえないだろうが、今回は「探耽求究」に調律に使用した自在式を勝手に改造されて悪用されたため、なんらかの影響が残っているのだろう。だが、あまりに弱々しい光は消えかけの蠟燭の炎のようで、この世に与える影響など皆無に等しい微弱なものだ。フレイムヘイズの中でも一際自在式に秀でているマージョリーは、そう判断した。「二応見張つときなさい」と二人に告げて、マージョリーはふと「白銀の討ち手」サユのことを思い出す。サユの気配はもう感じられない。すでにこの街を旅立ったのだろう。本人もそうすると言っていた。

では、この体の芯から湧き起こる不安感はいったいなんなのか？ サユが残した手紙の最後の一文を思い出す。

（あれはいったい……うあ、もう！イライラするわね！）

考えれば考えるほどに頭が痛くなる。三百年近く生きてきたが、未来人と関わるなん

て経験は初めても初めてだった。すつきりとしなないモヤモヤした感情に、ガリガリと豊かな髪を乱暴にかき乱す。

マージョリーは気づけなかった。光点は、たしかに一つだけでは限りなく微弱な力しか持たない。だが、明確な意思を持つて操作されたそれらは、地脈を通じて根を張るように互いを繋ぎあい、地下に巨大な紋様を描き始めていたのだ。それは、地上表面しか監視できない『玻璃壇』の特性を熟知している者にしか出来ない策略だった。また一つ、啓作と栄太の死角で光が増える。そして、『玻璃壇』には映されない地下で、ゆっくりゆっくりと根を繋いでいく。

その時が訪れるのを、じっと待ちながら

3—2 伏線

「このツツ、ヘンタイ悠ニイイ——ツツ!!」

「やっぱりこうなると思つて——ひぎい!!」

ブーメランのように回転する鍋の蓋が腹部を直撃し、僕は慣性の法則に従つて後方へ踊るように吹つ飛んだ。

「デリカシーのないミステスなのであります」

「汚物消毒」

「む、無実だ……」

なぜこんな理不尽な事態に陥っているのか。それは、シヤナとヴェルヘルミナさんが購入してきた生活用品を収納してあげようと何気なく押入れを開いたら、無造作に放り込まれていたシヤナの下着が頭の上に降つてきて、不幸にもあたかも僕がパンツを被っているような状態に貶められ、それをシヤナにバツチリ目撃されたからである。完全に不可抗力だし、元はと言えばシヤナが丁寧に住舞つておかなかつたことが原因だと反論したが、シヤナ専売特許の「うるさいうるさいうるさい」と鉄拳のアンハッピーセットで黙らされた。

シヤナの家（元は平井ゆかりさんの家だが）に着いて早々、ヴィルヘルミナさんは本来の来訪目的——『御崎市から紅世の痕跡を消し去る工作活動』の労務に追われることになり、シヤナはその補助を担当した。結果、猫の手にもなれない僕は部屋の掃除や荷物の整理、ヴィルヘルミナさんが持ち込んだ資料の大まかな分別などの雑務一切をすることとなった。シヤナは掃除が苦手らしく——というか根本的に掃除の必要性を理解していないように思えるが——シヤナが使用している箇所以外は全て埃がうず高く積まれているという、おおよそ女の子の部屋とは思えない惨状だった。さしものヴィルヘルミナさんもこれには頭を抱えていた。シヤナの教育を行ったのは彼女らしいが、もしかしたら掃除については教えていなかったのかも知れない。そんなこんなで、全てが粗方完了した時にはいつのまにか日を越えるまであと数時間という時間になってしまっていた。母さんには予め連絡しておいたから心配はされなと思うが、あまり夜遅く帰宅するときはさすがに怒られてしまう。夜中まで女の子の家にいるのも思春期の男子としては気恥ずかしいし、ヴィルヘルミナさんの視線も「いつまでいるんだ」と言わんばかりに怖いままなのでそろそろ帰ることにした。

「それじゃあ、また明日。お休み、シヤナ」

「うん。今日は自主鍛錬ってことにしてあげるから、忘れずやっておいて」

「わかってるよ。ちゃんとやっておく」

そろそろ腕立て伏せと腹筋の回数をまた増やしてもいいかな、などとトレニングの内容を考えながら、靴ひもを結んで立ち上がる。今夜のシヤナとの鍛錬は休みだ。昨日の襲撃もあって、「用心するにしくはない」と新たな襲撃を危惧していたアラストールも、半日様子を見た結果、警戒度を下げても問題無しと判断したのだ。それに、シヤナとマージョリーさんに加えてヴィルヘルミナさんを加えた三人の豪傑が集結した今、僕を襲いに来ることは、敵にとってハイリスクこの上ない抑止力になるのだそうだ。

アラストール曰く、

『坂井悠二は囷のようなものだ。囷に噛み付こうとしたが最期、我ら“炎髪灼眼”、“万条の仕手”、そして“弔詞の詠み手”の三者から袋叩きに合う。また、この三者を抑えた上で坂井悠二を襲おうとするなら、相当の強者を揃えなければならない。この場合、強者を集結させる動きがあれば、たちまち外界宿アウトローの情報網に察知され、復讐に燃えるフレームヘイズたちの攻撃が集中するリスクを負う。どちらにしろ、自殺に等しい犠牲を払わなければならない。昨日の“風雲”が良い見本だ』

……だとか。ちなみに、外界宿アウトローとはフレームヘイズの寄り合い所みたいなもので、情報交換場所の提供から移動や金融面などなどのバックアップを行ってくれる支援組織なのだとか（日本にもあるらしい）。

（殺されるのがわかっていて襲いに来る奴はよほどのバカで、対策を講じて襲いに来る

強い奴らは必ず尻尾を掴ませる、ということかな)

アラストールの分析に感心しつつ、悠二は自分なりに嘸み碎いて納得する。『他人から与えられた情報は自分で納得できるまで信用に値しない』。これは数々の戦いをくぐり抜けて自力で学んだことだ。

「ん。それじゃあ」

シヤナが頷く。淡白な返答だけど、ほんの少しだけ寂しそうに唇を小さく尖らせる顔を見られれば十分だ。感情表現が乏しいように一見されるけど、シヤナはこれでいいのだ。その初々しい表情の機微に微笑を返すと、『ブルートザオガー』の皮袋を肩に担ぐ。そしてふと、この大剣を譲ってくれた佐藤と田中の話を思い出した。

(なんかサユちゃんに似てるなって思ってた)

(この街に来た新しいフレームヘイズの女の子だよ。シヤナちゃんそっくりなんだ)

「あ」

「どうかした、悠二?」

八極拳で投げられたり、変な幻覚を見たり、ヤカンが頭に命中したりと相次いで衝撃を受けたため、新しいフレームヘイズのことが頭からすっぽ抜けてしまっていた。フレームヘイズが増える分には問題はないだろうと心のどこかでタカをくくっていたのも否定できない。

(一応、聞いてみるか)

新しいフレイムヘイズの来訪をシヤナたちが知らないはずはないと思うが、念のためにそのフレイムヘイズについて尋ねてみる。

「そういえば、シヤナとアラストールはサユってフレイムヘイズを知ってる?」

こちらの唐突な質問にも戸惑うことなく、シヤナは小首を傾げて記憶を探る仕事を始める。しかし、その首は僕の予想に反して横に振られた。

「私は知らないわ。サユって、器となった人間の名前でしょ? 称号や契約している王の名前はわからないの?」

アラストールも追従して面識がないと言う。

「うむ。我ら討ち手は基本的に称号を使う。人間だった頃の名前に関してまで諳んじてはいない」

まさか、シヤナたちが気づいていなかったとは。目をキョトンと見張り、そういえば、「サユ」というフレイムヘイズについての情報をほとんど持つていないことに今さらになって気付く。「シヤナたちなら知っているだろう」という思い込みからくる上辺だけの安心感が、情報への探求心を押し潰していたのだ。なんでも大事なことを聞きそびれるんだ、と過去の己の不甲斐なさに悔恨を感じて臍を嘔む。これが、もしもフレイムヘイズではなく徒や王だったら取り返しが付かないことになっていたかもしれない

い。

「いや……。佐藤たちからは名前以外は聞いてないんだ。ごめん。ただ、シヤナによく似てるらしいってことしか」

「えっ？ 私に？」

これにはさすがに戸惑ったのか、目を丸くして驚く。

「そんなフレイムヘイズがいるのなら聞いたことがあると思うんだけど……。アラスツールは知らない？」

シヤナが胸元のペンダントに問う。紅世に関するあらゆることを知悉している魔神なら、その討ち手に関して何か思い当たることがあるかもしれない。シヤナはすぐに返ってくるであろう答えを信じて待つ。

「……アラスツール？」

果たして、魔神は応えなかった。応えられなかった。言いあぐねているのでも、面倒臭がつているわけでも断じてない。常に明瞭に、冷静に、絶対の確信を持って言葉を紡ぐまさに神の如き彼が、出会って初めて見せた人間じみた逡巡。その息が詰まったような、感情で切羽詰まった無言に、僕は背筋が冷えるものを感じた。紅世最強の破壊神が、まるで人間がするように認めることを拒んでいる。なにを、という主語を欠いたまま、

冷たい不安だけがじわじわと心を侵食していく。かつて、これほどまでにアラストールが動揺したことがあっただろうか。僕の記憶にある限り、この魔神が言葉も出せないほど驚愕したことなど一度足りともない。だが、それはシヤナにとっても同じだった。シヤナですら、この超常の存在がここまで動揺する様子を目撃するのは初めてのことだった。絶大な信頼をよせる、師であり父親であるアラストールが見せる知らない顔にギョツと目を見開く。

「アラストール、いったい 「天壤の劫火と、話があるのであります」 ツ!」

不意に割って入ってきた声に、二人の心臓が同時に跳ね上がった。

(い、いつの間に!?)

正面にいる僕すら気づけなかった。驚愕に肩を跳ね上げてさつと振り返るシヤナの背後に、まるで最初からそこにいたかのようにヴィルヘルミナさんが静かに佇立していたのだ。音も気配も伴わずにシヤナほどの手練の背後に移動するという、幾多の戦いをくぐり抜けた者だけが到達する至高の域に達した所作に改めて畏怖を覚える。しかし、余人では到底真似できない動作を平然と見せつけた猛者の表情は、自信に満ちるどころか目に見えて曇っている。親を見失った幼子のような顔で彼女を見上げる、シヤナのせいだ。

「ヴィルヘルミナ、今、なんて、」

そう、ヴィルヘルミナさんは天壤の劫火と話がしたいと言ったのだ。それはシヤナに對して暗に「席を外せ」と告げている。恩師からのその言葉は、シヤナには戦力外通告に聞こえただろう。衝撃を受け、いつになく不安な声を発したシヤナを前に、表情のないヴィルヘルミナさんの双眸が微かに揺れ、苦渋の色をうつすらと宿す。

「あなたに不備はないのであります。これはひとえに、我らと天壤の劫火が抱えるべき過去の因縁から生ずる問題。しかし、いつか必ず、全てを打ち明けるのであります」

「理解、懇願」

一息に言つて、一人と一体はじつとシヤナと正体する。これ以上は言えない、と態度で示している。

「でも……!?!」

会話すら拒否し、取り付く島を一切見せない自らの養育者に、なおも納得が行かず子どものように食い下がるシヤナを押し留まらせたのは、思わぬ謝罪だった。

「すまぬ、シヤナ」

「アラストール!?!」

「今はまだ、話せぬだけなのだ。これは我らの覚悟の問題だ。時が来れば、必ず話そう。我が真名に誓う」

「——っ——」

ぐつと握りしめられた拳を僕は見逃さなかった。天壤の劫火の真名を担保にするとまで言われれば、さしものシヤナもそれ以上踏み込むことはできない。傍から見ても卑怯な物言いだと思つた。つまり、そういう物言いをしなければならぬような案件が発生したということだ。眼前で繰り広げられる急展開についていくのがやつとの僕の前で、シヤナが再びヴィルヘルミナさんに疑念の視線を戻す。何か言いたげなシヤナと、頑として不回答を貫くヴィルヘルミナさん。互いに目の底を覗き合う時間が数秒すぎ、

「……10分で戻る」

折れたのはやはりシヤナの方だった。小さく呟かれた言葉と共に、その背で燃えていた不条理への怒りや疑問が見る間に萎えていき、諦念へと移ろいでいく。強張つた背中が、常よりさらに縮んで見えて痛々しかった。

「……話してくれるまで、待つてるから」

そう言うのと、アラストールの意思を表出させる首飾り——コキユートスを首から外してヴィルヘルミナさんにそつと預ける。除け者にされた、などとは思っていないだろう。こういう時、理性的なシヤナは何よりもまず己の力不足を責める。だが、もつとも認めて欲しい相手に拒絶される痛みは、理屈を飛び越えて心に堪えるものだ。下唇をきゅつと噛むシヤナの表情を前にして、ヴィルヘルミナさんの鉄面皮に一瞬ヒビが入りかけるも、僕の訝しむ視線に気づくと同時に音もなく修復された。この妙に鋭いミステ

すが、すでに眼前の展開に理解が追いつき、さらに事態を見極めて推理しようと頭脳を高速回転させていることを察したからだ。

「道中、お気をつけて」

「注意喚起」

「……うん」

お互いに平静を装った声を重ねると、シャナがさつと踵を返して悠二の脇を通り抜け外に出てゆく。俯く顔は影に塗り込められて見えないが、間違いなく困惑と悲哀で染まってしまうているだろう。支えてあげなくては、という義務感が衝動となって背中を叩き、悠二は慌てて後を追いかける。

「さようなら、ヴィルヘルミナさん、ティアマトーさん、アラストール。……あの、僕が言えたことではないかもしれないんですけど、」

小さく振り返り、ヴィルヘルミナを見つめる。

「必ず、話してあげてください。シャナ、あれでけっこう寂しがり屋なので」
「……言われるまでもないのであります」

「愚問愚答」

即答してこちらを見つめ返すヴィルヘルミナさんの赤い瞳は、内奥に煩悶を湛えながらもそれを圧倒する強い決心の光を放っていた。そう、長い間シャナを見てきたのだか

ら、そんなことくらい僕から言われなくたって知つているはずだ。出会つて一年も経つていない僕からの忠告なんてまさに愚問だろう。そんなことは口に出す前からわかっていた。それでも、言わなければいけないと思つたのだ。

「ありがとうございます。それじゃあ、おやすみなさい」

ヴィルヘルミナさんの眼差しを一秒ほど見つめ、その生硬くも真摯な光にひとまずの安堵を得ると、僕はペコリと非礼を詫びるお辞儀をしてからシヤナを追いかけて駆け出しました。

† † †

「二人がああなることは、たまにあつた」

合流して少し経ち、並歩していたシヤナがぼつりと呟く。シヤナらしくぬか細い声だったが、人通りのないおかげで聞き取りにくくはなかつた。

「私がフレイムヘイズになる前に、アラストールとヴィルヘルミナとティアマトーが三人だけの内緒話をするのは、時々あつた。それは私が完璧な“炎髪灼眼の討ち手”になるための会議だつたし、私も未熟なままその話し合いに立ち入るべきじゃないと思つてた。でも、フレイムヘイズになってから隠し事をされたのは、これが初めて」

その声にも、表情にも、いつものような可憐な張りはない。シャナは、彼女を育てたアラストールやヴィルヘルムミナさんから、一人前の戦士——『完璧なフレイムヘイズ』と認められたと自負していた。時には頼り、また頼られる対等な存在になれたと確信していた。それが他でもない育ての親たちによって覆されたことに、心の水面がひどく揺れているのだ。寂しそうなシャナの独白を聞きながら、慰める言葉のない僕は黙って隣を寄り添い歩く。こうして隣り合ってみると、シャナの背は僕より頭一つ分は低いことがよくわかる。その、触れたら壊れてしまいそうな細い肩に、いったいどれほど大きなものを載せているのか。この儂い少女をどう慰めればいいのか。こんな時に限って回転が鈍る自分の頭脳を恨む。「落ち込むなよ」などとという上辺だけの慰めをシャナが好かないことはよくわかっていた。それに、何より僕自身も困惑していた。フレイムヘイズは紅世の王と人間が文字通り一心同体になったものだ。隠し事は互いの関係を大きく悪化させるし、特に公明正大な性格のアラストールはそういうことはしないと思っていた。

(アラストールがシャナに隠すほどのこと、か)

それはいつたい何なのかと考え、直前にアラストールが絶句したことが頭を過ぎる。「もしかして、佐藤たちから聞いたシャナにそっくりなフレイムヘイズと何か関係があるのかな？過去の因縁とも言ってたけど」

「私も同じことを考えた。でも、わからない。さつきも言ったけど、情報が少なすぎる」
「そうだよね……。でも、きつと話してくれるよ」

「……うん。そう信じてる」

どのみち、ヒントが皆無に過ぎる。先ほど何か掴めないかとヴィルヘルミナさんの表情を探ってみたが、歴戦の猛者相手には通じなかつたし、逆に警戒を呼んだような気がした。これ以上僕のような素人の若輩が考えても詮のないことだ。それに、僕が関与してはいけないことかもしれない。踏み込んで欲しくはない領域というものは誰にもある。それからは、お互い口を開くことはなく、静かに共に歩き続けた。誇り高い獅子は、他人から傷を舐められることを決して望まないのだから。

「じゃあ、私はここで戻る」

5分ほど歩いたところで、シャナが立ち止まる。ここが折り返し地点だ。心配になって顔を覗き込もうとすると、唐突にさつと黒髪をなびかせてシャナがこちらを仰ぎ見ただ。僕をまつすぐに見つめる清廉な瞳が、もう大丈夫だと告げていた。いつもの、小さくて大きなシャナに戻っていた。そうだ、この美しい戦士は、同情も情けも慰めも必要としていない。他者に寄って立つことを良しとしない高い矜持を秘めるからこそ、シャナはシャナなのだ。『在るべくして在る者』と評されるに値する、強い女の子なのだ。いつもの堂々としたシャナを見て安心したこともあつて、僕は満面の笑みを浮かべてシャ

ナに別れの挨拶をする。

「うん、わかった。シヤナ、また明日！」

「う、うん。また明日……っ」

　そうして、坂井悠二は『ブルートザオガー』を「よっ」と担ぎ直して姿勢を整えると、てくてくと帰路についた。途中、ちらりとシヤナの方を振り返ろうかとも思ったが、なんだかそうすると女々しいようで、やめておいた。今回は、その選択は功を奏した。というのも、そこには唐突に満面の笑みを向けられて顔を赤熱させるシヤナが突っ立っていたからだ。シヤナが自分の内に秘める矜持だけで立ち直った、というのは悠二の思い込みに過ぎなかった。本当は、隣に大切な人がいてくれたから、シヤナは気持ちを切り替えることが出来たのだ。何時の時代も、傷心の女心を癒し、前に進む力を与えてくれるのは、想い人の屈託の無い笑顔なのだ。

　その様子を、漆黒の少女が食い入るように見つめている。

‡ ‡ ‡

「言われるまでもないのであります」

反射的に飛び出した言葉に自分でも驚いている内に、ミステス——いや、坂井悠二なる少年は満足そうな表情を垣間見せると、日本人特有の首を落とすお辞儀をして、あの方を追いかけていった。

(必ず話す。話すのであります。……しかし、どのように話せば?)

愛する少女を傷つけてしまったことを自覚するヴィルヘルミナは、心中で激しく自問自答する。具体案もないのに坂井悠二に言明してしまったのは、彼女の悪いクセ——意地が首をもたげたせいだ。感情を無理やり抑える術しか心を統制する方法を知らないヴィルヘルミナは、一度感情が制御の手から離れたら持て余してしまうことがしばしばある。今回の場合は、悪い虫から思わず核心を突かれたことが癪に障り、お前に言われるまでもないとこみ上げた感情を口にしてしまったのだ。ヴィルヘルミナは、坂井悠二を少女についた悪い虫に過ぎないと軽視していた。しかし、当初抱いていたミステスに過ぎない単なるモノという認識はすでになく、今は坂井悠二という人格を持ったヒトであると不本意ではあるが容受していた。それは、つい昨日に坂井悠二のサポートによつて極めて迅速に紅世の王を討滅したという事実と、"フレイムヘイズによる背後からの攻撃を鋭敏に察知し、吹き飛ばされながらも瞬時に受身をとつた"という戦闘練度の高さを目にしたことに起因する。シャナが手心を加えたことを差し引いても、流れるような? 法は修練を施したヴィルヘルミナも唸るほどの達人級の冴えを見せていた。

“虹の翼” メリヒムとともにシヤナに体術を叩き込んだ師でもあるヴィルヘルミナが心中で満足気に頷いたのも束の間、悠二はなんとそれに見事に対応してみせたのだ。吹き飛ばされた後に腰を擦りながら立ち上がるしかなかったことにシヤナと悠二は不満そうであつたが、常人が同じ技を掛けられたならとつくに病院送りになつてゐる。悠二当人は、ヴィルヘルミナに無様な姿を見せてしまつたと恥辱と後悔を感じていたが、彼女にとつては驚愕に値する成長結果であつたのだ。

(……無能なミステスであつたなら、すぐさま一刀の元に切り伏せられたのであります)

『零時迷子』に封印された恋人を探す、ヴィルヘルミナの友人——“彩飄” フィレスの件もある。何の価値もない存在ならさっさと破壊して中身の『零時迷子』を無差別転移させるつもりだつた。ミステスという入れ物を破壊すれば、『零時迷子』はその自己防衛機構によつて次のミステスへ完全なランダムで瞬時かつ密かに移動する。そうなつてしまえば、世界に無数に存在するミステスのどれに混入したかなど誰にもわからなくなる。だが、人材となれば無闇に破壊することはできない。昨晚のフレイムヘイズのみによつて行われた会議の場でも、不愉快にも悪い虫に恋々とした想いを抱いてゐるらしい少女だけならともかく、ヴィルヘルミナが大きな信頼を置く数少ない戦友の一人、アラストールすらも「破壊するには惜しい」と擁護した。決して凡愚市井などではなく、敵の謀りを見抜き、反撃の手管を描いてみせる才能は天賦のものであると。

（あの方が変容していく様子をもっとも長く近くで見ているくせに、どうして）

事実、こうして心中で八つ当たりをしているヴィルヘルミンナ自身も、無意識に、葛藤による怒りの矛先を逸らす対象にするほどに坂井悠二のことを認めていた。この世界では、『風雲』ヘリベといったイレギュラーの襲撃者の存在や、坂井悠二の成長速度が若干速いという誤差によつて、ヴィルヘルミンナが坂井悠二の存在を是認する時期が非常に早くなつていた。それでも、かつて恋に敗れた女としての感情が彼女を素直にはしなかつた。

（何も知らないくせに、必ず話せだなんて一端の口を聞くなんて——）

「ヴィルヘルミンナ・カルメル」

「主題集中」

「……む」

玄関で黙りこくつた戦友の思考があらぬ方向に逸れ始めたことを察した二人の王が短く戒める。ヴィルヘルミンナ自身も、無自覚ながら坂井悠二をダシにして心の紛擾から目を逸らそうとしていた自分に気付いて己の精神の未熟を恥じた。『まだまだね、ヴィルヘルミンナ』。親友の誂いを隠さない美しい声音を耳元に幻聴し、ヴィルヘルミンナはふんと鼻を鳴らす。

「……あの方が帰つてくるまで、残り8分と20秒であります。早急に意見を交わさな

くては」

気を取り直すためにも、話し合いの場をリビングへ移す。綺麗に拭き上げられた机にアラストールを鎮座させ、自らは床にそくさと正座をする。初見した際には廃墟の如き惨状だったリビングが、今ではなんとか普通の家庭並みの生活環境程度には回復した。机に床に埃がうず高く降り積もり、天井角には蜘蛛の巣が引つ掛かっているような目を覆う状況には、綺麗好きを自負するヴィルヘルミナもさすがに失神しかけたが、ヴィルヘルミナとシャナ、なにより坂井悠二が率先して掃除に協力したことで体裁は整った。

(……一応、感謝はするのであります。あくまでも心の中で、でありますか)

ここでも坂井悠二の存在を思い出すことになるとは、と鉄面皮の下で苦々しい表情をしながらも、悠二の助力がなければ居住空間の改善を一日で成し遂げることは難しかったことを認め、不本意ながら感謝の念を浮かべる。初めて平井家を訪れたらしい悠二が、「はは、女の子の部屋って凄いついていうもんね、はは」と引き攣った笑顔を見せなければ、赤面するシャナが掃除の必要性を痛感して本気で取り組むことはしなかっただろう。基本的に不老不死であるフレ임ヘイズに生活環境の劣悪さは関係ないとはいえ、掃除くらいは教育しておくべきだった。ヴィルヘルミナが怠ってしまった教育を補ったのが坂井悠二の一言となった事実は、結果論だったとしても非常に不快なことでは

あつたが。

「役には立つだろうが、色々と不安も残る。」

ヴイルヘルミナは坂井悠二をとりあえずこう評し、位置づけることにした。

(———そういえば、)

不意に、既視感が額を走った。そういえば、かつてあの討ち手にも同じような評価を下したことがあつた、と。500年も昔。『大戦』の際、劣勢に立たされた兵団の前に突如として現れた、異能極まるフレイムヘイズ。その特異な能力と未来から来たかのような洗練された知識、そして頭脳の冴えを煌めかせた討ち手。フレイムヘイズとしての張り詰めた緊張感を湛えながら、他者への思いやりを忘れない優しい瞳をしたフレイムヘイズらしからぬ少女。可憐な容貌なのに、どこか少年のような初々しさと未熟な蛮勇さを兼ね持ったアンバランスな少女。

唐突に、記憶のなかの少女の瞳が、坂井悠二の瞳に重なった。

(何を、噂も無いことを考えているのでありますか、私は)

あまりにも馬鹿馬鹿しい妄想に足を踏み込みかけたことを瞬時に後悔し、頭かぶりを振って今度こそ坂井悠二のことを思考から切り離す。外見があまりにかけ離れすぎているし、血の繋がりがあるとも思えない。そんなことは火を見るよりも明らかだ。仮定の話として突き詰める価値もない戯言だ。あの討ち手と少年が似ても似つかないことは、まさ

にあの方と隣り合っている光景を見れば一目瞭然ではないか。

今は、そんなくだらないことよりも話しあうべき重大な案件がある。あの方を傷つけてしまっても話し合わなければならぬ、三人にとつてとても大事な仲間の話が、『大戦』を最後の最後まで共に戦い抜き、そして行方不明になつてしまつたシヤナとよく似た少女の話が。

自らの契約者の心中に区切りがついたことを確認したティアマトーが端緒を開く。

「相談必須」

「うむ」

「では、協議を始めるのであります。我々が戦友、白銀の討ち手について——」

——背中を預けるのに、あなたたちほど安心できた戦友はなかつたわ。ヴィルヘルミナ、ティアマトー、白銀のお嬢さん——

3—3 激突

「なんだか、今夜は肌寒いな」

人気がない寂寞とした一本道を歩きながら、僕は思わず肩を擦って呟いた。車一台が通るのもやつとな狭小な生活道路は、高くせり上がった左右のコンクリート壁によつて外界から遮断されているようで、不気味さをさらに際立たせている。夏真つ盛りだといふのに、大気は季節外れともいえる乾燥した夜気に冷え切っていて、やけに冷たい。いともなら鬱陶しい蚊の羽音も耳に入らず、生命の気配も消え失せてしまっていた。まるで巨大なトンネルにでも迷い込んでしまったかのように空気は重く澱み、身体に纏わりついてくるようだ。空を見上げると、夜の闇には星一つなかった。頼れるのは、等間隔で設置された心細い街灯だけだ。

「——？」

出し抜けに、頭上からブツンというワイヤーが千切れるような耳障りな音がした。同時に足元を照らしていた街灯の灯りが消え失せる。街灯の電球が潰れる瞬間に立ち会った経験は初めてだった。御崎市は県下ではそれなりに規模の大きな都市で、インフラの整備も悪くないだけに、電球は切れる前に定期的に交換されていた。珍しい体験を

したな、と街灯を感慨深げに眺め上げる。別に帰り道の街灯すべてが消えてしまったわけではないし、怖がる必要もない。もとより、この世の「歩いていけない隣の世界」——『紅世』の存在を知ってしまった僕には、幽霊や妖怪などの類のものは怖いと感じられなくなっていた。この道路も、近くに民家はまばらで、その印象の悪さから「幽霊が出る」とかいう根も葉もない噂が流れていて、人が寄り付かないが、僕には平気だった。むしろ、何かあった時に一般人を巻き込む心配が減るから愛用しているほどだった。この道路を僕が頻繁に使っていることを知っているのはシヤナとアラストールと僕だけだ。

さて、早く帰らなければ母さんに怒られる。母さんは怒鳴って口やかましく怒ることはないが、怒る時は静かに強く怒る。けっこう怖い。早足で帰ろうと、街灯が白々しく照らし出すアスファルトに強く一歩目を踏み込み、

—— ブツン、ブツン、ブツン

「ええ？」

背後で立て続けに街灯が消える音。振り返ると、自分が歩いてきた路地は暗黒と化していた。押し潰してくるような闇の壁に思わず後ずさり、

——ブツン、ブツン、ブツン、ブツン、ブツン、ブツン、ブツン——

一本道の街灯すべてが、次々と灯りを失う。気づけば、視界すべてが濃密な黒一色に塗りつぶされていた。停電でも起きたのかと慌てて周りを見渡す。だけど、それにしても様子がおかしい。周囲をどれだけ見渡そうとも、指先一つほどの光すら見つけることができない。それどころか突然の停電に狼狽して焦る人々の喧騒すら聴こえてはこない。

封絶が張られた気配は感じなかった。ならば、この静寂はなんなのか。

時が止まったかのような硬質な静けさに、僕はごくりと息を飲む。その静謐を、がりがりと硬質な何かを引きずる金属音が破った。ぞつとするほど冷ややかに耳に忍び込んでくるその音は、だんだんとこちらへ近づいてきている。

「……誰、ですか？」

言いようのない悪寒に貫かれながら、それでも問う。不穏な想像は的中し、相手の応えは返ってこない。ついに音源がすぐ目の前まで迫る。五歩ほどの距離において、何かを這う音はぴたりと止まった。闇の中に、同じ闇色をした輪郭がぼんやりと見え、じつと目を凝らす。だが、見れば見るほどにその影は細部がぼやけ、ますます不鮮明に

なつていく。それはまさに、昼間に見た異様な風体の影そのものだった。

「お前は、誰だ」

意を決し、両足に力を込めると今度は精いっぱい声を張って問いただす。

「——『白銀の討ち手』」

返つてきた声に、驚く。初めて耳にしたはずのその声は、聴きなれた少女の声——

つい今しがたまで会話していたシヤナにそっくりだったからだ。唐突に影が揺らぎ始める。霧が晴れるように、声の主を塗り潰していた闇が薄れてゆく。暗闇に慣れていく視界で、ついに声の主の姿が露わになった。自分の身体より大きな黒い外套を羽織り、顔を俯けてはいるが、悠二にはそれがシヤナそっくりの姿をした何かだということがすぐにわかった。昼間に佐藤と田中から聞かされた、シヤナによく似たフレイムヘイズの話を思い出す。

「もしかして……君が、サユさん？」

返事はない。それは肯定を意味すると僕は受け取った。一步後ずさり、身構える。楽しく会話をしに来たようには到底見えなかった。少女の身体から発せられる研ぎ澄まされた負の波動は、触れると切れる鋭利な刃物を連想させる。フレイムヘイズが僕に何の用があるのかと疑問に思うが、答えは一つしか思いつかない。胸を守るように押さえ、『白銀の討ち手』——サユをきつと睨みつける。フレイムヘイズに『零時迷子』を

狙われるのは初めてだった。時間稼ぎの意図も含めてその理由を聞きたかったが、そんな押し問答をする意思があるようには思えなかった。自分がフレイムヘイズ相手にどこまで戦えるか——はつきり言つて絶望的だ。だけど、ここはシャナの家からさほど離れていない。戦闘が始まり、その気配を察知したシャナが駆けつけてくれるまで抵抗し続ければ、勝機は自ずと見えてくる。大丈夫だ、と己に言い聞かせる。気持ちで負けたらダメだ。今までの自分を信じるんだ。『風雲』ヘリベだつて倒してみせた。きつい鍛錬だつて頑張つてこなしてきたんだから——

「シャナが助けに来てくれるまで堪える、か？」

背筋を掻き筆られるような、押し殺した声。思考を簡単に読み取られ、僕は驚愕を露わにして目を見張る。奮い立たせようとしていた闘志に冷水を浴びせられた格好になり、体温すらサアツと低下する。しかも、このフレイムヘイズは『シャナ』という親しい者たちしか口にしない名前まで知っていた。こちらが考えている以上に僕たちのことを知っている、という事実を突きつけられ、足場が崩れたような絶望感に口中が乾いてひりつく。だから、僕がこの道路を使うことも知られていたのだ。僕は、まんまと罠に引つ掛かつてしまった。

くつくつと小さな嘲笑が響き、華奢な肩が波形のように震える。シャナと同じ声のはずなのに、性質は真逆だ。覇気はなく、やつれ果てて、まるで廃館に住まう亡霊の囁り

泣きのようだ。ゴクリと喉を鳴らす僕の眼前で、亡霊の嘲りがピタリと止まる。肩の震えが止まる。何かが、来る。

「残念だけど、それは叶わない」

吐き捨てるようにそう呟くと、突如、サユは引きずってきた白銀の鉄柱を大きく振りかぶり、勢いそのままに足元のアスファルトに突き下ろした。ドスツと鈍い音を立て、鉄柱はアスファルトの表面を砕いてその3分の1ほどを地中に埋める。

そして、それは発動した。

避雷針のように突き立つ鉄柱を起点に、葉脈のような光の筋が蜘蛛の巣状に広がった。それは目を剥く悠二の股の間をまたたく間に通過し、街中に拡大していく。地上にいる悠二にはわかるべくもないが、上空からこの様子を俯瞰していた者がいれば愕然となったであろう。光の筋は街のありとあらゆる場所に伝播し、そこを中間点としてさらに稲妻のように拡がり、ついには地表に幾重にも重なった巨大な五芒星を描き出した。光が中間点としたのは、宝具『メケスト』の贗作によって地面に穿たれた自在式である。カムシンの作った自在式の残骸を利用して編まれたこの五芒星は、主の目的を達するた^{あるし}めに必要な舞台を形成する。

五芒星が、白日の如き銀色の光輝を次々と屹立させる。人造の光を嘲笑うかのように圧倒的に輝く明光が轟きともに天を直撃し、林立する光柱同士が繋がって継ぎ目を埋め、艶めく光の壁となつて内部の空間を隔離した。それは封絶に似ていて、しかし封絶ではない。封絶の数段上を行く、地脈を利用した強力で容赦のない隔絶結界だった。

「な……!?!」

威圧的にそびえる光の壁を見上げ、絶句する。理解したくなくても、せざるを得ない。今、この瞬間、僕はシャナから完全に切り離されたのだ。

「坂井、悠二」

耳元で囁くような少女の声。反射的に振り返つて、度肝を抜かれる。いつの間に接近したのか、目と鼻の先にサユの貌かおがあつた。端然たる美貌は死人のように凍りつき、見る影もない。悲しみと嘆きにやつれた無表情の中で、ただ昏い光くらを放つ双眸だけが目的意識を秘めて爛々と燃えている。見下ろすほどに低いはずの矮躯の少女に例えようもないプレッシャーを感じて、動けなかつた。焦燥の汗が額から滲み、顎を伝い落ちる。

『零時迷子』——貰い受けるぞ」

地の底から湧いたような声。怯えて一切の動きが取れない僕の胸に、サユの手が迫る。

† † †

「あ、姐あねさん、これって!？」

「で、でけえ」

「なによ、これ……!」

『玻璃壇』に映し出された巨大な五芒星の結界に、マージヨリーは呆然と呟いた。封絶など足元にも及ばない、その土地に流れる地脈の力場を応用した強固な隔絶結界。並みのフレイムヘイズはおろか、当代最高の自在師と称される自分ですら破ることは難しい。誰がどうやってこんなものを。よほどの知識と専用の宝具がなければこの結界は成し得ないはずだ。

思い当たる人物は、一人しかいなかった。記憶にある宝具を贗作し、その宝具の過去の使い手の知識を吸収できるフレイムヘイズ。『玻璃壇』に監視されていることを熟知し、その裏をかく術を知っている未来から来た人間。

「サユ……!」

臍を噛み、駆け出す。マルコシアスを勢いよく窓から放り投げると自らも身を投げ出し、マルコシアスに飛び乗って飛翔した。背後から説明を求める佐藤と田中の声が聴こ

えたが、後回しだ。マージョリーの直感は当たった。サユは、何かとんでもないことを仕出かすつもりだ。手紙の最後の『ごめんなさい』が脳内で反響し、彼女をどうしようもなく焦らせる。間違いなく、サユはこの結界の中にいる。穴を開ける方法を考えるが、自分ひとりでは数時間かかるだろう。ならば。

群青色の光芒が虚空に弧を描き、焦燥を示すように高速で空を駆けて行った。

† † †

「そうは、いくかッ！」

サユから伸びた手がシャツの胸元を掠った。間一髪で恐怖に竦む身に鞭を打ち、もんどり打って地面に倒れこんだのだ。柔道の受身の要領で地面を叩き、瞬時に立ち上がった後方にステップを踏む。たった数歩分だが、間合いを開けることができた。急激な動作のために心臓が激しく動悸を刻み、呼吸も必然的に荒くなる。落ち着け、と必死に己を律する僕の視界で、*“白銀の討ち手”* サユが無言のまま背から刀を抜き放つ。白銀のそれはサユの身の丈ほどもあり、芸術的なまでの優美な反りを見せる。驚くほど『贄殿遮那』に酷似した、白銀の太刀だった。一切の無駄のない動きで太刀が大上段に構えられる。このまま振り下ろされれば、自分は間違いなく真つ二つにされる。

「くっ！」

背の『ブルトザオガー』を渾身の力を込めて振りぬくのと大太刀が脳天に向かつて振り下ろされるタイミングはまったく同じだった。まるで重機による鉄槌の一撃を喰らったかのような凄まじい圧力が剣を圧迫し、全身の骨を軋ませる。分厚い皮袋も、刀身に何重にも巻かれていた布も、たった一度の激突でバラバラに散逸した。袋と布の残骸が雪のように舞い散り、鎬を削る剣と刀が溶接機のような火花を散らせる。歯を食いしばって鏝迫り合いに堪えるが、すでにこの身は至るところから悲鳴をあげている。関節がミシミシと鈍い音を上げ、膝がガクガクと震える。やはり、フレイムヘイズを相手にするには僕ではあまりに未熟すぎる。何もかもが圧倒的に不足している。勝敗を競うことすら愚かしい。それでも——！！

「うおおおおああッ!!」

裂帛の気合を込めて吼える。存在の力が全身を荒れ狂い、腕を伝い、手を介して『ブルトザオガー』に流れ込む。ウオン、と大剣の刀身がウーファーのように低く唸り、次の瞬間、火の玉が炸裂したような衝撃が目と耳を劈いた。『ブルトザオガー』の固有能力、存在の力を流し込むと接触している相手にダメージを与える効果が発動し、大太刀とその持ち手を弾き飛ばしたのだ。その反動で僕自身も後方へ弾かれるが、間合いが開けて逆に好都合だ。

痺れる腕を叱咤して、ブルートザオガーを正眼に構える。剣術はシヤナから毎朝毎晩の鍛錬でみっちり教え込まれたが、まだまだシヤナに傷ひとつつけられていない。素人に毛が生えたようなものだ。でも、やるしかない！

弾き飛ばされたサユは、まるで何事もなかったかのように地表に着地を決めていた。だが、羽織っていた外套もその中に着ていた濃紺の給仕服もところどころが無残に裂けている。俯くその顔から、ポトリと一滴、弱い粘性を帯びた赤い液体が滴り落ちた。さらに追隨して鮮血が次々に地面を打ち、血の飛沫を散らせる。ほんのわずかでも相手にダメージを負わせられて、僕の心にも一陣の希望が吹き込む。この剣と触れた敵は、その接触が直接・間接問わず痛烈なダメージを負うことになる。シヤナも、この剣を縦横無尽に振り回して戦う「愛染自」ソラトとの戦いで苦戦していた。接近戦を得意とする者相手に戦うのなら、この剣ほど最適なものはない。

（ありがとう、田中、佐藤！）

この剣を今日渡してくれた田中と佐藤に感謝する。これなら、サユもこちらとの剣戟を警戒して攻撃の手を緩めるかもしれない。時間稼ぎの道筋が見えてきた。乱れた呼吸を鎮め、眼前の相手の一挙動一投足まで見逃さないように意識を集中し——かたかたと乾いた金属音が鼓膜を突きぬけ、脳を冷ややかに貫いた。サユの双肩が、いや全身が、細かく震えている。その音は、大太刀が震動して発する音だった。軋るような、噁

り泣くような声が俯く顔から漏れる。サユが総身を痙攣させながら、抑えきれなくなつた情念を漏らしている。その情念とは、

——なんで、笑つてるんだ。

悠二の背筋を悪寒が奔り抜ける。思考ではなく本能の域で、恐怖が湧き上がつてくる。身が竦むのを理性でなんとか防ぐが、内心の震えは止まらない。俯いていた顔がゆつくりと持ち上がる。頬に真一文字の傷を走らせおびただしく流血させながら、だどいうのに、その艶やかな美貌には悪鬼のように獰猛な笑みが張り付いていた。

「そうか、この世界のお前はもう存在の力を使いこなせてきているのか」

何が嬉しいのか、シヤナの声で楽しげに低く呟く。喉をグルルと唸らせ、鋭い八重歯を剥き出しにして、なおもサユは口端を耳に届くほど吊り上げる。

「だったら、こちらも遠慮はしない……!」

冷徹な殺意が解き放たれる。歓喜か狂喜か見分けがつかない凄然とした破顔に、本能的に背筋が固くなる。野生の獣じみた眼光に見据えられ身を固くする僕の前で、サユの衣服に変化が生じた。じわじわと内側から染み出てくるように、サユの濃紺の給仕服が白銀に染まってゆく。存在の力を鋭敏に察知することのできる僕には、その変化の正体

を見破ることができた。サユの体内で沸々と湧き出る存在の力が衣服を侵食し、支配し、強化を施しているのだ。白銀の光が強化繊維で編まれた給仕服の全てを飲み込んで、メリメリと音を立てて変化させ、ついにその全容を明らかにさせる。

華奢に走らず、無骨に落ちず、それは機能美と豪奢さを紙一重のバランスで両立させた戦装束だった。磨き上げられたかのように銀色に輝く鎧を各部に備え、その下に華美でありながら決して動きを阻害しない純白のドレスを纏っている。猛々しくも流麗なその戦装束はシャナそつくりの可憐な容姿に見事に適っていた。

しかし、決定的に足りないものがあつた。シャナの持つ華やかさと輝きを、目の前の少女は一切持つていなかった。見る見るうちに治癒されてゆく頬の傷の上で、冷然とした愉悅を浮かべた双眸が燃えている。衣服をこれほどまでに変化させてなお余りある存在の力が現実世界にまで干渉し、轟然と唸る竜巻を引き起こし、サユを包む。竜巻の中心で、サユの絹のような長髪が、奈落のような瞳が、純白に染まってゆく。それは清浄な色彩というより、あまりに純粋な闘志の塊に見えた。その肩に轟ゴウと漆黒の外套が翻り、旋風に激しく靡く。

これが、フレイムヘイズ“白銀の討ち手”の完全兵装だった。

度外れた圧倒的なプレッシャーに打ちのめされ絶句する悠二に、サユが大太刀の切っ先を真っ直ぐに突きつける。その瞳は、限りなく獰猛で残忍な、全てを跡形もなく塗り

つぶす白。

「さあ、坂井悠二——力の限り、足掻いてみせろ」

† † †

「おい、あそこだ！ビルの屋上！」

「ええ、見つけた！」

封絶の気配を探していたマジヨリーが地表を見下ろすと、そこには見慣れたフレイルムヘイズが二人、封絶の中で常人には見えない銀色の光の壁を前に苦戦していた。紅蓮の炎を纏った少女が太太刀の一閃を結界に叩き込むが、光の壁にはわずかな亀裂が走っただけだ。すでにその行為は何度も繰り返されているらしく、攻撃のたびに亀裂は少しずつ広がっているものの、少女の頭一つ分の隙間すら開いてはいない。しかも、その隙間は攻撃を加えるのをやめると自ら修復している。地脈のエネルギーが常に循環するこの結界は驚異的な自己修復機能を備えているため、力業でこじ開けるのは極めて難しいのだ。だが、それで諦めるような少女ではないことはマジヨリーも十分すぎるほどに承知していた。これだけ必死になっているということは、この隔絶結界の中には十中

八九、坂井悠二が閉じ込められているに違いない。その健気さに微笑を浮かべ、マー
 ジョリーは封絶に穴を開けると少女の元へ急降下し、金の髪を翻して降り立つ。

「ちびじやり、そんなことしてもこの結界は破れないわよ」

「『弔詞の詠み手』!？」

少女——『炎髪灼眼の討ち手』シャナが驚いて振り返る。頭に血がのぼって、マ
 ジョリーの接近すら察知できていなかったようだ。少女の隣では、『万条の仕手』ヴィ
 ルヘルミナ・カルメルがじつと佇んでいる。彼女はマージョリーの接近に気づいていた
 らしく、この事態に多少の戸惑いはあるようだが、視線を交わすと「すべて把握してい
 る」と頷きを返してくる。

「『弔詞の詠み手』、これがいったい何なのか、知っているようだな」

シャナの神器から投げ放たれる、『天壤の劫火』アラストールの静かながら威厳を滲
 ませる声。これが隔絶結界であることは彼にも理解できているだろう。彼が聞きたい
 のは、『この事態が何者によって引き起こされたか』である。もちろんマージョリーは
 知っている。が、答えるのは憚られた。まさか、この場で『未来の坂井悠二がフレイム
 ヘイズになってやってきた』と説明するわけにもいくまいし、その姿形がシャナに似て
 いることを伝えても、あまりに突飛過ぎてこの堅物たちにはおいそれと受け入れられな
 いだろう。それに、肝心のサユの行動の真意についてはマージョリーですら想像もつか

ない。坂井悠二を結界内部に閉じ込め、自分たちフレイムヘイズたちから切り離し、そして何をしようとしているのか。さっぱりわからないが、このまま放置するわけにはいかないという直感だけは頭蓋のなかでしきりに声を荒げている。説明している時間はない、と断じたマージョリーはアラストールにひらりと手を振るだけに済ませた。

「ええ、知ってるわ。だけどそれは後回し。今は一秒でも早く、この結界に穴を開けなくちゃね——ヴィルヘルミナ？」

「ええ。フレイムヘイズ二人なら、この結界にある程度の大きさの亀裂を開けることができるのであります」

マージョリーの意を汲み取ったヴィルヘルミナが正確に引き継ぐ。シヤナはそれだけですべてを把握した。

「亀裂は小さい。だから、一番身体の小さい私がそこに飛び込めばいいってことね」

相変わらず勘のいいちびじやりだ、とマージョリーは不適に微笑む。ヴィルヘルミナも一見無表情ながら、長い付き合いの者が見ればわかる満足げな微笑を口端に浮かべた。二人の猛者の視線が交差し、無言の内にタイミングを示し合わせる。次の瞬間、群青色の炎と桜色の炎が二人の総身を包み込んだ。

「ちびじやり！言っとくけど、亀裂はあんた一人が入るのが精一杯だし、それもすぐに閉じるわ！」

「つまり、我々はすぐに加勢にいけなないのであります」

世界に名声赫赫たる古強者ふるつわもののフレイムヘイズ二人でさえ、この大掛かりな結界にはシヤナ一人が通るだけの隙間しか開くことはできない。だが、シヤナにはそれで十分だった。どんな敵も圧倒してみせるという決意に満ちていた。二人に力強く頷きを返し、跳躍一つで数メートル後方へ下がる。そして髪と瞳を紅蓮に染めたかと思いきや炎の翼を爆発的に拵げ、体勢低くグツと身構えた。それを確認したマージョリーとヴィルヘルミナが身に纏う炎の勢いをより一層激しく燃え立たせる。

「ヒィーハーッ！ 派手にかまそうぜ、
“夢幻の冠帯” イ!!」

「委細承知」

マルコシアスとティアマトーの力強い応酬に弾かれるように、二人のフレイムヘイズが渾身の力を込めて、貫通力を極限まで高めた一撃を放つ。桜色のリボンの一撃と群青の爆炎が混ざり合い、巨大な炎の砲弾となって結界の壁に激突する。大破壊力を帯びた二人の攻撃を受けた結界は、無限に近い地脈のエネルギーを吸い上げて微塵も揺るがず立ちはだかっていた。しかし、世界で10の指に入るだろう最強レベルのフレイムヘイズ二人の猛攻は容赦がなかった。

「だあああッ!!」

「はあああッ!!」

気合の咆哮が重なり、二度目の砲弾が激突する。雷鳴も及ばぬ轟音が足元のビルを揺らす。十字の光が迸ったかと思いきや、ガラスが割れるような鋭い音を立てて結界は屈した。それまでシャナの剣戟では傷しか入らなかつた強固な壁に、一メートル四方の鋸歯状の穴が穿たれ、内外の気圧差によつて水蒸気を吸い込み始める。穴の向こうには空恐ろしいほどに虚ろな闇が立ち込めていて、前途に待ち受ける多難さを明示していた。だからなんだというのか。

常以上に激しく燃える紅蓮の双翼がバンと大気を叩き、背後で爆発が起きたかのような速度をシャナに付加した。時速にして優に毎時300キロの初速を獲得した肉体はぐんぐんと加速し、逸る思いを燃燒剤に変えてなおも速さを増す。衝撃波をも置き去りにしたシャナが神速で亀裂を擦り抜ける瞬間、

「ちびじやり、気をつけんのよ！ 相手はあんたにとって最悪の敵よ!!」

かろうじてマージョリーの忠告が耳に入った。最悪の敵、と聞いてもシャナの胸中に恐怖は生じなかつた。『零時迷子』を、悠二を脅かす存在ならば、それが何者であろうとも問答無用で一刀両断に切り捨ててみせる。速度はついに亜音速域に達し、彼女の鼻先に円錐状の雲を生じさせる。

「待ってて、悠二——!!」

炎の稲妻と化した少女は大切な少年の元へ駆けつけるべく、暗闇の中へと飛翔した。

† † †

なんという、膂力。なんという、速度。

受身をとることすらできずに地面に叩きつけられ、身体をバネのように跳ねさせながら、僕は相手の力に底しれぬ畏怖を覚えた。あまりに強烈な衝撃に手足が全て外れ落ちてしまったかのような錯覚に陥る。だが、痛みになら今までの数々の訓練や戦いで慣れている。常人なら気絶しかねない意識を焼けつくす激痛にも、ギリギリのところまで懸命に堪えた。足元に転がっている『ブルートザオガー』を自分でも驚くほど機敏な動作で掴み、痛みを押し滑るような動きで立ち上がるとその勢いを殺さぬままに猛然とサユに斬りかかる。力任せの攻撃ながら、『ブルートザオガー』の重さも加わったその渾身の斬撃は分厚いコンクリートですら切り裂く威力を孕んでいた。衝撃が腕に奔る。金属バットで金床を猛打したような鈍い衝撃だった。

「ぐう……ッ!？」

果たして、僕が力の限りを込めて繰り出した渾身の一撃は、サユの片腕の手甲だけで防がれていた。白い双眸が再び愉快げにほころぶ。

「ボクより成長が早いな」

サユが何を言っているのか、理解できなかった。理解する余裕もなかった。存在の力を込めて『ブルートザオガー』の本領を發揮しようと柄を握る力を強めるが、むぎむぎそれを許してくれる相手ではなかった。サユがまるで羽虫を払うかのように無造作に腕を振る。それだけで、僕の身体は大きくよろめいた。一回りも二回りも体格に差がある矮躯の少女に赤子のように翻弄され、悔しさに歯噛みする。たとえ相手が物事の条理など簡単に覆す超常の存在だったとしても、僕のプライドはズタズタに切り裂かれそうだった。

「だあああ——ッ!!」

悔しさを怒りを剣に乗せ、もう何度目かもわからない一閃を放つ。鼓動が胸郭で狂ったように鳴り響いている。筋肉はとうに痛みを叫ぶ段階を超えて感覚が消え失せている。しかし、耗弱する精神と肉体とは反比例するように、その剣の冴えは瞬く間に上がっていく。

坂井悠二は、その生まれ持った性質として、危機的状况になればなるほど本領を發揮するという稀な特性を有している。それが今、發揮されているのだ。

酸素不足で朦朧とする脳みそを厳しく叱咤して、シヤナとの鍛錬で教わった極意を引つ張り出す。地を踏む両脚の力に、腰の回転、肩の捻りを相乗させ、全身の瞬発力を総動員してこの一撃に集積させる——!!

朗々たる金属の打撃音が鳴り渡った。

今度はさすがのサユも手甲だけでは防ぎきれないと判断したのか、大太刀を盾にして防御する。瞬時に弾き返そうと大太刀が動くが、それよりも僕が剣に存在の力を装填する方が早かった。バアン、と耳を聳さんばかりの凄まじい炸裂音が『ブルートザオガー』と大太刀の接点から生ずる。次には、なんと銀の大太刀が真ん中から破断し、咄嗟に防御に回されたサユの手甲すらも粉々に碎け散った。それでも衝撃を受け流しきれなかったのか、たまらずサユが後方へ跳び退く。剣を振りながら同時に強い存在の力を流し込むという高度な技に初めて成功し、それによつて相手の武器をも破壊して、僕は自分自身の急激な成長に心から驚いた。しかし、それで油断などできるはずもなかった。今までのサユの攻撃に手心が加えられていたのは明らかだったからだ。

（——なんなんだ、この違和感。まるで）

ふいこのように呼吸しながら、「まるで自分を鍛えているようだ」と心中で呟いた。事実、僕は、サユと一合を交えるごとに自分が成長していると実感していた。何度と無く危機的状况に陥れられるたびにすんでのところまでそれを乗り越えた。今や、ストレスや苦痛がなんの意味も持たない、より高次の「戦士の領域」にへと足を踏み込もうとしているほどだ。あたかも導かれているかのように。だが、そんなことをしてもサユには何のメリットもないはずだ。

いったい何を考えているのか、と疑問に満ちた目でサユを睨み——その姿がノイズのようにザツと掻き消えた。ギアを入れ替えたような本気の急加速に動体視力が追いつかない。思わず思考を止めてしまった僕の視界を白銀が埋め尽くす。脊髄の反射によつて持ち上げることができた剣の刃に、いつのまに取し出されたのか新たな大太刀の刃が激しく重なり、否応なく拮抗状態に突入した。シャナにとつての『贄殿遮那』がそうであるように、サユの武器も大太刀だけだと思ひ込んでいた。自らの浅はかな先入観に首を絞められる形となつてしまつたのだ。

「ぐ——うう——!!?」

後悔の暇も与えてはもらえない。メキメキと不快な音を立てて刀身同士の接点から火花が散る。腕の筋肉に血管が浮かび、今にもはち切れそうだ。存在の力を流し込む意識の余裕がない。刀身を挟んだ正面で、シャナそっくりの顔が火花の照り返しを受ける。その顔にもう笑みの色はない。サユは本気だつた。僕が本気にさせたのだ。これまでとは段違いの雄牛を相手にしているかの如き圧力に、人間の筋力しか持たない僕が対抗しうるはずもない。

「——がッ!」

巨大な掃除機に吸い寄せられているような錯覚に戸惑う暇もなく、石垣に背を思い切り叩きつけられる。弾き飛ばされた、と直感が訴える。耐え切れずに漏らした悲鳴も、

掠れた呻きにしかならなかった。激痛は喉の奥につかえたまま外に出て行かず、体内を激しく蠢く。

それでも、諦めるという選択肢は存在しない。

軋みを上げる身体に鞭を打ち、立つことすらおぼつかない身体を壁にしがみついてかろうじて支えて立ち上がる。全身から血が滲んでいた。怪我をしていない箇所の方が少なかった。酷使しすぎた筋肉は限界をとうに超え、感覚が返ってこない。指先の毛細血管ははち切れ、爪の間から血が滲んでいる。気を抜けばこのまま昏倒してしまいそうな疲労感によるめきながら、それでも僕は意志の力を総動員して立ち上がった。

自分の弱さは嫌というほど痛感させられた。シヤナがいなければどうしようもなく自分は無力だ。だけど——— だけど、諦めるわけにはいかない！ 絶対に！

「約束、したんだ！ シヤナと、また明日」って、約束したんだ……い！」

残されたわずかな力を肉体の底の底から振り絞ると、腰を落としていつでも切り返せるように剣を正眼に構える。その見開かれた双眸には、不屈の精神が、戦士の魂が宿っていた。その視線を真っ向から受けたサユの顔に、一瞬だけ——— ほんの一瞬だけ、何かに安堵したような微笑みが浮かんだことに、僕は気づけなかった。踏みしめる足が路面を叩く衝撃が地面を介して伝わり、今度こそ自らの最期を覚悟したからだ。

それでも、僕は眼を逸らさない。文字通り死にもの狂いの勢いで猛然と剣を振るう。

高速で交わる剣戟。

一度だけ大太刀の攻撃を受けとめた『ブルートザオガー』が遥か空中に弾き飛ばされる。

返す刀で翻った銀色の剣閃が首に迫り、

空振った一閃の風圧が何も無い空間を吹き荒れた。

対象を見失った風圧は、間合いの遙か外の家屋の外壁を切り裂く。その家屋の屋根に、紅蓮の火の粉が桜の花のように美しく乱れ散る。

—— 力強く羽ばたく、激しく紅蓮に燃え盛る炎の翼。

—— 地獄から溢れ出したかのような業火に彩られる長髪。

—— 灼熱の闘志を宿し、眼前の敵を射殺さんばかりに怒りに燃える双眸。

見紛う事なき、最強のフレイムヘイズと謳われる“炎髪灼眼の討ち手”であった。その足元には、力尽き倒れ伏している悠二の姿があった。サユの大太刀が悠二の首を両断するコンマ数秒の間に、超高速で飛来したシャナがすんでのタイミングで悠二を助け出

したのだ。あらためて悲惨な姿で苦しそうに喘ぐ悠二を見て、シャナの双眸に猛々しい怒りの炎が宿る。

「なぜ、今になって……」

呻くようなアラストールの声。キツと視線を転じれば、白銀のフレイムヘイズはなんの感情も伺えない表情でシャナを見上げていた。アラストールは、眼前のフレイムヘイズに対して何かしらの覚えがあるようだった。『サユ』という名の、外見が自分に酷似したフレイムヘイズ。見れば見るほどにそっくりだ。まるで色を反転させる鏡を見ているような錯覚さえ覚えるほどに両者はよく似ている。だが、シャナにとってはそんなことは関係なかった。たとえ自分そっくりの姿をしていたとしても、悠二をここまで傷つけ、殺そうとしたことは絶対に許せない。かける言葉など、交わす言葉など、寸毫足りとて無い。シャナの背に広がる双翼が、彼女の激情を顕すように大きく羽ばたく。

憤怒に燃える紅蓮の視線と、冷ややかに凍った純白の視線が交錯する。

ここに、『炎髪灼眼の討ち手』と『白銀の討ち手』の熾烈極まる戦いの火蓋が斬って落とされた。

3—4 苦戦

「久しいな、頑固ジジイ」

サユとシヤナの視線が火花を散らせ、着実に張り詰めていく空気のなか、地鳴りのように低い声が響いた。それに応えるのは遠雷のように低い声。

「『贋作師』……。貴様、今までどこで何をしていた」

「おかげ様で、1000年ほど前にアンタに大目玉を食らってから、ほとんど紅世に引きこもってたさ。だが先日、俺もようやく、相応しい契約者を見つけた」

「先日、だど？ いったい何を言っている、『贋作師』。貴様ら、あの戦いのあと500年間もいつたいたいどこでなにをしていた？」

「500年前？ そつちこそ何を言っていやがる、ついに耄碌もうろくしたか？ こつちは早く『零時迷子』の贋作を創りたくて仕方が無いんだ。さつさとそこをどけ」

「なに……!？」

両者の互いへの認識には決定的な齟齬が生じていたが、『零時迷子』の贋作”という容認できない要求によってアラストールの感情は一気に憤怒へと向けられた。

「あのような常軌を逸した宝具が増えれば世界のバランスがどうなるか、わからぬ貴様

ではあるまい！何を考えている！？」

たしかに、まだアラストールが紅世の世界に君臨していた1000年前、若かりしテイレスシアスによる無秩序な宝具の贗作を危惧し、叱責の雷を落としたことがあった。それは今回のような暴挙に出ることを未然に防止するためであったし、テイレスシアスもそれを理解したはずだった。だが、反省の色も見せないテイレスシアスの傲岸不遜なさまに、虚仮にされた形となったアラストールは憤然として怒鳴る。轟々と怒りに燃える少女の胸元にあつても、圧倒的な怒気で大地を震わせる迫力は魔神そのものだ。

だが、それに飄々と応える紅世の王もまた、それで臆する器ではなかった。

「俺は贗作を創ることができれば、他のことなどどうなろうが知ったことではない。それに、我がフレイムヘイズも『零時迷子』を欲している。やっと手に入れた、俺の力を十全に引き出すことのできるフレイムヘイズだ。些細なことで仲違いをしたくはないのでな」

「些細なこと、だと!？」

テイレスシアスは一切の聞く耳を持たない態度をあらさまにし、アラストールの逆鱗を刺激する。語気を荒らげていく二人と同様に、対峙する紅蓮と純白の鬨気が二人のフレイムヘイズの間で衝突し、緊張感は否応なく高められてゆく。互いが互いを油断なく見据えながら、同時に大太刀の柄を握り締める。

「貴様ら……500年を経て、墮ちるところまで墮ちたか」
途端、地を底から揺るがすような豪笑が辺りに鳴り響く。

「何がおかしい、『贗作師』」

「いや、なに。同胞殺しを根っからの生業にする者が墮ちるなどと、平然と口のできるとは思わなくてな。それより墮ちる外道など、元よりありはしないというのに」

相對する自分と同じ姿をした敵から放たれる、身体を串刺しにする殺気。

互いが放出する高密度の鬨気が周囲の光景を陽炎のように揺らめかせる。
必滅の大太刀の切っ先が対峙する敵を見据える。

「——口で言ってもわからんようだな、偏屈者の小僧」

「おう、ならどうする？頑固ジジイ」

テイレシアスの挑発を、アラストールは挑戦と受け取った。言葉による説得の時間は
終わりを告げたのだ。

会話が途切れた瞬間、両のフレイムヘイズから放たれた鬨気が大気を燃やす。その余
憤が互いの鬨気の衝突点にある地面に小さな亀裂を走らせる。あらかじめそれを合図
と取り決めていたかのように、両者は同時に地を踏み砕いた。

二振りの大太刀が満月を描く。紅蓮の大太刀は炎の軌跡を上弦の月に、白銀の大太刀
は氷の軌跡を下弦の月に。切り裂かれる大気の悲鳴が鼓膜を穿ち、地面を這うように煌

く刃が地を両断する。極限まで鍛え上げられた鋼と鋼が爆発的な速度で激しく合間見えた。その余波で、互いの胸の神器が激しく衝突する。恫喝の如き衝撃音に負けない怒声で、魔神と王が情念に身を任せて吼える。

「身体でわからせてやろう、『贗作師』!!」

「臨むところだ、『天壤の劫火』!!」

† † †

紅蓮と白銀が拮抗する。火花を散らし、互いに押し潰さんと全力で鎬を削る。その紅蓮を纏った少女、シヤナは心のどこかで落胆に似た感情を覚えていた。『弔詞の詠み手』に最悪の敵と言わしめたほどの相手だ。自分に瓜二つということもあり、どれほどのものかと覚悟をして挑んだが、こうして刀を合わせていれば相手の実力が手に取るようにわかる。この罅迫り合いは互角に見えて、実はシヤナの方が数歩も勝っていた。全力を出してこの拮抗を崩せば、すぐにでも大太刀を弾き飛ばして目の前の敵を斬り伏せられる。そう、剣技だけならシヤナの方が一枚も二枚も上手だということは明白だ。シヤナの身体と『贗殿遮那』に蓄積された情報を得たとは言え、サユの剣技の実力はシヤナに劣る。——剣技だけなら。

刀身が十文字に交差し、一再ならず鍔迫り合う。力押しの状態になれば、やはりシャナに有利だ。理由はわからないが、身体能力の面でもシャナの方が一枚上手^{うわて}だった。「勝てる」と確信したシャナの頬がそれとわからぬ程度にほころぶ。ふと、視界の隅でサユの漆黒の外套がはらりと靡くのを何気なく視認した。そこから一枚、銀色のトランプカードが滑り落ちる。理性的な思考ではなく本能的な直感が、強烈な警告を発する。スパー드의A。シャナはその宝具に見覚えがあつた。それは、「狩人」フリーアグネが持つていた――

「な――!?!」

見開かれたシャナの視線の先で、カードは無数に分裂していく。人知を超えたスピードで幾百幾千と増殖し、魚群のように高速で宙を舞う。それは、フリーアグネの有していたトランプ型の攻撃宝具『レギュラーシャープ』に他ならなかつた。『レギュラーシャープ』は一枚一枚がまるで意思を持っているかのように華麗に宙を飛び回り、急上昇と急降下を繰り返しながら隊伍を整えると一斉にシャナに向かつて襲い掛かる。対応しようにも鍔迫り合いの状態では防御ができない。回避行動に移ろうと『贄殿遮那』を力任せに振るつてサユの大太刀をいなすと大きく後ろに跳び退る。

「いかん、シャナー!」

悲鳴じみたアラストールの叫びに驚き、そして鈍い感触とともに『贄殿遮那』に巻き

付いた白銀の鎖にさらに驚愕した。大蛇のようにとどろを巻いて喰らいついた鈍重な鎖によって、シヤナの両腕に尋常でない負荷がかかる。

これは、敵の宝具に巻き絡まり使用不可能にする、フリアグネの宝具——『バブルルート』！

突然重量を数倍に増した『贄殿遮那』に引きずられ、シヤナの動きが一挙に鈍る。グツと奥歯を噛む音に混じり、頭上からガサガサと激しい葉擦れに似た音が急き立てるよう
に迫る。

「うっ!?!」

見上げれば、『レギュラーシャープ』の大群が矢群と化して降り注いできていた。回避しようとする翼を広げるも、『贄殿遮那』が錨となつてシヤナの挙動を封じる。回避できないように縛ったうえで、点ではなく面での広範囲攻撃を仕掛けてきたのだ。逃げる暇はない。

「強引に断ち切れ!」

「はあああああつ!!」

全身全霊の力を込めて『贄殿遮那』を振るう。人間の域どころか並のフレイムヘイズすら遙かに超えた怪力と熱量がマグマの如くほとばしり、『バブルルート』はバターのように一瞬で融解した。刀身にへばり付いたヘド口状の残骸を一振りで吹き飛ばし、枷を

断ち切ったシャナは返す刀を頭上の『レギュラーシャープ』に斬りつける。炎を付加された斬撃は破壊的な力の本流を生み出し、『レギュラーシャープ』の群れを粉微塵と化した。殺到する衝撃波に遅れて豪雨のような粉塵が辺り一帯を覆い隠し、視程すべてをグレーに染め上げる。皮肉にもそれは煙幕の役目を果たし、シャナの身を隠してくれた。相手の算段を阻止したことに安心し、シャナは身をかがめて息を整える。しかし、奇妙な手応えだった。宝具にしては強度が低すぎるし、そもそも両の宝具ともフリアグネに付き従って燃え尽きたはずだ。

「アラストール、今のは!？」

「『白銀の討ち手』の能力は『贗作』だ。一度目にした宝具をコピーし、使用者の経験も抽出できる。その能力で倒した紅世の王や徒は数知れぬ。そして何より、奇妙に頭の回転が速い。強敵だ、油断するな」

「……わかった」

アラストールと『贗作師』テイレシアス、そして自分に瓜二つの容姿をしているサユという契約者の間には、何かただ事ではない因縁があるようだった。アラストールが彼らの能力のみならず性格まで諳んじているのが証左だ。自分の知らない因縁とは何なのか。しかし、今はそれについて追求をしている場合ではない。思考を逸したまま勝てる相手でないことはすでに悟っていた。

「自分の能力を使いこなしてる。あいつ、強い」

どんなに精巧な贗物を造り、使い手の経験を抽出しても、必ずや技に劣化が生じ、齟齬が生じるのが道理だ。いかに経験を手にしよう、使い手がその身に刻んだ研鑽までは手に入れられない。だというのに、“白銀の討ち手”は繰り出す宝具をまるで四肢の延長のように何不自由なく操っていた。個々の宝具の特徴を把握し、別の宝具の短所を別の宝具の長所で埋め合わせて隙のない戦術を構築している。身体能力、戦闘技術ではシヤナが数歩分も先に進んでいるが、戦いの上手さではサユがより柔軟かつ巧妙だ。マージヨリーの『最悪の強敵』という忠告は的を射ていたのだ。

悔しいという感情を意識の外に追いやり、シヤナは冷静に相手との力量の違いを分析した。

「奴の贗作は総じてオリジナルよりも強度が弱い。しよせん偽物だ。その弱点を攻めるのだ」

アラストールの助言に無言で頷き、周囲の気配を探りながらもパズルピースを組み合わせてるようにサユの一連の攻撃を冷静に見極め、対抗策を導き出す。相手の強みは、種類に富む贗作宝具によって多種多様かつ臨機応変な連続攻撃ができること。弱みは、贗作一つ一つの強度が低いために強力な一撃に踏み出せないこと。こちらが力技で押し切れば、先の『パブルルート』のように簡単に破壊できる。先攻の出鼻を挫いて攻撃を

連続させなければ、敵の得意とする連撃に楔を打てる。そうすれば、自ずと勝機は見えてくる。要は力押しだ。出力勝負なら、決して負けない。

戦術は決まった。煙幕となってくれていた粉塵から抜け出そうと身体を前のめりにして駆け出し——痛みに先んじた直感が、シヤナを死地から救った。

「ッ!？」

直感に従い、全身の筋肉を総動員して半身を仰け反らせる。その鼻先を、粉塵を穿ち、唸りを上げて白銀の剛槍が貫いた。肩口を浅く抉られ、風圧に前髪が幾房か千切れる。槍を切断せんと『贄殿遮那』を振りかぶるが、持ち手の姿を見せない槍は瞬く間に刃圍から粉塵の闇へと姿を消す。持ち前の高度な体捌きで瞬時に体勢を立て直し、夜笠を身体を包むように展開させて防御力を上げる。気休め程度だが、ないよりはマシだ。シヤナの額にじわりと汗が滲む。さっきのは一級の槍騎兵に匹敵する槍撃だった。正直、危機一髪だった。

(気配は感じなかったはずなのに、どうして!?)

シヤナというフレイムヘイズは限りなく接近戦に特化している。相対する相手の動きを読み、気配を掴むことは彼女の得意とするものだ。どんな敵にでも動作の直前に気配が生じる。姿が見えなくとも、聞こえなくとも、臭わなくとも、鍛え抜いた第六感が気配を察知する。それさえ読めれば、シヤナは相手の考えている次の行動すらいとも容

易く読み解いてみせるだろう。しかし、今の攻撃にはその気配がなかった。そもそも、他のフレイムヘイズに察知されることなく悠二を襲撃できたことからして、何らかの隠蔽をしているのかもしれない。粉塵で全周囲の視覚を遮られたうえに気配も察知できないのでは、対処のしようがない。臍を嘔むシヤナの背後から再び槍の穂先が姿を現す。常軌を逸した刺突の連撃は数え切れないほどの槍の残像を作り出す。それはまさに槍の弾幕だった。この世界の物理法則にあるまじき狼藉に、大気がヒステリーをこして絶叫する。

「だあああああッ!!」

対するシヤナもそれら全てを『贄殿遮那』で迎撃する。目で見た情報が脳に届くより先に肉体が動いた。あらゆる方向に瞬時に対応し、襲い来る必殺の猛攻を一つ残らず切り払う。ひるがえる手さえ見えぬ剣舞は数秒と続かなかった。あまりに苛烈な衝撃の連続に、贗作に過ぎない槍の強度が限界を迎えたのだ。砕け散っていくその槍にもシヤナには見覚えがあった。千変シユドナイの持つ宝具、『神鉄如意』だ。

「次から次に……!」

あらためて最大限に集中して気配を探ってみるが、やはり察知できない。代わりに、鋭敏な聴覚が側方で轟と風を斬る音を捉える。如何な達人であっても対処不可能な視界外からの攻撃に、神業と称すべき体捌きで『贄殿遮那』が防御に繰り出される。金属

音の大音響。受け止めた銀色の太刀を見て、シヤナの背筋が凍る。

（——『ブルートザオガー』!?）

咄嗟に夜笠に意識を回し、身体を包み込むようにして前面に即席の盾を作る。一瞬遅れて全身を叩きつけてくる衝撃。夜笠を貫通した波動によって衣服が裂け、白い肌に幾筋も裂傷が刻まれる。無我夢中で夜笠を振り払い、反撃を叩き込もうと刺突の構えを取るが、敵の姿はすでにない。今度はすぐ背後で地を蹴る音。人の規格を超越した動作で轉身し、再び襲いかかる斬撃をかるうじて迎撃するも、刀身同士が触れたがために横腹と太腿に激痛が走る。その余波を受けたアスファルトに無残な破壊の傷跡が刻まれ、石礫が爆竹のように弾け舞う。

（なんて、イヤな奴！）

シヤナは戦慄に歯噛みする。『レギュラーシャープ』を破壊して煙幕状にさせたのは、意図しての作戦だったとようやく理解したからだ。姿を隠して利を得たのは自分ではなく、敵だった。自分はまだ、相手の手のひらから抜け出せていない。反撃に転じようにも、相手の姿も気配もわからない状態ではそれすら不可能だ。せめて粉塵が消えて姿が見えれば——。

「だったら、吹き飛ばせばいいまで！」

ふたたび襲いかかってきた『ブルートザオガー』を少々のダメージを覚悟して渾身の

力で弾き飛ばす。肉体が訴える痛覚を冷然と軽視し、シヤナは硬化させた夜笠を刃のように左右に突きたてて大きく身体を捻ると、猛然と回転を始めた。それはまるでブレードのついたコマだった。荒れ狂うハリケーンが中心に出現したかのように、立ち込めていた粉塵がまたたく間に散らされていく。肉を切り裂く殺傷能力を有した竜巻は、攻撃は最大の防御”を体現してシヤナの身を護りながら煙幕を彼方に吹き飛ばした。唐突に回転が停止し、シヤナが女豹のように四肢をついて地に着地する。その様子に大回転による三半規管の乱れは微塵も見られない。

敵の姿がはつきりとする。サユはシヤナから大きく間合いを開けて前方に佇んでいた。総身を包むように外套を被るといふ奇妙な格好をした彼女からは、姿は見えるのに気配がまったく感じられない。まるでプロジェクターで投影される空虚な立体映像でも見ているかのようなのだ。眉をひそめるシヤナの眼前で、サユはブレードの竜巻に無残に切り苛まれた外套を何のこだわりもなくチラと一瞥するとザツと背に払う。途端に、シヤナは相手の殺気や闘気を鋭敏に察知できるようになった。あの外套こそ、サユの気配を遮断していた宝具のようだった。

(……あいつ、私の戦い方を知ってる)

そつくりだから、という理由では説明できないほど、サユはシヤナの苦手とする攻撃を熟知していた。その持ち前の俊敏さを活かした接近戦闘を得意とするシヤナの俊足

を封じ、視界と気配を隠して、かつてシヤナを大いに苦戦させた『ブルートザオガー』による攻撃を行なってきた。そして奇妙なことに、その太刀筋はどこかシヤナに似ていた。

(……どこかで会ったことがある?)

シヤナは、対峙する敵がまるで自分の戦いをずつと間近で見ているかのような奇妙な感覚を覚えた。そして、その太刀筋にも同じような既視感を覚えた。執拗かつ的確に自分の弱点を突いてくる謎の強敵に冷や汗をかき、

「なッ!」

信じられないことが起きた。突然、サユが『ブルートザオガー』を乱暴な動作でシヤナに向かって振り投げたのだ。あたかも幼児が興味を失った玩具を放り捨てるような雑な動作は、投擲とすら呼べるものではない。『ブルートザオガー』の殺傷能力は、剣を振るう者が直接握っていないければ効力を発揮しない。敵に投げつけたところで無意味だ。武器を自ら捨てるという不可解な行動に戸惑うも、なにか対処しなければ自分につかる。相手の意図がわからないことにわずかに躊躇いながらも、迫るそれを『贄殿遮那』で横薙ぎに斬り裂く。たったそれだけで、存在の力の供給を断たれていた『ブルートザオガー』は呆気なく両断された。真つ二つにされた剣が空中で分割され、その影が左右の視界を覆う。手応えが、意外なほどに柔らかい。まるで斬ってくれと言わんばか

り――

「シヤナ!!」

アラストールの絶叫と世界を包み込むような轟音が重なる。シヤナの動体視力でさえ視認できない小さな何かの大群が、両断され宙を舞っていた『ブルートザオガー』を蜂の巣状に穿ち、またたく間に粉碎し、音速を超えてシヤナに迫る。意識するより疾く、肉体が感電したかのように敏速に跳ね動いた。フレイムヘイズの動体視力を以ってしても視認できない物体群が毎時1500キロの音速で迫り、シヤナはほとんど勘だけでそれらを迎撃する。刀身を叩きつける重い衝撃がシヤナの華奢な骨身を容赦なく打ち振るわせる。

(なに、これ……!?)

苦痛に顔を歪ませながら必死に敵の持つ武器を見据える。二つの明滅する閃マズルフラッシュ光。その後ろで回転弾倉シリンドラーが激しく回転している。それがフリアグネの『トリガーハッピー』だとシヤナは瞬時に把握する。形は似ているが、二丁もあり、さらに威力はオリジナルを優に超えている。強化が施されているようだった。

「シヤナ、このままでは不味い! 距離を詰める!」

「わ、かってる、けど……! ううッ!!」

銃撃を迎撃するたびに激震に腕が痺れる。剥き出しにされた腕の骨をハンマーで直

に打擲されているようだ。絶対に折れることはないという並外れた特性を持つ『贄殿遮那』でも、持ち手が折れれば意味がない。柄を握りしめる手の甲が乳白色を通り過ぎて青紫色に達するも、銃撃は容赦しない。毛細血管が張り詰め、紅褐色の斑紋が痛々しく浮かび上がる。ついに迎撃できなくなった銃弾が夜笠を次々と穿ち、蜂の巣にしている。自在式を苦手とするシャナは、遠距離から攻撃をしかけてくる敵に対する攻撃手段をほとんど持っていない。唯一の手段は『炎弾』だが、これは存在の力を込めるのに時間がかかる。今の状況はシャナにとつて最悪のものだった。いつもは洗練された優美な輝きを放つ『贄殿遮那』も、今はその繊細さが心細い。

(せめてこの銃撃が一瞬だけでも止めば、状況を覆せるのに……！)

「やあああああッ!!!」

思わぬところから閃いた斬撃がサユを襲った。風を切り裂いて振り下ろされた大剣がトリガーハッピーを両断する。復活した悠二が総力を振り絞り、オリジナルの『ブルートゾオガー』で果敢に立ち向かっていったのだ。即座に放たれた反撃の拳に悠二の身体が吹き飛ぶ。

突然の事態に、しかしシャナは動じずに悠二の与えてくれたチャンスを生かすために地を這う稲妻となって肉薄する。10歩以上はある間隙を何の脚捌きも見せないままに滑走し、極限まで高めた力を両腕に集中させる。

人の域を超越する走法から繰り出される、持ち得る剣術の粋を結集させた斬撃。これなら——!!

金属音と衝撃音の多重奏に悠二は意識を取り戻す。

だが、その光景が目に入ってきた瞬間、坂井悠二はこれが夢ではないかと思った。それくらい馬鹿げていたのだ。

『贄殿遮那』を受け止めた、その武器の形状が。

「な——」

炎の飛沫を飛び散らせ、金属を擦り合わせる甲高い異音の多重奏を軋りたてながら『贄殿遮那』を受け止めているその異形の大剣に、さしものアラスツールも啞然とするほかなかった。

たしかにそれには柄があり、鏑もある。だが肝心の刀身にあたる部分が、あまりに常軌を逸していた。円錐状の刀身は螺旋状に捻くられて深い溝が刻まれ、先端は鋭く尖っている。そして、その刀身全体が轟々と唸りをあげて回転しているのだ。

それは即ち——ドリルだった。

3—5 決着

(何故だ、“白銀”)

アラストールの苦悶するような声が彼の心中を埋めていた。今、己のフレイムヘイズ、シヤナが総力を尽くして戦う敵、“白銀の討ち手”。その姿を前にして彼の脳裏をよぎるのは、懐かしい彼女との思い出だった。

『——ねえ、この娘』

『おおかた、流れ弾に当たつたのだろう。単なる不運なフレイムヘイズだ。捨て置け。それよりも“棺の織手”の討滅が優先だ』

(何故、お前が)

『……………いいえ、アラストール』

『マテイルダ?』

(何故！)

『この娘は、運命よ』

彼女が見つけた運命の娘が、彼が見つけた運命の娘と敵対する。それはまるで彼女と敵対してしまっているようで、アラストールの胸は言いようもない煩悶に引き裂かれそうだった。だが、もはや少女たちの戦いを止めることは出来ない。アラストールの悲痛な思念とは裏腹に、“炎髪灼眼の討ち手”と“白銀の討ち手”の熾烈極める戦闘はさらに激化の一途を辿っていく。

その異形極まる剣のオリジナルは、紅世の王“壊刃”サブラクが有していた『ヒュストリクス』という西洋大剣型の宝具である。華美な装飾を一切好まない幅広の刀身をした剛剣は、この時間軸ではない未来において“探耽求究”ダンタリオンによってサブラクの預かり知らぬところで勝手に改造が施された。その結果、無骨で実用的だった造形は見る影もないほどに変貌を遂げ、サブラクは怒り狂ったとされている。しかし、その出来事を経たことで『ヒュストリクス』の誇る攻撃力が低下したわけではない。むしろ、曲がりなりに改造が施されたことで、その性能は飛躍的に向上している。

轟然と風を逆巻かせながら、刺突というにはあまりに巨大な一撃が放たれる。それを紙一重の差で回避したシャナの脇腹を回転する刀身が擦過する。途端、突風に身体を煽られて危うく体勢を崩しそうになる。剣の回転は刀身が回転するたびにその速度を増していく。一転ごとに早く、速く、なお疾く——気づけばドリル状の刀身はスクリューのように大気を激しく掻き乱し、周囲のあらゆるものを巻き上げるハリケーンの発生源と化していた。やおら頭上高々に掲げられた『ヒュストリクス』が己の力を示さんと囁々と咆哮する。破壊の嵐は蹂躪され粉碎されたアスファルトや建築物の残骸を軽々と上空へ吸い上げ、周囲の全てを吹き飛ばしていく。

「ぐッ!?!」

身体が空間ごと吸い寄せられ、シャナの姿勢が傾ぐ。『ヒュストリクス』は贗作の強度限界に達して紫電を撒き散らしながら、挫けることなく回転速度を増して捻れ狂う。攪拌される風の唸りが鼓膜を突き刺し、叩きつけるような強風が身体を連続して打ち据える。

(あ、あんなもの、一撃でも喰らったら……!)

想像しただけでも恐ろしい。シャナの小さな身体では、ただ掠っただけでも致命傷は免れない。触れればそこは肉片と化すだろう。直撃すれば結果など言うまでもなく、そこには死しか待つてはいない。

“白銀の討ち手”が純白の翼を大きく広げて大気を叩く。傲然と唸りを上げて迫り来る『ヒュストリクス』に、シヤナは一步も引かずに『贄殿遮那』を構える。あれほど巨大な剣なら、連撃の合間には必ず大きな隙を見せる。その虚を衝いて懐に飛び込み斬り伏せれば、勝機はある。過度に恐れる必要はない。いかに強大な攻撃も、見切つてしまえば怖れることはない。瞬間、シヤナの体内に炎が宿る。燃え盛る業火ではない。極限にまで高められた炎は青白く、波紋一つない湖面の如き静けさを持つ。体感時間が何倍にも引き伸ばされたような超感覚が覚醒する。

「——ふッ！」

眼前まで迫つたドリルの切つ先を、首だけの最小限の動作で回避する。頬を掠るように激しい閃光が過ぎり、烈風の音が鼓膜を叩く。小さな耳たぶに深い傷が刻まれるも、ダメージはそれだけに抑えられた。真正面には無防備な“白銀の討ち手”の胴体が晒されている。これで詰チエックメイトめだ。すでに予備動作を終えて振りかざした『贄殿遮那』はカウンターで敵を袈裟斬りにするだろう。さあ、どんな驚愕の色を浮かべているかとサユの顔を覗き込み、そのギョロリと冷たい双眸にギョツとした。

この時点でもまだ、シヤナは改造を施された『ヒュストリクス』の埒外の威力を見誤っていた。

シヤナの傍らを通り過ぎる刹那、『ヒュストリクス』がけたたましく絶叫した。限界点

をとうに超えて刀身の至るところに亀裂が走り、断裂し、その身を砕く激痛に苛まれながら、今までの回転など序の口だと言わんばかりに『ヒュストリクス』が破滅の猛威を撒き散らす。爆発的な空気の渦に横殴りにされ、容赦のない衝撃が総身を蹂躪する。攪拌機に放り込まれたように、肉が捻れ、骨がメキメキと音を立てて軋む。当惑する暇すら与えられず、轟風に今度こそ体勢を大きく崩される。甘かった。敵はこちらの思考を一步先どころか二歩先も読んでいる。紙一重で避けてカウンターで斬りかかることも予測されていた。

間断なく、刀身のほとんどを砕き散らした『ヒュストリクス』が襲い掛かってくる。その姿はもはや残骸と言うべき様相だったが、絶大な破壊力を孕む刀身は依然として唸りを上げて駆動している。咄嗟に『贄殿遮那』を防御に繰り出す。凄烈な火花を散らして大破壊力を受け止めるが、不安定な体勢のまま出された防御で封殺できるような攻撃ではなかった。肩が砕けそうなほどの衝撃。音を立てて『ヒュストリクス』が跡形もなく砕け、反動で『贄殿遮那』が弾け飛ぶ。遙か後方の地面に音高く突き立った『贄殿遮那』に、しかし、シヤナは見向きもせず、即座に反撃に移行する。

『贄殿遮那』がなくなった——それがどうしたというのか。

手刀を形作り、『紅蓮の大大刀』を出現させるべく存在の力を前腕部に集中させる。過去に『愛染自』ソラトを一刀の元に切り伏せてみせた、超光熱の炎刃を顕現させる炎熱

攻撃型自在法だ。死刑宣告の如く振り上げた手刀から刃状になった紅蓮の炎が噴出し——そして、音もなく霧散した。

「——な」

何が起こったのかを理解して受け止めるのに、2秒かかった。戦士にとっては致命的な隙だが、“白銀の討ち手”は敢えて待った。彼女が見せつけるように突き出した左手の人差し指で光を反射する、銀の指輪。その宝具は、かつてフリアグネが所持し、炎系の直接攻撃型自在法を消去する結果を展開して所持者を守る効果を持つ。

「『アズルール』……!」

その戦慄の眩きに応えるように、サユの顔に不敵な笑みが浮かぶ。ナメられた。その事実を否応なく突きつけられ、シヤナの瞳孔がグワツと見開き、激情の焔が煮えたぎりそうになる。あからさまに侮られた経験などほとんど無いシヤナにとって、侮られることはどんな蔑視よりも堪え難いものだった。だが、沸騰寸前の自尊心を統制するのにもまた、彼女の気高い自尊心だ。焔の制御弁を頑強な意思の力で締め上げ、その怒りを内に向けて地を踏みしめるエネルギーへと変換する。

三步先まで読まれた。こうもたやすく先手をとられ続けるなど、どう考えても異常な事態だ。思考を巡らせながらも肉体は流れる水のように次の攻撃に移る。『贄殿遮那』を失い、炎刃を封じられても、シヤナにはまだ武器がある。鍛え上げた己の肉体という

武器が。

地を這うように疾走し、電光石火の如き早業でサユの内懐に滑り込む。それは八極拳にて極意とされる走法、活歩だった。この超至近距離こそ、八極拳が最大効果を發揮する間合いだ。シヤナは物心がついた時から武術を会得し、その身に積み上げていた。その技の冴えは、すでに達人の域すら超えている。踏み込んだ脚が轟音を立てて地面を抉り、全身の瞬発力を集積させた掌底がサユの胸板を穿つ。肋骨を残らず叩き割り、内臓を粗挽き肉に変えるほどの威力を誇る一撃。削岩機に匹敵するそれは、しかし、直撃すればの話だ。

シヤナが舌打ちをして、手首を掴まれ胸の寸前で止められた掌底を蛇のようなしなやかな動きで引き戻した。何食わぬ顔で必殺の掌底を防御してみせたサユに、シヤナの意気はさらに引き締まる。敵もまた己と同レベルの武術の覚えがあることを悟ったからだ。

すかさず繰り出されてきた反撃の拳打を化勁かけいを使い巻き取って受け流し、続けざまに突き手を鳩尾に叩き込む。——半身を逸らされ虚空を穿つ。

ならばと足を敵の軸足に内側から絡ませ刈り払い、体勢を崩す。——即座に足が踏み換えられ、逆にこちらの足に絡み付いてくる。脚を柱のように地に押し付け重心がぶれるのを防ぐ。

がら空きになった敵の腹部に掌を押し付け寸勁を放つ。——すんでのところで見だど気づき、身を捻るようにして間合いをとる。

勢いを腰の捻りに変えて槍のような肘撃を放つ。——ボクサー顔負けの膝が地に着くほどの上体落として回避される。

しかと大地を踏みしめ、高々と脚を振り上げ会心の連環腿を放つ。——ほとんど同時に放たれた天空を打ち抜く鋭い膝蹴りに迎撃される。鋭くかつ鈍重な衝撃が脚に走り、骨を砕かれそうな痛打に顔を顰める。噛み締めた歯の間から呻きが漏れる。

「ぐ、う……ッ!!」

さながら、同じ師の元で修行した門徒と戦っているような心地だった。まるで鏡を見ているようだ。瓜二つだから、という理由では説明しきれない。間違いなく、自分と行動を共にしたことのある人間だ。——では、こいつは誰だ？

二歩分の間合いを置いて、再び活歩を駆使して肉薄する。腕の力だけではなく全身の筋肉の伸縮を最大限に生かして重心を掌面に移動させ、一気にサユの首に叩き込む。稲妻じみた残像を残して叩き込まれた掌底は、交差させた腕の手甲に阻まれる。手甲が砕け、その奥にある猛禽類の如く鋭い双眸が覗く。自分と驚くほど似ているのに、その押し隠した分厚い帳の奥には自分とはまったく異なる魂が輝いている。沸き立つ既視感に胸が激しく締め付けられる。その純白の瞳を真正面から睨みつけ、シヤナが叫ぶ。

「答えろ、〃白銀の討ち手〃！ お前は——誰なの!？」

† † †

『行くこう、悠二。——私と、一緒に』

はつきりと思い出せる。そう言つて手を差し伸べてくれたシャナの笑顔も、その背景の雲から草一本に至るまで、明確に思い浮かべることができる。葛藤の末、ボクはシャナとともに生きる道を選んだ。大切な仲間たちと涙を流して別れ、二人で御崎市を後にした。『零時迷子』を狙う紅世の王や徒から人々を守るために奮闘を重ねたけど、キリがなかった。皆を護るためには、ボクがとにかく移動し続けるしかなかったのだ。ほんの数年間の短い旅だったけど、ボクにとっては人生で一番充溢した時間だった。笑つて、怒つて、泣いて、苦しんで、また笑つて。愛する少女と二人で、すべてを分かち合つた。ボクは、そんな日々が限りなく永遠に近い時間、続くのだと思ひ込んでいた。

ボクがシャナの前から消える、あの日まで。

「答えろ、〃白銀の討ち手〃！ お前は——誰なの!？」

シャナが叫んでいる。お前は誰だと問うてくる。

ダメだ、シヤナ。それは言えない。言えば、きつと君は悲嘆して膝を屈してしまう。それではダメなんだ。ボクと共に歩んだシヤナは、君じゃない。だけど、それでも、君はシヤナだ。かつてボクが恋した少女だ。君を悲しませたくはない。ボクたちの辿った結末を繰り返させたくはない。だから——戦ってくれ、シヤナ。

そして、ボクを——

‡ ‡ ‡

「……………」

痛みに地に伏している悠二は、一刻も早くその場を離れなければならぬというのに動けずにいた。否、たとえ痛みがなかったとしても動けなかっただろう。果たしてそれは、本当に人間の戦いなのだろうか？少女のカタチをしたヒトガタたちの、なんと凄烈なことか。咆哮一つなく、静かに、しかし迅速に交差する紅蓮と白銀の人影。抉られ破砕された足場においても、弾けるような二人の動きに一切の無駄はない。互いに必殺の一撃を繰り出し、それを紙一重で見切つて躲し、二人の戦いはさらに激化の一步を辿つていく。命の駆け引きをしているにも関わらず、それはまるで完成された一つの芸術作品のようだ。ひどく典雅で思わず見蕩れてしまいそうになるその演舞は、あまりに完璧

すぎるがゆえに完成度の高い殺陣を連想させる。

張り詰めた死線の気配はこちらまで押し寄せてきて、全身が強張り、呼吸することすら忘れそうになる。シヤナがここまで苦戦したことなど果たしてあっただろうか？常に戦いの中で勝機を導き出し敵を一刀の元に斬り捨ててきたシヤナをここまで圧倒するとは……。

「ッー」

唐突な自身の変質の気配に、悠二は目を見開き手首の腕時計を凝視する。戦火に晒された遺品のように傷だらけになった腕時計が、それでも懸命に針を動かしている。その長針と短針が、同時に頂点を指そうとしていた。もう、零時が近い。悠二の思考の歯車が猛烈に回転し、閃きを紡ぐ。

「シヤナッ!!」

激しい格闘戦の最中、一度だけこちらを振り返った紅蓮の視線に腕時計を掲げて見せる。それだけでシヤナには十分だ。シヤナが突然低く身を屈め、サユが突き出した神速の右腕を鋭い動作でくぐる。次の瞬間、まるで怪我人に肩を貸すかのような姿勢でシヤナが右腕を肩の後ろに背負い込んでいた。左肘と左脚が同時に動き、鳩尾と軸足を狙う。悠二は知る由もないことだが、これは八極拳の極意の一つ『六大開・頂肘』と呼ばれる套路であった。

それは成功すれば確実に相手に致命傷を与えられるはずの攻防一体の絶技だったが、それすら流れるような体捌きで間合いを開けられ受け流される。だが、それは予想されていた。シヤナは牽制のためにその攻撃を使ったままだ。間合いが開くや否や、鮮やかな動きで高く背転して敵の攻撃範囲から一気に離脱する。着地の瞬間、傍らの地に突き立っていた『贄殿遮那』を抜き放ち、足の裏から這い上がってくる衝撃を強靱なバネで殺してさらに流れるようにバックステップを踏んで悠二の元へ駆ける。追い討ちをかけんと夜走獣のように低く疾駆してくるサユに向かい、残されたありったけの存在の力を使つて炎弾を連射する。立て続けに撃ち出されたそれは弾幕と化し、サユの追撃を阻めてたたらを踏ませる。もうすぐシヤナの存在の力は底をつくだろう。だが、それでいい。

ついに、時刻が零時となった。

『零時迷子』が時の事象に干渉し、時間を歪め、毎夜の奇跡をここに再現する。身体が熱くなり、悠二の中に力が漲ってくる。十全に動くようになった身体で立ち上がり、炎弾を放つシヤナの肩を掴む。シヤナとサユの実力は拮抗している。防戦一方では埒が明かない。ならば、『零時迷子』で存在の力を回復させて全力全開の一撃を叩き込み一気に

に勝負をつける。シヤナが全ての存在の力を一撃に乘せて放てば、その力は塵殺の威力にして余りある。

紅蓮の長髪が輝きを増し、溢れ出る火の粉が渦を巻いて轟々と舞い上がる。

「離れてて、悠二！」

力強い頷きを返して安全圏まで退避する。直後、背後で紅蓮の爆炎が顕現し、辛うじて原形を保っていたビルを蹂躪する。振り返らなくてもわかる。存在の力を完全回復させたシヤナの背から巨大な炎の翼が生まれ、大きく羽ばたいたのだ。振り返れば、サユは中央に立つシヤナを挟んで悠二と反対側に悠然と佇んでいた。目を眇め、轟々と燃えるシヤナを無表情で見つめている。

ふと、サユと目が合った。刹那にも満たない交錯の中、その表情が緩み、安堵と諦観に似た微笑が浮かぶのを見た。

何を安心しているのか、何を諦めているのか——。

悠二が疑問を思い浮かべるとシヤナが踏み込むのは、果たしてどちらが先だったのだろう。巨大な翼は常時の数十倍もの初速をシヤナに与え、音速の壁を轟音と共に楽々と突破する。衝撃波によって瀑布のカーテンを左右に巻き上げながら地上すれすれを猛滑走するシヤナが『贗殿遮那』を突き出す。だというのに、サユは動かず、迫り来るシヤナをじっと見つめている。

時間にして、その滑走は数秒にすら満たないものだった。20メートルを超える距離を一瞬で0にして、シヤナとサユが交差する。そして、

贄殿遮那の切っ先が、白銀の少女に突き立った。

3—6 眞実

——さあ、零時迷子を手に入れる。

すぐ耳元で、あの声が出た。戦いの最中に——そして、悪夢の中に出てきた黒い坂井悠二の吹き荒ぶ風鳴りのような声が、意識の空白に強く響く。

——己が為したいことを、為せ。その力が、今のお前にはある。

その声が続いていた違和感——広い空洞を渡るような距離を感じる響きはなくなり、間近にまで迫った気配が蛇のようにじわじわと絡みつき、締め付ける。

息を吹きかけるような至近から、全てを見透かす暗黒の気配が妖しく囁く。

——お前の望みを、叶えろ。お前だからこそその望みを。それこそ、余の望み——

『ボクの、望みは——』

シヤナの笑顔が胸の中いっぱい広がる。目を瞑り、輝きを放つその全てを心の中で大切に抱き締める。この世界の坂井悠二を、自分自身を殺してでも彼女の元に帰りたいと心の奥底の闇で獣が呻る。漆黒の獣が、何としてでも取り戻すと爪を立てて血の涙を散らせながらシヤナの笑顔に必死に手を伸ばす。この獣の声に従ってしまえば、どんなに楽だろうか。己を律する心を捨て、剥き出しの欲望のままにこの双腕を振り乱し、シヤナの下に帰れるというのなら。

獣の爪が、ついに笑顔に届く。決して放すまいと輝きに爪を深く食い込ませて強く激しく狂おしく抱擁する。そして獣は気づく。腕の中の輝きはすでに失せ、笑顔も失せていることに。そこにあるのは、悲しませたくないと願ったはずの人の泣き顔だけ——
　　脛をゆつくりと開く。そうだ。すべきことなんて決まっているじゃないか。迷うことなんて、ない。

『ボクは、シヤナを悲しませたくはない。だから、シヤナと悠二に戦いを挑む』

『それは矛盾してはいないか?』

『していないさ。二人を極限状態に追い込み、鍛え、弱点を責める。そうすれば、二人がボクと同じ結末を迎えることはなくなる』

ボクとシヤナが敗れた原因は、互いの弱点を補強しきれていなかったという力不足に

他ならない。シヤナは接近戦に特化しすぎ、坂井悠二は単独でも敵と渡り合える力を持てなかった。二人合わされば両翼となつて誰にも負けなかったが、切り離されればお互いの弱点が露呈してしまう。ボクたちはその瑕疵を強化する余裕もないままに御崎市を離れてしまい、その結果、ボクは殺されてしまった。だからこそ、同じ欠点を抱える二人に対して、シウドナイにされたような攻撃を仕掛ける。徹底的に弱点を衝けば、二人は確実に成長する。シヤナも悠二も実戦を経て成長するタイプだ。口で伝えるよりもこの方がよっぽど効率がいい。

ボクの考えを咀嚼したテイレシアスが豪胆に笑う。

『最強のフレイムヘイズと謳われる、あの天下の“炎髪灼眼の討ち手”を相手に回して、手加減をしつつ鍛えてみせるとお前は言うのか？フレイムヘイズになって一度しか戦いを経験していないお前が？』

『まさか。シヤナ相手に手加減なんてできるわけない。ボクが全力で挑んでも最後にはシヤナに敗北し、殺されるだろう。——それでいいんだ』

悠二を殺して元の時間に帰つても、シヤナはきつと喜んではくれない。シヤナを悲しませなければ元の時間に帰れないというのなら、この時間のシヤナのためにボクは命を差し出そう。それに——この胸の奥で蠢く獣をずっと抑え込んでいられる自信はボクにはない。だから今は、心に蓋をしよう。獣が暴れださないように。決心がぶれない

ように。

笑い声がぴたりと止まる。地鳴りのような声がさらに低くなる。

『再び手に入れた生を他人のために使い捨て、自ら進んで悪役を買って出るというのか。』

『白銀の討ち手』サユとして別の道を歩むこともできるといふのに』

『ボクにチャンスをくれたテイレシアスには悪いと思ってる。でも、ボクはやらないといけないんだ』

しばしの沈黙。テイレシアスにとっては迷惑この上ない話だろう。でも、ボクは意思を曲げるつもりはなかった。

『1000年。1000年待つて、やっと相性のいい契約者を得たと、思っていたんだがな』

深いため息とともに慄然とした声が漏れる。テイレシアスの力を使いこなせたフレームヘイズはボクが初めてだと聞かされた。つい数刻前まで、彼は契約をしたことで現界に長く留まり様々な宝具を見て回れると声を弾ませて喜んでいた。テイレシアスにとって、ボクは待ち望んだ存在だったのだろう。そのフレイムヘイズが自分から死にたいと願うのは、テイレシアスからしてみれば不本意極まることだ。そつとペンダントを拾い上げて首にかける。

『……ゲンコツだぞ』

『え?』

『天壤の劫火』め、あの頑固オヤジときたら、贗作を創り過ぎると世界のバランスをうんぬんとギャアギャア叱りつけてきた挙げ句、俺にゲンコツを喰らわせやがった。9本ある尻尾を8本にしてやるぞと脅しやがった。俺を『贗作オタクのいたずら小僧』だと言いやがった。あの頑固オヤジをギャファンと言わせてやりたいと何度思ったことか』
『て、テイレシアスさん?』

口を尖らせた不満を漏らす声が一変し、くつくつとした忍び笑いになる。

『いや、すまん。自分のフレイムヘイズそっくりの敵が現われた時の『天壤の劫火』の反応を想像したらつい笑ってしまった。その紅世の王が俺だと知ったら、あの頑固ジジイ、大層怒るだろうな。今から楽しみだ』

『——許してくれるの?』

テイレシアスが楽しそうにふん、と鼻を鳴らす。

『言っただ、俺はお前を気に入っている。お前が決めたことなら心置きなくやるがいい。それに、『炎髪灼眼の討ち手』に喧嘩を売れる契約者を得られる機会など、お前が最初で最後に違いない。あのジジイに弓を引ける絶好のチャンスを、むざむざ逃す手はないだろう?』

『……ありがとう、テイレシアス』

万感の思いを胸にもう一度夜空を見上げる。過去の自分とシヤナを相手に剣を振るうことに抵抗がないわけではない。本當なら、胸が張り裂けそうなほどに悲しいと感じるのだろう。だけど、ボクは悲しいなんて感情は忘れてしまった。シヤナのために手に入れたチャンスやシヤナのために使えるのなら、それはきつと本望だ。

これから始まる戦いのために、心に重い鉄蓋をする。鈍重なそれをゆつくりと獣の上に被せてゆく。

——それがお前の望みと言うのなら、それもまた是だ。

それと同時に、黒い坂井悠二の声も静かに薄らいでゆく。期待を裏切られたことに戸惑いも焦りも感じない、待つことに慣れた者の風格と衰えを知らぬ覇気を感じる。その声は、鉄蓋の影に隠れてゆく獣の口から発せられていた。

——だが、お前は必ず余を解放する。お前が真に望むものは、余に他ならぬのだから

ら——

そうして、巨大な獣はゆつくりと瞼を閉じた。

鉄蓋を被せ終わると、しかと耳に届いていたはずの声はまるで幻だったかのよう跡形もなく消え失せた。……いや、本当に幻だったのだろうか。ボクの弱い心が幻聴となつて心のどこかから囁きかけていたのだ。もう、そんなものには惑わされたい。

『さあ、行こう、我が紅世の王。これからボクたちは悪役だ。零時迷子のミステスと、炎髪灼眼の討ち手』をとことんまで苦しめる怨敵だ』

『いいだろう、我がフレイムヘイズ。お前がどこまで戦えるか、俺が見届けてやる』

太陽が昇り始める。これが見納めになる、最後の日の出だ。それを一瞬だけ目に焼きつけて、ボクはその場を後にした。

† † †

「シヤナツ！」

この世界の悠二が叫び、腕時計をシヤナに見せる。それを一刹那だけ視認したシヤナが悠二の作戦を完全に把握し、牽制の技で間合いを取ろうとする。惚れ惚れするような絶技は、今までのように辛うじて回避するだけで精一杯だ。ボクとの間合いを広げたシヤナは細くしなやかな身体を疾駆させて悠二の元へ駆ける。悠二の存在の力が溢れんばかりに回復していくのがわかる。その見事な連携を見ながら、ボクは、「もう零時に

なるのか」と何の感慨もなく思った。

悠二をシヤナから隔離して、とことんまで追い詰めた。思った通り、いや、思っていた以上に、悠二は剣を交わらせるごとに強くなっていった。悔しいが、元々、ボクよりも素質があるようだった。これで、シヤナがいなくても戦えるように成長への筋道を立ててやるのが出来ただろう。シヤナの弱点を衝いて、圧倒して、苦しめた。ボクとしても、針金一本の橋を綱渡りするような、一瞬でも気を抜いたら敗北必至の接戦だったけど、その甲斐はあった、と思いたい。でも、合理的なシヤナなら、きつと自分のネットワークを冷静に分析できたはずだ。

シヤナの柔らかな質感を持つ紅蓮の長髪が、存在の力の回復に併せて輝きを増し、炎に靡く。その華奢な肩を力強く掴むのは、この世界の坂井悠二。その比翼の鳥のような連携にボクの胸をチクリとした嫉妬の痛みが刺す。拮抗する戦闘を打開するために、最大の力をのせた一撃を放ってくるつもりだろう。ボクと同じ坂井悠二であるなら、必ずそうすると確信していた。何度もシミュレーションを重ねた結果なだけに、達成感は感じられなかった。

「最後までお前の読み通りになつたな。まったく、つくづく失うのが惜しいフレームヘイズだよ、お前は」

胸元から呆れたような感心したような複雑な声が出た。テイレシアスと話すのも、こ

れが最後になる。

「短い間だったけど、テイレシアスには感謝してる。それこそ、言葉で言い表せないくらいに」

「よせ、俺は人に感謝されるのには慣れていない。だが……俺も、お前には感謝している。なかなかにおもしろかったぞ、我がフレイムヘイズ」

テイレシアスと契約できて本当によかった。ボクが一番の幸運は、テイレシアスと出会えたことだ。

シャナの背から巨大な炎の翼が顕現し、両脇にあった建築物を飲み込んで羽撃く。零時迷子の効果によって存在の力を全開まで回復させたのだろう。ボクにはもうこれっぽっちも存在の力なんて残ってはいない。使える宝具は全部使った。こうして余裕を装って立っているだけで精一杯だ。最初から全力投球だったから、こうなるのは予測していた。

ふと、悠二と目が合った。悠二は、ボクと同じ結末は辿らない。絶対に諦めず、何度でも剣を握って立ち向かってきた悠二なら、どんな窮地でも必ず勝利を掴んで前に進める。他でもないボクが言うのだから、間違いない。その視線に微笑みを返す。変な笑顔にならなかつたか、ちよつと不安だった。

シャナの紅蓮の翼が一際大きく羽ばたいたかと思うと、渾身の力で大気を叩きつけ

る。衝撃波を引き連れて、『贄殿遮那』を構えたシヤナがまっすぐに驀進してくる。その姿は僕にとつては死神と同じはずなのに、なぜかとても美しいと思つた。こんな感情を、前にも感じたことがある気がする。——ああ、シヤナと最初に会つた時だつたわけ。

瞬き一つせずにシヤナを見つめる。数年にわたり積み重ねてきたシヤナとの思い出が脳裏に浮かんで虚無へと還つていく。

ずぶ、と鋭い異物が腹部を抉る感覚。焼けるような激痛が全身を貫く。喉から鉄の味が溢れてくる。

これでいい。ボクのすべきことはこれで終わった。

意識が遠退いていく。ゆっくりと底なし沼に沈んでいくような、自分が薄れてゆく奇妙な感覚。

シヤナの手で始末をつけてもらえて、ボクは幸せ者だと思う。

最後に、君をこの名で呼ばせてほしい。ボクが考えて、つけた名前だ。

「シヤナ、ありがとう」

——そして、ボク
の思考は途切れた。

3—7 希望

波一つない久遠の海に仰向けになつて浮かんでいる不思議な感覚。音など聞こえず静穏としているが、決して寂しきを感じない。自分はどうなつたのかと考えるが、意識もはつきりとせず、思考もうまくまとまらない。……ああ、きつとこれが死の世界だ。もつと凍えていて寂しい場所だと思つてたけど、やけに温かくて穏やかな場所だ。誰かが手を握ってくれているような、そんな錯覚までしてしまう。

「——うじ、悠二」

シヤナの声が聴こえる。悠二、とボクの名を呼んでいる。なぜ聴こえるのだろうか？ボクは死んだはずなのに。これが死ぬ間際に見る幻聴なのだろうか？だとしたら、ずいぶんとサービスがいい。

「本当に悠二なの？ねえ、答えてよ……！」

グラグラと肩が揺すられる。ゴリゴリと後ろ頭が地面に擦れてとても痛い。幻聴でも、もう少しボクを気遣つてくれてもいいと思う。

「……うう。シヤナ、お願いだから、起こすならもつと優しく起こしてよ。いつも言つてるじゃないか」

息を呑む気配とともに揺れがぴたりと止まる。でもまだ後頭部がひりひりする。痛い——痛い？痛みを感じているのか、ボクは？なら、もしかしてボクは、

「——生きてる？」

鉛のように重い瞼をなんとか持ち上げて、茫洋とした目で辺りを見回す。ずいぶんと荒れたところに寝かされている。そこら中の道路や建築物がまるで空爆にでもあつたかのように業火に燃えて消し屑と化している。灰燼と呼ぶに相応しい惨状だ。どうしてこんなことになったのかと疑問に思つて、自分がやったんだと他人事のように思ひ出す。とすると、ここはボクが「白銀の討ち手」サユとしてシヤナたちと戦つた場所……？

「ああ、お前は生きている」

もう聴くことはないと思つていた、地鳴りのような低い声。その声はホツとした安堵に満ちて、そしてどこか満足気だ。

「テイレシアス？どうして、ボクはたしか……」

靄がかかったような視界に、人影が映る。ボクを囲むようにして四人の人影が膝を突いてボクを見下ろしている。目を凝らしてそれが誰かを探る。ヴィルヘルミナさんと、マージョリーさんと、悠二と——シヤナ。皆が心配そうな瞳でボクを見ている。なぜだろう？ボクは彼女らにひどいことを……。

「お前は過去の悠二に救われた。お前が機知に富んでいたように、過去のお前もまた才知に長けていたのだ」

「悠二に……?」

悠二の方に目をやると、朗らかに破顔して微笑を返してくる。ボクが悠二に救われたとはどういうことだろう? ボクの腹部にはたしかに『贄殿遮那』が突き立ったはずなのに。痺れる手で腹を擦って傷を確かめようとして、違和感に気づいた。そこにはなんの傷もない。ただ痛みの残滓があるだけで、かすり傷一つ見当たらなかった。

状況をまったく飲み込めないボクが混乱していると、テイレシアスが苦笑しながら一部始終を話してくれた。

† † †

シヤナが矢の如く驀進し、サユとの距離を一瞬で縮める。その瞬き一つにすら満たない刹那の時間の中で、悠二の思考は目まぐるしく回転していた。

最初は疑問からだった。

サユの力を以つてすれば自分を一瞬で切り裂いて『零時迷子』を奪うこともできたはずだ。なぜそれをしなかったのだろう。サユとの一対一の戦いで、悠二は思った。ま

るで自分を鍛えているようだ。もしも、その直感が正しければ？

そう仮定すれば、戦いの中でサユが見せた安堵の微笑にも説明がつく。シヤナの弱点を突き、常にギリギリのところまで圧倒していた。しかし、決してトドメは刺そうとはしなかった。本当にシヤナを殺すつもりだったのなら、最初から『アズユール』を使つてシヤナの意表を衝くなりして、そこを攻撃すればよかつたはずだ。でもしなかつた。

とどのつまり、サユはシヤナと自分に強くなつてほしかつたのだ。

炎の翼から眩いフレアを放出させて敵に迫るシヤナの背中越しに、サユの表情が目に入る。一向に防御や回避に移る気配を見せない彼女の表情は、まるで小走りで駆けてくる愛おしい人を抱き締めようとしているかのような柔らかな微笑みだった。そこでようやく、察知能力に長けた悠二はサユに存在の力がまったく残されていないことに気がついた。

(まさか、あの娘は最初から殺されるつもりで——!?)

気づけば、声を張り上げて叫んでいた。

「シヤナ、殺しちゃダメだ!!」

悠二の思考はたしかに常軌を逸して速かつた。しかし、一度撃ち出された銃弾は止められない。弾丸と化したシヤナは非情なまでの加速を続けた。

悠二が叫んだ、殺してはならないと。それにはなにか理由があるに違いない。私はそれを信じる。

シヤナが瞬時の判断で急速に後方へ流れいく地面に足先を突きたてて減速を試みる。が、自らの全力の一撃を相殺するには至らない。ガリガリと大地に二条の傷跡を刻みながら、シヤナの速度はなおもあがり続けた。一方、こちらが躊躇いを見せたのに、白銀の討ち手”は回避も防御も行おうとしなかった。

(どうして、避けないの!?)

減速の努力虚しく、ついに『贄殿遮那』の切っ先が無防備な少女の腹に深々と突き刺さる。ズブ、と生身の人間の肉を抉る嫌な感触が手に伝わり、それが自分と瓜二つの人間であることに、シヤナは思わず目を逸らした。

ふと、囁くような小さな声が聴こえた。

「シヤナ、ありがとう」

「え——?」

自分と同じ声質のはずなのに。だというのに、その優しい声はなぜこんなにも彼に似ているのか。

『贄殿遮那』はその威力を微塵も衰えさせることなく着実にサユの身体を抉っていく。皮膚を破り、筋肉を裂き、内臓を破裂させ、骨を砕く。それはいつもなら勝利を確信さ

せる手応えなのに、今はどうしようもない悪寒を背筋に奔らせる。

お願い、誰か止めて、とシヤナが強く願う。

その願いは、どこからともなく現われた桜色のリボンによって叶えられた。

シヤナの胴体に巻きついた力強いリボンが岩のようにグツと引き締まり、一瞬にしてスピードを相殺する。それが誰のリボンなのか、シヤナには考えるまでもなく理解できた。

「ヴィルヘルミナー」

振り返れば、いつになく表情を強張らせたヴィルヘルミナがリボンを手にして上空から軽やかにに着地していた。見上げれば、神器グリモアに乗って闇夜に群青色の弧を描くマジヨリーの姿もあつた。ついに結界を突破してきたのだ。

戦闘機の曲芸飛行のように急旋回して地上に滑空するグリモアからマジヨリーが飛び降りる。重力を感じさせない動きで華麗に降り立ったマジヨリーだったが、『贄殿遮那』が胴体に突き刺さったサユを見て顔を青くする。もはやサユの意識は失われ、瞼を閉じた表情は青ざめていた。全身から力が抜け、風を失った旗のようにぐったりとしている。いかに頑強な肉体を持つフレームヘイズでも、致命傷を免れないことは明白だ。シヤナが焦り、ヴィルヘルミナに助けを求める視線を送る。今、焦つて『贄殿遮那』を引き抜けば間違はなく鮮血が噴き出して数秒と持たずに失血死してしまうだろう。

だが、このままでもいずれ失血して死ぬのは明らかだ。シヤナには誰かを回復させる能力はないし、治療の手段も持っていない。

「『白銀』、気をしっかり持つのであります……！」

シヤナの視線に先んじて、焦燥を隠さずに走り寄ってきたヴィルヘルミナがリボンでサユの腹部を締め付けてこれ以上の失血を防ぎ、『贄殿遮那』をゆつくりと引き抜いて横たえさせる。またたく間にリボンがどす黒い血色に染まり、血の気の失せた小さな口からごぼりと大量の血が溢れ出す。それを見たヴィルヘルミナの唇がいつになく感情を表にしてわなわなと震える様子に、駆けつけてきた悠二も顔を蒼白に染める。

「『白銀』……『贗作師』、貴様、なぜ己のフレイムヘイズを回復させない。見殺しにする気か！」

アラストールが強烈な怒気を孕んだ怒声で咎める。それに対し、テイレシアスは落ちて着き払って静かに応える。

「もう、我らに存在の力はこれっぽっちも残されてはいない。それに、我がフレイムヘイズは最初からこうするつもりだったのだ」

それは、戦いの前にアラストールと激しい言葉の応酬を重ねた者とは思えない、まるで愛しい死者を追悼するような厳かな声だった。

「お前たちをより強くする。そのために自分が殺されることも厭わない。それがサユの

願いであり、決意だった。俺はそれを尊重すると誓った。まさか、最後に他ならぬ坂井悠二に看破されるとは思ってもみなかったが……」

テイレシアスの告白に、シヤナもアラストールも愕然とした。自分たちが手の平の上で踊らされていたということよりも、この強敵が殺されることを受け入れていたということに。

その理由を問い質そうと口を開こうとして、真横から放たれたマージョリーの怒声に遮られる。

「ふざけんじやないわよ！それでアンタらが納得できても、私はちつとも納得できないのよ！」

声を荒げるマージョリーの姿を見慣れていない他の者たちが啞然とする中、マージョリーがテイレシアスに詰め寄る。冷たくなってゆくサユの頬をそつと撫でる。時間が
ない。

「それに……あんたも、本当はこの娘を失いたくはないんでしょ？」

静かな、しかし強い問い掛け。本心を突かれたテイレシアスがハツと息を呑む。

（そうだ。俺は常に、俺がやりたいと思うことをやってきた。何者にも縛られなかった。何者にも。ならば、今も同じように、やりたいようにやればいいではないか……！）

「——坂井悠二、お前の存在の力を寄越せ！お前のであればびつたり適合する！俺な

ら、この傷を治せる！」

「あ、ああ！わかった！」

安堵に頷くマージョリーの傍らで、悠二がサユの手を握る。ひやりと冷たい小さな手に焦燥を感じながら、意識を集中して循環する存在の力をイメージし、その流れをサユに向ける。存在の力は、まるで自分の身体のように驚くほどすんなりとサユの身体に馴染み、吸収されていく。途端、白い炎がサユを包み込んだ。澄んだ金属の音色を立てて、白銀の戦装束が飛沫の如く飛散する。テイレシアスがそれらの維持に使われていた存在の力も根こそぎ傷の修復に回したのだ。見事な拵えだった戦装束がなくなると、そこには見るも無残な状態になった紺色の給仕服を着た少女がいた。悠二にはその姿がどうしようもなく夢げに見えた。

握る手の平に温かみが戻ってくる。血の気を失っていた青白い肌は元の健康そうな白い柔肌に戻っていく。腹の傷も見える見るうちに癒えて、皆の顔に安堵の表情が浮かんだ。

傷が癒えるのを確認したシャナがヴィルヘルミナとマージョリーにさつと目を転じる。それは説明を要求する視線だった。その清冽な眼差しを、ヴィルヘルミナは珍しく目を背けて直視出来なかった。それを見たマージョリーはひどく困惑し、苦い顔をした。古くからの友人が、何か途方もない秘密を押し隠していることを悟ったからだ。

が、誰かが説明してやらなければ、この少女は絶対に引き下がらない。マージョリーは小さくため息を吐いて気を整えると、意を決してゆつくりと口を開く。

「その娘はね、」

一呼吸だけ置いて、シャナの目をまっすぐに見据える。

「――未来の坂井悠二なの」

† † †

「……そっか。ばれちゃったのか」

テイレシアスの説明を聴いてようやく把握できた。ボクが坂井悠二で、どんな最期を迎えて、どうしてこの姿になってここにいるのかも、全てばれてしまった。ボクが二人を襲った理由も、テイレシアスが話したという。ヴィルヘルミナさんに支えられながら重たい半身をどうにか起こして、目の前に膝をつくシャナを見つめる。その瞳は明らかに戸惑いの色に染まっていた。ボクが坂井悠二だと聴かされれば、当然だと思う。なんと伝えたいのかかわからないけど……とりあえず謝っておくべきだと思った。

「ごめん、シャナ」

シャナの肩がびくりと震える。それに思わず苦笑してしまいそうになるのをなんと

か我慢して、言葉が続ける。

「ホントは知られたくなかったんだ。シヤナはきつと悲しむと思ったから」
「……本当に、悠二、なの？」

震える声とともに小さな繊手がボクの顔に伸ばされ、優しく頬を触れられる。ああ、シヤナの手だ。二度とこうして触れることはできないと思っていたのに。シヤナの瞳をしつかりと見つけて返事をしようとしているのに、視界が涙でぼやけてシヤナの顔が見えない。熱い感情が胸の内から込み上げてきて、喉がしゃくりあげ、声が震えてしまいうそになる。笑顔を作ろうとしているのに、うまく作れない。くそ、かつこ悪いな。言葉が途切れてしまわないように、一文字一文字ゆつくりと紡いでいく。

「うん、そうだよ、シヤナ。ボクは——坂井、悠二だ」

シヤナの綺麗な目から流れ出た一筋の涙が頬を伝う。その頬に手を伸ばして、そつと撫でた。とても温かい涙だった。迷いからも苦悩からも解放され、胸の内のすべての疵が癒されていくのを感じる。

ああ、きつとこれでよかつたんだと、唐突に悟つたような気がした。手の平に伝わるこの温かさを噛み締めながら、ボクはずつとシヤナを見つめていた。

御崎市でも群を抜いて高い高層ビル、依田デパートの屋上階で、ボクは一人で朝焼け前の街並みをぼうつと眺めていた。あの日、この場所で、シヤナと一緒に戦って、フリアグネを倒した。完全に修復されたここにはその戦闘の名残は少しも残ってはいないけれど、目を閉じれば昨日のことのように一連の情景全てを思い出せる。

不意に、地平線が胸を焦がすほど眩いオレンジ色を発した。空と大地の境界線から、もう見ることはないと思っていたはずの夜明けの光が差してくる。それは、この星ができてから毎日飽きることなく続けられてきた自然現象だというのに、ボクにはとても美しいものを感じられた。白い光が夜空を優しく抱き、癒やしていく様子は巨大なタペストリーのようだ。

「悠二」

背後から小さな声が聴こえた。

「なに、シヤナ？」

ゆつくりと振り返ると、そこには悲しげな表情をしたシヤナがいた。ボクはそれに笑顔で応える。シヤナが何を伝えたいかは察しがついていた。シヤナは幾度か視線を泳がせて言い淀んでいたが、やがて彼女らしい強い意志を秘めた瞳で真っ直ぐにボクを見据えて、言う。

「私は、たぶん、悠二のことが好きだと思う」

「うん、わかってる」

「でも、私が好きな悠二はお前じゃない。お前が大事に想ってくれたシヤナも、私じゃない」

「……うん、わかってる」

悲しくはない。シヤナははつきりと悠二が好きだと言ってくれた。この世界のシヤナも、僕を認め、想ってくれている。それだけで、ボクは幸せだ。

「ボクは大丈夫だよ。ありがとう、シヤナ。それに、ボクが君を好きになっちゃったら、ボクのシヤナに浮気だって怒られちゃうからね」

ボクのニヤケ顔の惚気に、シヤナは頬を可愛らしく桜色に染めて満面の笑みを浮かべてくれた。吹きこぼれるほどの至福が心に満ちて、ボクも負けじと心のままに朗らかな微笑みを返す。歓喜の余韻に浸りながら、踵を返して朝日に向かって歩む。防護フェンスがなくなつた屋上の縁まで歩み寄つたところで、もう一度だけ振り返る。

「それじゃあシヤナ、またどこかで」

「うん。またどこかで。サユ」

最後にそれだけ言葉を交わす。それだけで、ボクとシヤナには充分だった。

怖じることなくそつと地面を蹴つて空中へと身を躍らせ、完全な垂直を維持したまま

直線軌道を描いて落下する。

「さあ、どこへ行く？我がフレームヘイズ」

胸元から響く、地鳴りのような低い声。

「そうだね。とりあえず、」

背に意識を回し、自分の背で炎の翼が羽ばたく様子をイメージする。途端、夜気に冷えた大気を燃やして白銀の炎の翼が背に顕現する。それを大きく羽ばたかせて揚力を掴み、一気に空へと舞い上がる。

「飛びながら考えよう！」

「ははっ！それはいい考えだ!!」

純白の雲を突き破って遙か高空へと舞い上がっていく白銀のフレームヘイズを、シヤナは何の憂いもない笑顔で見送っていた。あれほどに悠二を夢中にさせられたのだから、きっと未来の自分は悠二に告白することができたのだろう。それはシヤナにとつて素晴らしい未来だ。後は、サユが示してくれたように、二人でもっと強くなればいいだけだ。

「私も、カズミに負けないように、頑張つて悠二に——」

「え？僕がなに？」

「ひゃっ!!」

いつのまにか隣にいた悠二に、シヤナが驚いて跳び上がる。意表を突かれた心臓が破れんばかりにばくばくと収縮する。

「シヤナ？」

「あ、えと、その、だから……!」

「シヤナ？炎髪灼顔になつてるよ。風邪でもひいたの？」

そう言つて優しく額に当てられた大きな手の平に、ぼん！とシヤナの頭が爆発した。気がつけば悠二の内懐に滑り込んで、胴体に思いつき寸勁を叩き込んでいた。「ちによー!」と潰れた蛙の悲鳴と共に悠二の身体が木の葉のように軽々と吹き飛び、防護フエンスを突き破つて宙を舞う。

「うるさいうるさいうるさーい!!悠二のくせに——つて、あれ？悠二は？」

「たつた今お前が吹き飛ばしたぞ」

遠雷のように低い呆れ声。さあつとシヤナの顔が青くなる。慌てて炎の翼を顕現させ、シヤナも悠二の後を追つて宙へと身を躍らせた。

その様子を遥か高空から見ている。『白銀の討ち手』サユが、ぼりぼりと頬を掻きながら苦笑してぼつりと呟いた。

「……もう少し、ここにいた方がいいかもね」

キャラクター設定

“白銀の討ち手” サユ

身長141センチ 体重38キロ

元・坂井悠二。シャナと共にあることを選び、家族や友人を零時迷子を巡る被害から遠ざけるために故郷である御崎市を離れて旅を続けていたが、シユドナイ率いる『仮装舞踏会』^{バル・マスケ}の追跡軍の前に力尽き、消滅する。その際、シャナの放った強力な炎弾（＝エネルギーの塊）を浴びたことによってその能力を起動・暴走させた『零時迷子』が爆発。その破片が魂に突き刺さり、そのまま紅世と現界の狭間に落ち込んでしまう。そこに偶然通りかかった紅世の王“贗作師” テイレシアスと契約を結び、彼に新しい身体を贗作してもらい、フレームヘイズとなる。

その後、破片と化した『零時迷子』の効果によって意図せず過去の御崎市に逆行し、その時間において強力な紅世の王と戦闘を繰り広げ、“白銀の討ち手”として覚醒する（この戦闘の折、共戦した“弔詞の詠み手” マージョリー・ドーと親しくなる。サユという名前もマージョリーが命名した）。

元の時間に帰り、再びシャナと会うことを切に願うが、そのためには過去の坂井悠二

から『零時迷子』を奪うしかないことをテイレシアスから伝えられ、断念。死を覚悟して過去の坂井悠二とシヤナに戦いを挑み、自分と同じ結末を辿らないように鍛えあげる道を選択する。この戦闘で一度は死にかけられるが、坂井悠二の機転によつて一命をとりとめ、全てを告白。『零時迷子』を使う以外の方法を模索するために、マージョリーが拠点とする佐藤啓太の家に下宿させてもらったり、特別な宝具の噂を頼りに世界各地を飛び回ったりしている。

とつくに肉体は滅び、存在の力の器もないトーチ（しかもほとんど消滅しかけの状態）だったため、テイレシアスが新しい肉体を贗作して与えている。この身体を作る際、テイレシアスが「強い人間の姿を思い浮かべろ」と言つたためにシヤナを思い浮かべた結果、新しい肉体はシヤナを模倣したものとなっている。そのため、サユにもシヤナの格闘センスや五感・嗜好のクセなどが受け継がれている（メロンパンに無意識に反応する e t c …）。シヤナには一歩及ばないが、彼女を師として教えを叩き込まれたため、常人の比ではない格闘能力を有している。

元がトーチであり、しかも前述したように肉体が贗作物であるため、並のフレイムヘイズよりも存在の力の限界保有能力が低いというウィークポイントを持つている。また、贗作に特化した紅世の王と契約したため、普通のフレイムヘイズなら簡単に習得できる自在法の習得ができない、または非常に困難となっている（『浄化の炎』、『達意の言』

といった基礎的な自在法が使えない)。

一人称は「ボク」。性格は温厚であり、かつ鈍感。元が男だったため、自分に向けられる男からの思惟には察しが悪い。人格も男のままなため、内面と外面にギャップが生じており、それに無防備な水草が合わさって不思議な魅力を醸し出している。しかし、有事の際は自らの特殊能力とシャナとの旅で培った戦闘経験を存分に活かし、類まれなる戦闘能力を発揮する。また、自分が存在の力を喰われてトーチとなった過去により、紅世の者による人喰いを何より嫌い、防ごうとする傾向がある。大半のフレイルムヘイズは復讐を動機としていることを踏まえると、フレイルムヘイズとしてはイリーガルな存在と言える。

〈特殊能力〉

“白銀の討ち手”はテイレシアスの能力の一部を使うことが出来る。一度目にした宝具や武具を存在の力を消費して再現できる。また、強化したり能力を付随することもできる(その結果、能力の一部が制限されることもある。例を上げれば、トリガーハツピーの威力を強化した際、対フレイルムヘイズ用の特殊能力が失われている)。強力な宝具になればなるほど、強化をすればするほど、多くの存在の力を消費する。宝具でない通常の武具を贖作する場合は消費を抑えられる。ただし、攻撃力や特殊能力は宝具に到底及ばない。

贗作した宝具は常に存在の力を消費しながら形状・能力を保つていたため、その宝具特有の特殊能力を使用したり、力の供給がカットされてしばらく放置されると自然消滅してしまう。サユの保有する以上の存在の力を注ぎ込まなければ再現できないもの、あまりに複雑精緻な構造をしたもの、または規模が大きすぎるものは贗作することが出来ないという欠点を持つ。

余談だが、もしも最高クラスの宝具を同時に複数贗作できるレベルに至ったとしても、その限界数は最大9つまでという制限がある。これはテイレシアスの限界と合致している。

† † †

“贗作師” テイレシアス

人間と紅世の者が生み出す奇跡の産物である宝具に魅せられて、その贗作を創ることを至上の喜びとする若い紅世の王。シャナのコキュートスに似たペンダント型の神器に意志のみを表出させる（シャナの姿をモデルにした影響）。その正体は白銀に燃える巨大な九尾の狐である。

3000年ほど前に紅世に生まれた時から、すでに『己の存在の力を消費してモノの

『贖作を創る』という特殊能力を有していた。そのため、戦うことよりも気に入った宝具を贖作することの方にベクトルが向き、今ではライフワークとなつてゐる。あくまで贖作を創ること自体が目的のために、創つた後の贖作には興味がなくなる。放置された贖作が悪用されることを危険視したアラストールに一度雷とゲンコツを落とされたことがある。それが原因で、アラストールとは仲があまりよくない。例えるなら『口うるさく恐ろしい体育教師』のように思つてゐる。

性格はマイペースかつ気分屋な自由人。冷静沈着でもなければ豪放磊落でもない。しかし、偏屈者の表皮の下に他者への深い配慮も隠し持つてゐる。贖作をすることに罪の意識などまったく感じておらず、趣味に生きることを何より尊ぶ。宝具を創ることのできる人間という種族を認めており、それ故に人喰いを良しとしない。しかし、人の存在の力を喰わないために現界に降りても存在の力がすぐに不足して長く滞在することができず、長年フレイムヘイズと契約することを念願していた（契約すれば長期間現界に滞在することができる）。世界のバランスを護るといふ使命はオマケ程度にしか認識しておらず、人食いは自分の趣味の妨げになるといふ消極的な理由でフレイムヘイズ側に属している。

最近契約したサユのことをいたく気に入つており、大抵の場合はサユの意志を尊重するなどともはや愛娘の如く可愛がつてゐる節がある。ちなみに、彼が自らの称号に「炎髪

灼眼の討ち手”と同じ“討ち手”を使っているのは、アラストールへのこれ見よがしの当て付けのためである。

実は“髓の楼閣”ガヴィダと交友があり、意見の衝突は多々あれど何だかんだで仲が良かった。唯一の友人だったガヴィダが消滅した後は、ほとんどを紅世に引き籠って過ごしていた。基本、ぼっちなのだ。

〈特殊能力〉

フレイムヘイズ “白銀の討ち手”に付与される能力とは違い、テイレシアスが創った贖作は存在の力の供給がカットされても自然消滅はしない。また、フレイムヘイズでは手に余る巨大・精密な宝具も再現が可能である。自身の存在の力の塊であるため贖作に自由に手を加えることができるが、当人はしたがらない。最高ランクの宝具を贖作する場合、同時に創ることが出来る限界数は最大9つまでという生まれながらの制限がある。

〈元ネタ〉

名前の由来はギリシャ神話に登場する元祖TSキャラのテイレシアース。蛇の交尾を偶然目撃してしまい、「その時不思議なことが起こった!」というノリで女体化してしまった不幸な人物。世界広しといえどこのような奇天烈な経験をした人間は彼(彼女

?) だけだろう。

† † †

“螺勢” キュレネー

4000年前以上前に紅世に生を受けた、灰色の炎を持つ紅世の王。灰色の衣を幾重にも纏った白人の美女の姿をしている。遠く離れた場所から獲物をいたぶり殺すことのできる「弓矢」に陶醉しており、弓を使わせれば数ある紅世の王においても彼女の右にできる者はいない。また、紅世生粋のリヨナラーでもあり、特に少女のフレイムヘイズを苦しめ殺すことが趣味のスーパーサディストでもある。特定の勢力に属すのではなく、傭兵として名高い“壊刃”サブラクのようにフリーランスで活動している。

その能力は「分身」だが、彼女のそれは桁が違う。存在の力があればあるだけ己の分身を作ることができるため、上限は存在しない。“白銀の討ち手”“弔詞の詠み手”との交戦の際には数千もの分身を作っていた。遠距離からの圧倒的な物量攻撃を得意とし、狙撃の腕も非常に秀でている。その手で幾多ものフレイムヘイズたちの命を刈り取った。

近代で五指とまではいかなくとも十指には入る実力を備えているため、彼女を味方に

引き入れたいと思う者は多いが、少女のフレイムヘイズを見つけると作戦そっちのけで勝手にそちらに傾倒してしまうので肝心な時に頼りにならないと不評も多い。逆に、少女のフレイムヘイズを餌に使うと簡単に協力するため扱いやすいという好評もある。

人間を脅して作らせた攻撃宝具『カイニス』を愛用している。薦が絡み合つてできたような黒色の弓の形をしており、存在の力を矢状に収束させ、指向性を持たせて射出できる。また、キュレネーの分身に合わせて宝具も分裂するという特性も持っている。

前述したように非常に強大な紅世の王ではあったが、相手に合わせて武器と戦い方をオールマイティに選択できる「白銀の討ち手」とは相性が悪かった。また、「白銀の討ち手」が選択した宝具は偶然にもキュレネーが心から忌み嫌う拳銃の形状をしていたため、普段の冷静さを欠いてしまったのも大きな敗因となった。

〈元ネタ〉

元ネタの方のテイレスアースさんが蛇の交尾を目撃した山の名前「キュレネー（またはキタイロン）」と、紀元前4世紀に設立された極端な肉体快楽主義哲学の学派「キュレネ派」が元ネタ。容姿は *fatestaynight* のキャスターさんがモデル。でも耳は尖ってない。

宝具の元ネタは、こちらもギリシャ神話のTSキャラ「カイニス」さん。元は女性と

して生を受けたが、神々の恩寵により男性カイネイウスへと性転換され、そのまま一生を遂げた。息を引き取った瞬間、彼は元の女性の姿に戻ったという。それを目撃した家族友人はとても驚いたに違いない。

† † †

「風雲」へリベ

シヤナと悠二を襲撃した紅世の王。浅黒い肌と彫りの深い容姿という中東人種に通ずる美青年の容姿をしている。炎の色は不明。『愛染自』ソラトや『愛染他』テイリエルのように若い紅世の王。多くの隣子を従え、自らも俊敏性と頭脳の優秀性に富んでいた。本文中では呆気なく討滅されてしまったが、高度な意思を持った隣子を数多く生み出したり、高度な戦術を用いていたことを考えれば、彼がそれなりに有能な紅世の王だったことが伺える。しかし、シヤナを引き止めるはずであったキュレネーが間違つて『白銀の討ち手』を引き止めたこと、獲物としか見ていなかった坂井悠二が実はへりべを越える戦術家であったことが災いし、ものの数分で『贄殿遮那』のサビにされてしまった。

作者が鼻くそほじりながら考えたためほとんど設定らしい設定もないくらいの噛ま

せ犬キャラクターだったが、ヴィルヘルミナに坂井悠二の有用性を知らしめた点については役立ったと言える。もちろん元ネタなんてない。語ることもない。可哀想。

義足の騎士編 プロローグ

「俺がフレイムヘイズになったのは、一人の女の子と出会ったからなんだ」

——第三次フレイムヘイズ兵団突撃機動軍司令官『義足の騎士』の回顧録より

† † †

暗く臙げな、どこか奇妙な部屋。石壁で構成されたその部屋には窓はなく、照明は壁に備えられた蠟燭しかない。明らかに中世風の趣のある部屋だ。壁にそっけなく貼られた日本語のカレンダーがなければ、西洋にある廃教会の一室と間違えてしまいそう
だ。

そこに、一人の男がいた。彫りの深い顔つきをした三十後半の白人の男だが、分厚いメガネの奥に隠されたその灰色の瞳はどこか疲れた哲学者のような雰囲気を漂わせ、彼をさらに十歳は年老いて見せた。椅子に深く腰掛け、男は一人きりで何かの作業をしている。——否、たつた今、二人になつた。

「Schreitet die Arbeit glatt fort? Deni

S.

(調子はどうかね、デニス)「

背後の壁から染み出してきた人間が、撫でるような声——流暢だが、どこか発声に違和感を感じるドイツ語——で問う。暗くて判然としないが、上等な燕尾服に身を包むその姿は一昔前の西洋の紳士のようだ。その異常な訪問者に振り返りもせず、黙々と手を動かす男はフラスコの中で青白く光る炎を顎で指して平然と応える。どうやら、彼の名はデニスというようだ。

「Die Arbeit schreitet sehr glatt fort.

„Macht des Existenz“ ist ein wenig not

wendiger. Es wird sofort vervollständigt,

wenn ich mache, damit es.

(至つて順調だとも。あともう少し、君がこの“存在の力”を持って来てくれれば、すぐに完成する)「

「Ich sehe! Es ist sehr gute Nachrichten

!

(おお、そうか!それはよかつた!)「

デニスの返事に、紳士は声を弾ませた。ステッキを鳴らしながらゆつたりとした歩み

でデニスの元へ近寄り、その手元を蛇のように首をうねらせる動きで覗く。

デニスにはポットほどの大きさに削られた木塊をひたすらノミで削っていた。象形文字のような得体の知れない言語や奇怪な紋様を器用な手つきで表面に余すところなく刻み込んでいく。

ふと、デニスの手が止まった。紳士を振り返り、その満足そうな笑顔を凝視する。ゴムのような質感をした肌の奇妙さが蠟燭の乏しい明かりで際立つ。相変わらず気味の悪い笑顔だ、と彼は思った。

「……Salmacci, Wir machen Zusammenarbeit
die ganze Zeit. W•rdest du heute meine
Frage beantworten? Was ist das „Macht
des Existenz“?»

(なあ、サルマキス。私たちはずっと共同作業をしてきた。今日こそは答えてくれてもいいんじゃないか? この『存在の力』とは一体何なのかを)「

デニスは、突然自分の元に現われたこの得体の知れない紳士から、*“存在の力”*という不思議な炎のことをほとんど知らされていなかった。少し前までは、彼自身も知らうとも思わなかった。紳士から与えられる今まで見たこともないような未知のエネルギー

ギーと異世界の技術は非常に魅力的で、根っからの職人氣質な技術屋である彼を盲目にさせるのには十分だった。しかし、デニスには存在の力にだけは畏怖を覚えていた。時々、炎の中から大勢の人間の断末魔の悲鳴が聴こえる気がして、最近ではろくに眠ることすらできなくなっていたのだ。

紳士——サルマキスが、ふむと顎に手を当てた。言うか言うまいか悩んでから、答えを待つてじつとこちらを見ているデニスに小さなため息をついた。優雅な動きで体を翻してデニスに背を向けると、そのまま去ろうとする。

「Salmaci.

(サルマキス)」

「Ich verstehes. Ich verstehtes gut!

H·re es sich energie·en, Mein Freund. Ma

cht des Existenz" ist——

(わかっている、わかっているとも。いいかね友よ、存在の力というものは——)」

サルマキスはそので一旦止めると、首だけでぐるりとデニスを振り返る。その顔には、同じ人間とは思えない口元を引き攣らせた凄絶な笑みが貼りついていて。いや、事実、彼は人間ではないのだ。

「Menschliche Energie. In Krze ist es

ine Seele.

(人間の生命力、つまり魂そのものなのだよ)

「Warum . . . atme es ein?

——なん、だと?)」

デニスの手から木塊が滑り落ちた。サルマキスが嘘を言っているとは思えなかった。戦慄に全身から汗が噴き出る。では、あの悲鳴は——?

「Nicht, du verstehst? Aber es gibt keinen Weg. Das „Macht des Existenz“ ist Macht für einen Menschen, dem Ruf zu folgen. In der Welt zu existieren. Es ist die beste Macht, die nicht erhalten wird, wenn ich es nicht aus einem Menschen herausziehe!

(理解できないかね? まあ、無理はない。存在の力とはその名の通り、人間がこの世界に存在するために持っている根源の力だよ。人間から“抽出”することでしか得られない、至高の力さ)

物覚えの悪い教え子に諭すように説明すると、サルマキスは来た時と同じように壁の

中にその体を染み込ませて行く。去つていく人外の存在に、デニス椅子を蹴り飛ばしてすがるように掴みかかる。

「Wartzeit Salmaci! Wie · ber dem Mensch
n, der "Macht des Existenz" verlor!? Ist
es tats · chlich anders!?

(待つてくれ、サルマキス! 存在の力を抽出された人間はどうなる!? まさか……!?!)

半狂乱のデニスの手からするりと逃れたサルマキスは、首だけでぐるりとデニスに振り返ると、邪悪な嗜虐の笑みを浮かべた。

「Nat · rlich stirbt der Mensch. Ich versc
hwinde vollst · ndig. Aber es kann nicht
die Sache geben, die du dar · ber zusetz
t. Du benutztest schon unz · hliges Ein
Mensch · · · Bis morgen. Auf Wiedersehen.
(もちろん、死ぬ。この世から何の痕跡も残さず消えるのだ。だがそれで君が気負うこ
とはない。君はもう数えきれないほどの人間を消費してきたのだから。では、御機嫌よ
う。友よ)」

嘲笑うかのようにそう言い残すと、サルマキスの姿も気配も完全に壁の中へと消え失

せた。デニスが呆然として地に膝を突く。

なんということだ。自分が今まで作ってきた作品——サルマキスは宝具と呼んでいた——には、数え切れないほどの人間の命が使われていたのだ。サルマキスの甘言にまんまと騙された。……いや、知ろうとしなかった自分も共犯だろう。自分の罪は許されるものではない。

デニスはおもむろに立ち上がると、足元に転がっていた製作途中の宝具を拾い上げた。サルマキスが是非にと持ち掛けた、彼念願の代物。これを創るにあたって、デニスは大量の存在の力を使った。つまり、大勢の魂を使ってしまったのだ。しかも、この効果を発揮させるためには、より多くの存在の力を必要とする。他ならぬ自分がそのように創ってしまった。これをサルマキスに渡せば、今までよりもっと多くの人間が犠牲になることは火を見るより明らかだ。これ以上、あの非情な男に人間を殺させるわけにはいかない。

「…Nine…!」

(……駄目だ……!）」

破壊してしまおうと手斧を振りかざす。が、そうしたところでまた創らされるだけだという考えが頭をもたげ、振り下ろす気力を削ぎ落した。それに、この宝具に大勢の人間の命が詰まっていると知ってしまった今では、彼らの犠牲の魂を破壊することなどで

きない。行き場のなくなった怒りと無念とともに手斧を床に突き刺す。ドカツと鈍い音が石造りの空間に響き、すぐに消えた。

自分はどうすればいいのか。サルマキスは恐ろしい力を持った悪魔だ。自分が抵抗したところで、あの男には傷一つつけることすらできない。それに、自分には妻子がいる。一人息子は先日、事故に遭って右足を失い、満足に動くことすらできない。今ではその事故すらもサルマキスの仕業ではないのかと疑ってしまう。下手なことをすれば家族がどうなっても知らないぞ」という警告だったのではないかと、と。

「Was will Gott, ich mache? Untrrichte
es bittte, Gott:…」

（おお、神よ…。私はいったいどうすればいいのです？お教え下さい、神よ……）
虚しく響いたその声に、返事はなかった。

† † †

全身で風を切り裂く。ライバルたちを遙か後方に追い抜き、追隨を許さない走りですラックを駆ける。周囲の光景も何千人という観客たちのざわめきさえも流星にして背後へと吹き飛ばしていく。その勢いを殺さぬまま、胴体でフィニッシュテープを破る。

一瞬の沈黙が会場を包み——雷鳴のような大歓声が空間を轟かせた。観客席から、街中から、世界中から、フリッツと俺の名を何度も叫ぶ声が聴こえる。巨大な電光掲示板には『世界新記録』の文字が表示されている。それを仰ぎ見て、俺は高く腕を振り上げて歓喜に叫ぶ。

ああ、これは夢じゃないのか？こんなことが本当にあるのだろうか！
ふと、自分をこの栄光の瞬間に導いてくれた足に目を落として、

——足がなかった。

「……やめてくれッ！」

突っ伏していた机から顔を起こす。慌てて辺りを見回して、今まで見ていたものが夢なんだと理解した。どうやら居眠りをしてしまっていたらしい。あまりの悪夢に、以前住んでいた国の言葉まで出てしまう始末だ。長く住んでいたから身に染み付いてるらしい。

『Dies ist die Zeit für neuen neuen Welt
rekord! Ich wurde ·ber·rascht. Er kann!
s ehrfr·h laufen!』

（これが、今回の新記録です！速いですね！）

点けっぱなしにしてしまっていた型の古いテレビのなかで、世界大会を中継するアナウンサーが興奮して声を荒げている。そのうるさい声に顔を顰めて液晶画面を睨みつけると、『100メートル短距離走・世界新記録：9秒70』というテロップがでかかと強調されていた。なるほど、たしかに速い。

——だが、はつきり言つて俺ほどじゃない。俺なら9秒68は出せる自信がある。事実、出したこともある。だけど、俺は決してオリンピックという舞台で華々しく活躍することはできない。たとえばどれほど驚異的なタイムを叩きだしたとしてもだ。

（「足」さえあれば、俺だって）

右のジーンズの裾をあげて脛にあたる部分を撫でる。ザラザラとしていて冷たい肌触りは、人間の肌のものではない。当然だ、木製なんだから。

「Sch e i e !

（くそっ！）

持っていたシャープペンシルを壁に投げつける。俺の右足は、膝から下の部分が存在しない。事故で激しく傷つき、切断してしまった。この義足は、4年前に死んだ義足職人だった父さんが造ってくれたものだ。父さんが死ぬ間際に精魂を込めて完成させたこの義足のおかげで、俺は自前の足を持つている奴らよりも早く走れるようになった。

突然、日本国籍からドイツ国籍へと変更させられて、何かから逃げるように俺たち家族を父さんの母国であるドイツに連れて来たことは今でも少し恨んでいる。急激な変化への適応を迫られて、俺と母さんは大きな負担を負うことになった。引越してすぐに父さんが死んだせいで生活は苦しくなり、俺のために必死に働いてくれた母さんは身体を壊して入院している。こんな結果になってしまふことは、聡明だった父さんなら想像ができたはずだろうに、なぜ突然ドイツへと渡ったのか……。当人がこの世を去った今では知る由もないことだ。

この義足のおかげで生き甲斐を見つけられた。誰にも負けない特技を手に入れることができた。苦学生としてただ生きるために勉強するだけの退屈な日々を添えてくれている。それは、心から感謝している。

でも……偽の足じゃ、オリンピックには出られない。障害者のためのオリンピック——パラリンピックに出たって、世間からの注目はほとんど浴びない。賞金も名誉も栄光も、本物のオリンピックに比べれば微々たる物だ。

(本物の足があれば、今頃、世界新記録を掴んでいたのは俺だったんだ)

テレビ画面の中で観客の拍手に大きく手を振って応えている、世界新記録を打ち立てたスカンディナヴィア系人種の選手を冷えた眼差しでしばし見つめる。もしかしたら、そこに映っていたのは俺かもしれないのに、と。義足を履いてすら9秒68の記録

なら、自身の肉の脚があればもつと速い記録が出せるに違いないからだ。

テレビに映る選手の喜びに満ちた満面の笑みとは対照的な暗く深い諦観の思いに苛まれ、会場に満ちる感動と反比例してズブズブと気が沈んでいく。

「……Halten wir an, da・ich denke.

(……やめやめ、なにやってんだ俺は)」

頭かぶりを振って気を取り直す。ない物ねだりをしたって仕方がない。テレビを消して傍にある簡素なベッドへ倒れこむ。頭上にある時計を見れば0時をとくに過ぎていた。明日も朝からスポーツクラブでの練習がある。ドイツは日本と違って学校に部活動があるところはほとんどないが、その役割は地区ごとのスポーツクラブが担っている。本気でやりたい者が集まっているクラブは日本の部活動に比べてより実践的だし、俺が顔を出すクラブはその典型だった。寝不足で参加できるほどヤワなところではない。もう寝よう。

簡単な点検を済ませてから慣れた手つきで義足を外し、枕元にある照明のスイッチを切る。途端、心地よい眠気に襲われる。勉強で疲れていたのだろう。まるで日が暮れるようにゆつくりと瞼が閉じていく。

意識せず狭まっていく視界に、街の夜景を透かす窓が映る。毎日嫌でも視界に入る、埃だらけの小さな窓。

そこに、目を疑うような光景があつた。

「…Ein Engel…？」

(…「天使」…?)

向かいの教会の屋根に、天使が佇んでいた。純白に輝く長髪と大きな翼を背ではためかせて華麗な白銀のドレスを着ていれば、それは天使としか言いようがないだろう。

俺の視線を察知したのか、天使がこちらをツイと振り向く。さらりと風を孕んで流れた銀髪が自ら光を放っているかのように輝いた。

「あまりの可憐さに、絶句した。」

東洋系の顔立ちをしているが、その繊細で端麗な容貌はこの国の人間も思わずため息を漏らさずにはいられないだろう。透き通るような白い肌、洗練されているのにどこか少年のようなあどけなさが宿る細面、そして黄金比を体現するような引き締まった細身の肉体——。

究極と言うべき造形をしたその少女は、まさに「美少女」を絵に描いたような、どこか創造物じみた完璧な美しさを煌々と放っていた。見た目はひどく幼いのに、すでに現

在で完成していると確信できる美に満ちて、肉欲というより所有欲を煽り立てられる。そういう趣味を持つていない俺にも、天使の少女は女として十分すぎるほど魅力的に見えた。年齢は、まだ10代前半だろう。だというのに、薄い紅唇が月の光を反射して艶々と濡れ光る様は、年齢という枠を超えた妖艶さを以て俺の目を釘付けにした。その姿を目にしているだけで胸が無性に切なくなり、ぎゅうつと締め付けられる。ゴクリ、と喉が鳴る音がひびく遠くに聞こえる。

見飽きて、もはや嫌気すら感じていた窓の光景が、この瞬間はどんなに神々しい宗教画にも勝る至宝の名画と化していた。

(これは現実か?夢か?)

自分の正気を疑いながら目を擦つてもう一度教会の屋根を見ると、

「……Was?」

(……あ、れ?)

果たして、そこには天使の姿なんてどこにもなかった。窓の外には、いつも通りの見飽きた世界がただ茫漠と広がっているだけだ。寝ぼけて変な幻覚を見たことは何度かあるが、天使なんてのを見るのは初めてだ。肺の空気を絞り出すほどのため息を吐き出して、くだらない妄想を見た自分自身に呆れ返る。さっき見た夢のせいで、よほど精神がまいっているのだろう。こういう時はさっさと寝て疲れを取るべきだ。

あれは幻覚だったと強引に結論づけ、寝返りを打って頭から毛布を被る。一週間後には大事な試験がある。ドイツの高等学校ギムナジウムでは良い成績がとれなければ奨学金のランクが下がってしまう。ドイツの奨学金制度は、貧しい家庭はもちろん、両親の収入に関わらず学生の成績が優秀であればさらに奨学金を与えてくれる。スポーツには金が掛かるし、なにより病気の母さんの件もある。こんなところで失敗するわけにはいかない。試合前に行う精神統一の要領で必死に頭を真つ白にすれば、途端に睡魔の波が訪れる。その心地良い波に身を任せながら、ゆっくりと眠りに落ちてゆく。

(でも、あの娘、)

意識の緞帳が落ちる直前、瞼の裏に焼き付いた天使の純白の瞳が目の前をよぎる。

(可愛かった、な……—)

これは重症だな、という自嘲じみた感想を最後に、俺は深い眠りについた。

† † †

「……あれ？ 反応が消えた？」

天使——『白銀の討ち手』サユが眉を擡める。

「どうやら、宝具への存在の力の供給がカットされたようだな」

その胸元から地鳴りのような低い声をあげて、サユが契約する紅世の王、『贗作師』テイレシアスがうぬと唸る。サユが目を閉じて意識を広範囲に拡散させ、もう一度周辺の探査を行う。しかし、先ほどまで感じていた宝具の反応はやはりまったく感じられなかった。

「？」

はたと、食い入るような視線を感じて背後を振り返る。少し離れた家の二階の窓から誰かがこちらを見ていた。ベッドに仰向けに寝転んでほとんど眠りかけている少年。黄金色に輝くブロンドの短髪に翡翠色の瞳をしているが、年齢不相応な野性味のある顔つきをしている。背丈からしてボクより年下のようなのだ。もつとも、西洋人らしいがっしりとした体格は、ボクがまだ坂井悠二だった時の体格より二回りは大きいのだが。

少年がごしごしと目を擦る。きつとボクの姿が信じられないのだろう。背中から羽を生やした人間がいたら誰だつて目を疑う。このゴスラーという街では魔女伝説が有名だそうだから、魔女なんかの間違われたかもしれない。騒ぎになることは避けたいので今のうちに地面に降りることにした。

音を鳴らさないように柔らかに足を踏み出し、とんと軽やかに地面に降り立つ。最初は元の身体とまるで違う体格や性能に戸惑いもあったが、もうすっかり順応できた。今ではこの身体をなんの齟齬もなく完璧に動かすことができる。

そこまで考えたところで、いつのまにか手が勝手にスカートの乱れを直していることに気づいた。慣れてしまうのも考えものだ。

「少女が身だしなみに気をつけることはいいいことだぞ？」

笑いを含んだテイレシアスのからかい声にふんと鼻を鳴らし、指先でペンダントをぺちりと弾く。テイレシアスに抗議する時はいつもこのようにする癖がついてしまった。

「放つといってくれ。それより、本当にここにあの宝具があると思う？」

サユとテイレシアスがドイツのゴスラーという田舎まで来た理由は、他でもない、
時の事象に干渉できる宝具^をを手に入れるためであった。フレイムヘイズの支援組織『^{アウトロー}外界宿』を経由してその宝具の存在を知った二人は、伝えられた微かな情報を頼りに日本から遠く離れたこの街まで辿り着いたのだ。

「それらしい反応があったのだから間違いないだろう。少なくともこの周辺にあるということまではわかったんだ。しばらく休息を取っていなかっただから、今日はもう休め。あの宝具を狙う徒もいる。突然、戦闘になる可能性もある」

そういえば、最近宝具の反応を追ってずっと動き回っていたから疲労が蓄積している。いかに超人のフレイムヘイズとさえい、疲れるものは疲れる。この状態で戦闘を行うのはたしかに不安だ。テイレシアスの言う通り、今は休むことにした。

運良く教会の二階の窓が開けっ放しになっていたのでひよいとそこから侵入する。

どうやらそこは倉庫のようだった。

(不法侵入だけど、ちよつと風を凌ぐ場所として借りるだけだし、いいよね?)

中に誰もいないことを確認して、無造作に置かれていたマットに横になると背に展開した外套、『タルンカツペ』を幾重にも身体に巻きつけて眠りにつく。

「うう、寒い。やっぱりフレイムヘイズでもヨーロッパの冬は堪えるね。温かいお風呂に入りたいよ」

「風呂と言えよ、お前がその身体で最初に風呂に入った時は——」

「アーアー聞こえないー！お休み！」

少年も、サユも、気づかなかつた。暗闇の中で、少年の義足が淡い水色の光を放っていることに。

その光が、やがて二人の運命を大きく変えるということに——

1—1 急転

「フリッツ・Y・ルヒトハイム。次は君の番だ」

スポーツクラブの部長を務める男——同じ高等学校ギムナジウムに通うひとつ上の上級生——に名を呼ばれ、俺は意識して悠然と立ち上がった。わざわざフルネームで呼ぶのは、俺を仲間とは見なしていないという意思表示だ。俺よりも拳ひとつ分は背の低いそいつを冷ややかに一瞥して、スタートラインへ立つ。俺はドイツ人の父親と日本人の母親のあいだに生まれたハーフだが、面差しなどの身体的特徴はゲルマン系そのものだ。肌の色が若干黄色みがかっているくらいで、それもほとんど目立たない。だから、俺がハーフだと知っているのは俺の履歴情報を知っている学校関係者くらいだ。

(今日は、9秒74だ)

前足側の膝を立てて義足の膝を地面に押し付け、足裏をスターティングブロックにじわりと乗せる。両手の指で全体重を支えて前傾姿勢をとり、太腿の大腿四頭筋に力を集中させて暴発寸前まで高める。鼻から大きく息を吸って肺腑を満たし、茂みから獲物を狙うチーターのように姿勢を限界まで低くする。疾く走る、それ以外には何も考えない。アイドリング状態だった心臓のギアを一段ずつ上げていく。呼吸を止め、精神を統

一し、走ること以外の思考と雑音をシャットアウト。獲得した耳が痛くなるほどの静謐の世界に、『用意：』という合図が響いた。身体に染み付いた滑らかな動きでぐつと腰を上げて静止する。自分が限界まで引き絞られた弓になったという確信。

空砲の音が耳に入ったと自分が理解するよりも速く、身体は感電したかのように跳ね動いた。アッパーカットのように激しく腕を振り上げ、足の回転を一瞬にして限界値まで上げる。車輪のように間断なくコースを蹴つて、風よりも速く疾駆する。ビュウビュウと風を切る音が、遠い。一瞬だけ瞼を閉じて、この感覚をたつぷりと味わう。この短い時間だけは、何からも束縛されない心からの自由を味わえる。病気の母さんのこと、学校のこと、将来のこと、金のこと、成績のこと、そして自分自身のこと。それら全てを振り払って俺は自由になる。何者も、今の俺には手出しできない。

景色が瞬く間に後方へ流れ、ついさつきまで100メートル先にあつたはずのゴールラインを飛び越える。そのまま10メートルほど余韻を楽しみながら速度を漸減させ、心臓と筋肉の収縮を平常時の状態に戻す。

「タイムは……えっと、9秒74、です……」

ストップウォッチを手にした年下らしい少女が呆然としながらタイムを告げた。想定していたとおりのタイムを叩き出したことにとりあえず満足し、俺は巖のような無表情でスタート地点へと戻る。メンバーの仲間や大人たちの空気が高タイムにザワリと

波打つが、それだけだ。褒めそやす顔はなく、全員が一樣に俺から距離を置く。……一人、タイムを告げた女だけを除いて。

「あ、あの、ルヒトハイム先輩……」

見ない顔の女だ。最近入ったマネージャーだろう。細かく観察せずとも、その白すぎるほど白い肌を見れば、男子部員の誰かを好いて入部したことは容易に想像がつく。このクラブはそういう手合いが多い。誰を好んで入部したのかは知らないが、迷惑な話だ。

「悪いな、忙しいんだ」

突き放すように短答し、何か言いたげだったマネージャーを押し退けるように待機ベンチへ突き進む。オリンピック選手も顔負けのタイムを叩き出したにも関わらず息も切らしていない俺に、小さなマネージャーは怯えたように身を竦めて道を譲った。伸ばした前髪越しに上目遣いにこちらを仰ぎ見る視線が、涙を溜めているように見えた。きつと化け物を見ている気分なんだろう。

ベンチに戻ると、同じ視線がクラブメンバーたちから浴びせられる。それを無視して俺はどつかと隅の指定席に派手に腰を下ろした。不快には思わない。こいつらがどんなに全力を出しても、俺のタイムには届かない。しかも、今のはほんのウォーミングアップに過ぎない。俺が本気を出せば、こいつらの自尊心は粉々に砕け散るだろう。

「義足の走者に負けた」と。

憐憫にも嘲笑にも似た感情を覚えて口端を歪ませながら、義足の接続を外して生身の足と義足の間の緩衝用フェルトを調節する。走る時も、義足は変わらず父さんが作ってくれたものを使っている。元は日常用に設計されたものだが、職人の技術の粋を凝らした丈夫でしなやかな木製の義足は、まるで本来の生身のようにフィットしてくれて、短距離走にも十分対応できる。以前にクラブポランテアが押し付けてきた短距離走専用の形状記憶合金製の義足で走ったことがあるが、タイムは散々なものだった。父さんがどれだけ優れた技術者だったかが身に染みてわかって誇らしく思う。

そうこうしているうちに、最後の走者が走り終えた。案の定、俺のタイムを越える者は今日も出なかった。部長が苦々しい表情をしてこちらに目を向けたので、それにひらと手を振って応える。ざまあみろだ。

いつものように、ぎりど歯を噛み締めて殺意すら込められた視線を俺に送った後、笛を鳴らして部員全員を傾注させる。

「よし、今日はここまでだ。大規模トラック整備のため、午後のクラブは中止だ。だが、各自で訓練はやつておくように。以上、解散」

蜘蛛の子を散らすようにメンバーが解散し、汗の染みだ服を着替えるためにそれぞれに割り当てられた更衣室へ歩む。そんななか、俺は一人学校へと歩を進める。汗をかい

ていないのだから、着替える必要もない。ジャージの上にセーターを着てそれで終わるだ。

背後で「化け物め」と呟く声が聴こえたので、鼻で笑って嘲笑を返してやった。射るような憎悪の視線を背中に感じながら、ふと思う。

最後に心から笑ったのは、いつだっただろうか。

クラスの俺の立場も、クラブのそれと大して変わらない。俺は溶け込もうとはしないし、クラスメイトたちもわざわざ迎え入れるつもりもない。比較的裕福な家庭の子どもが通うこのハイスクールの空気には最初から馴染むことは出来なかったし、馴染む努力をする余裕も気力もなかった。それに、むしろこの状況は俺にとつて好都合だ。ひたすらすべきことに集中できる。

ただ……一つ、気になることがある。同じクラスにアジア系の女がいるのだが、その様子明らかにおかしい。落ち込んでいたりとか、元気がなさそうとか、そんなレベルじゃない。まるで、なんとか消えかけの蠟燭のように、存在感が目に見えて薄れていつていつていっている。だというのに、ここからがより異常なのだが、他の奴らは誰もそれに気づかないのだ。陰湿なイジメを受けているわけでもない。ほんの数日前までは、その女はベラベラとくだらないことを仲間内で語っていた。

俺が横目で観察する中、そいつはフラフラと教室へ入ってきてストンと自分の机に座

る。そしてそのまま、人形のように固まって動かない。向こう側が透けて見えそうなほどに存在感が希薄だ。幽霊だと言われれば納得してしまいそうなくらいだ。誰にも話しかけないし、誰もそいつに話しかけない。完全に背景と同化してしまっている。

(まあ、親しいってわけでもないし、俺が気にかけることでもないな)

体調でも悪いのだろう。自覚症状があれば本人が勝手に病院に行けばいい話だ。ちなみに、ドイツの高校には保健室がない。自己管理は生徒本人がすべきことであって、悪ければ自分で病院なりなんなりに行けばいいというのがドイツの学校のスタンスだ。同じ理由で図書館もない。本が読みたければ市立図書館に行け、ということらしい。教材も自分で適切なものを買ってくればいい。日本から移住したときにはそのドライな考え方に驚いたが、今ではむしろ俺の肌合っていると思っている。自分のことは自分で解決すればいい。他人なんか、当てにすることが間違ってるんだ。

それ以上思い煩うこともなく、同級生のことなどすっぱりと忘却して、俺は今後の自主トレーニングの改良点について没頭し始めた。

† † †

必要な会話以外はしない学校生活が終わり、夕方、俺はまっすぐに帰路に就いた。道

草をする金もないし、奨学金獲得に必要な成績に達するために勉強もしなければならぬ。ドイツの高校では必修科目数が日本に比べて倍以上あり、どれも難しい。国や地方からの学生支援金はあることにはあるが、それらは今の学費と生活費、そして母さんの治療費で全部消えている。病院で長期入院しているため、重病ではないとはいえそれなりに金がかかる。保険だけでは賄い切れないし、そもそもドイツ国籍を取得してからまだ5年しか経っていないので医療保険も満額は支給されない。ギムナジウムでの最高ランクの奨学金の条件は「常に好成績を維持すること」だし、それだけでは足りないだろうからそのうちアルバイトも始めなければならぬだろう。自然とため息が漏れる。父さんの貯蓄を切り崩しながら生活するのも、そろそろ限界だ。正直、金の工面に関しては頭が痛い、進学は自分で選んだことなのだから仕方がない。

……そうやって自分を納得させなければ、この粘つくような息が詰まる日々を繰り返すことは出来なかった。昨日と同じ今日を過ごし、今日と同じ明日が来て、またその次も同じ日を繰り返す。一年先、十年先もただ繰り返される一日のために、明日に繋がるだけの今日をただ漠然と生きるだけの生活。そのうち、それが当たり前になって、走ることの楽しさも歳を重ねるごとに薄らいで、日々労働の汗にまみれ、仕事帰りの一杯やたまの贅沢を宝にして、誰かを好きになり、結婚して子どもを作り、そして僅かばかりの何かを残して老いさらばえ、安らかに死んでいく——。それが人並みの幸せなのだ

と理性が論す一方で、青臭く猛る本能がそれを明確に拒否していた。「そんなつまらない人生は嫌だ。俺の“器”はこんなものじゃない。機会さえあればもつと輝ける」と。

出し抜けに、突拍子もない妄想が風のように思い浮かぶ。かつて日本で読んでいた少年漫画のように、無為に続くだけの人生を木っ端微塵に破壊してくれるなにかが起こりはしないか、と。「あなたは他の凡人とは違う」と告げてくれる謎の何者かが現れて。「あなたが必要な」と嬉しい言葉をかけてくれて。そうして、ハラハラと心踊る非日常の世界に連れ出してくれる何かが——そう、例えば、昨晚に教会に立っていたようなとびつきりの美少女なんかが現れてくれないものかと。

「……なんて、都合のいい話だよな」

自嘲を多量に含んだ息を無意味な期待と共に体外に吐き出して腹腔を空にすれば、後にはいつもと同じ空虚な感覚だけが残された。中学生みたいな自分勝手な期待感なんてとつくに捨てたと思っていたのに、まだ大人になりきれていないらしい。もう17歳だつていうのに、馬鹿みたいだ。そんなご都合主義的なこと、起きるわけがない。期待なんて、持つだけ無駄なんだ。どんなに願おうと、どんなに足掻こうと、このへドロのようにまとわり付いてくる日常は何も変わりはない。

見慣れた道を歩き、見慣れた店の前を通り過ぎ、見慣れた角を曲がって、

ゴオツ、と火の粉が、燃え上がった。

「な、なんだ？」

突然、炎が視界を満たした。

でかい炎の壁が、一帯をドーム状に囲んでいる。腐った沼のような緑青色の炎の壁には、文字だか絵だかもわからないおかしな紋様が刻まれている。火事かと思つて辺りを見回すものの、慌てふためく人々の姿は見えない。いつもは賑やかなはずの路地にもカフエにも^{ひとけ}人氣はまったくない。

悪趣味な夢か、はたまた大掛かりなドッキリか。理性がそう思い込んで平静を保とうとするが、本能がこれはあつてはならない事態だと命の危機を警告してくる。見てはいけない禁忌の世界の皮膜が唐突に目の前で破れてしまったような感覚に、知らずに握りしめた拳が粘っこい汗で不快にベタつく。心臓がドクドクと激しく脈動して暴れまわり、「ここにいと死ぬ。早く立ち去れ」とヒステリックに体内から喚き立てる。確かに無為な日常からの脱出を願つてはいたが、この展開はあまりに唐突で、恐ろしすぎる。

わけの分からないままにとりあえずこの場を離れようと後退りをして、

「Es gibt nicht deine Flucht. (どこへ行くのかね?)」

すぐ耳元で男の声が囁いた。流暢なドイツ語は鼓膜の間近で発せられたはずなのに、吐

息をまったく感じなかった。咽喉を通るはずの空気がない、違和感の塊の音声だった。耳の穴にずりりと侵入してくる最悪に気味の悪い声に、氷の指で心臓を掴まれ、血が凍りついた。思考より先に総毛立った肉体の防衛本能が働いて反射的に腕を振るう。しかし、振り返ったそこには誰もいなかった。何も無い空間を振り切った腕がぶんと虚しい風切り音を立てる。

「君、私は……ちだよ」

「なっ!?!」

再び背後から不気味な声。移動する音どころか気配すら感じられなかった。

(どうやって後ろに!?)

今度は転がるようにして間合いをとって振り返る。見上げたそこには、英国紳士を思わせる服装をした中年の男が突っ立っていた。頬骨が透ける痩せぎすの顔、上唇を飾るのは鉛筆を引いたような口ひげ。高級感のある漆黒の燕尾服スワローズテールコートで細身を包み、同じ色のブリティッシュスクエアハットで頭を飾っている。白い手袋をつけた手には、頂上に光沢を帯びた琥珀が埋め込まれ全体に稠密な紋様が刻み込まれた黒いステッキを握っている。

「乱暴だねえ。まったく、紳士的じゃない」

外見だけ見れば、往年の白黒映画に登場するような一昔前の伊達男のようだが――

—中身が、絶望的なまでに異常だった。瞳孔が開いている、なんてものじゃない。白目のない黒目がそこに収まり、別の生物であるかのようにギョロギョロと蠢いている。まるでこの世界の悪意をたつぷりと吸い込んだような淀んだ眼球に見据えられただけで、骨に直接冷水を浴びせられたかのような悪寒が全身を駆け巡り、産毛が総毛立つ。面と向かい合っているだけで生命力が萎えしぼんでいく錯覚に吐き気がする。

それは、明らかに人間ではなかった。

(……なんの、冗談だ……!?)

額に次々と汗が浮かび、全身が小刻みに震える。そいつが細長の目で俺の身体を上から下まで舐めるようにくまなく観察していく。その視線に吐き気を催すほどの不快感を感じながら、しかし蛇に睨まれた蛙のように身体はその場に固定されてピクリとも動いてくれない。気色の悪い視線が俺の右足に到達する。瞬間、紳士の皮を被っていたその顔に亀裂が走る。それが笑顔だと気づくのには数秒の時間を要した。

「ああ、やっと見つけたよ、ルヒトハイム！そこに隠したんだね、私の宝具『トランスケンダンス・ムンドウム』を！」

「な、なんで俺の名を——!?!」

上擦る俺の言葉に、そいつが「ふむ？」と虚を突かれたというように小首を傾げて俺の顔を凝視する。そして合点がいったというようにぼんと手を叩いた。わざとらしい

動作がまるで人間を真似しているようで、余計に違和感が募っていく。

「ああ、君はルヒトハイムの息子だね！そうかそうか、たしかに彼によく似ている」

「父さんを知っているのか!? あんた、いったい……!?!」

精一杯の精神力を振り絞ってそいつを睨みつけながら疑問をぶつける。その間に、じりじりと少しずつ後退して距離を稼ぐ。そいつは、肩を竦めて顔面に走る亀裂を歪ませる。

「凡庸な君には言ってもわからないだろうし、わかる必要もないし、言う気もないよ。それにしても、君は父上にとてもよく似ている」

子供をなだめすかすように言うと、男はやおらステッキを無造作に掲げ、そして勢いよく地面に突き下ろした。ガツン、という道路を打ち付ける音。その意図がわからず眉を顰め、次の瞬間、目を見開いた。建物の陰、ポストの陰、車の陰、ありとあらゆる陰の中から生まれ出るように巨大な生き物が這い出て来た。ずるずる地面を這うそれらは、芋虫のような——いや、そんな生易しいものではない。深海に生息する異形の生物に通じるものがある、限りなく不気味で悪意に満ちた化け物だった。それらは俺が逃げようとしていた路地をイモムシのような巨体で塞いでしまった。あまりにも人外すぎる光景に立ち尽くすしかない俺に、紳士の姿をしたそれが蛇のような薄気味悪い笑顔を向ける。

「父上と同じく、逃げることにかけては人一倍優れているようだね。まあ——」

ガツン、とステッキが再び地面を突く。

「もう逃がさないけどね」

ぞる、と音を立てて無数の化け物が襲い掛かってきた。怖気と絶望に打ちのめされて身体がまったたく動かない。動こうという意志も生じてくれない。情けなく竦み上がって震えるだけだ。化け物どもが乱杭歯を見せ付けるように大口を開けて迫り来る。人間など軽くひと呑みにできる、洞穴のような大口。恐怖が体内で爆発し、思考が攪拌され、奥歯が掘削機の如くカチ鳴る。死神がその骨ばった手で俺の肩に触れているのを明確に感じる。

粘性の高い唾液が足元で跳ね、ドブのような臭気が眼前に迫る。もう、何をすることも遅すぎる。絶叫さえ上げられない。目を見開いて、冷や汗をびっしりとかいて、ただこの光景に翻弄されるだけ——

——運命に服するな

柔らかみのある、聞き慣れた声が脳裏に閃いた。何者かが死神の手を強引に振り払い、俺の肩を力強く掴んだような錯覚。

ゴツゴツと節くれだつた職人の手は、大きくて、温かくて、その感触は忘れようもなくて。

「父さん?——うわツ!」

突然、右足に刺すような痛みが走つた。まるで燃えるように熱い。いや、本当に燃えていた。見下ろせば、清々しい水色の炎を纏わせて義足が囁々と燃えている。美しい珊瑚のような、どこまでも続く空のような、見る者をハッとさせる水色に、俺は一瞬心を奪われた。木製ゆえに火が燃え移つたのかとドキリとするが、不思議なことに脚の肉が焼けている様子はない。それどころか義足との接点から力が流入してくるような、何でもできそうな万能感すら湧き上がってきた。

(う、動ける!?)

気づけば、痛みに意識を弾かれたことで身体を思い通りに動かせるようになっていた。心身に、急速に余裕が満ちてくる。さっきの声はなんだったのか、なぜ義足が突然水色に燃えているのか。どれもこれもわからないが、そんなことはどうでもいい。今はとにかく、この化け物どもから逃げるのが先決だ。俺の脚力なら逃げ切れるかもしれない。自由になった身体を180度ひるがえし、肉体の思うがままにクラッチスタートの

体勢をとる。右足に、今までにない力の充溢を感じる。太ももに力を込めると、まるで命令されたかのように水色の炎が一際燃え広がって俺を包み込む。

獲物を丸呑みにしようと迫る化け物の雄叫びが耳の後ろで聴こえると同時に、踏み出された右足が地面を思い切り蹴り飛ばし——その瞬間、俺は物理法則を超えた。

「——なあああッッッ!?!」

比喩でもなんでもなく、この瞬間、俺の身体はこの世界の物理法則を裏切っていた。大気が気圧の塊となつて行く手を阻もうとするが、俺はそれすらもぶち破つて壊れたマシンのように疾駆する。バシ、バシ、と円錐状の白い膜を何枚も蹴破り、その度に轟音が遠くに放たれ、視程の左右限界線で何かが派手に吹き飛ぶ。

(なんなんだよ、これは……!?!)

強烈なGが全身を叩きつけてくるが、加速は弱まることを知らない。それは疾走という名の暴虐だった。遙か後方に置き去りにした伊達男の驚愕の声が聴こえたが、あつという間に聞き取れなくなつた。完全に制御不可能になり、猿のように無様に手足を振り乱してなんとか走る。周囲の光景が水飴のように引き伸ばされ、俺の動体視力ではただの横線の群れにしか映らなくなつてきた。急激に増加していくGの圧迫で眼球が押し潰され視界がブラックアウトとレッドアウトを繰り返す。時速何キロ出てるのか。そもそもキロ単位なのか。もう何も見えないし、聞こえない。硬膜のなかで光が散る。風

圧に胸郭が押し潰され、息もできない。思考もできない。踏みしめる足底の感触のみが感覚の全てとなった。

「うがつ!?!」

不意に何かに足をとられて転倒する。目が見えない俺が体勢を整えることなどできるはずもなく、当然のように俺の身体はコマのように猛烈にスピンしながら放物線を描いて虚空を舞った。数秒の滞空時間を経て背中から地面に激突し、二、三回、跳ねてどこかの建物にぶつかってやつと動きが止まる。巨大な鉄球の一撃のような鈍重な衝撃に全身を余すところなく打ち据えられ、もはや痛覚さえ麻痺していた。ただ身体が痺れて動かない。指一本たりともまともに動かせない。痺れる眼球だけがなんとか自分の意思で動かすことができた。明滅する視界で辺りを見回し、そこが自分の家のすぐ目の前だということがわかる。ということは、背中を接している建物は教会だろう。動物は身の危険を感じると咄嗟に自分の住処に足を向けると本で読んだ。俺もその例に漏れなかったらしい。

自由の利く片目で義足を見てみると、水色の炎はとつくに燃え尽きて普通の義足に戻っていた。あれだけの衝撃を受けたのに、木製の義足には欠損どころかかすり傷一つ見つけられない。思い返せば、この義足は昔からやけに丈夫だった。手を滑らせて落としても欠けたりしないし、色落ちもしていない。今まで、それは頑丈な素材を使ったか

らだと思いきんでいたが、考えてみれば奇妙な話だ。

「……やれやれ。驚いたな。手間をかけさせないでくれるかな？あまり騒ぐとフレームヘイズに見つかってしまうじゃないか」

今、もつとも聴きたくなかった声。ずるずると化け物どもが重く長い図体を引きずる音が聴こえ、緑青色の火の粉が視界いっぱいに散る。逃げなければと脳が緊急指令を送るも、意識と無意識の境目に落ち込もうとする肉体は反応を示してくれない。

「私がほしいのは『トランスケンデンス・ムンドウム』だけ——と、言いたいところだが、君はかなりの存在の力を持つている特異な人間のような。曲がりなりにもその燃費の悪い宝具を起動させられたのだから。悪いけど、食べさせてもらおうよ。恨むなら父上を恨むんだね、名も知らぬ少年」

こいつの言っていることがどれ一つとして理解できなかった。父さんとこいつがどんな関係だったのかもわからないままだ。水色の炎を噴き出す義足のこともさっぱりわからない。「存在の力」とはなんのことだ。俺がそれを持っているって、どういうことだ。疑問ばかりが頭に募る。俺は、何もわからないまま、こんな理不尽な化け物どもに殺されるのか？

化け物の群れから、車ほどはある巨大なナメクジのような生物が一匹、他の仲間を力づくで押しやりながら進み出てくる。顔もなければ四肢もない。あるのはあんぐりと

開けたでかい口だけだ。その口にも、歯茎はなく、舌もなく、喉すらない。そこには口腔内を埋め尽くしてギチギチと煽動する鮫のような牙だけが無数にある。これに食われたら、生きながらにミキサーにかけられてグチャグチャに殺されてしまうだろう。俺は間違ひなく死ぬ。俺が死んだら……母さんは、どうなる？

「……チクシヨウ、ふざけんじゃねえぞ……！」

飛びそうな意識を悪態をついて必死に繋ぎとめ、持ち前の精神力を総動員して強引に身体を引き起こす。それを見て、化け物の親玉である伊達男がほうと感嘆のため息を吐く。

「ふむ。精神力は父上を上回るようだ。フレイムヘイズにでもなったなら、君はよほど優秀な戦士となっただろう。たとえ敵勢力であろうとも、貴重な人材が失われることは惜しい」

芝居がかった大仰な仕草でさも残念がってはいるが、内心は正反対のことを考えていることがよくわかった。その仕草の何もかもが鼻について、こんな奴に生殺与奪を握られていると思うとはらわたが煮えくり返る。鼻先まで迫った化け物が、目の前の絶好の餌に興奮して靄のような吐息を吐いて激しく身悶えする。下水道の臭いを千倍に凝縮したような吐き気を催す汚臭に嗅覚が一瞬で麻痺する。思わず口を押さえて嘔吐を防いだ目の前で、牙が擦れあつてギチギチと軋みをあげる。その牙にどす黒く変色した血

痕が数え切れないほどこびり付いているのを目にしてしまい、戦慄する。いったい何十人、いや何百人の人間がこいつの餌食になったのか。

「こらこら。宝具まで食べてしまっやないぞ、ハリハラ?」

微笑を浮かべてステッキでこつんと化け物の尻尾を小突く様子は、まるで愛犬を躑けているかのようだ。

「伊達男」、「宝具」、「トランスケンデンス・ムンドウム」、「存在の力」、「フレイムヘイズ」、「父さん」、「義足」——それらを知る由もなく、知らないまま終わる。自分が殺される理由すらわからないまま死ぬ。そうして、母さんは一人になる。ただ一人の肉親を失ったら、母さんがどれだけ悲しむのか。いや、この伊達男は俺の次に母さんを狙うことだってありえる。そんなの冗談じゃない。許してたまるものか。なんとしてでもこの窮地を脱出しなければならぬ。なのに、身体は今にも崩れ落ちそうな状態だ。精神力も限界に達して、今にも無意識の闇に滑り落ちてしまいそうだ。「くそつ、動け、動けよ!もう一回、燃えろよ……!」

義足はうんともすんとも言わない。義足と繋がる肉の面から燃料切れという奇妙な直感が伝わってくるだけだ。スツと影が俺に覆い被さる。ゾツと血の氷る思いで見上げれば、ハリハラと呼ばれた化け物が俺を噛み砕こうと顎門あごどをがぱりと開けていた。嬉々として迫り来る化け物の裁断機が俺の身体を包み込んでくる。自分を取り巻く謎

を聞かされながら、それをろくに理解もできないままに醜い化け物に押し潰される。こんな、こんなの、あまりにも理不尽じゃないか——！

「う——うわあああああああああああああああ!!!」

ついに恐怖が沸点に達し、喉の奥から悲鳴が迸る。

その絶望の叫びが、絶望の沈黙に取って代わろうとする瞬間——

轟音が耳朶に響いた。俺の頭の真横から、教会の壁を突き破ってそれが姿を現す。円錐状の螺旋を轟然と回転駆動させる銀色の刀身は、ハリハラ^ハの牙を一本残らず粉碎して口腔に破壊の猛威を叩き込む。巨体に深々と食い込んだそれは内臓を引つ掻き回し、グロテスクな中身をあたりに撒き散らした。

俺が狂つてないのだとしたら——それは、紛れもなくドリルだった。

ハリハラがドリルをその身に突き立たせたまま断末魔の悲鳴を上げてのたうち回る。それと同時に、亀裂から光を明滅させる教会の壁が内側から爆砕した。顔の前で腕を交差させて襲い来る石礫を防ぎ、教会から現われたソレを凝視する。

「天使……？」
Ein Engel

純白に燃え、しかし柔らかな質感を持つ髪が、ゆっくりと地に惹かれ、腰の下まで伸びる。後光のような強烈な輝きを放ち、純白と純銀の入り交じる戦装束が美しく照り映える。全てを塗り潰す白い光に彩られた少女は、昨夜にこの教会の屋根で見た幻覚の美少女そのものだった。だが、腕を組んで威風堂々と仁王立ちをしている様子は天使というより戦士だ。俺を視界に入れた少女の純白の瞳に、より一層強い怒りの炎が宿る。仁王像のような絶対的な怒りを孕んだ瞳。それは俺に向けられたものではなく、俺を殺そうとした伊達男に対しての怒りだった。地獄の劫火の如く大気を燃やす怒気に、チリチリと肌が焦げるような痛みすら感じる。

白銀と緑青色の火の粉が舞い散るなか、俺より遥かに小さい矮躯の少女が、圧倒的な鬼迫を放出させて化け物どもと対峙する。俺は、周りの状況も、置かれた立場も忘れて、見入った。純白の火の粉を舞い咲かせて屹立する、純白の髪の子女を。

その瞬間、俺は直感した。

外れた、と。

永遠に続くと思っていた俺の日常は、あまりに呆気なく燃え落ちた。あるいは、燃え上がった。

もう、日常には戻れない。ここから、今までとは絶望的なまでに乖離した非日常が始まる——

1—2 触手

「おお、そんな、やめろ、やめてくれ！」

今までの冷静な態度をかなぐり捨てた伊達男が、手足をばたつかせて死に体の化け物に走り寄る。そのまま汚物のような内臓にまみれるのも構わずにガバリと抱擁した。ビクビクと激しくのたうち回っていたハリハラは、主人の腕に抱かれた途端に緑青の火の粉を散らして音もなく消え失せた。

「ハリハラアアアアア!!」

伊達男が惜しみなく涙と鼻水を流して慟哭する。見るに忍びないほど哀れを誘うその悲嘆ぶりは、事情を知らない人間なら同情して思わず抱き締めてやりたくなるほどのものだった。

「……許さんぞ、下賤なフレイムヘイズめ」

ぼつりと、項垂れ、両肩を悄然と下げていた男が静かに呟いた。その背中から邪悪な怨念と瘴気がゆらりと立ち昇る。たったそれだけで、俺の身体はガクガクと震えだす。情けないと悔しがる余裕すらない。動物としての本能が発する警鐘は、意志の力ではどうにもならないのだから。

男が胸元のポケットからハンカチを取り出して、自身の体液で汚れた顔を丁寧に拭く。だが、ハンカチが拭いたのは涙だけではなかった。

——ズルリ、と白い肌が剥がれた。

拭うたびにブチブチと薄布をちぎるような音を立てて剥がれ落ちていく。ホラー映画の特殊メイクじみたグロテスクな様子を見せ付けられて、俺は目を逸らせない。拭い終わると、そこには到底人間とは思えない異形の顔面があった。湿り気を帯びた肌は濁った濃緑色で染まり、濃紺がマーブル模様のように見える。よく見るとそこにはウロコのようなものであつた。目鼻立ちというものが欠如したのつぺりとした顔は、ある生き物を連想させた。

「ト、トカゲ……!?!」

「お前は……紅世ぐぜともがらの徒、
“魔使い”サルマキスカ」

「えっ?」

思わず呆けた声を漏らして声の発せられた方に目を転じるが、そこには白銀の美少女しかいない。少女の声は、イメージしていた可憐な声とは正反対の地鳴りのような低い声だった。心のどこかで抱いていた幻想が崩れる音がする。だが、驚愕の追撃は留まらない。少女が突然発した日本語ヤパーニッシュに対し、

「私を知っているのか……ああ、その炎! さては貴様、
“贗作師”だな!? この薄汚い

キツネめが、よくも私の可愛いペットを殺してくれたな！」

伊達男——サルマキスという名らしい——が総身を震わせて顔をグニヤグニヤと歪ませながら、憎々しげに声を荒げた。その地獄の呪詛のような声は怒りに満ち満ちている。そして、その言語は日本語に聴こえた。

(な、なんだ? どうしていきなり日本語の会話に切り替わったんだ?)

相変わらず違和感を内包したサルマキスの台詞が、急に日本語として知覚されるようになった。まるで魔法かなにかで、この世界の再生音をボタン一つで切り替えられたようだ。どのタイミングで変わったのかも察知できないほどの自然な言語の移行に目眩を起こしそうになる。

「ふん、やかましいわ、トカゲめ。お前、人間に宝具を持ち逃げされたらしいじゃないか。そんな間抜けの阿呆がこんなところで何をしている?」

「私を侮辱するか、贗作狂い風情が! 『祭礼』に連なる眷属であるこの私を!」

「なーにが眷属だ。連なるというても末席も末席だろうが。『祭礼の蛇』だってお前のことなんざ覚えてもおらんさ」

「お、おのれ……!」

少女が低い声でサルマキスの怒りを一蹴する。しかし、きつく結ばれた小さな口は先ほどからぴくりとも動いていなかった。よくよく聴くと、その声は少女の口より下から

発せられているようだった。無線機か何かかと思つたが、そのクリアな声質は紛れもない肉声だ。

俺がわけがわからないという表情でわずかに膨らんだ胸元のペンダントを凝視していると、鍛えた第六感で視線を察知したらしい少女と目が合った。俺の視線が胸に向けられていると気づいた少女がさつとそこを隠すように押さえ、柳眉を逆立ててじとつと睨んでくる。その咎める視線が何を意味するのかわかつて、俺は慌てて手と首を振る。「ち、違う！お、俺は別に君をそういう目で見ていたわけじゃない！俺の好みは貧乳じゃないし——」

火に油を注ぐ形となつた釈明に、少女のこめかみにびきりと青筋が走り、頬をびくびくと引き攣らせる変な笑みが浮かんだ。今のは完璧なまでに失言だった。さらに弁解を重ねようとして、サルマキスのケタケタとした笑い声があたりを響いた。振り返ると、さつきまでの悲嘆ぶりはどこへ行ったのか、サルマキスはステッキをガツガツと地面に打ち付け、腹を抱えてオーバーに爆笑していた。

「ひはははっ！契約した王も王なら、フレイムヘイズもフレイムヘイズだな！どちらも貧相だ！ひはははははっ!!」

それがトドメになつた。『フレイムヘイズ』と呼ばれた少女の総身を包み込むように純白の炎が轟と燃え立ち、背後の教会の壁を焼き尽くした。すぐそこで鉄溶鉱炉の窯が

開いたかと錯覚するほどの熱波がこちらまで押し寄せて、慌ててその場から後ずさる。

「誰が——貧相だつて？」

「あーあ、言つてしまつたな。知らんぞ俺は」

初めて聴いた少女の声。本来は凜として澄んでいるだろう少女らしい声音は、今は唸るようなドスの利いたものになっている。操る言葉が日本語であることからして、彼女も日本人のようだ。ゆらりと流れる動きで背に手を回す。鈴のように軽い金属音がしたかと思うと、どこに収まつていたのかというほど長大な日本刀が抜き放たれた。刀身も柄も全てが銀色に光るその刀は、凡人の俺にも芸術品の域に入る代物だということがわかる見事なものだった。

俺でもなんとか振り回すのが精一杯であろうその日本刀を、矮躯の少女が軽やかに舞わせて正眼に構える。

「なに、その骨張つた貧相な身体でも私のペットたちにはいい栄養になるだろう。下賤な王ともども、大人しく食べられたまえ！」

サルマキスは静かな怒りに燃える少女の台詞など意にも介さず、ステツキの先端を少女に突きつける。それを合図にして、サルマキスが侍らせていた化け物どもが仲間の仇をとらんと一齐に襲い掛かってくる。

化け物という言葉を体現する恐ろしい醜悪な生物が群れを成して襲い掛かってくる、

どんな悪夢にも劣らない光景。だが不思議と、さつきまで感じていた「殺される」という恐怖感は訪れなかった。化け物の群れの突撃に一步も引かずに対峙する白銀の少女から放たれる巨大な城壁のような存在感は、それほどまでに圧倒的だった。

果たして、俺の直感は見事に的中した。

一瞬の出来事だった。

俺には、微動だにしない少女の前で銀光が宙に弧を描いたようにしか見えなかった。それから半瞬遅れて、押し寄せる化け物の波が少女の眼前でぴたりと止まる。1秒間の奇妙な静止が空間に満ちる。毛虫のような化け物どもの巨体に一筋の線が走ったかと思うと、ずるりと上半分が水平にスライドして地に落ちた。サルマキスの笑みが石のように強張り、ザツと血の気が引く。

そこでやっと、少女が人間には認識できない速度で化け物全てを切り裂いたことに——この少女もまた人外の存在なのだということに気づいた。

俺がへたり込んで呆然とするなか、少女がごく自然な動きで足を踏み出す。その足が地面を砕いたと脳が認識した瞬間には、すでに少女の姿はそこになかった。激しい旋風が巻き起こり、化け物の死骸とむせ返るほどの臓物臭を跡形もなく吹き飛ばす。人知を

超えた速度で一陣の疾風と化した少女がソニックブームを引き連れてサルマクスに肉薄したのだ。次の瞬間、動物の金切り声のようなおぞましい悲鳴が木霊し、神聖な神の家を震わせる。何が起こったのか理解が追いつかない俺の目の前に、飛んできた何かがぼとりと落下した。それがもぞもぞと蠢いたと思つた瞬間、俺の足首を掴んだ。

「うわっ!!」

それは腕だった。肩から先の部分だけになつていても関わらず、それは意思を持っているかのように俺の足にしがみついて、離そうとしない。慌てて義足の硬い踵で何度も踏みつけて蹴り飛ばす。蹴られた腕は宙で緑青色の炎となつて消滅した。その上等そうな服を着た痩せぎすの腕には見覚えがあつた。

「おのれっ、おのれっ、おのれええエエエエエ!!」

ぞつとする猿叫に振り向くと、そこには肩の断面を押さえて地に膝を突き、目の前の少女を睨みあげているサルマクスの姿があつた。断面から噴き出すと思われた血しぶきはなく、代わりに緑青色の火が漏水のごとく漏れ出す。その喉元には刀の切っ先が突きつけられている。少女は、1秒にも満たない時間で5メートルはあつたはずのサルマクスとの距離を0にし、抵抗できないように腕を切り落とし、その首に刀を突きつけて動きを封じたのだ。文字通り、目にも留まらぬ早業だった。

(いったい、どんな走法をすればこんな人間離れした芸当ができるんだ)

俺も走法の研究は欠かしていなかった。だからこそ、眼前の神速技が人間の身体能力では明らかに不可能なものだと身に染みて理解できた。濡れ光る戦慄の美を流す刀が澄んだ金属音を立てて翻り、サルマキスの喉に刃先をわずかに食い込ませる。それだけで、激昂して喚き散らしていたサルマキスは表情を硬直させて押し黙る。その顔を真正面から見据えて、不自然なまでに落ち着き払った少女が諭すような口調で語りかける。「貧相なのは、まあ、事実だ。潔く認めよう。オリジナルがそうなんだから仕方がない。事実を指摘されたからと言って即座に殺す、なんて野蛮なことほしくない」

「そうとも。俺たちは紳士的だ。『炎髪灼眼』よりよっぽど理性的だ。あの頑固ジジイよりよっぽど優しい」

それを聞いたサルマキスの顔にほっとした安堵の表情が浮かぶ。ふと、純白の視線がちらりとこちらに流された。切れ長の双眸が全身に裂傷を負った俺を見る。再びサルマキスへと戻ってきたその決然とした瞳は、絶大な怒りにメラメラと燃え盛っていた。

「だけど、人喰いをする徒ともがらは問答無用で討滅する」

「俺のフレイムヘイズを侮辱する奴は許さん」

直後、何の抵抗も感じさせない滑らかな動きで少女の刀を持つ腕が上がった。燦然と煌めく刀身には油のようにベトベトとした緑青色の液体がへばり付いている。それをブンと一振りで払い落とすのと同時に、サルマキスの頭部が首から音もなく外れてゴト

りとアスファルトを転がった。凍りついたままの安堵の表情は、自分に何があったのかすら理解できずに絶命したことを示している。悪魔じみた伊達男の最期は、あまりに呆気なかった。

「た、助かった、のか……？」

地獄を生き抜いたことで緊張が抜けて、無意識に膝が折れてその場に尻餅をつく。たった数分間の間に今までの人生で培ってきた全ての知識や常識が跡形もなく破壊された。明日も今日と変わらない日になるという確信が、本当は何の根拠もない都合のいい思い込みに過ぎないのだと思い知らされ、まるで地面がなくなつたような空虚な不安に襲われる。この世は、想像していたよりずっと俺の知らないことばかりだったのだ。

異常極まる戦いに巻き込まれたことに悲しむべきなのか、命拾いしたことに喜ぶべきなのかの判断がつかずに呆然としてみると、いつのまにか目の前に白銀の少女が佇んでいた。天使だと思つたが、実は戦士で、フレイムヘイズと呼ばれる少女。人間を圧倒する力を持った化け物を、さらに圧倒的な力でもって簡単に斬り伏せた少女。彼女もまた、俺の日常を破壊する人外の一人なのだろうか。

「*st es s i c h e r*」
「大丈夫？」

不意に、白くしなやかな繊手が目の前に差し伸べられた。驚いて見上げれば、につこりと微笑んだ少女の愛らしい容貌が視界に飛びこんでくる。先ほどの戦闘時とは打つ

て変わって温厚な雰囲気を漂わせる少女は、やはり昨夜見た天使に違いなかった。

間近で見れば、そのルックスがどれほど際立っているのかをさらに強く思い知らされる。透明かと思紛うほどに白い肌は、まるで精巧な造り物であるかのようにシミ一つない。端麗で可憐な顔立ちは、歳相応の幼い造形だといふのにこれが完成形だと言われれば迷わず納得してしまいそうな美貌を讃えている。この年代でこれなら、成長したらいったいどれほどの絶世の美女になってしまうのか想像もつかない。さらに、少女が纏う柔らかな空気には他人を包み込む余裕と気品も感じられる。まるで童女の中に成熟した女が共存しているようなアンバランスな印象に、クラクラとした目眩を覚える。生命の危機に瀕して動揺していなければ、今頃本能のままに抱きしめてしまっていただろう。

(まさか、俺はこの子に見惚れているのか？こんな、小さな女の子に?)

自分を軽蔑したい気持ちに駆られるが、心臓の高鳴りにすぐに掻き消された。思わず見惚れてしまうのも仕方ないと思えるぐらい、少女の形貌は見目麗しかったのだ。釘付けになった視界の中、清楚なつぼみのような唇が苦笑の形をとって開かれる。

「……テイレシアス、もしかして、ボクのドイツ語が通じてないかな？」

「紅世の王である俺には人間の言葉なんぞどれも同じに聴こえるがな」

「ち、違う！そうじゃない！ちゃんと伝わってる！」

「そっか。ああ、よかった。きちんと学校で習ったわけじゃないから、こっちの言葉には自信がないんだ」

少女の表情が曇りそうになったのを見て、慌てて否定する。たしかに、御世辞にも上手いとは言えないカタコトのドイツ語だったが、その涼風のような声音に込められた優しさはよく理解できた。想像していた通りの、いやそれよりずっと可憐な鈴のような声は耳に心地いい。ホッと胸をなで下ろす少女の微笑ましい仕草にも再び心を打たれる。
(味方、つて考えていいんだよな?)

控えめな物言いに、この少女が自分に害を及ぼすものではないと確信する。同時に、天上から遣わされた天使のような超常の存在ではなく、言葉の習得に悩む程度には人間に近いのだとわかって親近感が湧いた。危機一髪の状態に昂ぶっていた警戒感が溶け、深く息を吐いて脱力する。

少女は、ドイツ語が苦手のような。日本語が主言語のようだし、このままだと会話のやりにくいから日本語で会話した方がいいだろう。母さんと話す時以外に使わなくなつて久しいが、普通の会話をする分にはまだ支障はないはずだ。差し出された小さな手を握つて立ち上がる。予想以上に滑らかな感触に思わず息を呑む。

「^{D a n k e}ありがとう。でも、俺は日本語を話せるからよかつたらこつちで話さないか？その方が、意思疎通もしやすいだろうしさ」

「えつ、日本語!?日本語ができるの!?ああ、よかった!」

日本語は母さんと話すとき以外には使わないから、いざ他の人間と話すときにちゃんと喋れるか不安だった。それでも長いこと使っていたから身体に染み付いてくれたようで、違和感なく口から出てきてくれた日本語に自身でも驚く。と、いきなり少女が満面の笑みを咲かせた。夏に咲く向日葵のような、朗らかで暖かい笑み。

(う、)

戦いの最中に見せていた鬼神の形相とは正反対の無防備な表情を向けられて、油断していた心臓がドツクンと派手に跳ね上がる。こちらの内心の葛藤など露とて知らず、少女は手を合わせて表情を綻ばせる。少女は、嬉しさのあまり忘れてしまっているのか、俺より一回りは小さなその手には俺の手が握られたままだ。手の平同士を重ねたら完全に俺の手に隠れてしまうほどに小さい。そつと握っただけで碎けてしまいそうな飴細工のように繊細な指なのに、感触はふにゆふにゆとしてヌイグルミのように柔らかい。これが女の子の感触なのか、とどうでもいい感慨が頭に浮かんだ。こんなに細くて柔らかいのに、どうやってあんなに長い刀を振り回せるのか、不思議で仕方がない。「ドイツ語って難しいから、ボクはまだあんまり喋れないんだ。『達意の言』も使えないし、正直通じなかったらどうしようかと不安だったんだ」

(ぼ、ボク?)

「ボクツ娘」とは初めて遭遇した。一人称を「ボク」とする女の子は漫画のキャラクタ―だけだと思っていた。そこら辺の女が同じように喋っても、きつとわざとらしいし不自然すぎて薄気味悪いに違いない。だが、少年のように無邪気に喜ぶ目の前の少女の笑顔には、不思議とよく似合っていた。まるで元は少年だったかのような自然さがあつて、親しみを感じさせてくれた。

「まあ、その、いい線は行つてたと思う」

「ホントに？ ありがとう。それにしても、君は日本語が上手だね。久しぶりに日本語を聞けて嬉しいよ」

「ええと、俺は、少し前まで日本人だったから。だから、本来は日本語が主言語だけど、父親がドイツ人だったからドイツ語も話せるんだ。5年前に渡独して、今は地元の高校に通つてる。だから……いや、それだけ。以上」

なにを一丁前に格好つけて自分語りをしようとしているのだろう。気を抜くと自分を大きく見せようとしてしまうガキの自分が出てきてしままいそうで、逆に格好が悪いじゃないか。緊張してしどろもどろな俺の説明に、少女は感心したように「なるほど、帰国子女みたいなものか」と小さく頷いた。たしかにドイツ語は難しい。単語や数字は用途ごとに異なつた使い方があつるし、その使い分けを習得するにはかなりの労力を要した。だがそれを言うなら日本語の方が遥かに難しいと思うのだが——つて、こんな話

をしている場合じゃない！俺には聞きたいことがたくさんあるんだ！

「違う違う違う！そうじゃなくて！」

「へ？」

少女の持つほんわかとした空気に飲み込まれてしまったが、質問は山ほどある。さつき少女が殺したサルマキスのこととか、少女自身のこととか、少女に助言する姿なき声の男のこととか、わからないことだらけだ。どれから聞くべきなのかと悩んで――

べちやつ

「へ？」「ぬ？」「は？」

同時に漏れる声。

粘性を帯びた何かが蠢く音が足元から聴こえた。二人して同時に足元を見下ろすと、どこから現われたのか、鳥賊の足のような太い触手が少女の足首に巻きついていた。

「まずい、奴は不死性を有していたのか！サユ、気をつける!!」

少女の胸元から男の大声が聴こえた。その意味はわからなかったが、極度に張り詰めた感じから危機が迫っているということにはわかった。戦慄して辺りを見回して身構えるが、ただの人間の俺にできることなんてないのも同じだ。だから、それが目に入った

時も、反応すらできなかつた。足の触手を切り裂こうと銀の大太刀を振りかざした少女の腕に、襲来した複数の触手が絡みつく。青黒くうねくる触手は見ていただけで胸が悪くなりそうだ。不快げに顔を歪ませた少女がもう一方の手でそれを振りほどこうとして、そこにさらに触手の群れが襲い掛かってくる。折らんばかりに締め付けてくる触手にたまらず刀が地面に落ちる。俺の腕と変わらない太さのそれらは瞬く間に細い身体に巻きつくや、彼女の両手両脚を外れんばかりに引つ張り宙に持ち上げた。

「この——うああッ?」

少女が苦悶の表情を浮かべながら手足を暴れさせて抵抗するが、万力のような力で腹を締め上げられてそれも無駄に終わる。臓腑をぎりぎりとは圧迫され、少女の顔色が一気に青く染まっていく。なんとか助けようと掴んで引き離そうと試みるが、妄想の産物のような触手の表面は粘性の強いゼリー状のぬめりに塗れていて、ぬるぬると滑るばかりで意味を成さなかつた。

『よくもやツてくれたな、小娘え……』

ノイズのような不快極まる声。その声は、全方位から聴こえてきた。正確には、全方位の陰から。見れば、触手もその陰から生えてきているものだった。切り貼りしたような声だったが、その声はまさしくサルマキスのものだった。さつきまでそこに転がっていたはずの死体に目をやるが、そこには死体どころか血の跡すらなかつた。奴は

死んでなどいなかっただのだ。

『宝具は後回しだ。まずは貴様を始末してやる』

「くうツ！い、ぎツ、あああああツ!!」

「サユ、しつかりしろ！」

少女を緊縛する触手が目に見えて張り詰め、締め付けを増していく。ミシミシという骨が軋む音が聴こえ、耐え切れず漏らした痛々しい悲鳴が耳を穿つ。見ているだけしかできないいちっほけな自分が耐え切れないほどに悔しかった。爪を立てて必死で触手を剥がそうとするが、粘膜のような皮膚には考えられない硬い表皮にはまるで効果が無い。それでも鬱陶しいことに変わりはなかったのか、一本の触手がその身をしながら飛来し、俺の胸を思い切り殴りつけた。たまらず吹き飛んで頭から街頭に衝突する。胴体が腫れ上がるような激痛に苛まれ、衝撃で脳が頭蓋の中でシェイクされる。朦朧として動けない俺の体を触手が縛りつけ、街灯に固定させる。

『ルヒトハイムの腐れ子め。お前はそこで大人しくしている、後でちゃんと食ってやる』
そう告げると、まるで弱った獲物にハイエナが襲い掛かるかのように、声の気配が一齐に触手と化して少女に群がっていく。不定形な動きでうねる触手の群れがべたべたと少女の柔肌を味わうように這い回る。事実、味わっているのだろう。陰から響いてくるくつつくと喉の奥で啜う狂笑がそれを物語っている。少女がいよいよ子供のよう

に首を振ってそれを拒否するが、捕縛され宙に縫いとめられた彼女はされるがままだった。それを見て勝利を確信したのか、それとも眦に涙を浮かべる少女の姿に興奮を覚えたのか、凄絶な狂笑がさらに大きいものになる。

『ひははは！存分にいたぶっていたぶって、女としてたっぷりねぶって辱めてから、ペツトどもの餌にしてくれる！ついでにフレームヘイズが子を宿せるかどうかも試してやろう！』

「ツツ——アアアアアアアアアアアアツツツ!!」

甲高い悲鳴。めきめき、ごりごり、とあらゆる関節が軋みを上げる。強引におかしな方向に捻じ曲げられた腕や脚が苦痛に小刻みに震え、多量の汗が伝い落ちた。美脚に絡まった触手が細い足首から螺旋を描き、脹脛、膝、太ももまで登り、スカートの中へ潜り込んでいく。別の触手が戦装束のスカートを膝上まで押し上げて内部の様子を覗わにしていくな。サルマキスが少女に何をしようとしているのかわかってしまい、おぞましさで背筋が凍りつく。

「わあっ!ど、どこ触ってんだコラアッ!ツうああっ!」

少女が抗議に声を荒げるが、スカートの中で触手が嬉しそうに暴れた途端に背筋をびんと伸ばして小さな悲鳴をあげた。もじもじと腰を捻らせて健気に抵抗する様子は触手をさらに興奮させるだけだった。スカートが完全に捲り上げられると、そこには付け

根から健康的に伸びた陶器のように白い脚と、少ない布で秘部を隠す白いショーツがあった。ショーツは噴き出した汗でびったりと肌に張り付いていて肌色が透けている。少女も、自分がこれから何をされるのか理解できたのか、最初とは打って変わって明らかに動揺して叫ぶ。

「やめろ、やめろつてばあ……！」

あまりの恥ずかしさに上気して少女の耳たぶが真っ赤に染まる。しかし、触手はそんなことはお構い無しに、相争うように次々と太ももの付け根に絡みつき、しゃぶりつく。「や、やめて……！」

ついに触手の先端がショーツを脱がしにかかった。汗と粘液の染みだ布がぐいぐいと下に引つ張られ、形のいい臍の下の窪みが顕わになる。目の前で、想像するだに胸が悪くなるような酸鼻な悪事が行われようとしている。自分は命の恩人すら——あんな小さな女の子すら助けられないのかと、血が滲むのも構わず臍を強く噛む。自分が力があればと激しく後悔する。これほどまでに力がほしいと思つたことはない。

何でもいい。あの娘を助ける力が欲しかった。力が欲しい。力が欲しい。死に物狂いで全身を暴れさせて身体と触手の間に隙間を作ろうともがくが、そんな隙は見せてくれない。ぎりぎり締め付けられる少女の抵抗が次第に弱くなり、それに反比例するように触手が動きを増して少女の秘部を己の領土にしようとする。力尽きたかのように

俯く少女の頬を涙が伝った。

「チクシヨウ、チクシヨウ、チクシヨウツ！ちくしようおお——ツ!!」

じたばたと不様に脚をばたつかせながら自分の非力さを嘆いて吼える。それに呼応するかのようには義足が再び燃えるようにじわりと熱を灯したように感じたが、今さらそんなもの何の役にも立ちほしめない。どんなに俊足であっても、女の子一人を危機から助け出してやることすらできない。偉そうに孤独に浸っていて、他人を見下していても、実はこんなにも役立たずだった。今まで自分が誇りに思ってきた全てが悉くちっぽけなものに過ぎなかったのだ。途方も無い無力感と自己嫌悪が脳髓を焼き尽くす。

（父さん！もう一回だけでいいから、力を貸してくれ!!あの娘を、助けさせてくれ!!）
俺は奇跡を願い、水色に燃える義足を地面に叩きつけ、

『ンなツ、なんだとおおおおツツ!!?!?』

轟く大破砕音。サルマキスの悲鳴。急激に傾いていく景色。崩壊していく教会。足元に突然穿たれた巨大なクレーター。そのクレーターの中心は——義足の踵だった。何が起こったのかはさっぱりわからなかったが、一つだけ確かなことがあった。それは、

「今だ!!」

声を張り上げて全身から叫ぶ。俺が叫んだ先にいるのは、触手の拘束が緩んで自由になった少女。慌てて触手の群れが少女を再び縛り付けようとするが、時すでに遅いだ。

少女が腹腔に蟠っていた激情を解き放つ。触手がたじろぐかのようにビクリとのたうちなんとか少女を押え込もうと圧力を強めた瞬間——少女が爆ぜた。怒りに沸騰した雄叫びとともに白銀の炎を全身から迸らせたのだ。炎の超炸裂に、少女の矮軀を押し包んでいた触手の束はただの一瞬とて持ち堪えることなく破断し、細切れの肉片と化して周囲に四散して消滅した。朗らかな微笑が似合っていたその表情は、轟々と灼熱に燃えて悪鬼の如く怒りに歪み、美しかったその双眸は獲物を狙う獰猛な猛禽類のそれになっていた。目尻に浮かんでいた涙がジュツと音を立てて蒸発する。その迫力に化したのか、どこかからサルマキスの小さな悲鳴が聴こえた。俺でさえもその威圧感に気圧されて思わずたじろぐ。

純白の炎に焼かれてアスファルトが表面を泡立たせながら融解し、白銀の鎧にこびりついていた粘液の一片までもが残さず燃え尽きて曇り一つない輝きを放つ。その様は、軍神もかくやという恐るべきものだった。異常極まるこの世界すら霞ませてただの背景に変えてしまう威圧感に世界そのものが恐怖して大気がビリビリと震える。

「やっつてしまえ、サユ。ド派手に」

男に声に弾かれるように、少女が両手を高く振り上げる。銀色の炎が少女の手に収束し、何かを形作っていく。それはリボルバー式の拳銃だった。凶悪な光を放つ大型銃だったが、そこへさらに爆炎が重なり覆いかぶさっていく。より巨大に、より強大に――。

「んな、アホな……」

剣呑な光を放つ五つの銃口、長大で剛健な回転銃身、無骨で角ばった射出ユニット、純白に燃える給弾ベルト。あまりにも巨大でこちらの感覚が狂ってしまった。そう、それはどこからどう見ても、ガトリング機関銃にしか見えなかった。

1—3 機銃

セーラー服に身を包む黒髪の少女が、自らの気配を完全に消して、バレリーナのようになつて先立ちでそそくさと歩む。彼女が背後に忍び寄るのは、自分と瓜二つの容姿をしたメイド服の少女である。少女の意図を察して、しかし、坂井悠二は口を挟まずに黙してその様子を見守つた。メイド服の少女は鼻を埋めるように読書に熱中していて、その柔肩を鷲爪のようにむんずと掴まれるまでまったく気が付かなかつた。

「サユ、なにをそんなに真剣になつて読んでるの?」

「ひゃあつ!?! シャナ、急に驚かささないでよ!」

猫のように飛び上がつて驚いたサユの顔に、「油断していたのが悪いのよ」とシャナはにんまりと満足げな笑みを見せつけた。決して、サユに襲撃された際に散々追い詰められたことへの意趣返しをしているわけではない。坂井悠二が敢えてシャナの子供じみたイタズラを黙認していたことも、サユによってボコボコにされたことの意趣返しではない。

シャナとサユ。事情を知らない者が見れば、性格が真反対の双子の美少女が子猫の如くじゃれ合っているようにしか見えないだろう。だが、一方は人外の戦士『フレイムヘ

イズ』であり、もう一方はそのコピーで、しかも中身は少年なのだ。さらに言えば、未
来の坂井悠二でもある。複雑な思いで二人のじゃれ合いを見ていると、不意にシヤナが
サユの手元からひよいと本を取り上げた。

「わつ、ちよつと、シヤナ!」

『世界の火器大全』?なにこれ、凶鑑を読むのにあんなに夢中になつたの?」

「なんとも安っぽい書物ではないか」

コンビニでワンコインで買えそうなツヤツヤした装丁の本は、やはりコンビニでワン
コインで売られている類いのものだった。表紙とタイトルから内容も推して知るべし
なその特集本は、拳銃や小銃から機関銃といった火器について、その歴史や構造、種類
までを鮮明なカラー写真付きで事細かに解説している。マニアックなそれをパラパラ
とめくりながら、シヤナはふんと興味なさげに鼻を鳴らす。『贅殿遮那』という業物の大
太刀を振るう戦闘スタイルを好み、また得意とするシヤナにしてみれば、銃器というの
は邪道も邪道である。そもそも、紅世の徒や王に対して通常火器はほとんど効果を示さ
ない。アラストールもまた、500年前の『大戦』の際にも大砲が使用され、せいぜい
足止め程度にしかならなかったことを身を以って知っている故に、サユがその本を穴が
空くほどじつと観察していることを疑問に思った。だから、異常に勘の鋭い坂井悠二だ
けがサユの真意を理解してギョツと顔面を引きつらせても、二人ともその理由に想像も

つかなかった。

「サユ、『トリガーハッピー』を……!?!」

「おお、さすがボク。やっぱりわかっちゃったか」

「え? え? どういうこと?」

大きな瞳をさらに大きくして不思議がるシャナの胸元で、先に合点のいったアラスツールが「そういうことか」と唸る。

「なるほど、贋作物を強化する際にイメージとして参考にするため、か。アレはそうやって創ったのだな」

「そういうことだ、頑固ジジイ。……ん? “そうやって創った”とはどういうことだ?」
「独り口だ、気にするな。それとジジイと呼ぶなと何度言ったらわかるのだ、偏屈者の小僧め」

アラスツールとテイレシアスがやいのやいのと応酬を始める。唯一、この場で置いてきぼりを食らったシャナが悔しそうに頬を紅色に染めて悠二をキツと鋭い目で見やる。その可愛らしい仕草に、悠二とサユは顔を見合わせて苦笑する。

「ごめん、シャナ。でも、サユの“贋作”って能力と、サユの得意とする存在の力の制御の応用を考えれば、わかるんじゃないかな。僕たちはその片鱗をもう見てるんだよ」

「応用……まさか、」

「うん、シヤナが考えてるので正解だと思う」

サユが生徒を褒める教師のようににっこりと笑って、シヤナから『世界の火器大全』を受け取ると、パラパラと目当てのページを指して指を滑らせる。

「たしかに、普通の銃なんかを贗作したって、紅世の者たちとの戦いには大して役には立たない。でも、宝具でありながら拳銃と同じ構造をした『トリガーハッピー』は効果がある。存在の力を流し込むことで強化をしてやれば、最強クラスのフレイムヘイズでもそれなりに追い詰められる」

そう言つてウインクするサユに、シヤナは苦虫を噛み潰したような表情で抗議する。『トリガーハッピー』を贗作した2丁拳銃には散々苦しめられた。自らのネックを身で以て悟る機会にはなつたが、いい思い出とは口が裂けても言えない。自分と瓜二つの姿をした強敵相手にとにかく必死だったのだ。まだあの時の腕のしびれが残っている気がして、シヤナは無意識に利き腕の二の腕を労るように擦った。

「人間が使う拳銃を贗作するより、拳銃型宝具を贗作して手を加えたほうが紅世に関わる者には効果がある。それはわかる。それで、その『世界の火器大全』はどんな役割を果たすつていうの？」

「うん。ある時、ボクは考えたんだ。『強化つて、どこまで出来るんだろう？』つて。手応えとしては、限界はまだ感じてない。どんどん存在の力を注ぎ込んで、構造が共通し

ていて、拳銃よりもずっと強い銃器や火器のイメージを押し付けてやれば、『トリガーハッピー』はまだまだ強化できるんじゃないかって」

「そのために、本を読んで『具体的なイメージ』を頭に叩き込んでおこうってことだね」
悠二の助け舟にサユが「そうそう」と同意して嬉しげに微笑む。シヤナとしては、理屈は理解できるが、自分とそっくりの少女が坂井悠二と笑顔で見つめ合っていることがひたすら気に食わないので、「で、その具体的なイメージって、なに？」と身を乗り出すようにして両者の間に割って入る。

「『贗作師』である俺には無い発想だ。さすがは俺の選んだ契約者だ。俺の慧眼はいつでも冴えている」

「誰も褒めてくれないから自画自賛とは見苦しいぞ偏屈小僧」

「なんだと石頭ジジイ」

「だからジジイと呼ぶなと何度言えば」

またもや音高くゴングの鳴った悪ガキとカミナリ親父の掛け合いを尻目に、サユが目的のページでピタリと指を留める。一つコクリと頷くとニヤリと不敵に唇の片端を釣り上げ、ページを両開きにしてサユと悠二に掲げて見せる。

『『トリガーハッピー』をね、これにしてみたいんだ！』

ニカッと白い歯を見せて自慢するように見開きページを見せつけてくるサユに、今度

はシャナと悠二が見つめ合う。お互いに共通する表情は、苦笑である。どんな末路を辿ろうと、どれだけ姿形が変わろうと、少年であることに変わりないのだと。

「やっぱり、中身は悠二なのね」

「やっぱり、中身は僕なんだね」

呆れるような二人の反応に、サユは赤くした頬を膨らませて抗議する。

「な、なんだよ、その反応は！ いいだろ、カツコイイんだから！ カツコイイんだからいいだろ！ 男の子はみんな好きなんだよ、一度は持つてみたいんだよ！ この——」

✦ ✦ ✦

「が、ガトリング機関銃……!?!」

少女が自分の身長ほどもある白銀の巨銃をぐんと構える。「ヒツ!?!」というのはサルマキスの引き撃った悲鳴だったのか、俺の喉から漏れた呻きだったのか。憤怒の双眸を燃やす少女はやおら引き金に指をかけると、躊躇なく発砲した。明らかに通常のそれではない炎の給弾ベルトが射出ユニットに次々に吸い込まれ、銃身が風を捻じ切らんばかりに回転して轟音と共に超常の弾丸の雨をそこらじゅうに叩き込む。電動チエーン

ソーが巨木を切断するような耳障りな音が耳朶をビリビリと刺激する。音速を遙かに超過した魔の弾丸が、硬く舗装されているはずのアスファルトの路面を見るも無残に耕していく。

「ブツツツ殺オオ——ツツツす!!」

少女は怒りで完全に忘我しているらしい。俺の頭上を弾丸の雨が通り過ぎ、その余波で危うく吹き飛びそうになる。狙いをつけているのではなく、サルマキスがいると思われるところに手当たり次第に攻撃しているようだ。背後で何かが盛大に吹き飛ぶ音がしたが、振り返る余裕なんてない。戦場を逃げ惑う兵士のように頭を押さええて姿勢を低くしながらその場を回避するが、弾丸の嵐はまるで追いかけてくるかのように辺りを灰燼と化していく。視界の隅で、かろうじて形を留めていたレンガ造りのカフェが積み木のように崩れ去る。と思いきや、落下してきた教会の鐘が最期の音色を披露する間もなく一瞬で木っ端微塵に粉碎されて鉄片の雨を頭上に降らせる。天を衝くような轟音に鼓膜を叩かれ、三半規管に穴が開きそうだ。

(もうメチャクチャだ! 化け物を倒す前に、この街が跡形もなくなっちゃまう!)
俊足を駆使して破壊の嵐から逃れて少女の背後に回りこみ、その腕を羽交い絞めにする。

「落ち着け、頼むから落ち着いてくれ!!」

「これが落ちていていられるか！あの野郎オ、よくもよくもよくもよくもおおおおお！！」

その矮軀からは考えられない怪力に俺の身体は振り子と化して縦横無尽に振り回される。白熱した回転銃身が大気を燃やして陽炎を揺らめかせ、さらにその速度を増して街を破壊していく。建物は根元から薙ぎ倒され、街灯は残らず吹き飛んでいく。これではどつちが悪役なのかわからない。やっぱり、この少女も日常の破壊者なのだ。

ふと、どこからか「やれやれ」という低い男の呆れ声が聴こえた。

「落ちて着け、サユ。残念だが、奴ならとつくに逃げたらしい」

「へ……？」

呆けた声と共に唐突に銃撃がびたりと止んだ。それ一つで戦車一台分に相当する威力を有した白銀のガトリング機関銃が少女の手の中で音もなく消え失せる。気づけば、サルマキスの気配はどこにもなかった。低い声の男の言う通り、勝てないと踏んだサルマキスはとつと退散したらしい。

今度こそ本当に安心して脱力し、その場に座り込む。少女は周囲の惨状を見回して、しばし呆然とした。流れ弾が直撃したのだろう、遠くの家屋根が破碎音を響かせて落ち込んだ。ひしゃげた水道管から水が吹き出る。もうもうと激しい土煙が湯気のごとく昇り、頭上で立ち込める靄に合流する。あれを最後に、人が住めそうな状態を保った

建物はすべて潰えた。爆撃を受けたゲルニカの方がまだ原型を保っていたかもしれない。乾いた風が吹いてひひうと虚しい土埃を舞わせる。

「えつと……もしかしてこれ、ボクがやったの？」

「言いたくはないけど、ほとんど君だ」

気まずそうな顔をしてこちらを振り返った少女に俺は頬を引き攣らせて頷くしかなかった。

「ド派手にやれとは言ったが、これは少々派手すぎだ。一人フレイムヘイズ兵団でも自称する気か。俺でもさすがに引くぞ」

「ご、ごめん。でも、あ、あんなことされたらさすがのボクでも怒るよ」

空爆でも食らったようなこの凄惨な光景のどこが少々なのか理解できなかったが、きつとこの少女と姿なき男は、こういうことを何度も繰り返しているのだろう。

いろいろと聞きたいことがあるのだが、それより気になることがある。

「なあ、この街はこのままなのか？ どうして人間は誰もいないんだ？ みんなあの化け物に……？」

まさか、あの恐ろしい化け物は街一つ分の人間を食い殺してしまったのか。俺の不安を察したのか、少女——サユが微笑んでゆつくりと首を振る。

「それは大丈夫だよ。これは『封絶』っていう自在法——わかりやすく言えば、外界か

ら遮断する結界バリアなんだ」

「フウ、ゼツ?」

「またもや知らない言葉を聴かされて眉を顰める。俺の知らないことが多すぎる。そんな俺に、サユは「実際に見ればわかるよ」と言つて指をぱちんと鳴らした。途端、サユを中心として白炎が舞い上がった。それらは高空まで達すると花が開くように展開し、雪のような白い火の粉を降らせる。世界が乳白色に包まれた。崩れた建物や荒れ果てた路地に火の粉がはらはらと降り注ぐと、逆再生をするかのように元の町並みへと再生させていく。」

まるで一つの絵画のようなそれは、奇跡と呼ぶに相応しい幻想的な光景だった。

だから、思わず口が滑つてしまった。

「——君は、天使みたいだな」

それを聴いたサユが長いまつげをはためかせ、「ありがとう」と気恥ずかしそうに頬を朱色に染める。今日はたしかに散々な目に遭つたが、この娘に会えたのだからそれもよかつたのではないか。そう思つてしまうほどに、その微笑みは可憐で、美しかった。

1—4 執着

「つまり——君みたいなの『フレームヘイズ』って呼ばれる奴らは、人間の味方って解釈していいんだな？」

「そう思ってくれて問題ないよ、フリッツ君」

迪々しい俺の確認に、目の前で椅子に腰掛ける少女は微笑を浮かべたまま頷いた。少女が街の修復を終えた後、俺たちはすぐ近くにあった俺の自宅に移動していた。窓からすっかり暗くなった外の景色を見れば、いつも通りの賑やかな町並みが広がっている。向かいでは教会の鐘が鳴り、皆に本格的な夜の訪れを報せる。その長閑な光景には先の人外同士の戦いの爪痕など微塵も見取れなかった。

(その人外の片方がこんな女の子だなんて、いまだに信じられない)

正面へと目を戻せば、少女——名をサユという——が、長い説明を終えた喉をブルブルと潤していた。ヨーロッパ人向けの重く大きな陶器のマグカップを両手でなんとか持ち上げ、コクコクと細い喉を鳴らしている。椅子もまた彼女には高すぎで、床に届かない足先がプラプラと振り子のように揺れている。その愛らしい姿は、先までの彼女とはまるで違っていた。純白に燃えていた双眸も長髪も、今は黒真珠のよう

な鮮やかな黒色に染まり、白銀の戦装束はなぜか濃紺の給仕服になっていた。彼女の説明によると、フレイムヘイズには今のサユのような『通常形態』と様々な色の炎を纏って怒れる神の如く戦う『戦闘形態』があるらしい。

(なんていうか、アンバランスな娘だな)

「顔は生き様を表す鏡」と聞いたことがある。荒んだ人生を歩んでいれば岩のような顔になるし、のんびり生きていけば自然と緩んだ顔つきになる。その法則に則ると、目の前の少女の性格はとて剣呑なものであるはずだった。筆を流したような切れ長の双眸は触れば指先が切れてしまいそうなほどに鋭く、強固な自制心と揺るがぬ意志を如実に示している。形の良い鼻梁は行き先を明確に知る渡り鳥のようにハッキリと前を向き、引き締まった唇は一切の情を廃して物事を語る哲学者のような硬質さを讃えている。容貌全体からはまさに「高貴な狼」といった印象を見る者に与え、他人のことなど知ったことかと言わんばかりの寄る辺のなさすら感じさせるだろう。だが、それも黙っていたらばの話だ。実物の性格は、なにかみ印象とは真反対も真反対。人を安心させて惹き付ける眼差しはまるで穏やかな夜空のようで、年齢不相応な深みを秘めている。リップグロス要らずの艶やかな唇はふにやりと締まり無く、少年じみた人懐っこい微笑みを絶やすことはない。外見からはもつと言葉少なげでクールな性格を予想していただけに、そのポメラニアンみたいな内面とのギャップが余計に俺の混乱に拍車をかけていた。

簡単な自己紹介をした後、俺はサユに数え切れないほどの質問をした。過去に同じ質問を受けたことがあるのか、それとも質問をする立場になったことがあるのか、サユは嫌な顔一つせずに丁寧に答えてくれた。『紅世』という、“この世の歩いていけない隣の世界”があること。そして、この世界は遙か昔から紅世の住人による侵入と暴虐を受けていること。それを撃退し、紅世と現世のバランスを保つためにサユのような『フレイムヘイズ』が日夜戦っていること……。簡単に理解できる話ではなかったが、実際に体験をしてしまった後では信じる他なかった。自分が当たり前のように過ごしていた日常とまったく相容れない非日常。それと接してしまった時点で、俺が送ってきた暮らしは終焉を告げた。——いや、俺が気が付かなかっただけで、実はもつと前から俺は非日常の住人に付け狙われていたのだ。

あれだけの戦いに巻き込まれながら、平然と無傷の顔を浮かべる義足に一度目を落とし、再びサユを見る。視線に気づいたのか、サユがその小さな手には大きすぎるマグをテーブルに置くと小さなお尻を動かして居住まいを正す。おしとやかな乙女のようにメイド服の裾を整えようと指を伸ばして複雑そうな表情でそれを中断したのは何故なのか、俺にはわかるはずもない。

「宝具つてのが、人間と紅世の住人が協力して造る特殊な道具や武器だってことはわかった。でも、それと俺と何の関係が？」

この質問にサユは答えられないようで、彼女はカップの傍らに置かれたペンダントに促す視線を向けた。ペンダント——この中にいるテイレシアスという男は、俺を襲った「紅世の徒」^{ともから}サルマクスと同じ種族であり、その中でも上位種に位置する。「紅世の王」と呼ばれる存在だという。同種だが、目的が正反対なので同類ではないそうだ。彼のような力の強い「王」が、復讐心といった人間の強い意思に呼応し、その人間と契約することで紅世の脅威に対抗する戦士——「フレイムヘイズ」が生まれるのだという。

テイレシアスが、「うむ」と相変わらず地鳴りのような声で己の契約者から流された視線に応える。

「小僧。お前のセカンドネームは「ルヒトハイム」で間違いないな？」

「あ、ああ。そうだけど……」

「では、デニス・ルヒトハイムはお前の親族か？」

「それは死んだ父さんの名だ。時計職人の家系で、義足職人になった。死ぬ前にこの義足を造ってくれた」

サルマクスも父さんの名を口にしていたことを思い出す。俺の即答に、テイレシアスは「なるほどな」と低い納得の声を漏らした。俺には何が「なるほど」なのかまったくわからない。困惑を隠さない俺を見て、「テイレシアス、どうということなの？」とサユが

助け舟を出してくれた。

「小僧、お前の父デニス・ルヒトハイムは、当代においては名の売れた宝具の創作者だった。会ったことはないが、なかなか腕の良い紅世の宝具製作者だったと聴いている。死んだとも、息子がいたとも知らなかったが」

「父さんが!？」

自慢の父親が紅世と密な関わり合いがあつたと知って激しく動揺する。テイレシアスの淡々とした言葉がそこへさらに追い打ちをかける。

「お前の父が得意としていたのは、時の事象に干渉する“宝具”だった。加速、遅速、停止。その分野では、紅世の匠もはだしの腕前だったらしい。ルヒトハイムの名は、俺のような宝具に興味を持つ者のあいだでは評判だった。だが、ある日を境に忽然と姿を消した。彼について知られている噂はこのくらいだ。宝具は人間だけでは創ることはできない。それ故に紅世の徒の協力者がいたことは推測されていたが、それがサルマキスだったのだろう」

サルマキス。その名を耳にただけでゾッと悪寒が背筋を走り、指先が震えだす。俺の命を狙った化け物。あんな恐ろしい奴と父さんが手を組んでいたなんて、信じられない。

「あの『祭礼』狂いのトカゲについては、良い噂はほとんど聞かん。個人主義の塊で、

なんでも肯定屋の「祭礼」の無神経な寛大さにつけ込んで自分の行動を正当化している。あれで当人は「祭礼」のためにやっていると本気で思っているのだからたちが悪い。宝具を人間に持ち逃げされたという噂を必死こいて否定して笑い者になつていたが、どうやら事実だったらしいな。その人間こそ、お前の父親だったわけだ。デニスが姿を消したのは、おおかた、あの下衆なトカゲと組んでいるのが嫌になつたというところだろう。だいそれた宝具を扱うに足る器ではないとようやくわかつたのかもしれない。サルマキスは怒り狂つてデニスを追い続け、ついに今日見つけたというわけだ。デニスが隠した宝具を」

サユが驚愕の瞳で俺を見る。「祭礼」とかなんとか、相変わらず簡単には飲み込めない難語ばかりだが、一つのことには理解できた。サルマキスに渡さなかつた宝具を父さんがどこに隠したのかを。俺に人の規格を超えた速度と地面を抉る脚力を与えた水色に燃える義足を思い出す。

「そうか、この義足が、」

そこまで言つて、思考が凍結した。

(時の事象に干渉する、だつて?)

加速、遅速、停止。——加速。

俺が速く走れるようになったのは、事故で足を失い、この義足を父さんから貰つてか

らだ。普通に考えれば不自然なことだ。際立った体力を有していたわけでもないガキが偽の足をつけた途端に早く動けるようになるなんて、冗談みたいな話だ。そして極めつけに、この義足には人知を超えた力を持つ宝具が仕込まれている。

要するに——俺の自慢の俊足は、純粋な実力によるものではなく、父さんの迷惑な遺産によるものだったわけだ。

「なんだ、そりゃ……」

思わず自嘲が漏れる。意気を喪失して脱力した肉体が椅子に沈み込む。自分の俊足の正体を疑うこともせず今まで調子に乗っていた自分が情けなくて、ひどく滑稽だった。

「大丈夫、フリッツ君？」

心配そうな声に振り向けば、その声そのままに不安げにこちらを気遣う表情をしたサユが、身を乗り出してこちらの顔を覗き込んでいた。思慮深い眼差しが、絶望に沈みかけていた心を優しく浮上させてくれた。

「……ああ、大丈夫だ」

本当はとても大丈夫な精神状態じゃなかった。脳天を殴りつけられたようなショックに喉がからからになる。だが、救いはある。別に二度と走れなくなったわけじゃない。宝具は今も俺が持つているのだ。問題なのは、この宝具を奪おうとしている奴がい

ることだ。

「テイレシアスさん。サルマキスはまた来ると思うか？」

「間違いない、来る。奴は宝具を持っていかれたことで顔に泥を塗られた。お前もわかったと思うが、自尊心だけは無駄にデカイ卑屈な奴だ。『祭礼』の眷属なんてのは眉睡な話だが、執念深さだけは一流と言つて違いない。何度でも、何としてでも、その宝具を奪いに来るだろう。そして憎むべきデニスの息子であるお前の命もまた然りだ」

低い男の声で淡々と告げられた台詞は、最後通告のようにも思えた。あんな化け物に襲われれば、俺なんか一溜りもない。一瞬で殺されるだろう。それならまだいい方だ。ハリハラのような化け物に足先から噛み砕かれながらじわじわと鬩り殺しにされるかもしれないし、むしろそうなる可能性の方が高い。俺に非なんてないのに、だ。

死と苦痛の恐怖に肩が震え、歯がガチガチと音を立てる。汗が背筋を伝い落ちる感触が軟体生物が這っているようで気持ち悪かった。

俺ではサルマキスには太刀打ちできない。——だが、それができる存在ならすぐ目の前にいる。震える声をなんとか押し殺して、静かに俺の義足を見つめていたサユを見据える。

「頼みが、ある」

「……なにかな？」

俺は一度目を瞑り、この少女が、さつきまでと変わらない天使のようなお人好しさを次の瞬間も發揮してくれることを神に願った。エホバでも、アラールでも、仏陀でもいい。コーランだって仏典だってたんまり買ひ込んでやる。俺の頼みを聞き入れてくれさえすれば、誰でも構わない。目を開くと、俺は睨むようにして神の如き超常の戦士を見つめる。

「俺を護つて、サルマキスを倒してくれ」

しばしの沈黙。沈鬱な空気は圧倒的な重さを持つて俺の双肩に押し掛かり、その重さに押し潰されそうになる。俯く顔から視線だけでサユを見上げれば、その表情は感情を押し殺しているような暗い無表情だった。大人の分別を宿す瞳の奥で、思考の灯火が激しく揺らめいている。何を考えているのか判然としない眼差しから逃げるように、俺は視線を落とすしかなかった。都合のいい願いだということとはわかつている。夕日で火中の栗を拾ってくれとでもいうような無茶な申し出だ。俺が得するばかりでサユには一切のメリットがない。『フレイムヘイズ』は群れて行動したり誰かを護ったりすることはほとんどないと聞いた。だが、俺は願うしかなかった。『NO』という返答が下されば、俺は死んだも同じだ。抵抗する術を持たない俺が生き延びるには、病気で弱った母さんを放つてでも世界中を逃げ惑うしかない。そんなことは出来るわけがない。仮に実行したとしても、今日見つかったようにいつかは発見されて殺されることは目に見

えている。それに、宝具を狙う奴らはサルマキスだけじゃない。圧倒的な力を持つ紅世の化け物どもから逃げ続けられる自信はなかった。

教会で祈るように顔の前で片方の拳を片方の手の平で握り締める。そして、俺の懇願に対するサユの短い返答。

「——わかった。君を護って、サルマキスを倒そう」

「……っ！」

押し寄せる安堵に全身から一氣に力が抜けた。頭頂まで上り詰めていた血がどつと足に向かつて押し下がって、そのまま貧血で氣絶しそうな眩暈すら覚える。いつのまに止まっていたのか、肺が収縮活動を再開して呼吸が再び行われ始める。ひゆう、と喉から空氣が漏れた。サユさえいれば、大丈夫だ。街の一角をふっ飛ばすほどの戦闘力を思いついて、口端がせり上がる。この無敵のフレイムヘイズさえいてくれれば、サルマキスは俺に手出し出来ない。いや、それどころかサルマキスを殺して、俺を狙えばどうなるかという見せしめにしてくれるかもしれない。

「ありが——」

「でも、条件がある」

命を承らえたも同然の状況に安堵する俺の台詞を硬い声が遮った。可憐な見た目に不相応な、鋭い声だった。また嫌な予感がした。

「サルマキスはボクが討滅しよう。その代わり、」

その白い指が俺の義足を指す。その確固たる意思を宿した双眸は、神の命ずるままに天罰を下す天使そのものだった。そこには何の邪悪もなく、何の救いもなく、ただの決定しか存在しない。

「全てが終わった後、その宝具をボクに渡してもらおう。これが条件だ」

「な……！」

生き延びたいと考えるのなら、母さんのことを考えるのなら、その取引は喜んで受けるべきだ。サユがサルマキスを倒し、俺がこの宝具を手放せば、俺にはもう襲われる理由がなくなる。普通の人間として暮らしていける。それはどうしようもなく正しい判断だった。しかし——この宝具がなくなれば、きつと、俺はもう走れなくなる。他人より秀でた優越感を、あの得もいわれぬ風を切る爽快感を二度と味わえなくなる。この足のおかげで待遇のいいハイスクールへの進学も決まった。走ることは俺のたった一つの取り柄だ。この4年間の生き甲斐はそれだけだったと言ってもいい。走れなくなったら今までの時間は全て無駄になってしまう。失いたくない、と思ってしまう。例えこの義足が化物どもを呼び寄せるハーメルンの笛だったとしても。

自分の置かれた現実を突きつけられ、しかし受け入れることが出来ずに閉口してしまつた俺に、サユは小さく嘆息してゆっくりと椅子から滑り降りる。

「今すぐ渡せとは言わないよ。サルマキスにはかなりのダメージを負わせたから、しばらくは身を潜めているはずだ。すぐに報復に来ることはないと思う。君は、その時まで
に覚悟を決めておいて」

「覚悟……？」

聞き返した俺の目を鏡のようにまっすぐに見返して、サユが容赦なく告げる。まるで、かつて自分が言われた言葉をなぞるをなぞるように。

「これを現実だと認め、未練を断ち切る覚悟を」

言つて、サユはおもむろに今まで羽織つてなかつたはずの黒い外套を翻した。何事かとそれを目で追つて——次の瞬間、サユの姿はどこにもなかつた。後には、まだ熱を持つた空のマグがあるだけ。驚きはしなかつた。彼女は異能を有する超常の戦士だ。これくらいの芸当ができてても何ら不思議はない。立ち上がり、ふらふらと自室のベッドの元まで歩むと、そのまま靴も脱がずに倒れこんだ。義足の関節がぎしりと軋みを上げるが、いちいち外す気にもなれなかつた。

サユは、きつと俺の未練をわかっていた。宝具への執着心を見抜いていた。だから、その浅はかな考えを見透かし、断ち切るようにと忠告したのだ。

「これが現実だ、つて言われても……」

今この瞬間にも、誰かが紅世の住人に理不尽に殺され、世界の記憶から消されている。

自分が平然と暮らしていたこの世界が実はそんなに物騒だったなんて——その世界に俺も属しているだなんて、信じたくなかった。でも事実なのだ。サユが言ったように、認めなければならぬ。認めて、判断を下さなければならぬ。自分のアイデンティティと引き換えに、自分の命を守らなければならない……。

苦悩の重さに耐えかねるように、身体をベッドに沈みこませる。くたくたになった頭にどつと疲れが押し寄せて、泥のような眠りへと誘う。今日はたくさんのことがありません。もう何も考えなくなかった俺は、その誘いに乗って意識を心地よいヘッドロへと投じた。

1—5 転校

げっそりと憔悴しきった顔のフリッツが自室のベッドに倒れこむ。大柄の肉体を受け止めたスプリングが抗議の呻きをあげるも、一日で身の回りの全てが激変した主人にそんなことを気にする余裕はない。弱々しい吐息を肺腑から吐き出すと、フリッツはまたたく間に意識と無意識の狭間に滑り落ちていった。

「……おやすみ、フリッツ君」

その様子を隣の教会の窓から覗いていたサユが、そつと呟く。その声は、舞い降りる大粒の雪に遮られて届くはずがないのに、フリッツはピクリとまつ毛を震わせて窓に向けて寝返りを打った。壁の隙間から刺し込んできた北ドイツニードルザクセンの冬の寒さを意識の外に追いやつて、サユはフリッツの容姿をあらためて観察する。190センチをわずかに下回るだろう長身で、そのかなりの部分がすらりと伸びた脚に費やされている。もとより北方白人種は筋肉質で頑健だが、厳しい節制と運動によつて無駄を一切廃された体型は、バイキングよりもスプリンタータイプと言える。身長は、坂井悠二だった頃の自分より25センチは高く、今のシャナそっくりの身体と比較すると軽く40センチ以上の開きがある。隣に立てば兄妹どころか父娘にすら見えるだろう。ドイツ人らしい彫り

の深い造作はほぼ欠点がなく、坂井悠二と比べることすら烏澁がましい。正直、「モテそうで羨ましい」というジェラシーを感じないと言えば嘘ではない。だが、木製の義足が目に入ったところでそんな独りよがりな感情は一気にかき消え、同情の念がふつと湧き上がる。

「あれほどの体験をしてもまだ現実を認められんとは、人間の心理はよくわからん。意味のないことだ」

教会の狭い倉庫に地鳴りのように低い呆れ声が木霊した。そこへ重なるサユの声は先ほどよりずっと沈んでいた。

「仕方ないよ。ボクも、そうだったから」

サユの脳裏に、全ての始まりとなったあの日の出来事が蘇った。日常の何もかもが変わってしまったあの日。

『おまえは人じゃない、物よ』。フリアグネの燐子に襲われて最初にシヤナと会った時、彼女に自分が坂井悠二の代替物だと告げられても、簡単に信じることはできなかった。本人の残り滓。燃え尽きてゆくだけの存在。いきなり、小さな女の子からそんな突拍子もないことを言われても、途方に暮れる他なかつた。自分が世界から零れ落ちたような圧倒的な失調感に打ち据えられ、目眩すら覚えて絶句した。抗おうにも抗えない、厳然とした無力感が全身を包み込み、押し潰してくる。その絶望から逃れようと目の前

の現実から目を逸らして、必死に仮初の日常にすがり付こうとした。気味の悪い冗談だ、悪い夢なんだと逃避しようとした。反発、戸惑い、恐怖。認められない、認めたくない——。きつとそれが、普通の人間の正常な反応なのだ。

「しかし、『外界宿』^{アウトロー}の情報屋ももつと詳しく調べていけばよかつたものを。〃時の事象に干渉可能な宝具〃を創ることのできる人間がいると聞いたのに、そいつはとつくと死んで、その遺産が人間の足に引付いているとは。知っていれば初手の対応も変わっていただろうに。しかもあの宝具、なにやら、あのフリッツとかいう小僧にとつて思い入れもあるようだ。長年そばにあつた道具に執着する気持ちは、まあわからんでもない」

「少しばかり気の毒だ」と目には見えない唇を尖らせる。贗作創りを生き甲斐とする職人氣質のテイレスシアスは、大事なモノを簡単に手放すことのできない執着心という人情に共感できた。それを聞いたサユの表情が目に見えて曇る。膝を抱えてくたびれたマットに座り込み、冷たい石の壁に背を預ける。

「でも……宝具を持つていれば彼は不幸になる。彼も、彼の身の回りの人間も……」

テイレスシアスは、サユがフリッツと昔の自分を重ねて見ていることに気づいた。『零時迷子』という紅世秘宝中の秘宝をその身に宿し、常に紅世の脅威に晒されていた坂井悠二^{トウジ}だつた頃の自分に。

「彼を戦いに引きずり込んでしまうことは避けたい。きつと不幸になつてしまうから」

「だから、あの小僧から宝具を取り上げる。それは正しい判断だ、サユ。間違いではない」

テイレシアスは一際「正しい」を強調して言った。それは彼なりに自分のフレイムヘイズを氣遣った言葉だったが、言った直後に内心に「しまった」と後悔して口を閉じた。サユが唇を噛んで目を伏せる。努めて平静を装おうとしているようだったが、その瞳は明らかに暗く沈んでいた。

「うん、きつと正しいことだ。間違つてない。だけど、正しいことは必ずしも良いことと同じじゃないんだ」

義足を渡せ、と言われた時のフリッツの絶望に染まる顔を思い出し、サユの胸は後悔と苦悩に締め付けられる。

そう、サユが行おうとしていることは正しいことなのだ。危険な宝具を排除することでリスクを取り除く。それは極めて現実的な処置だ。——かつて、ヴィルヘルミナが坂井悠二というミステスを破壊して『零時迷子』の及ぼす危険を振り払おうとしたように。

また、万事順調にサルマキスを倒すことが出来て、フリッツが宝具を手放しても、紅世の住人からの危険は変わらず付き纏う。皮肉なことに、フリッツは抜きん出て『存在の力』を大量に保有する稀な人間だった。『存在の力』とは万物がこの世にあらうとする

根源的なエネルギーであり、その保有量はそれぞれの体内の血液量のように個体ごとに異なる。体内に保てる限界量は生まれながらに決まっています、不運なことにフリッツの場合はこの限界量が稀に見て多い。悪道に落ちた紅世の「徒」には絶好の餌だ。フリッツから宝具を奪うということは、紅世の暴挙に抗する手段を奪うことにもなる。都合よく彼から宝具を取り上げて、それでいいのか。こちらの都合は解決しても、フリッツは失うものばかりだ。もしも彼が別の「徒」に襲われてむざむざと殺された時、その責任は誰にあるのか。

それに、問題は他にもある。おそらく、今起きていることの核心に迫る謎が。

「あの宝具には、きつと何かがある」

「ああ。俺もそう思う。サルマキスに狙われるとわかっている宝具を何も知らない息子の義足に仕込むなど、サデイスティック極まる話だ。そも、疾く走ることの出来る宝具」というだけではサルマキスがあれほど必死こいて奪おうとするはずがない。本来、アイツはフレイムヘイズとの直接対決は避ける陰湿なタイプだったはずだ。戦闘力も高くはなく、相手の不意をつかない限りまともに戦えもしない。『仮装舞踏会』に門前払いを食らうほどだ。そんな奴が正面切ってフレイムヘイズに挑むなど、甚だ奇妙じゃないか。奴にとつても、小僧の持つ宝具は譲ることの出来ないモノなのだろう」

テイレシアスの同意に、サユは重々しく頷く。指摘の通りだった。宝具の製作者、デ

ニス・ルヒトハイムは、サルマキスに宝具を渡すまいとして逃げた。フリッツの親しげな口ぶりからして、それなりの人格者であり、良き父親であったようだ。家族とともに日本からドイツへ逃げたのは、家族をサルマキスから守るためだったはずだ。だといふのに、サルマキスが喉から手が出るほど欲するとわかっている宝具を、サルマキスが奪う際に必ず危害が及ぶだろう義足という必需品に隠した。そして何も知らない息子に、その生命が危険に晒されることを承知で宝具を託した。そこには何か意図があるに違いなかった。決してサルマキスに渡すわけにはいかないが、息子^{フリッツ}が肌身離さず持つていなければならぬ理由があるはずだった。その謎を残したまま、フリッツから父親の遺産を奪取することは出来ない。出来るわけがない。

今のサユの頭からは、『時の事象に干渉する宝具』を使って元の時間に帰るといふ考えは消えていた。胸中を支配するのは、かつての己のように紅世との戦いに理不尽に巻き込まれてしまった不幸な少年を、最も良い未来に導いてやりたいという願っただけだった。自分は、無力だったあの時とは違う。フレイムヘイズとなり、シヤナと同じ姿を得て、シヤナに匹敵する力を得た。それなのに、みすみすフリッツが自分と同じ道を歩んでしまうことを許すわけにはいかない。救いたい、救わなければならない。だが、そのためには、問答無用で彼から宝具を取り上げるしかないのだろうか？

「ボクは強くなったつもりだった。でも、目の前の少年一人だつて、満足に救つてあげら

れない。どうすればいいのかも、わからない」

今にも張り裂けそうなほどの悔しさに満ちた声に、テイレシアスは敢えて無言を返した。サユも何も言わない。その潤んだ瞳に映り込むのは、眉をハの字にして眠るフリッツの苦しげな寝顔だ。触れられそうなほど密度を持った沈鬱のなか、少女の形をした少年は小さな膝を抱えてそこに顔をうずめる。小さな身体をさらに縮こまらせ、身動き一つせず、自分のすべきことは何かをひたすら模索し続ける。

——遅かったじゃない。

その脳裏に、一人の少女が燃え上がった。紅蓮の炎を身に纏ったその背中はその背中は圧倒的な存在感を放ち、まるで巨大な城壁のようだ。少女が漆黒の黒衣を大きく靡かせて振り返る。闘志溢れる赤い双眸を輝かせ、神々に宣告するように高らかに言い放つ。「悠二、お前は私が護る」と。

気づけば、サユは立ち上がっていた。誰かに背を押されるように力強く踏み出すと、開け放った窓枠をブーツの底で叩く。答えは決まりきっていた。かつての己と同じ境遇の少年がそこにいて、ここにはフレイムヘイズがいる。かつて自分を助けてくれた少女にそっくりのフレイムヘイズが。

「どうするか決まったようだな、サユ」

「ああ、決まった！ボクは、ボクがしてもらったことをする！」

満足げなテイレシアスの声に晴れやかな笑みを返し、その強い決意を現すように純白の炎の翼を大きく羽ばたかせ、サユは雪舞う夜空へと飛び立った。目指すは、学校だ。

† † †

すっかり脊髄に染み付いた習慣に従って、自動的に半身が持ち上がる。まだはつきりとしなない目を細めて枕元の時計を見ると、時刻はまだ6時前だ。朝のトレーニングに遅れないようにいつもこの時間に起きるようにしているのだ。昨日のことは全部悪い夢だったんじゃないかと都合のいい希望を抱いてベッドから起き上がるが、途端に怪我と疲労で全身の至るところから悲鳴が上がった。痛みに顔を顰めて呻き声を漏らす。その痛みに儂い希望は簡単に突き崩された。思わず仰け反りそうになるのを堪えて、鉛のように重い身体を引きずるように歩む。眠ったはずなのにちつとも回復できていない。唯一の救いは、あまりに疲れていて夢すら見なかったことだろうか。

毎日やっているように簡単な屈伸運動をして意識を覚醒させつつ、硬直した筋肉を解していく。関節を動かすたびに痛みが走ったせいで、いつもの倍の時間がかかってし

まった。軽くシャワーを浴びてから、疲労回復と心臓強化のために毎朝飲んでいるグレープフルーツジュースを一気に呷る。ふと、テーブルに置かれたままのマグカップが目に入った。それに注がれていたブラウナーを可愛らしい仕草で飲んでいた少女の姿を思い出す。

サユは今頃何をしているのだろうか。サルマキスを捜しているのか、それともどこから非力な俺を見守ってくれているのか。

サユは、フレームヘイズという超常の戦士でありながら、日常に住む普通の人間のような親しみやすさと他者への深い配慮を持っていた。さらに、その仕草一つ一つがどこかぎこちなくて、接する者にまるで小動物のような印象を与える。見ているだけでこちらまでなんだかほんわかとした幸せな気持ちになつて——

「何やつてんだ、俺は？」

そこまで考えたところで、毎日の習慣に従って通学用のボストンバッグを背負おうとしていた自分に気づいて深いため息を吐いた。化け物に命を狙われる身だということに未練がましく普通に通学しようなど、何を考えているのか。

「……でも、一箇所に留まっているよりは移動した方がいいよな……」

誰に言うでもなく呟く。いや、これは自分への暗示だ。日常から引き剥がされたくないという足掻きが勝手に口から漏れ出てしまったのだ。ほんの昨日まで、この退屈な日

常からの脱出を望んでいたというのに、なんて手前勝手に卑怯な人間なんだ。

（でも、サユは『サルマキスはすぐに襲ってこない』と言っていた。学校に行っても平気なんじゃないか？それに仮に学校で戦いが起きたとしても——巻き込んで気の毒に思う奴はいない。俺には何の関係もない）

今はただ、無我夢中で走りたかった。誰よりも早く風を切る快感に浸って、全てを一度忘れたかった。そうやって頭の中をリセットすれば、何かが変わるような気がした。それが周りの人間を危険に晒すことだとしても、構わない。ふつと小さく嘆息して体内を空虚にすれば、自分でも驚くほど冷たい冷笑が浮かんた。我ながら最低な奴だ。バツグを担ぎなおせば、後は毎日の習慣に従って身体が自動的に動いてくれる。

ふと、サユの悲しむ顔が脳裏に浮かんで、胸がぎりりと痛んだ。

走る。迷いや悩みを吹っ切るように、身体中の激痛も周囲の視線も気にせずただがむしやらに疾駆する。

重力など物ともせず、遠心力を振り解き、空気抵抗を引き裂いて、競争路をひたすら高速で駆け続ける。この爽快感に浸って悩みやしがらみを振り切りたいのに、一度『存在の力』というものを認識してしまった肉体は嫌でも義足から流れてくる「力」を感じ取ってしまう。昨日まではまったくわからなかったが、今では感覚で明確に理解する。こ

の宝具は、きつと『俺の時間を速めている』のだ。俺の肉体や精神を世界の時間から切り離して加速させている。テイレシアスはこれを『時の流れに干渉する宝具』と言っていたが、それも頷ける。

なぜ、父さんはこんな宝具を俺に託したのだろう。単純にサルマキスに渡したくなかったのなら破壊すべきだった。記憶の住人となって久しいが、むぎむぎ自分の子供を危険に晒すような真似をする人ではなかった。サユたちもこの宝具がいつたい何を目的として創られたのかは知らなかった。この宝具には、まだ何か謎があるのか——？

「フリッツ！フリッツ・Y・ルヒトハイム、終わりだ、生まれ！」

唐突に耳に滑りこんできた叫び声に、思考を中止して身体に急制動をかける。踵のスパイクが地面をえぐって部員待機所前に長い爪痕を残した。ペース配分を無視していたため若干肩を上下させながら声のした方を見ると、いけ好かない部長が目を丸くしてこちらを凝視していた。丸くした目をそのままに、しばし逡巡し、躊躇いがちに口を開く。

「その……今日はどうしたんだ？いつもと様子が違うみたいだが」

「——はっ。」

今度は俺が驚く番だった。こいつが俺を心配することなんて今まで一度もなかったのに。見れば、周りの部員も気遣わしげな目付きで俺を注視している。自分の目と耳を

疑う俺に、部長は気まずそうな顔をする。いつもの苦々しい面持ちの端に配慮の色が覗いている。

「お前の独尊的な態度には部長として不満を持つてるが、ハンデを抱えながらも誰よりも速く走るお前のことは認めてるつもりだ。だから、お前が普段の調子でないのはやっぱり気になる。何かあったのか？」

認めてる、だって？こいつが俺を？いつも鋭い視線を送ってくるだけで、そんな素振りは一度も見せたことなかったじゃないか。

（いや、俺が見ようとしていなかったのか？）

唐突に脳裏に浮かんだ直感めいた考えに息を呑む俺の背中に、誰かが柔らかく触れた。

「あの、大丈夫ですか？」

振り返れば、新しく入部した小柄なマネージャーが心底心配そうな表情を浮かべてこちらを見上げていた。なんなんだ、いったい。お前だって昨日はあんなに怯えていたじゃないか。どうしてそんな優しそうな顔をして俺を見るんだ。俺は、お前らを巻き込もうとしてるんだぞ。

「だ、大丈夫だ。少しコンディションが悪いだけだ、気にしないでくれ」

急に居心地が悪くなった俺は、突き放すように言い放つと荷物を掴んで控え室へと逃

げ出した。怪訝そうな視線が背中に突き刺さる。調子が狂う。いつものように俺を睨んでくれた方がよっぽどマシだ。

（俺は、お前たちのことなんて何とも思っていないんだ。お前たちも、俺のことなんて何とも思っていないんじゃないのか？それとも……何とも思っていないのは俺だけなのか？）

自分が取り返しのつかないことをしているような後ろめたさが背筋を冷やす。じくじくと疼き始めた罪悪感から意識的に目を逸らし、急かされるように急ぎ足で学校へ向かう。このまま考え続けていると気が滅入りそうだった。慌しく登校してくる生徒たちを掻き分けながら慣れた動きでスパイクシューズをスニーカーに履き替え、一限目の授業が行われる教室に入ろうと扉に手をかけ、

「Dies ist ein Stiel
これは仕様です！」

カタコトのドイツ語だったが、たしかにそう聴こえた。一度聞いたら忘れられない、透き通るように凜として、だけど幼さを多分に残した少女の声。その声は間違えようもなく、俺の日常の破壊者の声だった。

「冗談だろ？」

呟いてドアを乱暴に開け放つ。円陣を組んで何かに群がっていたクラスメイトたちの視線が一齐に俺に集中する。その中心に、中学生すら怪しい背丈の少女がいた。濡鳥のような長髪と濃紺の給仕服の裾を翻し、他の者たちより遅れて少女がこちらを振り返る。俺を見つけると、なぜか当惑していたその表情が花が咲いたような可憐な笑顔にとつて変わった。

「おはよう、フリッツ君」

「なんで」とか。どうやって」とか。いろいろ言いたいことがあつたはずなのに。なのに、その笑顔で全て吹き飛んでしまった。気負いも苦悩も晴らして癒すタンポポのような微笑みに、頬が火照り、胸が締め付けられ、心臓が高鳴る。腰から背中に電気が走り、全身が沸騰したようにカツと熱くなる。認めたくないが、俺には本当に特殊な嗜好があるようだ。そんな確信と諦めを覚えながら、クラスメイトが注視する中、俺は愛くるしい少女にただただ見蕩れていた。

【外伝】アラモ砦の天使

16世紀、ドイツ・プロツケン山

月のない夜。山中の森林を踏み潰し、頭部を持たない鉄の巨人の威容が炎に照らされて揺らめいた。世界に仇なす『^{トーテン・グロック}とむらいの鐘』の幹部『九垓天秤』が一柱、^ウ“巖凱”ウルikumミである。巨大な巖山に太い手足が生えたようなその姿はまさに襲い来る大自然の脅威そのものだ。その重厚な巨軀から繰り出される大技は凄まじく、剥き出しの岩肌のような堅牢な装甲は果てなく頑強。ウルikumミは未だかつてどんなフレイムヘイズの攻撃にも微動だに怯んだことはなかった。

——だからこそ、初めての^{けいけん}衝撃に彼は揺らめき、^{よろ}蹠踉めいた。

「これは、いったい……!?!」

胴体に描かれた双頭の鳥が驚愕の呻き声を発するも、誰の耳にも——彼自身の耳にも届くことはなかった。ドゴン、ドゴン、ドゴン、ドゴン、ドゴン。根太い広葉樹の森を底揺れさせる爆音が間断なく轟く。痛打のたび、見上げるほど巨大な軀体がガクガクと激震する。まさに今、彼の前面の^{ひふ}装甲は怒濤の如き鉄弾の打擲に晒され、月面のクレーターもかくやという惨状と化していた。容赦のない攻撃はさらに続き、彼の軀体は

砕け、燃やされ、溶け、穿たれ、貫かれていた。弱小な人間たちの作った火薬を用いる武器——大砲^{カノン}程度なら、今まで難なく弾き返してきた。燃える黒い粉の爆發力で削り出しの粗い鉄球を弾き出す小癩な兵器は、並の紅世の「徒」ならまだしもウルリクムミのような強大な「王」にとつては歯牙にもかけないものでしかなかった。雄々しい見た目に寄らず誰よりも思慮深く賢しい彼は、この攻撃も同じ原理^{かやく}によるものだろうと推測した。

「……この威力は、なんだ!？」

だが、その破壊力は、文字通り埒外のものであった。永劫に思える長い年月を超えてきたウルリクムミにとつても体験したことのない大破壊の猛打は息をつく暇すら与えてくれない。一撃一撃が非常に重く、鋭く、凶悪だ。けたたましい発砲音は大砲の比ではない。無垢の鉄球ではなくそれ自体が爆發する仕掛けを施された人の頭ほどの弾丸が、滝のような勢いで次から次にドウドウと襲いかかってくる。人間の兵器の機構をしているが、地獄の牙のように紅世の身を食い破る凶悪な破壊力は紛れもない宝具によるものだった。が、こんな稀有な宝具の存在などウルリクムミは聞いたこともなく、この戦場にこれほどの決戦兵器めいたものが持ち込まれた気配もなかった。まったく未知の宝具だった。

さらに、大砲なら一発撃つごとに面倒な装薬と装弾の手間がいるはずなのに、この攻

撃は一向に中断する気配を見せない。白銀に燃える葉莖を嘔吐するように大地に吐き出しながら、大気を振じ切らんばかりの勢いで長大な砲身パレルを猛回転させ、無数の弾丸を叩きつけてくる。

「うぬ、う、ううおおお?!?!」

たまらず腕を防御に繰り出すも、猛威に晒された上腕部の表面がまるでウロコが剥がれ落ちるように粉碎されていくのを見て、さしものウルリクムミも存在しないはずの心臓をゾツと冷たく萎縮させた。このままでは、殺やされる。

彼の動揺を示すように、天に届くほどの巨体がグラグラと震え、足元には先ほどまで彼を構成していた岩石の残骸がバラバラと散らばっていく。この状況が続けばいずれ軀体を軀体の形として保てなくなるのは誰の目にも明らかだった。

「嘘だろ、先手大将が」

「そんな馬鹿な」

無敵に思えた切り込み隊長が呻き声をあげて後ずさる光景を、『とむらいの鐘』に属する紅世の「徒」たちは絶望の顔で見上げる他なかった。自軍の士気が見る見る落ちていく気配を背中を察するも、ウルリクムミは胸板を抉り取る攻撃に耐えることしか出来ない。反撃の糸口を見つける余裕など与えてくれない連続砲撃は、彼以外では受け止めることも出来ないだろう。彼が自分の命可愛さに避けてしまえば、苛烈極まる火線はそ

のまま目標を変えて容赦なく自軍を襲うことになる。一撃一撃が、一体一体の紅世の“徒”を倒せるだけの威力を間違いないで有しているのだ。そうなれば一方的な虐殺が待っている。彼我の戦力差は取り返しがつかなくなるほど覆されてしまい、勝敗は決してしなうに違いない。味方なかもの損害を防ぐためには、形勢を維持するためには、彼がその身を未知の兵器の前に晒し続け、わずかな余命を消耗し続けるしかないのだ。にっちもさっちもいかなない狭間に蹴落とされたことを理解したウルリクムミは愕然とした。

「なんなのだ、これは!!!」

彼は知らなかった。知りようもなかった。白銀に燃えるその大砲が、これから400年後の未来において誕生する史上最強・世界最強の対戦車連装機関砲——G A U——8アヴェンジャーガトリングガンノンであるということ。

「貴様はいつたい、何者だ——!?!」

優勢から一転して防戦一方に追い込まれたウルリクムミが、生きながら身を磨り潰される苦痛に悶えながら叫ぶ。彼の咆哮が向く先で、白銀の炎を巻き上げて駆動する機関砲の引き金を引くフレイムヘイズが不敵に笑った。白銀の翼を羽ばたかせ、純白の長髪を大きく翻して、有名なあの台詞を口にする。

「アスタ・ラ・ビスタさようならだ、ベイビー!!!」

21世紀、アメリカ・テキサス。

警備員のホセ・ジュニア・ザバーラは、アメリカにも神殿は存在すると考えていた。それがこの『アラモ砦』だ。

18世紀にメキシコ共和国からテキサスが独立する戦争があつた。その主戦場の一つとなつた元教会は、その堅牢さから軍事用の砦へと改造され、壮絶な戦闘による数多の男たちの最期の輝きを見てきた。この『アラモ砦』は、テキサス人にとって象徴的な聖域だ。ここに立て籠もっていたテキサス独立軍182名はその全員が死闘の末に戦死し、メキシコ共和国は一時的な勝利に酔いしれた。そして、テキサスを失つた。メキシコ系アメリカ人であり生粋のテキサスつ子であるホセは、この神殿の夜間警備員となつてからずっと複雑な思いを抱いて冷えた夜気の中を巡回していた。

月が不在の夜、最低限の照明のみに照らされた砦跡に乾いた風の唸り声が厳かに吹き通る。まるで大自然がここで命果てていつた男たちに敬意を示しているかのようだ。毎晩、この場所は単なる記念施設ではないと思ひ知らされる。休暇に訪れたギリシアのバルテノン遺跡や、日本の伊勢神宮イセテンブルのような心身を引き締める厳格な雰囲気イセテンブルが腰を据え

ている。

「——ありやあ、なんだ？」

だから——天使が城壁塔にちよこんと腰掛けていたとしても、不思議はないのかも
しれない。

(なんてこつた！)

驚愕にあやうく手から滑り落ちそうになった頑丈なLEDライトを掴み直すと、ホセは即座にスイッチを切る。そして流れる水のように滑らかに身を乗り出すと、50代半ばに似合わない踊るような身のこなしで物陰に肩を押し付けた。

ホセの血筋を過去に辿ると、スペイン軍人とマヤの女傑戦士の間に生まれた男に行き着く。先祖は、何を思ったか傭兵となつてマスケツト銃片手に遙々欧州くんだりまで馳せて華々しく戦つた物好きだったという話だ。その血を誇るように、ホセの猪首はがっちりとして、目はラテン系を示すように顔の奥に引つ込んで鼻筋と顎は厳ついが、己がマヤ人の子孫であることを忘れない肌はクルミ材のように濃いブラウンをしている。

彼の家系は代々、何かしらの戦士を稼業としていたし、ホセ自身も5年前に上官に惜しまれながら退官するまでアメリカ海兵隊一等軍曹として地に足のついた立派な軍歴を歩んでいた。その際に培つた経験を必死に肉体の底から掻き出しながら、この5年間の不摂生でこびりついた腹回りを引きずつて天使の背中に近づいていく。

祖父オールドのホセはよく幼い自分に教えたものだ。「偉大な先祖グレート・ホセはこう言っていた。コツは自分が猫になったと自分自身に言い聞かせることだ」。

(そう、俺は猫だ。俺は猫。ニャアーゴ)

相変わらずこちらに背を向ける天使は、月の代わりでも肩代わりするように煌々と白銀に輝いていた。もしホセがあと30歳も若ければ、壁をよじ登って手を触れられそうなどころまで距離を詰めていく。チラチラと銀色の火の粉が降り落ちてくるが、試しに触れてみても熱さはなく、実態のない雪の結晶のように掴むことが出来ない。

天使は、最新のコンピュータグラフィクスですらけつして再現できない、浮世離れた神々しさを夜の空に燦々と放射している。腰まで伸びる優美な長髪はミルクのような純白、背中から左右に広がる翼は澄み切った銀色。炎のように揺らめく大きな翼に比べ、その肢体は小さく、華奢だ。

(子どもムチャイチヨだ。女の子だ)

ホセは目を見張った。巨漢のホセからしてみれば虚弱にすら思える体つきだが、肉付きはほのかにふくよかだ。腰回りを見てみれば、骨盤がわずかに左右に張り出している。性別は女であるようだ。天使の少女。人間界に興味本位で降りたものの、迷子になつてしまったのだろうか。

ホセの脳裏に急に娘のことが思い出された。一人目の妻ワイフとの間に生まれた三女、二一

ナ。ニーナが迷子になった時、夕暮れ時の公園のベンチで一人ぼっちで泣いていたのをホセが必死になって見つけ出したのだ。ホセの胸はたちまちの内に切なさに締め付けられた。

勇気というより義務感に急かされ、ホセは天使に声をかけてみることにした。だが、ふとして湧いた疑問が彼の首を斜めに傾けた。天使は人間の言葉が理解できるだろうか。スペイン語、英語。どちらも母国語として流暢に話せる。日本語も、まあ挨拶程度なら行ける。アリガトー。サヨナラー。ヤキトリー。スママセン。さて、それが気が利いているだろう？しばし顎に手を当てて悩んだあと、ホセは持ち前の性格を発揮することにした。当たって砕けろ、だ。ウーラー。

口が動くままに任せ、ホセは物陰からふてぶてしい猫のようにノシノシと歩み出ると、警戒させないよう努めて気さくな調子で頭上の天使に話しかける。

「やあ、^{オッラ}天使様^{アンヘル}。失礼ですが、もしかして迷子ですか？」

英語は万国共通だ。神世が「万国」に含まれるかは定かではないが。

ホセは天使の意表をついたと思っていた。だが、長髪を靡かせながらさりげない仕事で振り返った天使の眼差しを見て、イタズラを見透かされたジュニアハイスクールの未熟な男子生徒のような気持ちを感じた。

「いんばんは。ずいぶん大きな猫さんですね」

ふっと口元を柔らかく綻ばせ、天使は流暢な英語で優しく返した。見てもいないはずなのに、ホセの猫を意識した動きをしつかりと知覚していたらしい。見抜かれていたことを理解して、ホセは「まいったな」と後ろ頭を搔いた。これは一杯食わされた。人間如きが天使を欺こうとすることが間違っていたのだ。

穢れない真珠のような瞳を前に、ホセはセキユリ会社のロゴが刺繍された帽子を脱ぎ、経験な信者のようにそつと胸に当てる。ホセの家系は少なくとも300年前からカトリックだった。

「これは失礼を。驚かせてはまずいと思ひまして」

天使の顔貌をそれとなく観察する。実に美しい少女だった。アジア系に属するような造形だが、高い鼻筋はしゅつとして形が良く、目鼻立ちもハッキリとしている。どこかの文化圏でも十分に美少女で通じるに違いない。ブツダのような柔和な表情が似合うものの、目つきや口元のパーツはキツとしてやけに鋭い。気は強くないが、怒らせると怖そうな印象を覚える。服装は中世欧州の給仕メイドそのものだ。胸元にぶら下がる大人っぽいペンダントが、少女がオシャレのために精いっぱい背伸びしているようで微笑ましい。

（人形みたいだな）

印象深いのは、染み一つない完璧な肌。完璧すぎてやけに造り物めいてもいる、と直

感は言っている。天使は神の創造物だ、当然なのだろう。人間の域を超えた美を体現していて、ホセは思わず見惚れそうになった。年頃は、12、13歳頃と判別できた。もつと下かもしれないが、自信はない。二人目のワイフの間に生まれた次女のガメーが同じくらいの年頃なので、きつとそのくらいだろうと検討をつけた。

「それにこのご時世、手の込んだドッキリかもしれないと疑ったんです。ほら、ユーチューブとか。ユーチューブ……ご存知かな。ところで、私はホセ・ジュニア・ザバラ。このアラモ砦の夜間警備員です。天使様にお会いできて光栄ですよ」

言つて、深々と頭を下げる。人間から敬われるのは久しぶりなのだろうか。『天使』と呼ばれた少女はくすぐったそうに腰をもじもじと動かし、人差し指を顎に当てて何事か悩んだあと、ふふつと穏やかな微笑みを零した。

「無理もないですね。ユーチューブ、知ってますよ。たまに見ます。こちらこそ、変なところに座ってしまつてすみません、ザバラさん。ボクはサユと言います。天使の仲間みたいなものです。ちよつと迷子になつてしまつて、ここで休憩させてもらつていました。ご迷惑でしたか？」

「滅相もない。砦に箔が付くつてものですよ」

天使もユーチューブを見るのか。創業者も喜ぶことだろう。

さて、天使の名前は『サユ』というらしい。なんとなく、ロシアっぽくもあり、中国っ

ほくもある。英語の発音は見事だが、語尾に子供っぽい可愛げのある訛りアクセントがあった。ホセは在豪基地、在独基地、在日基地に赴任したことがある。訛りの特徴から、天使の少女が操る英語は日本に近いと思った。日本担当の天使なのかもしれない。日本刀サムライソードでも持たせれば案外似合いそうではある。

と、サユという天使が眉をハの字にして、茶目つ気のある笑顔で手元のペーパーブックを掲げて見せてきた。テキサス州観光協会発行の旅行ガイドマップだった。

「あの、この『ラックランド空軍基地』にはどうやっていけばいいんでしょうか？」

その基地には海外派兵からの帰国の際に何度か世話になったことがあったので、ホセはすぐに場所の検討がついた。中規模だが、居丈高な空軍にしては気のいい連中の集まる基地だ。

「ダウンタウンの向こうです」と基地の方角を指し示そうとした指が、曇った表情とともにピタリと動きを止める。天使が空軍基地に何の用があるのだろうか？

「……ひよつとして、サタンの奴原めやつぼらがついに兵を起こしたんですか？」

聖書に名高い終末戦争アルマゲドンが始まるというのか。息を呑むホセの問いに、天使はしばし返答に悩み、頬を緩めて「今はまだ」とだけ濁した。ホセは見るからに訝しげな顔を浮かべ、不安を隠さなかった。彼の愛する合衆国は神との軍事同盟は締結していなかったはずだ。少なくとも、今は。

ホセは居住まいを正して懇願する。彼は全ての優秀な軍人がそう思うように、自らの不用意な政治的発言によって天界と魔界の戦争に祖国が巻き込まれることを恐れた。

「天使様、せつかく我が合衆国軍を頼りにして舞い降りて頂いたところを恐縮なのですが、天界での戦争に我が軍の力を必要とするのであれば、その際はまず合衆国大統領に話を通してもらう必要があります。大統領の命令無くしてはご協力出来かねます」

ふと、ホセは天使の眼差しに大人びた気配が差すのを見た。幼い見た目よりずっと賢しげな、複雑な光を湛えている。こちらの事情も察してくれていそうだと見て、彼はジョークも混ぜてみる賭けに出してみた。

「……その時は『敵はロシアだから』と言えば、今の大統領は首を縦以外には振らないでしょう」

天使は一瞬だけキョトンと目を丸くし、やがてクスクスと笑った。ジョークが天使にも通用したことにホセは密かにガツポーズをして、自らのウィットセンスに自信を強めた。同時に、この天使が冗談の通じる話しやすい相手であることを確信した。ジョークがわかる相手との会話は好きだ。彼は天使に対して饒舌になることを自分に許した。

「ご心配なく。こちら側の戦いにお国の兵隊さんの力を借りようとは考えていません。ボクたちはむしろ貴方たちのような人間を護るために戦っているのですから」

「では……我が軍の基地に何用でしょう？ もしや、見学ですか？」

「ええ、そんなんです。人を食べる『悪魔』との戦いに役立つ知識を求めていまして。出来ればこつそりと見て回りたいのです」

天使が米軍基地を見学とは、なんとも誇らしいことだ。空軍の連中はさぞ鼻高々になることだろう。キリスト教会と縁故の深い今の大統領が知ったならホワイトハウスを訪れる他国の首脳たちを放つたらかしてエアフォース・ワンで飛んでくるに違いない。しかし、そんなゴタゴタをこの天使が望んでいないことは、彼女の控えめな表情を見れば火を見るより明らかだ。だからこそこんなド田舎の基地に来たのだろう。祖国への忠誠心と信仰心を天秤にかけ、ホセは大統領にも知らせないことを決めた。

「武器をただ見るだけでいいのです。勝手に持っていったりしませんし、ましてや触つたりもしません。『今後の参考』としてこの目で見ておきたいだけです。本や映像ではどうしても細部までイメージがしづらくて」

「なるほど」

見学だけというのなら別に害は無いだろう。この天使からは不思議と害意は微塵も感じない。それどころか無害な小型犬にも似た無防備な雰囲気すらあった。悪魔との戦いにアメリカ製の武器が参考にされるといふのなら素晴らしいことだ。

ホセは基地の方角とおおよその距離を身振り手振りで教えたあと、興味本位で話を掘

り下げてみることにした。

「見たいのは分隊支援火器とか汎用機関銃ですか？」

ホセは銃身を支える二脚をジエスチャードで示し、海兵隊時代に自身が愛用していたM60機関銃を空中に図示する。最強のイタリア移民が映画で乱射していたアレだ。

「いいえ、もつともつと強くて大きなものを見たいのです」

小さく首を振った天使が細腕をいっぱいに広げてみせる。その可愛らしい仕草に癒やされて微笑みを浮かべた直後、ホセは悩んだ。強力な個人用火器というとM60くらいだろう。ホセが退役したあとの海兵隊にはもつと強力で最新の武器が配備されたかもしれないが、そもそも空軍基地には重武装の海兵隊は常駐していない。歩兵が持てる火器の備蓄はたかが知れているだろう。天使が求めるものがあるとは思えなかった。顎に手を当てて困り果てる様子のホセに、天使が助け舟を出す。

「こう見えてもボクは力持ちです。人間にはとても扱えないような兵器でも構いません」

超常の存在である天使が見た目よりずっと馬力があつたとしても不思議はない。ホセはすぐさま答えをはじき出した。そうとわかれば、空軍らしい兵器があるではないか。

「では、オートキャノン機関砲一択でしょう。ラックランドには米軍において最大かつ最重量、そして

最強の対戦車機関砲『アヴェンジャー』を積んだ攻撃機がありますよ」

『アヴェンジャー』は、対地攻撃航空機A-10サンダーボルトIIの下部にマウントされたゼネラル・モーターズ製の連装機関砲だ。この機関砲のためにA-10が造られたといっても過言ではない。事実、A-10の重量の3分の1はアヴェンジャーが占める。戦車キラーとして生誕した回転する7砲身からは毎分3900発もの劣化ウラン製徹甲焼夷弾が初速1067毎秒メートルという超高速で吐き出される。撃たれる側は一秒が永遠に感じられるほどの地獄の大連射であり、これに耐えられる戦車など地球上にはこれまでもこれからも存在しない。着弾点が3メートル以上離れていたのに模擬敵兵が粉微塵になってカケラも残らず消滅したという話もある。大威力故の反動の大きさから、飛行中にアヴェンジャーを連射すると機体が後退するという噂まであるほどだ（実際は後退しないが減速するし、衝撃で10トンの機体が跳ね上がるらしい）。ホセが自軍の装備を自分の知る限りの知識を総動員して自慢げに説明してやると、天使は「それはいいですね」と少年のように瞳を輝かせて話に聞き入った。「素晴らしいですね。さすがにボク一人では運用できそうにないですが、使いようによつてはともとても役に立ちそうです」

この少女のような天使たちが力を合わせて巨大なアヴェンジャーを担いでド派手に乱射する浮世離れた光景を想像する。天使が悪魔との戦いに自社の製品を役立てる

ことを知ったゼネラル・エレクトリックのCEOはどんな反応をするだろうか。きつと狂喜乱舞するに違いない。知らせてやりたいものだ。

ホセがクスクスとほくそ笑んでいると、不意に、地鳴りのような低い声が砦に響き渡った。

「サユ、さつそく行つてみようじゃないか。人間がここまで自慢するのだ。さぞかし強力に違いない。天壤の劫火に自慢してやる」

「て、テイレシアス……このタイミングでお前が声を出したら……」

天使が己の胸元のペンダントをギョツとして見下ろした。ホセは天使よりもさらにギョツとした。驚愕が迫撃砲の至近弾を食らったみたいに背筋を突き抜けて肉体がビリビリと震える。どこからともなく聴こえたその声は、まるで心の水面に岩を投げ込まれて波紋が広がるような、非人間的な威厳を具えた壮年の男のものだった。姿かたちは見えないのに、まるでそこにいるように間近から聴こえた。魂に染み付いた信仰心が、熱湯をぶっかけられた形状記憶合金のように肉体をピンと直立不動の姿勢に硬直させる。

「ま、まさか、今の御声は、」

天使と出会えただけでも奇跡的なことなのに、まさか全能なる父——神様の御声まで耳に出来るとは！なんて神秘的な体験なのだろう。神の御声を聴いたなど、時代が時

代なら聖人と称されて銅像が建てられてもおかしくない榮譽だ。

ホセは限界を超えた歓喜に打ち震えて絶句する。精神という器が幸福で瞬時に満たされた。そんな信心深い彼を見て、天使は何故か焦り顔で胸元のペンダントをいたずらつ子の額にするように指でペチリと弾いた。白い翼が気まずそうにゆさゆさと揺らめく。

「おうおう、迷える子羊よ！ 贖作はいいぞ！ 汝、贖作を愛せ何をするモガモガガ」

「あ、あはは。すみません、ザバーラさん、お騒がせしました」

ペンダントを力いっぱい握りしめた天使が、なぜだか申し訳なさそうにそそくさと立ち上がる。翼を左右に広げる。光の粒子が舞って、夜闇を背景に銀河の輝きを生み出す。一流の宗教画の如き神々しい光景を見せつけながら、天使はホセの前から唐突に去ろうとしていた。ふわりと天使のつま先が砦から離れて、ホセは焦った。もつと話をしてみたかったし、神の御声をもつと耳にしたかった。しかし、人間を悪魔から護るために戦ってくれている神の使徒を自分の都合で引き止めるわけにもいかない。ならば、せめて激励の言葉の一つでも掛けるべきだ。

彼の喉について出てきたのは、ザバーラの家系に先祖代々伝わる鼓舞の文句だった。

「貴方たちに、天下無敵の幸運を！」

口にしたホセの胸が我知らず熱を持つ。先祖の誰が、どこの誰から仕入れたのか、い

つの代から伝わっているのかは定かではない。だが、不思議と魂を熱くして心にジンと感じ入るものがあるのは、連綿と続く彼の血筋を辿った先の祖先の誰かが重要な局面で耳にした、重みのある台詞だからに違いなかった。

言われた天使は、はたと一瞬だけ目を丸くすると「ありがとう、いい言葉ですね」と微笑んで自分の胸に丁寧に染み込ませる。

「それでは、ホセさん。因果の交差路でまた会いましょう」
 「ええ。^{ア・デイ・オ・ス、}白銀の天使様^{アンヘル・デ・ブラータ}」

そして、サユという名の可憐な天使は夜空へと飛び立った。空中できつと外套^{マント}のようなものをつけたのを視認した次の瞬間には、ホセの視界から消え失せてしまっていた。彼は今夜に起きた神と天使との逢瀬を決して他人に語るまいと堅く誓った。言っても、きつと誰も信じないだろう。それに……この特別な体験を自分だけのものとして独占しても、きつと罰は当たらないだろう。ホセは高らかに口笛を吹きながら、上機嫌で警備を再開した。

ホセにとって、天使^{サユ}と出会う因果の交差路は2度目^{ドゥイタ}であることなど、彼は知る由もなかった。

16世紀、ドイツ・プロツケン山

存在の力を練り上げ、フレイムヘイズ兵団の「対ウルリクムミ用決戦兵器」——白銀色の贗作『アヴェンジャー』が完成へと近づいていく。大木を横倒しにしたような巨大な兵器を見上げて、クルミ材のようなブラウン色の肌をした一人のフレイムヘイズが四角い顎を撫でながら感心深気に話しかけてきた。

「飛び入りのお嬢ちゃん、アンタの宝具は凄いな。ガトリンゲンキャノン連装機関砲、だつたか。これは本物

じゃなくて贗作だというが、俺のマスケット銃よりもずっと洗練されているな。なんていうか……そう、アンヘル・デーブラータ未来的だ。ぜひ本物を拝んでみたいもんだぜ、アンヘル・デーブラータ「白銀の天使殿」

そのスペイン語混じりの台詞と太い声音に聞き覚えがあることに気が付き、白銀のフレイムヘイズは控えめに問う。

「……あの、失礼ですが、貴方の名は？」

待つてましたと言わんばかりに猪首の上に乗つかる厳しい顔をニカツとした笑みでいっぱいにし、いかにも男らしい容姿のフレイムヘイズが自慢気に己の厚い胸板を親指で突付く。

「俺か？俺はホセ・グレート・ザバーラ。輝けるスペインと偉大なるマヤの混血さ。この

大激戦だ。お互い長生きは出来んかもしれんが、まあ、武運長久を願おうや」

白銀のフレイムヘイズは、しばしの間ポカンと口を開けて、大きな目をさらに大きく丸くする。そして、クスツとわずかに微笑みを零した。

「……因果の交差路で、また会いましたね」

「あん？」

「いいえ、なんでもありません。武運長久を祈ります。でも、きっと貴方は長生きすると
思いますよ」

訝しげに片眉を跳ね上げたフレイムヘイズに、白銀のフレイムヘイズは久しぶりに満ち足りた笑顔を咲かせた。

1—6 因縁

『皆、好きにせよ』

創造神の御言葉が、厳かに、だが宇宙の虚空のように冷めきった声音で告げられた。それを直に聴いた、まだ世界に発生したばかりだった紅世の「徒」の一人、「魔使い」サルマキスは雷に打たれたような衝撃を覚えた。

己の欲するままにせよ。欲しいままに喰らい、欲しいままに使い果たし、欲しいままにまた次を喰らう。押しも押されぬ紅世の神は、それらを公然と認めたのだ。病的に心配性な同胞殺し共がやれ禁忌だなんだと理由をつけて妨害してくる「人喰い」を公然と許したのだ。それを理解した数多の「徒」たちが群れをなして創造神を見上げ、思いの表情で恍惚を示す。

(なんて、素晴らしい御方だ！)

「好きにせよ」。そのたった五文字の一言に、サルマキスは自身の存在意義すら承認される絶大な安心感に満たされた。生まれ落ちたばかりで自己認識が雲のように曖昧だったサルマキスにはまさに天啓だった。今までは、己が何をすればいいのかわからず、人間の世界に行つては無為に人を喰らうばかりだった。目的意識乏しく、欲望も薄

く、活気もなく、同胞殺しフレイムヘイズどもの押し付けてくる理解不能の理屈に怯え、討滅されかけでは這々の体で逃げながら、ただ年月を無駄にむさぼるばかりだった。そんな泥の如く不安定だった足元がしつかりと整地されたような、自分自身の確固とした存在理由を全身で確信した。

（おお、我が神よ！我らの至高なる御神よ！）

未来に明るい希望を見出した彼は、あらためて遙か頭上を仰ぎ、尊大な雄姿を両方の目でしかと見る。巨大で、偉大で、強大な、紅世における最高の神の石柱。迷える「王」や「徒」を正しき道へと導いてくれる、創造を司る神。その山のような威容は、例えるなら鎧を着た漆黒の蛇。蛇。そう、蛇だ。蛇はトカゲによく似ている。トカゲに似た姿をしているサルマキスには、その類似がたまらなく嬉しく、誇らしかった。自分という紅世の「徒」がトカゲの形をしているのは、ひとえに、自分が創造神の眷属としてこの世に生まれいでたからに違いない。地面に這いつくばる彼の口元で細長い舌がチロチロと歓喜に震える。

不意に、創造神の金星の如く発光する眼球がギョロリと蠢いた。果てしなく遠い彼方に向けているような、どこを見てもない、汎ゆるものに一切の関心を示さない一對の視線が、その場に膝を付いて己を畏敬の面持ちで見上げる「王」や「徒」の群れの上を滑るように睥睨する。

「——あつ」

その一対の目が、サルマキスの視線と交差した。それは、客観的に見れば「交差」とも呼べない、数億分の一秒にも満たない交錯だった。相手にしてみれば個としての認識になど遙か遠く及ばない。流し目で視界に映り込んだ風景の一角にしか過ぎない。だが、サルマキスには永遠に感じられる神との繋がりがだった。絶頂しそうなほど馥郁たる心地だった。その瞬間だけ、世界は彼と創造神だけに感じられた。創造神は、他の誰でもなく、眷属であるサルマキスだけに告げるためにここに來てくれたのだと感じられた。その一瞬は、彼の未來を決定的に運命づけるには十分すぎた。

（いつか必ず、貴方の御許へ）

彼はうつとりとして決意した。いつか、あの神の玉座の左に立ってみせる。眷属として、腹心として、無二の配下として。『仮装舞踏会』の連中など蹴落としてやる。創造神のお傍に控える資格があるのは、本来ならこのサルマキスだけなのだから。これは運命なのだ。決定事項なのだ。自分は神に選ばれた、特別な存在なのだから。恍惚に尻尾の先までひたりながら、サルマキスは爬虫類そのものの顔をにんまりと不気味に融け崩した。

「——ぎゃんっ!?!」

その滑稽な悲鳴が誰のものか分かりかねた。自分の口から出たなどと信じられな

かった。うわの空だったサルマキスの肉体に激痛が走り、目の前で火花が散る。ぐぎゅつという鈍い音とともにそれまでの心地よさが無残に吹き飛び、予想だにしない衝撃にサルマキスは飛び上がって驚いた。尻尾だ。誰かが尻尾をひどく踏みつけたのだ。と、クツクツと喉を鳴らす意地の悪そうな忍び笑いが聴こえた。キツと目を見張つて振り返れば、そこにはいかにも底意地の捻くれていそうな子狐がいた。子狐の姿をした紅世の王。

自分より数百年ほど年上なのだろう、体格差はわずかに向こうが上回る程度だ。が、サルマキスは「徒」^{ともがら}であり、子狐は「王」である。その違いは生まれ持った存在の力の絶対量で決まる。成長すれば身体の大きさには象と蟻ほどの差が生じることは明白だ。単純な戦闘力で言えば、現時点ですら遠く及ばない。よほどの手を打たない限り、凡庸な「徒」でしかないサルマキスが太刀打ちできる相手ではなく、なにより敬愛する創造神の手前でこれ以上の無様な敗北を晒すわけにもいかない。サルマキスは内心で憤然としながらも努めて冷静を装った。

「す、崇高なる神の御前で無礼ではないか、見知らぬ「王」よ」

虎の衣を借るような台詞に、子狐は臆する様子を見せない。9本の尾を愉快そうに揺らし、地鳴りのように低い声で天与の反骨心を披露する。

「知ったことかよ。俺の神じゃない」

ザワツと、徒々のあいだに疑念の波が駆け抜けていった。創造神を見上げて悦に浸っていた彼らの陶醉心に冷や水をぶっかけて、子狐の「王」は我関せずといった態度でふんと鼻を鳴らした。誰も彼も創造神の圧倒的なカリスマの前に跪拝する勢いで心酔しかけるなか、この「王」だけは周囲をあざ笑う笑みを浮かべていた。周囲が熱狂すればするほど自らは冷めると言うかのような天の邪鬼な態度は、この幼い「王」が生来から有した魂の在り方に違いなかった。

「他人の許可なんて貰うまでもない。俺は俺の好きにする。俺は何者にも縛られない。自称神の言うことなど知ったことか」

サルマキスにはこの紅世の「王」のセリフの意味がわからなかった。言語は同じなのに、内容を理解することを頭が拒んだ。これほど素晴らしい、全てを肯定してくれる神がいるというのに、何が気に食わないというのか。どうして神を必要としないなどわけのわからないことを言うのか。神の肯定がなくて、どうして充実して生きていけるのか。混乱しながらも、自分自身すらも否定された気分になったサルマキスは憤慨の爆発をあと一步のところまで抑えると、震える声で狐の「王」に噛み付く。

「そ、その小生意気な台詞、「天壤の劫火」——天罰神の御前でも言えるのかな？」

弱気に口元をひくつかせながら紡いだ意趣返しだった。他ならぬ狐の前で虎の威を借りるといふなんとも情けない、それでも弱小のサルマキスにとっては精いっぱい仕

返しだった。だが、勢いに任せて口にしてしまった後で、自分の浅慮を悔やんだ。不用意に相手を挑発するべきではなかった。もしも、この年若い狐の「王」が激情に燃えて牙を剥いたら、今の自分には勝ち目などない。頭からガブリと食われればそこまでだ。(一)、殺されそうになったら、創造神は自分を助けて下さるだろうか？この無垢な信奉者を、自らの眷属を、その偉大な御手を差し出して颯爽と護って下さるだろうか？)

チラと視線を上に向けて大蛇の顔色を伺うも、天を衝く巨大な神はそもそも足元で起きている「徒」と「王」の一幕になどなら関心を示してはいなかった。遠いところを見つめるばかりの達観しきった透明な眼差しが、今はまったくもって頼りない。

自らの命が風前の灯であると感じて冷や汗を隠しきれない彼の眼前に細い鼻先がぐっと迫る。恐怖に息を呑むサルマキスを悠然と見下ろし、子狐の「王」は豊かな白銀の毛並みを堂々と見せ付けて、わははと豪胆に笑った。

「頑固ジジイの前でだど？なおさら、後ろ足で土をぶっかけてやるさ。俺にとつての神は俺自身だ。そして、俺という神は俺の生き方を肯定する。俺の自由を肯定する。ここに誰の許可がいるものかよ」

9本の尻尾を扇のように大きく広げた「王」は飄々とそう言つてのけると、事態全てに興味なさげにゆったりと踵を返す。

「他者に自分の存在証明を委ねるなんざ、くだらない。実にくだらない。そんなもんは

自分で見つけるものだ。目的は自分で自分に付与してやるものだ。趣味の一つでも見つけたらどうだ。……ああ、そうそう。言い忘れるところだった」

危機の方から去ってくれることに安堵しかけたサルマキスの内心を見抜いたかのよ
うに、狐の「王」がゆるりと流れるような動作で首を回し、細めた眼で振り返る。ギク
リと肩を跳ね上げて狼狽するサルマキスに、「王」は口端をニヤと不敵に釣り上げる。
「そうビクビクしなくとも、お前なんか食わないさ。誰もお前なんか食わない。誰もお
前のことなんか見ていない。創造神も、お前のことなんか見ていない。まだまだ、
空っぽだからな」

言つて、ついと再び正面を向くと、彼は悠々とした余裕の足取りでその場を後にして
いった。あの「王」には、サルマキスに対する害意などなかった。それどころか、こ
れっぽっちも意に介していなかった。敵する者とすら、ましてや捕食する相手とすらも
思われていなかった。完全に、ナメられていた。

「な——あ——」

己が相手の眼中にも無い、雑魚扱いされたことを悟ったサルマキスの背筋を冷たい衝
撃が貫き、次に怒りで全身がカツと熱くなった。精神が激昂し、処理能力の限界に陥つ
て、一切の思考を強制的に停止させられた。純白の尻尾を左右に揺らして小さくなつて
いく白銀の後ろ姿を、呆然と見開いた眼球で見つめることしか出来ない。

「ち、違うのです、 “祭礼” 様！これは——」

失望されたくない一心で、サルマキスは醜態について弁明しようと慌てて創造神を仰ぎ見る。しかしながら、崇拜する当の神の意識はすでにここにはなく、こことは違う別の次元の先を静かに見据えて瞑想に似た精神状態に至っていた。『仮装舞踏会』の連中ですら、サルマキスに一瞥をくれることすらしなかつた。このやり取りは、サルマキスの思念が一方通行であることを如実に示していた。周囲から漏れ聞こえるひそひそとした声は、たとえ真実はそうでなかつたとしても、サルマキスには自分の無様をあらかじめさまに見下し、下品に嘲笑っているようにしか思えなかつた。

サルマキスは全身をブルブルと制御しきれない感情に震えさせた。全身の皮膚から余すところなく脂汗が滲んだ。食いしばる口の間から涎が吹き出て止まらなかつた。訳も分からずに喚き立て、誰彼構わず八つ当たりしたくなる欲求を必死に抑制した。胸の内ですす黒い感情が煮えたぎっていた。皮膚が破けて中身が派手に飛び出しそうだった。

衆目の前で辱められたことが悔しかった。侮られたことが無念だった。崇拜する創造神の前で、特別な眷属である自分が無下な扱いをされたことが腹立たしかった。なによりも——自分自身では決して認めないし意識することも避けているが——愛する創造神に認識されていないと凶星を突かれたことが、たまらなく、たまらなく、恥ず

かしかつた。『お前は特別なんかじゃない』と残酷な真実を突きつけられたことが、果てしなく、果てしなく、屈辱的だった。

サルマキスは堅く誓った。「目に物見せてやる」、と。創造神の眷属である自分が、本来いなくてはならない場所に立ち、自分を見下してきたあらゆる愚か者たちを苦しみの底に追い落としてやる。彼の性格は取り返すことなどできないほど捻じ曲がり、その性質は邪悪を極めることとなった。

これが、『贖作師』テイレシアスと『魔使い』サルマキスの、最初にして最悪の出会いだった。

† † †

どこかで大人たちが語り合い、どこかで子供たちがはしやぎ合う。大小あらゆる車両が道路やそれ以外の場所を走り回り、けたたましい騒音を辺りに轟かせる。

……その喧騒に賑わう街の地下深くに、暗黒が立ち込める空間があった。狭いのか広いのか、そもそもその概念が存在するのかすらわからない異界の一室。上下四方すべてを隙間なく石壁で囲まれた完璧な密室は、生物どころか空気をすら侵入することを許さない。——その部屋の主を除いて。

「おのれ、『贗作師』め……!」

耳朶を掻き耨るような不気味な声音が響いた。それと同時に、濃緑色に濁った炎が粘性を帯びた液体のように壁という壁から染み出してくる。それらは必ずすると不定形な身体を引きずりながら中央に集まり、交わり合わさる。全ての炎が融け合った時には、その炎は爬虫類の顔をした紳士を形作っていた。

サルマキスは『不死性』を有する数少ない紅世の『徒』の一人である。『千征令』オルゴンが、彼の兵隊『レギオン』をすべて滅ぼさなければ討滅できないことと同様に、サルマキスもまた彼の飼う『化け物』^{ベクト}をすべて滅ぼさない限り、殺せない。化け物たちは単なる『燐子』^{けらい}ではなく、彼の分身でもあるのだ。彼の一部を埋め込んだ化け物たちの一匹でも取り逃がせば、彼はまた蘇ることが出来る。それは限りなく不死に近い特性である。そのため、『不死性』と呼ばれている。だが、肝心なことに、彼は弱かった。

サルマキスが怒りに任せてステッキを壁に叩きつける。頑健な作りをした両者はどちらも疵一つ入らず、それは彼に無力感を湧き起こさせてさらに苛立たせた。

(私を……)まで虚仮にするとは、あの腐れキツネめ、ルヒトハイムの子め……!)

肥大化しきったプライドを持って余す彼にとつて、捕食対象に過ぎない人間に戦況を覆されたことは不愉快極まりないことであつた。因縁のある『贗作師』に出鼻をくじかれたことが腹だたしくて仕方がなかつた。まさか、あの狐の『王』がフレイムヘイズの

側に立つとは。自由人を気取った無法者のくせに、世界のバランス云々とほざく同胞殺しどもに加担するとは。なんてムチャクチャで、厄介な奴だ。

押し寄せる強烈な憤怒に全身を身震いさせながら、サルマキスは自らの失態を分析しようと思念に努力する。

(あと少しであの宝具を奪い返すことができたというのに！)

“贗作師”のフレイムヘイズは手強かった。大口を叩くだけはあつて、現代のフレイムヘイズにおいて五指に入る……とまでは言わないが、間違ひなく十指には入る手練れだった。正面切つて戦えばまず勝てない相手に対し、自らの不死性を生かして不意を衝くまではよかつた。まさに“肉を切らせて骨を断つ”だと、あの時は自分で自分を褒めた。そうして手に入れかけた勝利を、ただの人間が宝具を使うことで打ち砕いた。よりよつて、サルマキスが血眼になつて捜していた宝具を使つて。

のつぱりとした爬虫類の頭部を憤怒に歪ませ、怒りに震える拳をギリギリと音が鳴るまで握り締める。そうやって自分を抑えなければ、今にも激昂して再びあの人間を襲おうとここから飛び出してしまふさうだった。無論、そこにはあのフレイムヘイズが待ち構えているのは火を見るよりも明らかだ。こんな不完全な状態で戦いを挑むことは得策ではない。サルマキスは“王”ではないため、存在の力の回復力が小さい。“王”なら放つておくだけですぐに回復するだろうが、サルマキスはそうはいかない。

常識外れの攻撃によって傷ついた身体を癒すためには「王」よりも手間をかける必要がある。今は堪える時だ。癒やさなければ。そうやって理屈で自分を抑え、血の昇った頭をじわじわと冷却していく。

（あの宝具さえ、あの宝具さえあれば、討滅の道具も、いかなる紅世の「王」も「徒」も怖れるに足らない）

冷えてきた頭で、念願の宝具を手に入れた自分の姿を夢想する。どんなに強大なフレイムヘイズが挑んできても一撃を放つ時間すら与えずに屠る力を有し、この世界でこそと隠れることなく自由に振舞える自分。特別な力を有した、特別な存在。それはまさに「祭礼の眷属」に相応しい。創造神の玉座の左に立つに相応しい。いや、むしろ——新たな神と呼ばれるに相応しい。究極の妄想に行き当たった途端、トカゲ顔がぐにやりと緩んで気味の悪い恍惚の表情に変わる。いつの間にか怒りは消え失せていた。

（幸運なことに、宝具自体はすでに完成していると見える。そこはさすがルヒトハイムと言ったところか）

水色の炎を纏って人間に力を与えていた義足を思い出す。自分があれを最後に見た時はまだ未完成の木塊だったが、ルヒトハイムは存在の力の正体を知らされても一応は完成させたらしい。それが技術者としての意地によるものか、存在の力を吸われた人間へのせめてものケジメだったのかは、人間を低俗な消費物としか認識していない彼には

判別できなかった。最大の懸念はルヒトハイムが宝具を完成させないまま死んでいるかもしれないということだったが、その心配はしなくてよさそうだ。

(もう一つの懸念は、フレイムヘイズがああ宝具の真の能力に気付くか否かだが……)

ステツキの琥珀に淡い濃緑の光が灯り、宝具の反応を探る。数秒と経たずにそれは強い水色の輝きを放ち始める。その光は、サルマキスの目当ての宝具が未だに健在で、まだ近くにあることを示していた。大切な宝具を持ち逃げされないように仕掛けていた発信機のような自在法は、それを看破したルヒトハイムの手によつて不完全な状態にされてしまった。おかげで、数十キロも離れてしまえば跡を追えなくなつてしまい、苦労することになった。だが、これほど近くまで接近すれば、微弱ながら痕跡を辿ることが出来る。

水色の輝きを見てサルマキスはにんまりと破顔する。あの宝具の本当の能力を知れば、フレイムヘイズは間違ひなく破壊するか遠くへ持ち去つただろう。そうされていなということは、まだ気付いていないということだ。フレイムヘイズの愚鈍さは相変わらずだ、とサルマキスはくつくつと嘲笑した。あの宝具の力は、単に持ち主の時間を改変することではない。それは人間の微量な存在の力に反応して宝具がその能力のほんの一部を起動させただけのものに過ぎない。そして、そのことを知るのはこの世で自分だけだ。

身体の内側から言いよのない優越感が湧き出してくる。この世にあまねく全てを支配していると錯覚する優越感だ。否、それはもうすぐ現実になる。今頃、あの「贗作師」のフレイムヘイズは安心して油断しきっているだろう。「ダメージを与えたのだからしばらく襲つてこないだろう」などと言つて。そうだ。油断している。その油断を衝けば、あの愚かな紅世の王と道具はどんなに驚愕し、ショックを受けるだろう？憎つきアイツらに吠え面をかかせてやれるのなら、多少の無茶も許容される。私なら出来る。祭礼の眷属である私なら簡単にやつてのけられる。未来の神である私なら絶対にやつてのけられる。

（そうだ、何も問題はない。多少の計画の変更はあつて然るべきだ。全て、全て順調に進んでいる。それこそ運命のように）

くくつとサルマキスの喉から常人には耳心地の悪そうな笑みが溢れた。自分を納得させる作業を終えてすつかり気が晴れたサルマキスが、両手で顔を覆い、粘土細工を弄るように揉む。奇妙な作業が終わると、そこには壮齡の紳士が優雅な微笑みを貼り付けていた。濃緑色の瞳はやがて訪れる栄光の未来に輝いている。彼は小躍りするようにして部屋の隅の革椅子にたどり着くと深く腰掛け、存在の力の回復に専念する。一日ほどしてある程度回復したら、どこかで人間を適当に喰らつて、フレイムヘイズを襲撃する準備をしよう。

(そうだな、手始めは病院がいいだろう。古い先短い人間どもの物置とはいえ、存在の力はまあまあ蓄えられている。素早く襲つて喰らつて撤退すれば問題はない。ついでにトーチも設置すれば一石二鳥だ)

餌場の当てをつけて、サルマキスは目を瞑つた。そう、トーチの設置もしなければならぬ。つまらない問題を片付けることと並行して、莫大な存在の力を蓄える段階にも入らなければならない。あの燃費の悪い宝具の力を最大限に引き出すには、とんでもない量の存在の力が必要になる。“徒”でしかないサルマキスが溜めておける程度の存在の力では到底足りない。かといって手当り次第に人喰いしていると鼻の利くフレイムヘイズどもに察知されてしまうし、そんな地道な作業に徹することのできる忍耐力は養っていない。だが、この問題を一挙に解決する方法がある。数年前、東の果ての島国で一人の強大な紅世の“王”が企てた大規模な自在法。かつて、膨大な存在の力を我が物にせんと“棺の織手”によって開発されたこの自在法は、宝具コレクターによって完成の寸前まで迫りつつも、“天壤の劫火”のフレイムヘイズに阻止されてしまったという。だが、原理さえわかれば模倣は可能だ。この方法でなら、準備さえ怠らなければ簡単に大量の存在の力を手に入れることができる。分身を生み出せる特性を持った彼にならそれが出来る。

(よもや、(一)から遠く離れた最果ての地で実現しかけた自在法のことを“贗作師”の

フレイムヘイズが熟知しているというわけもあるまい)

そんな偶然は万に一つもあるまい。奇跡のようなものだ。奴らは、最後の最後まで、こちらがどれほどの智謀を巡らせていたのかを想像することも出来ないだろう。勝利を確信し、さらにその先まで思い浮かべたサルマキスは喉を鳴らすようにしてくつくと笑う。彼の頭の中では、すでに自分の顔に泥を塗ったフレイムヘイズと人間を思う存分に痛めつけて惨殺する算段が作られ始めていた。華奢な身体を上から下まで己の鮮血に染め、甲高い悲鳴を上げる哀れな白銀のフレイムヘイズと、慈悲を乞う人間の子ども。彼らを腹の底から笑いながら容赦なく踏みつけて、絶望の果てにその命を刈り取ってやるのだ。

ああ、そうだ。もしも、あのフレイムヘイズの少女と人間の少年が互いに恋心を抱いているのなら、少年の目の前でフレイムヘイズを徹底的に犯して、犯して、犯し抜いて、恥辱の限りを尽くして、苦しみの末に少年を人質にして自害を迫ってやろう。自分で自分の腹を搔つ捌いて、自分の手で心臓を引きずり出させよう。己のために命を投げ出した想い人を見つめて絶叫する少年を、頭からガブリと踊り食いしてやるのだ。なんと、まるで壮大な戯曲のような展開じゃないか。我ながら、なんて素敵なアイデアなのだろう。

その様子を想像して、サルマキスの下半身がびくりと震えた。

極まる満悦に絶頂を覚えたのだった。

1—7 学校

周囲から刺さる好奇の視線。耐え切れないほどの居心地の悪さを感じて、俺は身体が萎むような深いため息を漏らして頭を抱えた。クラスで孤立することはどうの昔に受け入れていた。だが、こういう肌をざわつかせる空気には慣れていない。この浮ついた空気の原因は、俺が何かやらかしたからじゃない。俺の隣の席にちよこんと座っている、マスコットみたいに可愛い美少女のせいだ。俺は頭を抱えたまま、目線だけでチラチラの方を見やる。

「ん？フリッツ君、どうかした？」

さすが異能の戦士というべきか、自分に向けられた視線に間髪入れず気づいたサユが俺を見返してきよとんと小首を傾げる。動きに合わせて艶やかな長髪がふわりと舞い、窓から差し込む光に煌めく。たったそれだけの仕草なのに、まるで日溜まりに咲くヒマワリをパシヤリと切り取ったスナップ写真のように時間が止まった錯覚を覚える。心臓を握り潰されそうな愛おしさをひしひしと感じ、それを顔に出さないように全身全霊の精神力で抑えつける。声を潜めると、周りにわからないように日本語で問う。

「なんで君がここにいるんだ？」

「もちろん、フリッツ君を護るためだよ」

こちらの意図を察して、サユも同じく日本語で即答する。

「できれば、少し離れたところから守ってくれていてほしかった」

眉をひそめる俺の反論に、サユは「たしかにそうだね」と苦笑して一度頷く。頷いて、「だけど」と否定した。

「君がより良い未来を選択するための手伝いが出るかもしれないと思ったんだ」

「それは、つまり……？」

俺の心に希望の光が差す。じゃあ、義足を渡さなくてもいい……？

俺の淡い期待を見抜いたサユが申し訳なさそうに苦笑いを浮かべてゆっくりと首を振る。

「それは君次第だよ。ボクはただ、君の選択肢を増やしたいだけ」

がつくりと落胆に肩を落として「わかった」と口先を窄める。そんな都合のいい展開になるはずはないか。

これはサユなりに俺のことを考えた上での行動なんだろう。突然降り掛かってきた不幸に一方的に振り回されるのは気の毒だから、少しでも俺の意思を尊重させてやろうということだ。ずいぶんお人よしの娘だ。フレイムヘイズって奴らはみんなこうなんだろうか？それとも、サユが特殊なだけなのか。きっと後者に違いない。

「それで、気になってることがあるんだけどさ。その席は、俺の記憶によれば別の人間のものだったはずなんだが、そいつはどこへ行っちゃったんだ？」

サユの座る席を指差し、少しおどけた感じで質す。その席には、昨日まで印象の薄い幽霊みたいな女がいたはずだった。日系か、日本とのハーフだった。名前は……たしかユカコとかいったか？

あいつの代わりにサユが居座っていても、他の奴らはまるで「最初からそんな奴いなかった」とでも言うように平然としている。元々存在感も希薄だったし、フレイムヘイズの使う「自在法」とやらを使えば立ち位置を少しの間だけ入れ替わるくらい朝飯前なんだろう。なんたって街一つ簡単にぶっ飛ばすような力を持っているんだから。

顔を真っ赤にして大砲を振り回していたサユの姿が脳裏に浮かんで苦笑しかけ、

「……サユ？」

サユから返事が返ってこなかった。怪訝に思つて窺い見れば、サユは苦しげに眉根を寄せて俯いていた。その表情で、俺が何かひどい思い違いをしていたこと、先の質問がサユをひどく傷つけたことを悟った。深い悲しみに沈む横顔に心臓が震える。理由はわからない。だが、俺がこんな顔にさせたのだということは直感でわかった。サユが悲しそうな顔を見ると、何故か俺の心もヒリヒリと痛んだ。

「……………」

「な、なんで君が謝るんだよ？別に誰かが犠牲になったってわけでも——」

『代替物。紅世の“徒”に存在を喰われ、世界に与える影響を少なくするためにその場に残された食ベカス。やがて存在が薄れていき、誰からも覚えてもらえないまま、この世界から跡形もなく消えてしまう』

昨晚にサユが説明してくれた一節が脳裏にフラッシュバックして、ユカコの身になにが起きたか理解した俺は息を呑んで絶句した。存在感が日に日に薄れて、周りからいない者のように扱われていたのは……彼女がすでに殺されていたからだっただ。昨日まで俺の隣にいた彼女は、実はもういなかった。この世から——おそらく俺とサユの記憶以外から——完全に、消え失せたのだ。

知らなかったとは言え、自分のすぐ隣の人間がすでに人間ではなくなっていたという事実が背筋がゾツと冷えた。

「……あ、あいつもサルマキスにやられたのか？」

サユが「間違いなく」と小さく頷く。俺が気がついていないだけで、実は振り下ろされた鉈が鼻先を掠めていたのだ。目の鼻の先であの化け物が暗躍していたことに愕然とする。

「ま、まさか、クラスの他の奴らも……!？」

「それは、大丈夫。ここにいた人だけが、あいつに喰われたんだ。ただ腹が減っていたという理由だけで。ただそこにいたという理由だけで。ボクは、彼女の残像を利用させて貰って、ここにいるんだ」

慌ててクラスを見渡そうとした俺に、サユが相変わらず悲しみに沈んだ声で応える。か細い声だった。握りしめた拳から血の気がひいている。子どものように華奢な肩が、怒りと悲しみに震えている。その感情の源は、きつとサルマクスへの怒りだけじゃないだろう。間に合わなかった、護れなかった自分を責めているのだと思つた。顔も知らない、会つたこともない人間のためにそこまで感情を乱すだろうか。もしかしたら、過去に俺と同じように自分に近しい人間を喰われたことがあつたのかもしれない。

「き、君のせいじゃない。悪いのはサルマクスだ」

人を慰めることは得意ではなかったからうまく慰めることができたか不安だった。それでも、慰めなくちやいけないと思つた。それができるのは、唯一事情を知っている俺だけだと思うから。

サユが弱々しく顔を上げる。

「……ありがとう。君は優しいね」

小さくもたくましい夏の花が風にそよいだような、柔らかく強い微笑みだった。

こんな女の子が、そのか細い双肩に大勢の命を背負い込み、自身を削って人知れず

戦っている。助けた人々に感謝されることもなく、英雄として褒め讃えられることもないのに——。

そのいじらしい生き様に、急に胸が切なさで締め付けられた。同時に、自分が世界一の不幸者であるとボヤキながら安寧を貪り、あまつさえ都合のいい「新しい世界」を夢見ていた青臭い自分のことが、無性に恥ずかしくなった。命を懸けて戦っている本物の戦士を前に、自分はなんて幼稚だったのだろう。

胸中を埋め尽くす切なさとし訳なさに突き動かされ、サユを元気づける言葉をかけようと口を開く。が、肝心の言葉が出てくれない。上っ面だけの慰めの言葉が喉の奥で凝固して出ていかない。こんなものは彼女に差し出すに値しない。いったい何と云えばいいのだろうか？ 護ってもらえない非力な俺に何が言えるのだろうか？ 彼女を元気づけられる材料の根拠の一つも持たなくせに。そもそも、彼女に負担を強いているのは俺自身なのに。

「お、俺は——」

中途半端に口を開けたまま悩んでいると、唐突に教室の扉が開いた。このクラスの生徒を管理する教師だ。ドイツの進学校ギムナジウムにも日本と同じようにクラス担任の教師がいる。日本のように「精神的な指導」は兼ねず、あくまで「効率的な管理」のための担任という感じだ。

いかつい顔をした妙齡の白人男性教師の登場に、今まで俺たちを遠巻きに眺めて声を交わしていた生徒たちが弾かれたように一斉に自分の席を目指す。この担任は、感情的に声を荒げることはないが苦言をネチネチと話し出すと止まらなくなるから、生徒から苦手に思われているのだ。

「なあ、この話は今はやめにしないか？ たぶん、サユにとつて学校つて久しぶりだろ？ せっかくなんだし、楽しめよ。それに……授業に付いていくことに集中しないと、さすがに周りから怪しまれるだろうし」

なんとか話題をすり替えようとする。これ以上、サユの悲しむ顔は見たくなかったから。自分の情けなさを直視したくなかったから。それに後半の台詞は本気の心配だった。本人に言ったら怒るだろうが、サユの見た目の年齢は中学生すら怪しい。フレイムヘイズは不老だと昨晚教わったが、その初々しい言動を見るにサユの年齢は見た目とそれほど変わらないように思えた。俺と同じくらいだろう。

自慢じゃないが、この学校のレベルはドイツ全域で見てもそれなりに高い。留学生ウエルカムクラスを経て転入した俺は、日本の同年代が受けるよりもずっと高い教育難度に肝を潰されたものだ。高校卒業・大学受験資格試験アの難易度も高く、勉強だけでなく部活クラブに打ち込む俺のような人間の方が珍しい（アビトゥーアの試験は5教科に芸術・スポーツ科目をプラスしてもいい。俺はスポーツ科目を成績の足しにすることを狙っている）。正直

言つて、サユが授業のレベルについていけるのか不安だった。一瞬、ホワイトボードに記された難解な板書を目を真ん丸くしてぼかんと見つめているサユの様子を思い浮かべて吹き出しそうになる。

そんな俺の心配をよそに、サユが困つたような複雑な表情をして頬をぼりぼりと掻く。

「えつと、心配してくれるのは嬉しいんだけど……」

言いながら、手元の数学のノートをパラパラと開いて見せてくる。そこにはびつしりと計算式と解答が書き込まれていた。高次関数の作図と分析……見たところ、今日勉強するはずの範囲の予習のようだった。

「あー……まさかこれ、君が全部解いたの？」

困つたように苦笑してこくりと頷くサユ。少しだけだが、元気が戻つたようだ。中学生の才女が飛び級で高校に入学するとかいう話は聞いたことがあるけど、サユもそういう天才少女なのか。呆然としている俺に、サユからとどめの一言が放たれる。

「ボク、これでももうすぐ成人なんだよ？」

俺の中の何が、音を立てて派手に砕け散つた。



「ユカコさん、その服はどうしたの？なぜ給仕服を……？」

「仕様なんです！気になさらないで下さい！」

「そうそう、ユカコちゃんのファッションなんですよ！制服なんてギムナジウムにはないんだし、いいじゃないですか！」

「教室に花は必要ですよ！」

「カワイイは正義！」

昼過ぎ、最後の授業を担当する歴史宗教学の女性教師——ドイツの進学校ギムナジウムは昼過ぎで終わることもある——の質問に、サユが薄い胸を張って「仕様だ」と力強く応える。頬をほんのりと紅くして、半ば自棄になっているような気もしないでもなかったが、言わないでおいた。

堂々と言い切られた上にクラスメイトからの支援もあれば、それ以上追求する気にもならないのか、教師はしばし口元をモゴモゴさせたあと、無理やり自分を納得させて授業に戻る。一時限目からこのやり取りが続いたので、最初は必死に笑いを堪えていた周りの生徒たちもすっぴかり慣れて、今ではどいつもこいつも積極的にフオローまでするようになった。

フオローをした後にこっそりと振り返ってウインクをしてくる奴らに、サユはぺこぺ

こと忙しく頭を下げて礼をする。その子犬のような微笑ましい仕草に頬が緩みそうになるのを顔面の筋肉を引きつらせて堪える。クラスメイトが保護欲を掻き立てられるのも無理はない。そんな子犬が、実は誰よりも年上の成人なのだと知ったら、みんなな反応をするだろう。驚く一同を想像して微かに笑みを浮かべ、その真実を知っているのが自分だけということに優越感を感じてさらに唇の端がピクピクと震える。

(……ん?)

ふと、ついさつきサユにウインクを飛ばした男と目が合った。今までほとんど接したことがない奴だ(クラスメイト全員が同じようなものだが)。どうせすぐに目を逸らすだろうと思っていると、不意にそいつの片目がパチリと開け閉めされた。監視カメラのように首を振る教師の視線がそいつに向きかけたので、慌てて前に向き直る。それが俺が込められているのかまではわからなかったが、少なくとも悪意はなかったように見えた。

(……おい、まさか、うまくやれよとかいう変なお節介じやないだろうな)

「ねえ、フリッツ君。ここなんだけど……」

「え? ああ、それはな」

サユがテキストのドイツ語の一文を指して質問してくる。先ほど聞いた話によると、

サユは過去に誰かと一緒にドイツに滞在していた経験があるらしい。道理で会話が出来るはずだ。しかし、読み書きに關しては苦手だということ、難解な言い回しなどのサユが独学でわからない箇所については滞在歴の長い俺が教えてやっている。サユは頭の回転も飲み込みも早いので教える側としては楽でいい。楽でいいのだが……。

(どうして、どいつもこいつもニヤニヤしながらこつちを見てくるんだ)

うんざりしながら視線の送り主たちにじろりと一瞥を向けると、数人の男女が慌てた様子で顔を正面に戻す。俺がサユの手伝いをする度に周囲からからかうようなくすぐったい視線が爪のように背中をカリカリと擦るのだ。このやり取りもすでに何度となく繰り返し返されていたから、最初は目を白黒させて戸惑うばかりだった俺もだいたい慣れてきた。クラスメイトたちも、単なる物珍しい物への様子見から冷やかしかしへと目的をシフトさせているように見える。周囲からはいたいたいな妹分の女の子を甲斐甲斐しく世話してやっている兄貴分のようにでも見えるのだろうか。

(実際は、俺のほうが世話になってるんだけどな)

この可憐な少女が、実は悪の化け物から俺の身を護っている戦士だと思ひ至る奴は絶対にはいないだろう。少なくとも俺なら、現在進行形でノートの片隅にメロンパンの落書をつらつらと描いている女の子がボディガードだと言われても絶対に信じない。

自分の落書きをトロンとした目で見つめて口端に涎まで浮かべるサユに、俺は小声で

問う。

「……もしかして、メロンパンが好きなのか？」

落書きを描き始めた辺りから無意識だったらしいサユがビクリと肩を震わせて慌てて口元を拭う。一瞬、本当に昨日サルマキスと死闘を繰り広げたフレームヘイズと同一人物なのか疑ってしまったのは内緒だ。

「う、うん。元々はそこまで好きじゃなかったんだけど、でも無性に食べたくなるというか、もはや身体が勝手に求めるといふか……。とにかく、不本意ながらもボクにとつては欠かせないエネルギー源なんだよ」

何やら怪しい麻薬のようにも聞こえる支離滅裂な説明だが、要するに大好物ということだろう。もしや、フレームヘイズは全員、メロンパンを食べないと戦えないのだろうか。戦うためにメロンパンをエネルギー源とする戦士たち……。いや、それはさすがにないな。そんなメルヘンな戦士はサユだけに違いない。見た目もメルヘンだし。

さて、困った。俺は顎を撫でながら視線を左下に向ける。ドイツに渡って初めて知ったのだが、メロンパンは日本発祥かつ日本限定のもので、ドイツはもちろん海外でもまったく一般的ではなかった。ヨーロッパでは、パンというよりスイーツ的な扱いを受けている。元々、ドイツは日本で一般的な白パンを作るために必要な小麦が育ちにくい気候ということもあり、ライ麦や大麦を使う黒パン——ドイツパンが一般的だ。カロ

リーと糖質が低い代わりに食物繊維が豊富で、総じて健康志向なドイツ人向きのパンなわけだが、これがまあとにかく硬いのだ。『噛めば噛むほど奥深い味が染み出してくる。噛みごたえがあつて実に味わい深い』とはドイツパンが好物だったドイツ人の父さんの言である。俺自身は辛党ということもあつて、日本に住んでいる時も菓子パンに大して興味がなかつたので気にしていなかつた。でも、母さんは日本の甘くて白くて柔らかいパンを懐かしがっていた。

「……サユ、ハンカチ貸そうか」

「んあつ、ら、らいじょうぶらいじょうぶ」

とはいえ、隣のサユのように、絵に描いた餅ならぬ絵に描いたメロンパンに目を釘付けにされて意識を奪われるまでは無かつた。『身体が引つ張られる』という説明そのままに、強制的にメロンパンに惹きつけられているようだ。呪いでも受けているのか。そう考えると、メロンパンの摂取というのは、俺が考える以上にサユにとって非常に重要な問題なのかもしれない。

(あ、そういえば)

ボディガードが深刻なエネルギー切れを起こしているのは被保護対象の俺にとって非常に不安なので、薄い記憶を探って目的のパン屋の場所を思い出す。たしか、隣町だったはずだ。

「なあ、メロンパンを置いてる店が隣町にあるんだけど——おおっ!」

ガタン、とけたたましい音を立てて吹き飛んだ椅子に教室中の視線が集まる。ガツシ
リと鷲の爪の如き諸手に両肩を掴まれ、俺は一切の身動きが封じられた。突然のことに
目を白黒させる俺に、肉食獣のように表情を豹変させたサユがにっこりと圧力を伴う満
面の笑みを浮かべて告げる。

「フリッツ君、ちよつとデートをしない?」

マジかよ。

1—8 成長

さあ行こう今行こうすぐ行こうとまん丸の目を爛々と輝かせながら服の裾を引つ張るサユをなだめつつ、俺はクラブに充てがわれた部室へと歩を進める。サユにとつてメロンパンとは理性を失わせるほどに魅力的なものらしい。小さなお尻の後ろに、パタパタと左右に揺れる犬の尻尾が見えてきそうだ。

「すまんな、小僧。普段はそれなりにしつかり者なんだが」

すつかり落ち着きをなくした自らのフレイムヘイズに代わつて礼を言う保護者の呆れ半分諦め半分の声に「いいってことさ」と微笑を返す。このペンダント——
 Flame Welt 紅世という世界の王様らしい——も、彼なりの苦労があるのかもしれない（便宜的に「王」と呼ばれているだけで権力者というわけではないらしい）。

「まさか嗜好までオリジナルに引つ張られるとは。忠実に贖作し過ぎたらしい。凝り性なのも考え物だ」

内容のわからないボヤきにとりあえず相づちだけ打つておく。サルマキスと同種の生き物だと聞かされて、正直、このペンダントの中身にも苦手意識を持っていた。けれど、サユへの接し方がまるで愛娘へのそれに似ている様子を見て、その人間味のある態

度に段々と親しみが湧いてきた。サルマキスと同種ではあるものの、同類ではないようだ。

サッカー部の隣に設けられた部室——サッカー部の部室は陸上部の3倍デカイ。ドイツ人のサッカー好きは異常だ——の扉の前に立ち、肩越しにサユを振り返る。

「サユ、ちよつと外で待つててくれ。欠席届けを提出するだけだからすぐに済む」

「大丈夫？メロンパンは売り切れない？」

「大丈夫だから！間に合うから！」

幸いなことに、今日は4限目以降の授業はない。14時30分で授業が終わると、クラブ活動に参加していない普通の生徒はそのまま帰宅できる。俺も部活を休めば、日が暮れるまでに隣町まで足を伸ばす時間はなんとか確保できる。日暮れといつても、北半球に位置するドイツは日本のように夕方6時近くまで太陽がのんびりとしてくれない。冬になればなるほど極端に日照時間が短くなり、日の入りが夕方4時過ぎの日も珍しくなくなる。そして基本的に無駄を嫌うドイツ人は時間にシビアで、日が暮ればさっさと家に帰る。というわけで、この時期は店も夕方4時から5時で閉まったりするから、昼過ぎに学校を出発しても、徒歩で隣町に着く頃には閉店間近になっているというわけだ。こつちに引越して最初の頃は俺も母さんもよく戸惑っていたことを思い出す。

元氣を持て余す犬に「待て」をするようにサユを制し、部室の扉をノックする。朝の

気まずい会話を思い出して入室に一瞬躊躇うが、「なるべく早くね！」と背後で急かす声に逡巡を掻き消され、忍び笑いを我慢しつつドアノブを回した。

「ああ、お前か。もう調子は戻ったのか？」

「あ、ああ。そのことなんだが、今日はまだ調子が戻りそうにないんだ。だから休むよ」互いに気まずさを感じていることを自覚しながら口を開く。その日の出来事をネタに会話に花を咲かせるような同好がない俺は、部室の鍵を預かる部長の次に早くクラブに参加するのが常だった。今日も授業が終わると即行で（サユに押されながら）クラブを出たため、部室には机で事務処理をしているらしい部長と、例の小柄なマネージャーしかいなかった。衆目が少ない幸運を噛み締めつつ、二人に欠席届けを提出したい旨を告げる。ドイツでの放課後のクラブ活動は強制ではなく、どちらかといえば趣味に没頭したり、成績に余裕があったりする一部の人間が自由意志で参加するものとされている。だから、欠席届けを提出するハードルは日本に比べて圧倒的に低い。

低いのだが、それが俺となると反応は別だ。

「や、休む？お前が!？」

これまで、走ることを生き甲斐にして一度も休んだことのなかった俺が自分から欠席を告げたことに、部長とマネージャーは目を見開いて驚いていた。それも当然だと思ふ。今まで、雨が降ろうと雪が降ろうと他の部員が軒並み休もうと、俺だけは自主練習

を欠かさなかった。そんな俺があつさりと「休む」と口にしたのだ。他ならぬ俺自身ですら驚いているのだから、この二人がポカンと口を開けて固まっているのも不思議じゃない。

「そこまで調子が悪いのか？——ああ、なるほど」

「フリッツさん、いったい——あ……!!」

そんな二人も、背後の扉の隙間から「まだ？まだ？」とこちらの様子を覗くサユの姿を目にした途端に、合点がいったと言わんばかりに眉を跳ね上げた。部長はアングロサクソンそのものの彫りの深い眉を片方だけ意味ありげにくいつと持ち上げる。マネージャーに至っては、その大人しそうな容姿に似合わないキャベツ^ザの塩漬^クけを食^ラべたような渋顔で扉に厳しい目を向けた。

「な、何か言いたいことでもあるのかよ」

「いやなに、お前は他人に興味のない奴だとばかり思っていたんだが、なかなか隅に置けないじゃないか」

「だから朝から変な調子だったのか」とやけにさっぱりした顔を破顔させ、部長はテキパキと欠席届を引き出しから取り出して必要な欄に記入をしていく。後は本人のサインと欠席理由を入れるだけのサービス満点の状態にしてこちらに寄越すと、「だがな？」と不意に怪訝そうな目付きになってずい顔近づけてくる。

「なんというか、あの娘はちよつと、その、小さすぎるんじゃないか？ お前の趣味嗜好に文句をつけるつもりはないんだが、体格差的に兄妹にしか見えな——」

「違う！ 深読みするな！」

乱暴に届出書にサインをして欠席理由欄に「私用だよなんか文句あるか」と書き殴るとバシンと机に叩きつける。たしかに、サユが幼い見た目通りの年齢に見える傍からすれば、俺が彼女に惹きつけられている様子は奇妙に映るに違いない。

(サユの実年齢をみんなに伝えることができれば誤解も解けるのに)

内心に嘆息する。それはできない相談だった。サユのようなフレイムヘイズの存在、歩いていけない隣の世界の存在、それらを一般人に伝えてはならないと昨晩にサユから厳命されていた。そんなことをすれば無用な混乱を引き起こしてしまう。それに、荒唐無稽過ぎて信じてもらえないはずがない。

(そもそも、サユの年齢をどう定義すればいいんだ?)

俺は、サユが何歳のときにテイレスiasと契約してフレイムヘイズとなったのかを聞いていない。男友だちのような気兼ねのない話しやすさからして、年齢はある程度近いのだろうという推測しか出来ない。

そんな彼女の本当の年齢は、果たして何歳なのだろう？ いや、何歳の時の年齢がサユ

にとつての年齢なのだろう。契約して成長が止まったときの年齢なのか、それとも実年齢なのか。フレイムヘイズはどちらを自身の年齢だと自認しているのか。

(女性に歳を尋ねるのは失礼って話だし……)

気にはなつたけれど、母さんから口酸っぱく聞かされた言葉が俺の欲求を寸前で制したことで、際どい質問は躊躇われた。もしかしたら、成長が止まっていることはサユにとつてデリケートな問題なのかもしれないと思つた。彼女は異能の戦士フレイムヘイズといふはとも人間らしい感覚の持ち主だから、人間をやめてしまった事実を突き付けられるのは嫌がるかもしれない。

(もつとクラスメイトや部活の仲間と会話をすればよかつたのか?)

今になって思う。俺は、他人とのやり取りを煩わしいものと切り捨てていた。でも実際は、他人と深く接した経験の少なさ故に、他者の懐にどこまで踏み込んでいいのかというさじ加減がわからないだけだった。ただの臆病者だった。だから、欲求のままに勇み足でサユのプライバシーに突っ込んで嫌われてしまうことを恐れた。一丁前に斜に構えて周囲から一步引いていたツケがこんな風に回ってくるなんて、思いもしなかつた。取り逃してはいけないものを取り逃していたことに気付いたような、モヤモヤとした後悔が募る。

「……おい、なんだよ、その顔は」

「いいや、別に?」

目の前の部長たちから珍しいものを見る目で眺められていることを察して、自分の表情が羞恥で赤くなったり気落ちして曇ったりとコロコロ変化していることを自覚した。自分の顔面の筋肉がこんなに機敏に動くなんて初めて知った。

だが、見た目の事実として、彼女の背丈はあまりに小さい。180を越える俺と並んだらそれこそまさに妹にしか見えない。それでも、本人によると中身は成人間近らしい。その年齢不相応な落ち着いた人となりを知らなければ、日本のフィクションマンガみたいな出鱈目事にしか捉えられない。

(どうして、そんなデタラメな女の子に、こんなに惹かれるんだろうか)

外見と内面のギャップによるものか、サユには不思議な魅力があった。子どもなのに子どもっぽくなく、少女なのに少女っぽくない。一方で、肩肘張った大人っぽさもなく、いちいち共感を求める女っぽさもない。ほんの少しだけ年上の少年と接しているような肌なじみの良さを感じる。この柔らかな人格は、フレイルムヘイズになったことで培った、特殊で豊富で複雑な人生経験の厚みによって揮発したものなのか。

サユに対して「嫌われたくない」という感情が浮かぶのは当然だと思う。サユから愛想を尽かされることは即ち「死」を意味するからだ。けれど、俺のなかに芽生えているサユへの感情は、強者への媚びとは違う気がした。

(じゃあ、この感情の正体は、なんだ?)

心中の己に自問して、心中の俺が自答を拒んだ。直視することを未熟な本能が拒否した。

「フリッツよ、お前の百面相は見ていても飽きないが、そろそろ行かないといけないんじゃないか?」

「う、うるせえな」

普段なら下級生からの不遜な態度に怒りを露にするはずの部長は、なぜかいまだにニヤニヤと破顔したまま。それがこちらの心境を見透かしているように見えて無性に腹が立ち、またその何倍も恥ずかしかった。ムズムズとした痒い感覚が脚の皮膚の一枚下を走り狂い、じつとしていられなくなる。

「じゃ、じゃあな、ビュローロー部長!」

「ああ、すっかりエスコートしてやれよ」

「うるせえうるせえうるせえ!」

上擦った声で吠ええると、紅潮した顔を悟られないようにさつと翻してさつさと退室する。他人に対してこんなな感情をむき出しにしたのは久しぶりだった。怒りを抱いているのに、不思議と不快なものには感じない。むしろ他者と本心で触れ合ったことに心地よさすら覚えている。

馴れない心の揺れに戸惑いながら、さっさとサユを連れて校舎を出ようとして、

「メイド服の君、さてはサッカー部のマネージャー希望だろ？うちは人気だからな！」

「おい、サッカー部はもうマネージャーがたくさんいるだろ！陸上部に譲れよ！」

「そつちにはエリザちゃんがいるだろ！」

「どちらも違います。マネージャー希望じゃありません。ちよつと人を待つてるだけなので、落ち着いてください」

「じゃあなんでメイド服を？」

「仕様です」

「仕様」

「君、中学⁸2年生でしょ？誰だよこんな可愛い妹さんを待たせてる不届き者は！」

「ボクは高校¹⁰生です。一応」

「……ちゃんと食べてる？偏食しちや駄目だよ？」

「ぜ、善処します」

「ちつちやくて可愛いわね。ねえ、よかつたらこのチョコ食べる？ミルカの新製品！」

「このあと大切な用事があるので、お気持ちだけ頂き……やっぱりチョコ頂きます！」

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます！——んんん！濃厚くく!!」

人集りの中心で揉みくちやにされるサユを見て、ズルリと盛大にずっこけた。正面にあつたロツカーにド派手な体当たりをかまし、そのまま脱力してズルズルと床に突っ伏す。細めた横目で見やれば、サユが恵んでもらったミルクチョコを口いっぱい頬張っていた。その場の全員の顔が、まるで我が子の微笑ましい様を見守る慈父慈母のようにニヤけている。

ああ、彼女が目立つということをしつかり忘れていた。どこかに隠れていてもらうべきだった。

「あ、フリッツ君。やっと出てきた。待ちくたびれたよ」

地に伏して頭を抱える俺に気付いたサユが、「ドイツではチョコといえばミルクチョコって本当なんだね」と唇にチョコをつけたままトコトコと駆け寄ってくる。まるで主人の帰宅に気付いた飼い犬が喜び勇んで草原を駆けて来るかのようだ。そのいじらしく健気な仕草に身悶えしたくなるような愛おしさを覚え、心拍のリズムが一段高くなつた。

サユは思春期にかけて少女が身につけるはずの用心深さをまったく欠いて、なんだか危なっかしく見える。たしかに親しみやすいけど、女の子にしては親しみやす過ぎて、性自認の乏しさすら感じる。こんなに可愛いのに、他者との心の壁が無警戒に低すぎるのだ。フレームヘイズとはみんなこういうものなのだろうか。

(どつちがボディーガードなんだか)

そういったアンバランスな魅力故に、サユと接する人間の頭には「この天使のように純粋な存在を護つてあげなくては」と、切なさに似た義務感が湧き上がるのだ。俺のほう彼女に護ってもらっているという事実を思わず忘れそうになるほどに。

「……君が待ち合わせてるのって、フリッツだったのか」

サユに追従して屈強なスポーツマンやマネージャーたちがスクラムを組んで歩み寄ってくる。母性本能やら父性本能やらを刺激されたのか。ぞろぞろと肉の壁が大挙して迫ってくるのを見て、高鳴っていた心拍は急激に冷めた。

「な、なんだよ」

さつと身体のパネを使つて立ち上がり、常の仏頂面で奴らと対峙する。何故だろう、背の高さはそれほど変わらないはずなのに、遙か頭上から見下ろされるようなプレッシャーを肌で感じる。通常の3倍のプレッシャーだ。こいつらも、サユの纏う「護つてあげたくなるオーラ」にやられてしまったらしい。情けない奴らめ。だが、一応感謝してやろう。コイツらがいないかったら、衝動に任せて胸のなかに飛び込んでくる飼犬にするようにサユをギュッと抱き締めてしまっていただろうから。

「はい、そうです。フリッツ君とは同じクラスで、とつてもお世話になってます」

「ほお、あのフリッツがお世話をねえ」

邪気のないサユの返答に、砲丸投げを得意とする同学年の男がさも怪しい者を咎める視線を投げかけてくる。四方八方から突き刺さる追求の目にあつと言う間に射止められ、俺はクモの巣に引つかかった虫のように身動きがとれなくなつた。何も悪いことをしていないのに、どうしてこんな居心地の悪さを覚えなないといけないのか。たちの悪い警察官の取り調べを受けたらこんな感じの心象を抱くのかと漠然と思う。無意識に「私ポリツィストがやりました」と口走つて両手を頭の後ろで組みそうだ。

「ところで、フリッツとの『とても大切な用事』つて、なに？」

先ほどとは別の女子生徒がこちらを射貫く視線はそのままに、サユに優しく問いかける。その顔は、まさに「娘に悪い虫がつくのを嫌がる母親」といった感じだ。どいつもこいつも、保護欲求が噴火寸前なのが見て取れた。ちよつとした刺激で爆発しそうなくらいに。急にとつともなく嫌な予感が膨れ上がり、全身から嫌な汗がぶわつと吹き出す。

（頼むから空気を読んでくれ、サユ。無難な回答をしてくれ！）

懸命な願いを込めた俺の眼力をさらりと受け止め、サユはくすりと大人っぽい余裕を含んで微笑む。よかつた、君ならわかつてくれると信じて、

「ええ、これから二人でデートに行くんです♪」

「じゃあなお前ら!!!」

空気と俺の期待を真つ二つに切り捨てたサユの細腰を片腕で抱きかかえ、俊足を駆使してその場から遁走した。一拍遅れて「待てー!」という怒声と複数の靴音が廊下に響き渡る。待てと言われて待つ奴がいるか!

愛娘についた悪い虫を叩き潰そうと鬼気迫る様子で追走してくる連中から逃げようと、校門に向かつて一直線に突っ走る。女の子の腰に腕を回して持ち上げたまま走るなんて初めてのハンドデだった。そのせいで連中との距離が縮まらない。いくらサユが軽すぎるほど軽いとはいえ、人間一人を抱えながら追いつかれないだけマシなはずだ。こんな時こそ義足の宝具が発動して欲しいのに、まったく反応してくれないのはどういうわけなのか。今、明らかに命の危機だぞ、父さん!

ハアハアと息を上げる俺の腕の中で、出し抜けに、クスクスと愛嬌を感じる忍び笑いが発せられた。見下ろせば、荷物のように俺に抱きかかえられたままのサユがイタズラっぽい微笑を浮かべていた。まさか、さっきの台詞は。

「ごめん、ちよつとイジワルだったかな?でも、あんまり待たせるもんだから、つい」「やれやれ、お前もいい性格になつてきたな、サユ。これでは小僧が、ぶつくく、気の毒ではないかぶはは!いいぞもつとやれ!」

「お前らしい性格してるよまつたく!!」

ワザとだったのか!前言撤回、この娘は天使じゃなくて小悪魔だ!!

「フリッツはやっぱり凄いな」

スタタタタと一切の乱れのないストライド走法の軽快な足音が校門に向かつてフェードアウトしていく。いかに小柄とはいえ、人間を担いでいながら出来るような走りではない。それを横耳で聞きながら、陸上部のクラブ長を務めるリヒャルト・ビュローは、つい先ほど提出されたばかりの欠席届に晴れやかな顔で受認サインを記していた。その笑顔の理由は、調和を乱す問題児とようやく打ち解けるキツカケを掴めたことだけではない。

欠席届を然るべき棚に仕舞うと、先ほどから一向に手が動く気配のない新人マネージャーに苦笑を浮かべて話しかける。

「廊下での一幕、聞いてたか？」

「聞いてました。あの娘、デートだって。フリッツさんとデートだって！」

「違う違う。そつちじゃなくてだな」

よほど「お目当ての先輩」をとられたのが悔しいのか、小さい頃から気弱で自分の影に隠れてばかりだった彼女が珍しく声を荒げている。その変化も好ましいものだと感じながら、リヒャルトはニヤリと満足気に笑う。

「あいつ、初めて俺のことを『ビューロー部長』って呼んだんだ。今まで素っ気なく部長だけだったのにな。俺の前であんなに表情をころころ変えたことも今までなかった。こんなことは初めてだ」

「あつ！た、たしかに……」

「良い傾向に変わってきかと思わないか？あいつは変わろうとしている。あの黒髪の娘が良い影響を与えたのかも知れない」

「ううっ」

容姿は優れているのに昔から病弱だったせいで自分に自信を持ってない、根っからの引っ込み思案な『妹』にハツパをかけるために、少しトーンを落とした深刻そうな声で囁く。気の毒だが、これも発破をかけてやるためだ。

「これは大変な強敵が現れたんじゃないか、エリザ」

「——ツツ、ちよつと用事を思い出したので帰ります！後はリヒャルト兄さんがやっておいってください!!」

「ああ、行け行け。『思Heuteい立istったが吉die日』とも言うし——つて、もういないか。あいつ、実は短距離走の才能があるんじゃないか？」

処理途中の書類もそのままに弾丸と化して部屋を飛び出していった妹、エリーザベト・ビューローの慌てつぷりに口元をにんまりと綻ばせ、リヒャルトは彼女が残して

いった書類にも丁寧に目を通し始める。

正直、リヒャルトは、人付き合いが極端に悪いフリッツの人柄を信用していなかった。ただ走るために走っているような、やさぐれて生意気な下級生だとしか思っていなかった。他者との間の堀を埋めることを頑なに拒絶するフリッツは、エリザの恋慕に気づく様子もなく、彼女をぞんざいに扱った。その愛想のなさがまたビューローの怒りを買って、彼は妹の恋路を応援する気にはなれず、むしろ拒否感を抱いていた。だが、今日のフリッツの変化を見て、その心配も薄れた。

「うちのエースとやつと仲良くなれそうだ」

満足気に独りごちる。なんのことはない。ちゃんと話をすれば、フリッツもまた一人の人間なのだとわかった。義足という他者との違いを必要以上に気にして、他人に対して素直になれないだけなのだ。不器用で、そんな不器用な自分を持って余す、成長途中の少年なのだ。隔絶した世界の人間のようにだったフリッツが、地続きで繋がる同じ世界の人間だとわかって、リヒャルトは嬉しかった。

「さて、どうする、我が妹よ」

そんなフリッツのどこに惹かれたのかは今もってさっぱりわからないが、エリザは彼に首つたけだ。本人曰く、「ギムナジウムの広い校舎で迷ったときに道を教えてくれて一目惚れした」らしい。兄としては他にもっと相応しい男がいるのではと言いたい、

人の恋路を邪魔するのは無料というものだ。ああいう無口でニヒルな異性に恋する年頃なのかもしれない。なにとはともあれ、引つ込み思案だったエリザが自分から挑戦するというのはリヒャルトが知る限り初めてのことなので、温かく見守るつもりだった。黒髪と同級生という恋のライバルが現れたことであの娘がより活発的になれば、兄としては嬉しい限りである。

「うつつ、お疲れ様です、ビューロー部長。すみません、フリッツの野郎を取り逃がしました。マーカスが足が遅いせいですよ」

「うるせえよ、ドム。まったく、あの野郎、女の子を抱えてるのに俺らより足が速いってどうなってるんだよ。朝のことがあったから、体調が悪いのかと心配して損したぜ。なあ、コール」

「ああ、その通りだぜ。愛想も感情もない冷徹野郎かと思ってたが、隅に置けないもんだな。あいつも人の子ってことか」

「まあ、我が部にはアイドルのエリザベトちゃんがいるわけだし、ベアード様は気にしな——あれ？エリザちゃんは？」

「さっき出ていったぞ」

「……俺らも今日は休みます」

「よし、お前ら全員表に出ろ!!」

【外伝】白銀の討ち手S その①

「そんなことない！」

触れれば折れてしまいそうなほど華奢な少女の両肩を掴み、吹き出す感情を叩きつけるかのように少年が吼えた。少年より一回りも矮躯の少女は驚いて逃げるように身を振らせる。頭の芯まで熱を帯びた思考が自制を促す理性を振り払い、逃がすまいと掴む手の力をさらに強めて少女の体を力強く引き寄せる。

これほど感情が昂ったのは何時ぶりだろうか。まだ幾分か冷静さが残る頭の片隅でぼつりとそんな感慨を浮かべながら、少年——坂井悠二は目の前の少女の瞳を見つめた。驚愕し呆然とする少女は、彼がよく知る「普通ならざる少女」に似ていて、しかし中身はまったく違う。「彼」であり「彼女」でもある少女の名は、『サユ』。かつての坂井悠二であり、そして敗北と消滅を経て想い人の姿になってしまった未来の坂井悠二である。

「ゆう、じ……」

唇を震わせながら、サユがかすれるような声でもはや他人となってしまうたかつての自分自身の名を呼ぶ。その声は明らかに湿り気を含んでいた。新雪のように白い肌は

ほのかに朱色に染まり火照っている。掴む手から少女の震えが伝わる。期待と不安が織り交ざった、子犬のようなか弱い震え。

(構うもんか!)

腹の底から湧き上がる熱に突き動かされ、悠二はもう一度ぐいとサユを引き寄せる。視線が恥ずかしげなサユのそれと交差した。瞬間、自分が小柄なサユを抱き寄せる形になっっていることに気づいて知らずに頬に朱色が灯つたが、そんなことはもう些細なことだった。「サユに自分の気持ち伝えたい」。ただそれだけが悠二を平時とはまるで異なる行動に突き動かしていた。

熱に冒されているかのような火照りを全身に感じながらサユの双眸を見つめ、あらん限りの力と想いを乗せた言葉を紡ぐ。

「サユ、ボクは君のことを……?」

そこまで口に出した瞬間、背中に突き刺さる視線を感じて体の芯が凍りついた。否、この場合「突き刺さる」などという生易しい表現は適さない。恐るべき切れ味を有した真剣に体を余す所なく撫で斬りにされ、さらに剣山の拳によるデンプシーロールを全身に浴びているかのような、限りなく破滅的で殺人的で暴力的な眼力が確かな圧力を持つて背中を貫いていた。さらにもっと悪いことに、悠二はこの視線の持ち主が誰であるかもわかつていた。

（——どうしてこうなった！）

残虐非道の悪魔超人ですら失禁しながら泣いて逃げ出すような二人分の視線を背後に感じながら、坂井悠二は突然我が身を襲った危機的な現状を打開すべく思考を過去の記憶へと遊離させていった。

〈昨日 昼休みの教室〉

「シヤナちゃんにメイド服を着る趣味があつたなんて知らなかつたわ」

新学期早々、唐突に、緒方真竹の快活明朗な声音が教室内に響き渡つた。昼休みの教室という騒々しい空間にあつて、その衝撃的な内容はまるで新品のスポンジに浸透する水のように速やかに広がっていく。

「遠目で見かけたただけなんだけど、あれは間違ひなくシヤナちゃんだったわ。凄く可愛かつた！そんな趣味があるのなら言ってくればいいのに！メイド服なんて私は似合わないから羨ましいのなんのつて！」

『シヤナ』『メイド服』『可愛い』

それらの言葉が教室内を走り抜け、瞬く間に空気を震撼させる。ある男子は目眩く想像で思考を停止させ、ある女子は見るからに色めきたつて真竹さんの後に続く。そうし

て、たった今話題に登った少女の反応を見ようとその場にいる全員が全神経を集中させて耳を傾ける。気づけば、つい今しがたまで室内に充満していた若々しい喧騒は忽然と姿を消していた。その原因となった真竹さん本人は周囲の変化に気づいているのかいないのか、さらに声を大きくして興奮に鼻息を荒げながら僕の右隣の机に詰め寄る。その席に肩肘をついて座っているのは、濡鳥のように流麗な長髪を背中に侍らせて凛々しく佇む少女、クラスメイトの平井ゆかり——通称『シヤナ』である。

「は？」

いきなりのことに目を丸くして言葉にもならない息を漏らすシヤナ。シヤナが狼狽するのも当たり前だ。僕の知る限りシヤナはメイド服など着たことはない。動きにくい服装は実用的でないで常日頃から一蹴しているシヤナがメイド服を着ることなどこれまででもこれからおそらくないであろうし、そもそもシヤナがメイド服を着ても「可愛い」などという感想が出るはずない。どんな奇抜な服装をしようと内から滲み出る輝かしいオーラによってそれが正装であるかのように様にさせてしまうからだ。

そんなことなど寸毫足りとも意に介する様子を見せず、真竹さんがぼかんと口を開けるシヤナに詰め寄る。

「まったくまたあ、隠さなくても大丈夫よ！ちよつとは恥ずかしいかもしれないけど、でもシヤナちゃんはすつごく可愛いんだもん。誰もバカにしたりしないって！」

丸つ切り見当違いのフォローにシャナの頬がそれとわからない程度にピクリと痙攣するのを僕は見逃さなかつた。かく言う僕も、静かに俯いて頭を抱える。ついにこの時が来た、という冷静な思考が半分。よりによってどうして「彼女」を目撃したのが真竹さんなのか、と悲観する思考が半分だつた。そつと右隣の方を見やると、同時にこちらに目を向けたらしいシャナと目が合った。

(あいつね)

(間違いない)

(面倒事はイヤ。何とかしなさいよ)

(無茶言わないでくれよ)

一秒に満たない視線の交差で会話を交わせる。実際は僕が一方的に無理難題を押し付けられているだけだが。

周囲に察知される前に互いに互いに視線を外し、この事態への対処のために素早く思考を巡らせる。こんな時に限って『空気の詠み手』と称されるトラブル解決のエキスパートである親友、池速人は生徒会の用事で留守だし、事情を知っているであろう佐藤と田中もどう言えばいいのかわからないと言つた様子で遠巻きにこちらを眺めながら頬を掻いて申し訳なさそうな表情を作っている。吉田さんも状況が掴めないと言わんばかりに視線を右往左往させて戸惑っている。頼れそうな人間はここにはいない。対処方法を

自分なりに少しは考えてはいたのだが、こんなに早く、しかもまさか真竹さんが発端となるとは思ってもいなかった。言い訳のしようのない誤算に、己の眼識の無さを恥じる他なかった。クラスのムードメーカーである彼女の言葉は相応の重みがあるし、その分真実味も増して周囲に認識される。こういった事態を未然に防ぐために「彼女」にはなるべく知り合いに見つからないよう行動して欲しいと頼んであつたし「彼女」もそれを了承していたのだが、市内外を活発に動き回る真竹さんの目は避けられなかつたらしい。一見僕の右隣の完璧主義者そっくりの姿をしていても精神が中身だからやはりどこか抜けているのかもしれない。

と、親近感のようなものを感じている僕の横つ面を視線が横殴りした。その気配に顔を向ければ再びこちらをジロリと睨むシヤナの目が。その逆らいがたい炎を湛えた双眸はまるで蛙を縛り付ける蛇の眼の如し。そんな恐ろしい眼に僕が反抗出来るはずもなく。

(命令よ。早くして)

(……イエス、ママ)

「あー、うー、そ、それはシヤナじゃないと思うヨ?」

脅迫そのままの視線に尻を蹴り出されるようにして立ち上がり、真竹さんに話しかける。並列して全力で嘘のストーリーを考えながらの芝居なので声が裏返るのくらいは

勘弁して欲しい。だからそんなに睨まないでシヤナ。

僕が背中中で汗を掻いているのも知らずに、訝しげに眉を寄せながら真竹さんが好奇の追求のターゲットをシヤナからこちらへと変更する。他の生徒も磁石に吸い寄せられるかのように首をグルリと回転させてこちらに問の視線を投げかける。その光景はまるで数多の戦艦が目標に向かって一斉に砲塔を向けたかのようだった。

（ここで手際よく問題を解決することが出来れば、シヤナからの評価は格段に上がるだろう。Z旗を掲げよ！皇国の興廃此一戦にあり。各員一層奮励努力せよ！）

（おおーっ！）

脳細胞たちの逞しい声を聞きながら思考に集中する。屈強な脳細胞たちは一糸乱れぬ動きでこの場を濁す言い訳を構築し、主砲に装填。この間わずか0.1秒。この瞬間だけは自分で自分を褒めてやりたかった。

（主砲発射用意、てえーっ！）

ズドン、という威勢のいい轟音を胸の内に感じながら僕は真竹艦隊に向かって主砲を発射した。

「それはシヤナの双子のお姉さんだったんだよ！」

「な、なんだってー!?シヤナちゃん、姉妹がいたの!?!」

今度は真竹さんの目が丸く見開かれる番だった。初弾は見事に命中したようだ。直

撃の爆風が吹き荒れるように生徒たちの間を驚愕と納得の風が吹き荒れていくのを確認して安堵の息を押し殺しながら胸をなで下ろす。このまま追撃してこの場をうやむやにしてしまおう。常日頃から只者ではないミスティアスな雰囲気醸し出しているシヤナだから、普通なら頓狂極まりない話も現実味がある。家庭の事情で離れて暮らしている双子の姉がいる、という感じの話がいいだろう。

次弾を装填した自慢の主砲が再び咆哮を放とうと輝き、

「ちよつとーなんであいつが私の姉になるのよ!？」

それより先に、けたたましい音を立てて勢い良く立ち上がった友軍の砲門シヤナが火を吹いた。思わぬところからの攻撃に晒され、僕という艦体に巨大な風穴が開く。何となく「彼女」の方が落ち着いていて世話焼きなところがお姉さんタイプではないかと単純に考えたのだが、どうやらシヤナにとっては不快だったらしい。よくよく考えれば当たり前の話かもしれないが。

「あれ？双子のお姉さんじゃないの？じゃああれはやっぱりシヤナちゃん……?」

「違う。私じゃない。でも私の姉でもない。でしよう、悠二」

シヤナの言葉に如何にも活気と好奇心に満ち溢れた瞳を輝かせ、にんまりとほころんだ真竹さんがシヤナと僕を交互に見る。その好奇と期待の視線をシヤナの厚い装甲板が跳ね返し、跳弾が再度僕を激しく打ち据える。気がつけば、僕は真竹さん率いる艦隊

とシヤナという弩級戦艦にガツチリと挟まれる形となっていた。クラスメートたちも口々に「坂井くん、早く教えて!」「どうしてお前ばかり平井さんのことにそんなに詳しいんだ!」「知っているのか雷電!」と質問の機銃掃射を浴びせかけてくる。

「いや、その、えーつと。ていいうか雷電って誰だよ!」

(我々はここまでのようだ。各員、死に方用意)

(ああ、艦長。そんな諦めないで。まだ勝機はあるはずですよ!)

必死に脳細胞を鼓舞しながら言い訳を考える。シヤナ自身がメイド服を着ていたという事実はない。本人もそのような話を事実として広められるのを望んでいない。しかし名が示すように竹を割ったような快活な性格の真竹さんの言葉には真実味があり、見間違えやホラ話にすり替えることはできない。それに、実際にシヤナの姿をしたメイド服を着た少女も実在する。次に見つかれば今度こそ誤魔化しようがなくなる。かと言ってその少女をシヤナの双子の姉とするとシヤナからのお許しが出ない。

(こーうなれば……!)

「ごめん間違えた!あれはシヤナの双子の妹だった!だよねシヤナ!」

意を決し、喉元をついて出た言葉はあまりに稚拙なものだった。だが出てしまったものは仕方がない。覆水盆に返らず、だ。シヤナに向かつて一步詰めより、強引に認めさせるように言葉を重ねて畳み掛ける。姉から妹に変えたただだが、これ以外には思いつ

かなかつたのだ。勘弁して欲しい。

何時までも「彼女」のことを隠し通せる自信などないし、外に出る度にコソコソと人目を気にするような負担を「彼女」に強いるのはどうしても気が引ける。極力、紅世の者たちに見つからないようにするべくシヤナも僕も目立たないように努めなければならぬが、学校でのシヤナの人気ぶりを見ればそんな努力義務がとつくに形骸化してしまっていることがよくわかる。全ての才に秀でているスーパー美少女に実は双子の妹がいた、という話題が広まったとしても今更現状が悪い方向に変わるとは思えなかつた。

シヤナはそんなこちらの考えを察したのかしていないのか、綺麗な線を描く眉を苦悩の形に歪めてしばし悩む。妥協するか否かを判断しているのだろう。そんなシヤナを見守るように取り囲み、いつの間にか僕を含めたクラスメート全員、それどころか他クラスの生徒たちもが息を飲んでシヤナが口を開くのを今か今かと待つていた。……仲いいよね君ら。

「……あの、シヤナちゃん？結局あれはシヤナちゃん本人なの？妹さんなの？」

しんと静まり返った中、ついに我慢できなくなつたらしい真竹さんが遠慮がちに手を上げて問いかける。その間に、「ん」と何事か納得したらしいシヤナが小さく頷き、への字に曲げられていた唇を開く。そして、

「そうよ。それは私の双子の妹よ」

「美少女双子姉妹きた——!!」

校舎を揺さぶる歓声がサイレンの如く辺りに響き渡り、否応なく巻き込まれるであろう不幸の始まりを僕に報せた。

〈昨日 夜の佐藤家 縁側〉

「……それで、どうしてボクが学校に行くことになるんでしょうか」

「僕が聞きたいくらいだよ……」

隣に座る『彼女』の苦笑と呆れが緬い交ぜになった問いに、身体が萎むくらい深いため息を吐いて答える。

彼女——上質な絹糸のように細く美しい黒髪に純白のヘッドドレスをつけ、濃紺の丈長ワンピースとエプロンという簡素なメイド服を着た小柄の少女は、シヤナと瓜二つの姿をしている。雪花石膏のように白く肌理細やかな肌は限りなく可憐でありながら、大きめの瞳、切れ長の眼に形の整った眉、高い鼻梁は総じて凛々しく、シヤナと同様に内面の精悍さを主張している。しかし常に眉を釣り上げているシヤナとは違い、この少女はよく言えば優しそうに、悪く言えば呑気そうにおっとりとした柔らかな表情をしていた。

一卵性双生児というレベルではなく、まるで鏡写しのように瓜二つなのに、魂の波動はまったく異なる。当然だ。なぜなら、彼女の身体はシャナを模して創られたのだから。この少女の名はサユ。元は自分と同じ、坂井悠二だった者だ。

自分と同じように一度紅世の王「狩人」フリアグネの燐子に殺され、抜け殻を経て宝具『零時迷子』を宿すミスセスとなった。シャナと共にフリアグネを討滅し、幾度の戦鬪を繰り広げた。そして、あるタイミングで、家族友人を守るために故郷を捨てる道を選んだ。つまり、シャナと共に生きる道を明確に選んだということだ。そこから、この世界の坂井悠二との分岐が始まったと言える。御崎市を離れてからも『零時迷子』を巡って降りかかる苦難をシャナと共に乗り越え続けるが、ついに「千変」シユドナイに追いつかれ、敗北。二度目の死を迎えた。

しかし、そこで思いがけない奇跡が起こる。その身に宿した秘宝『零時迷子』が、宿主が絶命した瞬間に突如起動したのだ。破壊の奔流によってその内に秘めた力を暴走させた『零時迷子』は、坂井悠二の魂を次元の狭間に吹き飛ばした。その存在が消滅する寸前、坂井悠二は紅世の王「贗作師」テイレシアスと遭遇することになる。身体を失った坂井悠二を自らのフレイムヘイズに相応しいと見定めたテイレシアスは、その異能の力で器を創り、与えた。それは奇しくも、坂井悠二が恋したシャナの肉体であった。これが『白銀の討ち手』サユ誕生の瞬間である。

その後、『零時迷子』はさらにフレイムヘイズとなったサユたちを翻弄し、時間軸の違う過去に放り出す。そこでサユは己の能力に目覚め、目的を見つけ、この世界のシヤナと坂井悠二——つまり僕を襲撃。自分と同じ轍を踏ませないために命がけで弱点を克服させるといふ捨て身の襲撃を敢行した。大苦戦をしつつもその攻撃を辛くも撃退した僕たちに、サユは自身の正体を告げ、その後は迷惑をかけたマージョリーさんなどへの償いのために、ここ御崎市に滞在している。これが今までのざっくりとした顛末だ。

正直、あれから二週間が経過し、夏休みが終わって新学期が始まった今でもその話を完全に信じきれない自分がいる。

『故郷と家族と友人を置きざりにして各地を転々としながら身を隠すか、御崎市に身を置いて戦い続けるか』

いつまでもこの地に留まって安寧を貪れるとは思っていない。この選択は、いつかはしなければならぬと漠然と思っていた。でも、まさか前者を選択した未来の自分自身が現れるなんて。しかもシヤナの姿をしたフレイムヘイズとなって自分の前に現れるなんて、想像外もいいところだ。運命の悪戯にしては奇想天外すぎる。ましてや——

「ところで、サユ、その格好と口調はどうにかならないの？」

メイド服を着て丁寧語で会話をされれば、本当に中身は自分なのかと疑うのは致し方

のないことだろう。対する未来の自分——サユは、触れられたくないところを触れられたとばかりに苦悶の表情を顔に刻みつける。そして何者かの目を気にしてキヨロキヨロと小さな頭を動かして周囲を見回す。誰の目を気にしているのかは言うまでもない。

「『弔詞の詠み手』なら酔を覚ますために夜風に当たりに行つたばかりだろう」

首元のペンダントからの声——サユと契約する紅世の「王」、『贗作師』『テイレシアス』——にそう告げられ、サユは胸に手を当ててホツと小さく胸を撫で下ろす。

「ボクだって好きで女の子みたいな服と口調をしてるわけじゃないんで……だよ」

小さくかぶりを振って語尾を本来のものに修正しながら、サユは先ほどの僕そつくりの大きなため息をついた。

「でも、マージョリーさんにはお世話になりました……なつたし、迷惑もかけちゃいま……かけちゃったからね。あの人の言うことには逆らえませ……ゴホン！ 逆らえないんだよ」

最後に小さく咳払いをしてサユは口をきゅつと閉じ、淡い桜色に染まった頬を隠すように顔をふいと背けた。その仕草一つ一つは、本人は否定するだろうけど、シヤナよりよほど年頃の少女らしかった。本人は自覚していないようだが、未来の坂井悠二がマージョリーさんの調教の前に陥落寸前であることは火を見るより明らかである。自業自

得の感があるとはいえ、周囲にされるがままに振り回されているその背中に僕は同情で目頭が熱くなるのを禁じ得なかった。

「そ、それで？」

気まずい空気を振り払うようにサユが急に話題を変える。有事には優秀だが平時は愚鈍な脳が、一拍遅れて投げかけられた質問への適切な回答を選び出す。

「あ、ああ。『サユはシャナの妹で、ドイツに留学中。今は久しぶりに姉に会うために一時的に帰国している』ってことになつてる。明日は国際交流への興味を生徒たちに持たせる意味も含めてシャナと一緒に学校生活を共にできれば、ということに……」

僕の説明を聴いていたサユの表情が見る見る訝しげに歪んでいくのを見ながら、丁寧に言葉を選んで説明する。

「シャナに双子の妹がいる」。それでつちあげがシャナに正式採用された後のクラスメイトたちの動きは、まさに統制の取れた軍隊そのものであった。生徒会や教師たちといった関係各所への説明と根回し、

「外国留学に興味があり、かつ留学に不安を持つ学生の良い見本になる」

「平井ゆかりの妹ならば優秀に違いない」

という、誰をも納得させることの出来るもつともらしい理由の構築などが、役割分担された生徒たちの間で瞬く間に遂行されていた。シャナの妹に会いたい、話したい、

愛でたい。各個の強い欲望が一つに合わさった時、人はかくも蟻のように見事に均整のとれた群体行動が出来るのかとなぜか感動してしまったほどである。

かくして、事態を穩便かつ早期に有耶無耶にしてしまおうという僕の思惑を宇宙の彼方に吹き飛ばして、本人の了解関係なしにサユを学校に招く算段が練られたのだ。そしてなぜかサユを招く外交大使役として矢面に立たされたのは僕なのであった。本来なら姉（という設定）のシヤナがすべきことなのだが、シヤナは放課後に寄るところがあるという理由で固辞し、唯一サユと面識のある僕に押し付けられることとなった。

ちなみに、サユがまだ坂井悠二だった頃——現在僕が生きている時間軸とは違う世界における過去だが——の話を彼女はあまりしないのだが、かつて御崎市を離れてからシヤナと共にドイツで数カ月生活した経験があることは聞いていた。サユがドイツに留学しているという嘘の話はそれを使ったのだ。

「メイド服のことはどう説明したの？」
「『仕様だ』って言っておいたよ」

「なんだよそれは」とサユが天を仰ぐ。まさかサユ本人の趣味だと言うわけにもいかなかった。それに、年上のお姉さま^{マージョリ}に強制されると正直言えば、さらによからぬ誤解を生むに違いない（百合的な意味で）。他に適当な口実がなかったのだから我慢して欲しい。

「えーっと、その、せつかく誘つてくれたのに悪いんだけど、ボクはお断りさせて頂きま、頂くよ」

「あつ、サユ!？」

引き攣つた笑みを浮かべながらサユが席を立ち、そのまま足早に逃げようとする。やはり交渉決裂のようだ。後ろ手に隠した紙袋にそつと触れて、僕は一瞬逡巡する。

(僕はどうするべきなんだ?)

正直……、僕もサユを学校に連れていきたくはない。いらぬ騒ぎになるというのもあるが、それよりもサユに精神的な負担をかけることの方が不安だった。

サユ——つまり違う未来の坂井悠二は、故郷を捨てた人間だ。後ろ髪を引かれながら、育ててくれた家族、苦楽を共にした友人たち、生まれ育った御崎市との繋がりを断ち切つたのだ。きつと血を吐くような辛い決断だったに違いない。そこまでの覚悟を持って旅だつたサユに、一度捨て去つた故郷との繋がりを再び強く感じさせるのは耐え難い苦痛になるのではないか。事実……サユは、まだ坂井千草に一度も会っていない。死に際した人間が脳裏に思い描くのは決まって母親の姿だという。それほどまでに母親の存在は大きい。きつと本心では会いたはずなのに、顔を会わせるどころか坂井家に近づこうともしない。必要最低限の用事くらいしか顔を出さない。それに、吉田さんに会うことも故意に避けているようだ。故郷に残したことの、人生から切り捨てたこと

の負い目なのだろうか。

(たぶん、僕に会うことも避けてる)

こうやってサユと二人つきりで会話することも、実は初めてのことだ。マージョリーさんの晩酌に付き合わされているところに押し掛けてようやく掴まえられたようなもので、こうして二人きりになれたのはマージョリーさんが気を利かせてくれた結果に違いない。「サユはこのままじゃ前に進めない。過去に向きあうために、アンタが助けてあげなさい」。夜風に当たりに行くとそつと出て行くマージョリーさんの後ろ姿は、確かにそう語っていたように見えた。

(これも君のためだ、許してくれ、未来の僕！)

「待って、サユ！」

脳裏に浮かんだマージョリーさんの背中に突き動かされるように、反射的にサユの手を掴んで引き止める。小さな手がビクリと震えるのがわかった。夏だというのに指先が痛々しく冷え切っているのは、サユ自身も知らぬうちに拳をきつく握り締めていたからか。

(仕方がない。これも荒療治だと思って、諦めてくれ！)

閉じた口腔内で決意をすると、僕は後ろ手に隠し持っていた紙袋を掴み上げた。見た目は小さく質素な紙袋だが、これに入っているものこそサユを学校に連れ出すために用

意した秘密兵器なのだ。やおらサユの目の前に紙袋を掲げると、途端に甘く香ばしい香りが鼻腔を刺激した。その匂いはサユにも伝わったのか握られた手を振りほどくことも忘れてその場に硬直する。サユが逃げないことを確認してそっと手を離し、紙袋の封を丁寧に開ける。簡単なシールを剥がすと豊かな香りはさらに勢いを増して袋から飛び出し、鼻奥を心地よくくすぐった。もはや中身が何であるのか、サユは見なくてもわかるに違いない。

「ま、まさかそれは!?!」

銃口を突きつけられたかのように呆然と眩くサユに不敵な笑みを返しながら、紙袋に手をつ突っ込んで中にあるものを潰してしまわないようにゆっくりと取り出す。

サユの身体はシャナを横して創られた。坂井悠二が抱いている、シャナという可憐で猛々しいフレイムヘイズの情報を元に、テイレシアスの能力『贗作』を使つて忠実に再現された。それ故、咄嗟の反射的な動きや体術の癖といった身体に染み付いた記憶をサユは受け継いでいる。それはサユとシャナの戦闘ですでに確認済みだ。だとすれば、味覚の嗜好が受け継がれていてもおかしくはない。

袋から全容を現出させた。"それ"を視認した瞬間、口の中に広がる小麦の芳醇な甘みとサクサクモフモフとした歯ごたえの気持ちよい食感を想像したサユの瞳孔がグワツと開ききつた。今にも口端から涎を垂らしてしまいそうな口からは「あうあう」と言葉

にならない言葉が溢れる。やはり、僕の目論見は的中した。放課後にわざわざ隣のパン屋まで自転車で疾駆した甲斐があったというものだ。

「さすがは坂井悠二だ。この身体の扱いをよく心得ているな」

地鳴りのような声で、テイレシアさんが低く、でも楽しそうに唸る。その感嘆の声に僕は「どうも」と苦笑を返す。己のフレイムヘイズが良いように弄ばれている様を見て感心する紅世の王というのはかなり違和感があったが、そういう紅世の王もいるんだろうと自分を納得させて今は素直に賞賛を受け取っておいた。基本、面白いことが好きなのだろう。

紙袋から完全に脱して己の威容を誇示し始めた。それ“は、ふつくらとした半球形のパンに、表面に格子状の溝が刻まれたビスケット生地を備えている。これすなわち——メロンパンである。明治時代から多くの人に広く深く愛され続けるこのパンは、同時にシヤナの大好物でもある。そして、シヤナと同じ身体のサユにとってもそれは同じなのだった。

この世に二つとしてない宝物のように高々と掲げられたメロンパンから視線を外せないサユに、僕は止めの一撃を放つべく紙袋に描かれたパン屋のロゴを見せつける。これはただのメロンパンではない。これこそ、

「隣の有名パン屋『窯蔵』の限定100個特性メロンパンが、ぐうぜん手に

入ったんだけど」

実際は偶然なんかではない。窯蔵に毎日のように通う常連のシヤナのためにと店主が特別にとっておいてくれたものだ。今日の放課後、シヤナが受け取りに行く前に、シヤナのお使いだと嘘をついて貰ってきたのだ。

（この償いはいつか必ずしますから……!!）

今頃、毎日の楽しみを掠め取られて贅殿遮那を叩きおらんばかりに怒り狂っているであろうシヤナの姿をサユの姿に幻視し、胸中で土下座する。どんなに謝って事情を説明したところでボコボコにされた挙句に毎日の鍛錬の密度も跳ね上がることは目に見えている。ここまでの犠牲を払ったのだ。失敗は許されない。

左右に振れるメロンパンに合わせてサユの瞳が振り子のようにクリクリと揺れるのを確認する。メロンパンで誘えなければお手上げだと内心は少しヒヤヒヤしていたが、上手くいきそうだ。少なくとも成果は得られる。

「よかつたら、どうぞぞ?」

メロンパンをサユの眼前にそつと差し出す。空腹時にお預けを食らってしまった子犬のように慌ただしくパンと僕の顔とを交互に見やるサユに、僕はニコリと顔面いつぱいの笑顔を投げかける。「偶然手に入った」が嘘だということはサユも承知のはずだ。窯蔵はこの辺りでは有名なパン屋であり、休日には眼を見張るような長蛇の列が出来る

こともある人気店だ。この笑顔は、その店の人気メニューを手にいれるために支払った僕の努力、そして犠牲をも孕んでいるのだ。

プルプルと震える細い指が覚束ない手付きでメロンパンを掴む。まるでこの手にあるのが信じられないとでも言うかのように目の前のメロンパンを見つめるサユの耳元に口を近づけ、僕はそつと囁やく。悪魔の囁き。

「明日の、学校の件、なんだけど」

ビクリと両肩を跳ね上げるが、視線はメロンパンに釘付けのまま。この瞬間、もはや勝敗は決していた。僕は読み勝ったのだ。

ぼつてりとした唇を悔しそうに尖らせ、黒真珠の瞳を潤ませてサユが恨めしそうに睨め上げてくる。その仕草にどこかゾクリとさせられる嗜虐感を背筋に味わいながら、口をすぼめて囁きを重ねる。勘違いしてはならない。これは僕の保身のためではなく、サユの前進を願っての行為なのだ。過去から目を背けていては未来には進めない。それに、今回のようなことに至ってしまった責任の一端はサユにある。少し荷を背負ってもらっても罰は当たらないだろう。

「来て、くれるよね？」

安らかな眠りに誘うように、恋人の耳元で呟くように、唇の動きだけで小さく囁やいて畳み掛ける。それと同時にメロンパンを人差し指で押してサユの口元に近づけてや

る。ふにゆつと、メロンパンがわずかに唇に触れる感触。我ながら反則とも言える攻撃。

しかして、サユの返答は、

〈今日、朝礼〉

「F r e u t m i c h . I c h b i n S a y u H i r a i . V i e l e n

D a n k f u e r I h r e Z u s a m m e n a r b e i t . 初めまして、私

は平井サユといひます。今日はよろしくお願い致します」

若干片言ながらもしつかりと基礎が出来ていることを感じさせるドイツ語で、教壇に立つメイド服の少女が丁寧にお辞儀をした。下腹部の前で手を重ねてゆつたりと腰を折る姿は見事に様になっていて、中世の謹直な少女メイドを連想させた。これもマージョリーさんの仕込みに違いない。日ごろ、どんなキツイ調教をされているのやら。

そんなことなど露とて知らず、僕とシヤナを除くクラスメイドたち全員が「ほう」と吐息のようなうつとりとしたピンク色のため息を吐いた。見た目年端も行かない少女に男女共々見惚れる様子は、滑稽を通り越して犯罪的な危なささえ感じられたが、サユにはそうさせるだけの不思議な魅力があった。少女でありながら少年でもある。未成

熟でありながら成熟前でもある。そんな不思議なアンバランスさが奇妙な妖艶さを引き出し、周囲を心酔させるのかもしれない。

そんなことを考えていると、ふと頭を上げたサユと目が合った。純真無垢の宝石のような瞳は、到底、かつて枝分かれする前は同じ人間だったものとは思えず、僕は恥ずかしさと後ろめたさでついと目を逸らす他なかった。

昨日、サユは返答らしい返答はしなかった。ただパクリと小さな口でメロンパンに噛り付くだけだったが、それはもはや肯定と同義であった。あからさまに悔しそうに眼に涙を浮かべながらメロンパンをパクつくサユを見て、良心がチクリと痛んだのを思い出す。襲撃してきた時は鬼気迫る迫力の戦士だったというのに、平時はいたいけな少女そのものなのだから、調子が狂ってしまったというのに、平時はいたいけな少女そ

(もしかしたら平時と有事で印象が変わるらしい僕も、周りから似たような感想を抱かれているのかもしれない)

「お前たち、サユ君をあまり質問攻めにして困らせるなよ？彼女も忙しい日程をやりくりしてこの学校に来てくれたんだからな。感謝の意を持って接しつつ、将来の留学や外国旅行のために参考になるような話を聞いてしっかり吸収するように。ああ、そうそう。サユ君の席はお姉さんの後ろだよ。一日という短い時間だけど、うちのクラスの生徒たちに色々なことを学ばせてやって欲しい。今日はわざわざ来てくれてありがとう。

先生からは以上だ」

「お心遣いありがとうございます、先生。こちらこそ、今日はご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します」

物思いに耽る念を断ち切って、担任の先生が朝礼を締めくくる。

「起立！礼ッ!!」

先生の挨拶にサユが艶っぽい微笑をもって返事をしたのを見て、委員長の藤谷晴美さんが号令をかけ、生徒全員が弾かれたように一齐に起立。空気を切り裂くようなザツという音を立てて、定規で揃えたような45度の完璧な礼。

「お、おう。今日は一段と元気だな。それじゃあ、坂井、サユさんのサポートをするんだぞ」

「は、はい」

サユを前に目をギラつかせて一齐に立ち上がった生徒たちに気圧されて一瞬たじろいだ担任は、首を傾げながら答礼すると、生徒たちのプレッシャーに弾き出されるように足早に教室を出ていった。

それが始まりだった。

「サユちゃん可愛い可愛い!!」

「頭ナデナデさせてええええええ!!」

「握手してください！」

「坂井に変なことされてないか!? されてたら正直に言うんだぞ!」

「おいっ、誰だ不穏なことを言ったのはイデデデッ!!? 左尻が痛い!!?」

机と椅子を蹴り飛ばして、生徒たちが獲物に殺到する肉食動物のようにサユにめがけて殺到した。一瞬、攻め寄る男女の波に怯えたサユの表情が垣間見えたが、小さなその姿は津波に飲み込まれた小舟のようであつという間に見えなくなった。あと、どさくさに紛れて僕の左尻をガツシリと掴んだ奴は誰だ。片方の尻がもぎ取られるかと思つたじゃないか。ゴリラみたいな握力だつたぞ。たしか僕の後ろの席は……吉田さんか。まさかね。

「私と扱いが違い過ぎない?」

ぼそりとしたぼやき声が隣から投げかけられる。言うまでもなくシヤナである。胸の前で組んだ腕の上でこれでもかというほどに懽然として不満げな表情を浮かべている。昨日、僕のせいで食べられるはずだったメロンパンを食べられなかったこともその表情を形作る要因の一つだろうが、主な原因はやはりサユにある。左の尻と、昨夜に贅殿遮那でぶつ叩かれて痛む脳天を摩りながら、撫でられたり抱きしめられたりと揉みくちやにされているサユを横目で一瞥する。シヤナは、その矮躯とは正反対に見るからに自信と確信に充ち溢れ、勇猛果敢な人格を体現するかの如く常にどっしりと構えてい

る。だからまるでマスコットのようになやほやされることはないし、むしろ頼られることの方が多し。

「シヤナもあんな風に扱われたいの？」

その言葉に、シヤナも教壇の上を占領する集団に視線を飛ばす。そこでは、なぜかワツシヨイワツシヨイと胴上げされているサユが必死に「お願いですから降ろして下さい」と涙声で訴えていた。

「……やっぱりこのままでもいいわ」

ですよねー。

【外伝】白銀の討ち手S その②

〈今日、1時間目、英語〉

僕は今、シヤナが初めてこのクラスにやってきた日のことを漫然と思い出していた。代替物^{ト代替}となつて消滅しかけていた平井さんに成り代わつたシヤナは、優秀さに裏打ちされた自信と持ち前の度胸によつて次々と教師陣を精神的に打ちのめした。生徒から慕われていない能力不足な教師たちだったとはいへ、だいの大人たちが中学生も怪しい容姿の生徒に精神的に叩きのめされる様を見せつけられるのは忍びなく、クラスメイトたちはストレスにゲッソリとしていたものだ。さすがに数ヶ月も経つた今では「そういうものだ」として集団には馴染んだものの、毎日顔を合わせるわけではない専門科目の教師たちは、相変わらずシヤナに対して苦手意識を抱いたままだ。シヤナに尻を蹴り飛ばされた体育教師はすっかり意気消沈しているし、初顔合わせで痛めつけられた英語教科を担当する中年教師などは彼女と廊下で顔を合わせるたびに萎縮してさつと道を譲るほどだ。

そんな彼にとつて、果たして今日は厄日なのか、それとも吉日なのだろうか。

「シヤナ、そんな言い方はないよ」

「サユ、うるさい。コイツが間違つた文法を教えるのが悪いのよ。お前、よくそれで教師を名乗れるわね」

「はい……」

「誰にだつて間違いはあるよ。それにこの文法でも通じることは通じるでしょう。ですよね、先生」

「はい……」

どつちが大人なのやら。ぶつ叩かれては沈み落ち、掬い上げられては浮き上がり、またぶつ叩かれて凹む。海面で浮き沈みするブイの如く少女二人のあいだで精神的上下を繰り返す教師を、僕らはなんとも言えない顔で眺めている。あつちから責められてはしよんぼりと頭を下げ、こつちからフォローされては涙ぐんで手を合わせて拝む。容赦のない不動明王と慈悲深い弥勒菩薩に挟まれた一般人とはかくもこのように情けないことになるのだろうか。子どもからしたら、大人の醜態はなんとも見るに忍びない。同情でホロリと涙してしまいそうだ。

と、隣からツンツンと肘で突かれる。

「シヤナちゃんの子の双子の妹っていうからつきり性格も似てるのかと思つてたけど、なんだか正反対だね。坂井くん、なんでか知ってる？」

「あー、離れて暮らしてた時期があるらしいから、そのせいなのかな……？」

「なんとなくなんだけど、坂井くんに雰囲気似てるんだよねえ」

「あ、あはは、まっさかあ。それはサユに失礼だよ、あはは」

小声で囁かれた緒形さんの質問に声を上擦らせながらやつとのことで返事をする。ただどどしい応えにも納得してくれたいらしい緒形さんが「ふーん」と何度か頷いて再び視線を前に向けるのを横目に、僕はホッと内心に息をついた。昨日の今日では双子の妹のカバーストーリーを作るなんて考えに至らなかつたし、そんな余裕も無かつた。いきあたりばったりで作りを話しているといつかポロが出そうだ。嘘を吐くのが得意な人間じゃないし、罪の意識も積もるしで、胃が痛みそうだ。

「ネイティブスピーク^{Native Speak}を前提とするのなら、そもそも最初から文法に完全な正確性を求める必要はないわ。それに、こいつは前にも同じ文法を間違えてたし、わざと放つておいたらそのまま気づかすスルーしていた。愚鈍すぎる」

「はい……」

「人間はそうやって成長していくんだよ。みんながシャナみたいに優れているわけじゃないんだから。ね、先生」

「はい……」

僕たちクラスメイトを置き去りに、壇上にてブイの浮き沈みはまだ続いている。シャナがいつものように厳しい口調で教師の不備を反論の余地もなく突いたかと思えば、隣

のサユが優しくフォローする。サユは、設定では同い年となっているけれど、本当は僕らより年上だ。というわけで、シヤナほど飛び抜けてはいなくとも教師の過怠を見抜くくらいの学力は備えているらしい。かつて彼のシヤナと一緒に海外を渡り歩いた経験からか、英会話能力も鍛えられているようで、シヤナの高度な指摘にも追いつがることが出てくる。そのちょうどいいレベル差が、まさに「姉と妹」という表面上の設定とよくマッチしているのだ。苦し紛れの言い訳にしては我ながらピッタリの配役だったと思う。

(もしも本当にシヤナに双子の姉妹がいたら、こんな感じだったのかな)

などと想像すると、なんだかこの光景も微笑ましく思えた。精いっぱい背伸びした小学生が意地の張り合いをしているようにも見える。美少女二人のじゃれ合いは見事に絵になるな、と思わずフツツと忍び笑いを漏らしてしまったが、本人たちには聞こえなかっただろうか。

「とにかく、この教師は他人に教えを垂れる資格はないわ」

「はい……」

「そんなこと言ったら可哀想だよ。先生だって一生懸命やってるんだから」

「はい……」

まあ、今日はムチ役だけでなくアメ役もいるのだから、教師当人にとつてはいつもよ

り救いはあるのではなからうか。日頃から辛辣な正論で詰め寄ってくるシャナとまったく同じ姿の少女から優しく慰めてもらえるのだから、精神的ダメージも少しは減るのでは、なんて呑気に分析する。こうして対岸の火事を見ているような気分でいられるのは、普段は自分がやっているシャナのフォローをサユが代わってくれているからだ。

(やっぱり、中身は僕なんだなあ)

よくよく観察してみると、サユの口調の端々には自分と通じる部分もあった。緒方さんが野生の勘で気づいたのも頷ける。声質は同じだけど、抑揚が若干違う。身振り手振りも、一方は機敏かつ堂に入っていて、一方は控えめで穏やか。中身が坂井悠二なのは間違いないのだな……などと考えながら、肩肘を付きつつゆったり第三者目線で観察しているとおもむろにシャナとサユが同時に振り返ってこちらを向いた。ジロリという効果音が背後に浮かんで見える。嫌な予感。

「悠二、お前ならこの問題の答えをどう導くの?」

「悠二さん、どうですか?」

うつすら笑顔を浮かべていたのがまぶしかった。二人がジロリと僕を睨む。シャナは「なにを偉そうに他人事みたいな顔してんのよ」と仏頂面だし、サユも口元に微笑みは貼り付けていても目は笑っていない。「この状況を作ったのはお前だろなにのんびりしてるんだ」という苦情がありありと滲んで見えた。こういう時、シャナと同じ顔をしてい

るといふのは恐ろしい。迫力が単純に2倍になっていゝからだ。我知らずゴクリと息を呑んだのは僕だけではない。『悠二』^{イントネーション}の呼び方もシヤナのそれに寄せてきているところを見ると、意識してやっているのか。さすが僕だ、僕の怖がらせ方をよくわかっている。

「さ、坂井！あとは任せた！」

「先生嘘でしょう!？」

矛先が自分から僕に逸れたことを察知した英語教師は、「今日はもう自習だ」と唐突に声を上げると、なんとスタコラサツサだぜと言わんばかりにその場から大股で遁走を開始した。驚いて立ち上がった僕に、背中越しに情けないセリフを投げってくる。

「逃げるんだよオ！サカーイーツ!!どけーツヤジ馬どもーツ!!」

「わあく!!なんだこの先生ー!!」

保身のために生徒を売るとはなんて奴だ、同情して損した!吸血鬼にでも食われてしまえ!

ピシヤリと後ろ手に閉じられた教室の扉を呆然と見る僕の両肩に、むんずと鷹の爪を思わせる指が食い込む。細くて小さいのに、肩の骨を握り潰されそうな握力の指が、二人分。振り返らなくても、背後の二人がどんな表情をしているのかわかった。激しくささくれだっている圧力がレーダー波のように背中にピシピシ当たっているからだ。

さつきまで壇上にいたのに、どうやって一瞬で僕の背後に出現したのか。僕が知らぬうちに瞬間移動の自在法でも習得したのか。

「ずいぶんと余裕そうじゃない、悠二」

「ぜひ悠二さんのお手前を拝見したいです」

膝裏、学生服越しにシャナのスカートとサユのドレススカートが触れているのがわかる。密着した女の子に囁かれて耳たぶをコシヨコシヨとくすぐられるなんて、思春期の男からしたらご褒美だろう。低められたささやき声にこれでもかというほどの凄^{トス}みが利いていなければ。代わってほしいなら代わってやるから名乗り出る。助けを求めよう。ようにクラスメイトたちに向かってさつきと首を巡らせる。全員がさつきと一斉に机上を見下ろして自習を開始する。その間わずか0.2秒。なんて薄情な連中なんだろう——イイデデデデッ?! また左尻が痛い!?

「誰だよ！さつきから執拗に僕の左尻と右尻を離ればなれにしようとする奴は！左尻彦と右尻姫が可哀想だろ——……あ、ごめん、吉田さん。急に叫んだりして」

そうだ、後ろの席は吉田さんだった。にこりとタンポポが咲くように朗らかに微笑む吉田さんに頭を下げる。彼女がそんなことをするはずがない。僕の尻を物理的に仲違いさせたところで吉田さんに得るものがあるわけでもないのだから。彼女からどことなく闇を感じるのはきつと気のせいに違いない。ズルズルと壇上まで引きずられる自

身の行く末から目を逸らそうとする本能が見せた詮の無い幻だったのだろう。尻の痛みは幻痛にしてはやけにはつきりと尾を引いたが。

結局、僕は自身が英語教科をまったくの苦手としていたことをトラウマになるほど再認識させられる羽目になった。シャナの手によつて黒板に鮮やかに踊る流麗な筆記体を前に、ひたすらに「わかりませんごめんなさい」を繰り返すばかりだった。当然、サユはフオローしてくれず、逆に「そんな問題も解けないんですかあ」とメスガキムーヴで煽るばかりだった。メロンパンで都合よく操られた意趣返しなのか、なにやら楽しそうな気配すら感じる。「雑魚、雑魚」とからかう声まで聴こえてきそうだ。だが、それも今だけだ。次の2時間目でわからせてやるからな！

「悠二ー集中!!」

「はい……」

「悠二さん、そこ間違つてますよ」

「はい……」

【外伝】白銀の討ち手S その③

〈今日、2時間目、体育〉

夏休みも終わり、季節はもう8月も中盤に差し掛かっている。だというのに、太陽から降り注ぐ激しい輻射熱は一向に減衰の気配を見せない。大気中には手を伸ばせば触れられそうな蒸し暑さが満ちている。全身の毛穴から絶え間なく吹き出す汗も、肌を炙る熱射によって瞬間的に蒸発させられるほどだ。足元のコンクリートも溶融させそうな気温は「容赦がない」の一言だ。これが世間を賑わせる地球温暖化の脅威の一端なのかと、僕は手で作った日差越しにギラつく太陽を仰ぎ見た。

僕という小さな存在は地球レベルで言えば本当にちっぽけなものであり、大いなる地球のうねりの前にただただ汗を流して暑さに耐え忍ぶことしかできないのだ。そう考えると、何もかも全てが極めて些細で矮小な雑事に過ぎないのではないかと思えてきて

「坂井、現実逃避しないでサユさんを助けたらどうだ？」

「……もうしばらく放っておいて欲しかったよ、池」

親友、池速人の冷静な声に足首を捕まれ現実に引きずり戻される。目の前では、現実

——女子更衣室に連行される寸前のサユが必死に頭を振って抵抗する光景が繰り広げられていた。

「わ、私はいいです！遠慮します！運動は苦手なんです！スク水は、せめてスク水はご勘弁を！」

「シヤナちゃんがあんなに運動神経いいのに、双子のサユちゃんが苦手なんてありえないでしょ！てか、メイド服着てて今さら水着を恥ずかしがらなくてもいいじゃない！」

緒形さん、仰る通り。至極当然の意見に反論できなくなつたサユは「うぐぐ」と喉を鳴らすと、ただばたばたと手足をバタつかせて逃げようとする。が、終始笑顔の緒形さんたち女子勢に後ろから羽交い締めになれ、為す術もなくずると更衣室に引きずり込まれて行くしかなかつた。僕らは、そんな一幕を遠巻きから眺めていた。

今日の時間割は、1時間目は英語、そして2時間目が体育——つまり水泳の授業だった。地方大会の際には大会会場にもなるように建造された大型プールはオリンピックサイズの50メートルロングサイズ。そんな巨大なプールを有する御崎高校では、水泳は2時間連続、そして2クラス合同となることも珍しくない。いつもなら「朝つばらから水泳なんて」と面倒くさがる生徒たちも、ゲストおもちゃを迎えた今日ばかりは色めきだつて上へ下へのお祭り騒ぎである。校舎の裏手にある更衣室備え付けの屋外プールは、物珍しい一日転校生のおかげでとても騒々しかった。

当初は、「あのシヤナ」の双子の妹ということもあって、他のクラスの生徒たちなどはサユのことを一步引いて戦々恐々と観察していた。学年において、シヤナは「教師を返り討ちにするつもりでもない女の子」という認識が知れ渡っていて、上級生からも一目置かれているほどだ。そんな女の子の双子というのだから、警戒から入るのはなんら不思議じゃない。だけど、いざ面と向かってみると、サユが姉と違つて一般人の常識に根付いた極めて普通の人間で、しかもなぜか初対面とは思えない親しみやすさを感じたこともあり、すぐにマスコットのようになつたのだ。

(まさか誰も中身が僕だとは思わないだろうなあ)

マージョリーさんの調教によつて言葉遣いや所作が淑女らしく矯正されていることも手伝つて、坂井悠二の面影は表面上はほとんど認められない。マージョリーさんには感謝すべきなのか。複雑である。

ちなみに、サユの分のスクール水着は誰かがどこからともなく仕入れてきた。サユの体型もシヤナと同じく平均を遥かに下回るはずだが、いったいどこからそんな特殊なサイズを取り寄せてきたのだろうか。

「俺たちが持つてきたんだよ」

背後で佐藤啓作と田中栄太がさらりと述べた。すかさずスマホを取り出すと親指で110番をタップする。

「もしもしポリスメン？」

「違う違う違う！やめろ、坂井！マジヨリーさんから『持つていけ』って言われたんだ！」

「『絶対面白くなるわよ』って言われたから仕方なく持つてきたんだよ！俺たちだって恥ずかしかつたさ！誤解すんな！」

「ああ、なんだ、そうだったのか。初めからそう言ってくれよ。あ、すみません、早とちりだったみたいで……ええ、ええ、すみません、気をつけます」

「こ、こいつ、マジで警察に通報してやがった……！」

容赦のなさに恐れおののく二人をよそに、実はどこにも繋がっていないかったスマホをポケットに仕舞う。

ふと、更衣室のドアにしがみつきなから何とか内側に入るのを踏みとどまるサユと目が合った。その顔は真っ赤に紅潮し、眉は歪み、瞳はうるうる濡れている。そこには切羽待った意思がありありと滲んでいた。

自分が同じ立場だったら果たしてどんな心情になるのだろうか。女子更衣室に興味などない、と言えば完全に嘘になる。真正銘の男子として、女子更衣室は禁断の楽園だ。理性と倫理さえ邪魔しなければ一度は踏み込んでみたいと思うのは健全な男子なら当然のことだ。

しかし、女の姿で入室するということになる。無防備な異性たちのなかで、そうすることが当然だというように自らも裸体を晒さねばならない。そして極めつけにスクール水着である。これは死ぬほど恥ずかしいだろう。露出癖でもなければ顔からメラゾーマを吹き出しながら絶命する。

「ゆ、悠二さん、助けてください！」

助けを求めるその声はほとんど悲鳴に近かった。途端、その場にいる者たちの視線が一斉に僕に集中する。先ほどまでサユを中心に繰り広げられていた歓声がすつと嘘のように静まり返り、肌を刺す緊張感と殺気が僕の周囲を支配する。

警告——幾多の戦いをくぐり抜けてきた第六感がそう告げていた。「邪魔をするな」とギラつく眼光を全身に浴びて、僕は握った手の親指を天に向かって突き立てる。

「サユ、因果の交差点でまた会おう！」

「裏切り者おお！後で覚えてろおおお!!」

僕だつてクラスでリンチにされたくはないし、それなりに空気は読める。

再び爆発した歓声の中、震える声をフェードアウトさせながらサユが地上の楽園の奥へと吸い込まれていく。その姿が完全に闇に溶けた直後、更衣室の扉がピシヤリと閉められる。楽園が牢獄となった瞬間だった。女子たちのキャアキャアと甲高い嬌声に混じって聴こえてくる「脱がせないでください」という悲鳴にそつと合掌して、僕は隣で

呆れ顔を浮かべるシャナに顔を向ける。

「一緒に行かなくていいの?」

「騒動が落ち着いたら行くわ。巻き込まれたら面倒そうなもの」

クラスメイトたちと打ち解けてきたとはいえ、少年少女特有の向こう見ずなハイテンションが肌に馴染まないシャナは腕組みをして事態の静観をしていた。でも、いいのだろうか?

「シャナの裸をサユほくが見ることになると思うんだけど」

「早く言いなさいよ!」

一喝の後、ドドドドドと土埃を立ててシャナが更衣室に突進する。

ごめん、サユ。これも全てを円満に解決させるためには仕方のないことなんだ。さっきの1時間目のメスガキムーヴでちよつとイラツとしたとか、2週間前に襲撃されて死ぬほどボコボコにされたことへの意趣返しなんて、少しも思っていない。ざまあ。

「いいのか? サユさん、かなり嫌がってみたいだが」

「何とかなるよ。たぶん。きつと。おそらく。メイビー。それより、早く僕たちも着替えを済ませよう。お前もメガネマンアクアに換装しないといけないんだし」

「おつと、そうだったな」

メガネマンアクアは否定しないんだな。

「本当に……『やれやれ』って感じだわ……」

狂乱めいて騒ぐ生徒たちに、左肩に星のアザがある女性体育教師が額に手を当てて深くため息をつく。なんだろう。学校より刑務所が似合うような気がするのは気のせいだろうか。

「はひ、はひ、はひい」

スクール水着を着たサユは、耳たぶまで顔を真っ赤にして、変な息遣いで肩を上下させていた。足取りもフラフラとして覚束ない。大きな目も明らかに動揺してくるくると回っている。その後ろからは、サユと同じように頭の後ろで髪をお団子にしたシヤナが「見なかったでしょうね」「変なところ触らなかったでしょうね」とチクチク口を尖らせている。

シヤナもサユも、服装が同じになるともうまったく見分けがつかない。シミひとつ無い真っ白な肌、完璧に整った精悍な容貌、無駄を一切廃した四肢ときゅつと引き締まった腰のくびれ。なだらかな胸の双丘は、ふくよかではないけれど、そのささやかな肉付きがむしろ愛らしい。特に目を引くのがそのプロポーシヨンだ。スクール水着を着て

いるせいで脚の付け根が頭らになり、その驚異的な股下比率の高さに周囲の男も女も絶句する。ほぼ50パーセントとっていいかもしれない。およそ日本人離れたそのハイレベルなプロポーションのおかげで実際より背が高く見える錯覚が起きるほどだ。

「シヤナちゃんもサユちゃんもスタイル最高じゃん！」

「羨ましい〜！」

「あ、あはは、どうも」

そんな黄金比の肉体を神から授かった美少女がなんと双子としてこの世に存在しているというのは、客観的に捉えれば奇跡に近いだろう。芸能界に目をつけられたらすぐにお茶の間を騒がせるタレントになるのは間違いない。もしそうだったとしても、お茶の間の人々は、一方がオリジナルで一方がその精巧な贋作コピイだとは想像もつかないだろう。アラストールが「贋作師」テイレシアスについて「素行は悪いが腕前は確か」と実力を認めていたのも頷ける。今だって表情さえ揃えれば、上から下までまるで鏡写しのように同じ——おな、じ——？

(いや、一部だけサユの方が少し……いや、よそう。僕は何も見ていないぞ)

スクール水着の生地による光の屈折具合とか、なんかそういう理由に違いない。わずかな膨らみの誤差なんてどうでもいいじゃないか。触らぬ神に祟りなし！

気を取り直して視線をさらに上にずらし、サユの顔に目をやる。よくよく見ると、そ

の目元には布で覆われていた痕があった。目隠しをされたまま女の子たちによって無理やり裸に剥かれてスクール水着を着せられる。そしてスクール水着姿のまま同世代の少年少女たちの前に見を晒す。とんでもなく高レベルなプレイだ。物好きにはたまらないシチュエーションなのだろうけど、そういう嗜好のない僕には死ぬほど羞恥極まるし、僕の枝分かれした延長線上であるサユにとつても同じだろう。

「南無南無。サユ、新しい性癖を開拓したと思つて成仏してくれ……イテツ!」

再び合掌して冥福を祈つた僕の額に、ヒュンヒュンとブーメランのように風を切るビート板が当たつてポーンと空中高く跳ねた。目の前でチカチカ光る小さな星の向こうで、こちらを涙目で恨めしそうに睨むサユの顔があった。この距離で僕の眩きを聞き取つて、そしてビート板を命中させるなんて、驚異的な聴力と命中精度だ。さすがシヤナの贗作ボディ——なんて考へてる場合じゃなかった。

「あわ、あわわわわわっ!?!」

僕はプールの水際に立つていたことを思い出した。バランスを崩すまいとわたわたと手足をバタつかせたのも束の間、僕の身体は太陽を見上げながら背中からプールの水面へと傾いていく。「ナイスショット!」という田中と佐藤の歓声を聴いたと同時に、そのままドボンと水の柱を突き立てて頭から水中にダイブした。ガボガボと目を白黒させながらなんとか水面から顔を出すと、ヒューヒューと口笛を吹いて色めき立つクラ

スメイトたちの声が蒼天を突き上げている。

2時間目はまだ始まったばかりだということなのにこんな調子とは、僕は今日一日の山を乗り越えられるのだろうか。

「ぎゃつ、緒形さん!?!」

「一美、また大きくなつたでしょ〜!」

濃紺に艶めくポリエステル生地に包まれた2つの山が指を呑み込んでフニヤフニヤと変形する。見るからに張りのある弾力性を備えた双子の大山だ。ふわりと柔らかかろうなのに、しっかりとした重みがあることが見て取れる。これは乗り越えられそうにならない。そんな大山を背後から揉みしだく緒形さんが驚愕に目を見張り、山の持ち主である吉田さんが悲鳴をあげる。吉田さんは、その引つ込み思案な性格とは相違えるグラビアアイドルもかくやな肢体を輝かせている。緒形さんを振り放そうと抵抗する腰がクネクネとうごめく様はとて艶かしく、男子生徒の目線は磁石のように吸い寄せられた。メガネマンアクアの鼻の下は伸びる一方だ。ところで、なんだか吉田さんが喘ぎながらチラツチラツとこちらを横目で窺っているように見えるのは錯覚だろうか。

「悠二、どこ見てるの」

「んなつ、んなななななななが!!?」

「吉田さんの胸を見ましたよね、絶対。〃この山は乗り越えられそうにないなあでへへへ〃とか考えてる顔ですよ」

「悠二、いやらしい」

「ううっ!」

シヤナとサユが切れ長の目を細めて僕を見る。軽蔑がこれでもかと込められていて視線がすこぶる痛い。「でへへへへ」とまでは思っていないにしても内容は合ってるから否定できない。なぜ男はこういう状況になると一方的に責められる立場に追い込まなければならないのか。不公平だ。

「〃なんで一方的に責められる立場になるんだ、不公平だ〃って考えてる顔ですね」

「サユ、僕の考えを読まないでくれ!」

「悠二、情けない」

「うううっ!?!」

さすが中身が同じということもあって、思考を忠実にトレースされてしまう。シヤナの姿をしていて中身が自分というのは、もしかして僕にとって天敵みたいなものじゃないのか。

筒抜けにされる頭のなかをこれ以上覗かれないようにサユから顔を背けるも、背けた方にもシヤナがいる。左にはシヤナ、右にはサユ。まるで山深い寺の山門を守護する阿吽の金剛力士像のような迫力を伴って、じとーっと重く鋭い視線が左右から突き刺さる。

シヤナはともかく、サユは元々男だったんだから、どうしようもない純粋な男心リビドを理解してくれてもいいじゃないか……とは口に出さなくておく。

「いや、理解は出来るんですよ？でも、肉体が女の子こになったせいうか、男子高校生のお猿さんみたいな思考がやけに幼く思えるんですよねえ」

「男はオオカミなのよ気をつけなさい」って千草もリズミカルに言ってた」

「母さんは歳がバレるような歌をシヤナに教えるなよ！っていうかサユ！だからといってあえて口に出さないうええを読んで反応するのはやめてくれるかな！いかに中身が同じとはいえプライベートの侵害——あ、」

順調に女心に染まりゆく自分サユに指を突きつけて憤慨していたところ、唐突に、健康的な小麦色のシルエットがシヤナとサユの背後にゆらりと揺らめいた。彼女は僕に向かつて唇の前に人差し指を立てる。その意図を察して、僕は視線をそちらに向けようと集中することにした。唐突に言葉の切った僕にシヤナとサユが同時に首を傾げる。そんな二人の背後、一流のフレイムヘイズにすら察知されない忍び足で彼女はするする

と近付いていく。そして二人のちょうど中間点に立つてガバッと両腕を翼のように広げる。ニヤニヤとした邪な気配にハッと二人が同時に背筋を逆立てるも、時既に遅し。

「二人の成長も私が調べてしんぜよお〜！」

「ひゃうっ!？」

「んぎゃっ!？」

緒形さんのセクハラ宣言と同時に、その両の手がクレインゲームのアームのように閉じて、シヤナとサユそれぞれの左胸と右胸をグワシツと鷲掴みにした。ちなみに女の子らしい悲鳴がシヤナで、尻尾を踏まれた猫のような悲鳴がサユである。顔を真っ赤にして肩を跳ね上げる二人の胸が、ムギムギムギとしつこいほど揉まれる。濃紺の生地一枚下で、生硬い弾力を秘めた丘が指の動きに合わせてたわむ。ささやかだが完璧な左右非対称の美しさを誇る双丘。やんわりと膨らむ丘の頂上には小さな突起物がチラリと確認できた。そんな扇情的な光景を目と鼻の先で見せつけられて、僕にはロリコンちの気はないはずなのに、腰から背筋を這い上がるようなゾワゾワとした欲情を覚えた。思わず頬がヒクヒクとニヤけてしまいそうになるのを必死で堪える。

だ……駄目だ……まだ笑うな……こらえるんだ……し、しかし……「イイデデデデデッツ!!？」

左尻ツ!!再び左尻に走る激痛ツツ!!肉食獣のような爪を立てて僕の尻に何かが襲い

かかっているッ！気をつける坂井悠二ッ、スタンド攻撃を受けているぞッ——！！

「だから誰なんだよ執拗に左尻ばかり狙うのは！せめて右も狙わないと不平等だろ——あ、吉田さん。ごめん、ゴリラみたいな握力をした怪しい奴を見なかった？」

さつと振り返るも、後ろには吉田さんしかいなかった。相手を間違えて激昂してしまつた僕の質問に、親切な吉田さんは首をふるふると左右に振る。犯人はいつたいたいどの誰なんだよ。しかし、吉田さんはなんていじらしくお淑やかな女の子なんだろう。シヤナとサユに爪の垢を煎じて飲ませたい。

「お、緒形さん、もうやめてください、あつ」

「ちよつと、お、緒形あー！」

振り返ると、緒形さんはシヤナとサユをぬいぐるみのように懐に抱き寄せてまだ感触を楽しんでいた。二人とも体重は30キロ半ばほどしかないだろうから、スポーツ女子の緒形さんにとっては逃れられないように抱き寄せるのは朝飯前だ。当然、フレイムヘイズである二人が本気を出せばあつという間に抜け出せるのだらうけど、そうすると緒方さんを傷つけてしまうと弁えているのだ。

そんなことなど露とも知らない緒方さんは、眉根を寄せてイヤイヤと首を振る二人の拒絶などお構いなしに胸を揉み続ける。女性同士の無礼講というのは実に羨ましい——むつ、左尻に殺気を感じる!?!どうやら恐ろしい尻シッアルキラーは僕がシヤナとサユに

意識を釘付けにしたタイミングを狙っているらしい。何が目的なのかは定かではないけど、気をつけないと。

「んふふ、よいではないかよいではないか。二人ともやっぱり双子なだけあって、バスともまったく同じ——ん？」

不意に、緒形さんの片方の眉がピクリと訝しげに跳ね上がった。揉む手付きが、感触を樂しむものから何かを確かめるそれに変化する。なんということだ。僕は口に手を当てて騒然とした。彼女は氣付いてはいけないうものに氣付いてしまった。

同時に、シヤナとサユも電氣が流れたようにビシリと身体を硬直させた。しかし表情は正反対。一方は怒りに。一方は怯えに。二人の間に明確な亀裂が走ったのだと第六感が察した。さつきまで仲の良かった金剛力士像が唐突に仲違いを起こしたような錯覚が重ねて見える。阿形像の首がギリギリと音を立てるようにしてゆっくりと右を向き、刺さる視線を突きつけられた吽形像がたまらず目を逸らしてブワツと額から汗を流す。

さすがの爛漫な緒方さんも、シヤナの両肩から滲み立つ怒気を察して、触れてはいけないデリケートな琴線に素足でダイレクトアタックをかましたことを理解したらしい。顔面筋が笑顔のままひくつき、シヤナとサユの胸を揉みしだく格好のまま硬直した。ああ、どうして人間は自らの好奇心を制御できないのか。

「……緒方、どうしたの？ 続きをどうぞ？」

「え、あ、ええつと、その、ふ、双子でも成長具合が異なるのは当然っていうか、仕方ないっていうか、気にすることはないんじゃないかな〜って」

「私は、続きをどうぞ」と言っただけ」

贅殿遮那を一閃したかの如き鋭い眼力だった。ハイライトの消えた目をじとりと据わらせたシヤナの迫力に気圧されて、緒方さんどころか周囲の空気すら凍りついた。夏真つ盛りだというのに身体の芯まで凍りついてしまいそうな怖気が背筋を貫く。

「お、緒形さん……！」

サユが緒方さんの手を握ってうるうると哀願する視線を投げる。「言わないで」という魂からの懇願だ。頬を引くつかせて途方に暮れる緒方さんが一縷の助けを求めて僕の方に顔を向けるも、僕もまたさつとあらぬ方向に顔を向けて雲の数を数え始める。「薄情者」という呟きが聴こえた気がした。ごめん、緒方さん。竜のヒゲをなでて虎の尾を踏んだのは君なんだよ。胸中にそつと呟き、三度目の合掌を緒形さんに厳かに送る。南無。

プールが重油を流したような重い静寂に包まれるなか、ゴクリと意を決した緒方さんが喉を鳴らし、口を開ける。

「さ、サユちゃんの方が、ちよつとおっぱいが大きいんだなあ〜って——ごめん、サユ

ちゃん」

薄氷が割れた、という直感が稲妻のように全員に走った。言って、緒形さんがスルスルと二人から後ずさる。サーツと青ざめていくサユの顔を、恐竜のように首をゆつくりと回しながらシヤナが間近から覗きこむ。近くにゐる僕にしか聴こえないような小さな、でもアラストールばりに低い声で、詰問する。

「サユ、アンタは私の忠実なコピーなのよね。テイレシアスに贋作してもらう時に私の姿を思い浮かべたって言ってたわよね。だから私と瓜二つのはずなのよね」

「ソ、ソウデスネ」

「なのに、どうして、アンタの方が、大きいの？」

「ソ、ソレハデスネ」

サユが汗をダラダラと流して片言の返事をする。その隙にそつとシヤナに近づき、ボソリと意趣返し。

「サユのこの顔はね、シヤナはもつとあると思ってた”って考えてる顔だよ”
「ば、バカ……！」

凶星を突かれたサユの顔色が変わる。フレイムヘイズは『過去』『現在』『未来』の『可能性』をすべて紅世の“王”に明け渡すことで自身を“器”とする。そうして己の存在の全てを捧げることで、紅世の“王”をその身に宿した不老の戦士となるのだ。彼彼女

たちは決して老いないし、成長もしない。これはサユにしても同じで、贗作してもらった肉体には『未来』の可能性はないため成長はしない。だから、サユがシャナを抜いて成長することはない。だというのにサイズに違いが生じる理由は何か。答えは簡単。発注ミスだ。

サユから聞いたところによると、シャナそっくりの肉体を得ることになったのは、テイレシアスに「最強の肉体を思い浮かべろ」と言われて即座にシャナを連想したからだという。その際に思い浮かべたシャナの姿かたちがそのままサユの肉体となつている。つまり、サユはシャナのサイズをもつと上だと思いきんでいたわけだ。慌てふためくサユの反応からして、サユもどこかのタイミングでそのことに気付いていたらしい。

「サ〜ユ〜！」

頭の回転が速いシャナはすぐさま僕と同じ結論に至った。ズモモモとシャナの背後に稲妻轟く暗雲が立ち籠めるのを確認すると僕は4度目の合掌とともにさつと踵を返して立ち去る。さらばだ、サユ！別に、サユを誘うためにシャナが買うはずだったメロンパンを横取りしたせいで彼女から烈火のごとく怒られに怒られたことの八つ当たりではない。ホントウダヨ。サカイユウジ、ウソつかない。

……が、腰にガツシリと回された細い両腕に動きを封じられてその場に固定された。空中に縫い留められた胴体の下で足だけがバタバタと回転する。人間離れした万力の

よような腕に締め付けられ、目が飛び出そうだ。

「悠二さん、せめて貴方も道連れです！」

「さ、サユ!?!」

ギョツとして頭だけで振り返ると、涙目のサユが決死の様子で僕の背中に張り付いていた。バックドロップをされそうな力強さだ。でも、僕は痛みとか恐怖とかよりもっと切実な感情に支配されていた。そんなに背中に密着されると――

「さ、さ、サユさん！む、む、胸が！」

まるで温水をこめた水風船のような不思議な感触だ。腰裏にムニユツと押し付けられる温かく柔らかな双丘に、健全な男子高校生の精神はジェットコースターのように激しく動揺する。異性の女性らしい部分とこんなに濃密に触れるのは初めての経験だった。熱い体温を包み込むスクール水着のギユチギユチとしたゴムっぽい肌触りが扇情的だ。「この一枚下には一糸まとわぬ神聖な部位が」と脳みそが勝手に想像し始める。暴走するな、大脳新皮質！外見は女の子だけど、中身は自分なんだぞ！初めての経験が自分ってどうなんだ！

「胸が当たってますって！ガツシリ当たってますって！」

「当たてんのよ！」

「なにそれ懐かしい！じゃなくて――はっ!?!」

瞬間、殺気を察知して身体が硬直する。そちらに目をやれば、燃えるような灼熱の眼光。ズドンと右足がプールサイドの舗装を派手に食^はんで穴を穿つ。ひくひくと恐怖に顔を引きつらせる僕らの瞳に映るのは、体を横向きにして腰だめに掌底を放つ寸前の予備動作。見事極まる八極拳の奥義『冲捶』^{ちゅうすい}が『川掌』^{せんしょう}の構えだった。

「サユと悠二の——バカア——!!!」

「ごめんシヤナ——!」

「なんで僕まで——!?!」

激情に顔を真っ赤にしたシヤナが光を放った、ように見えた。一般人の動体視力では彼女の奥義は速すぎたのだ。およそ人間業とは思えない、トラックに跳ねられたような鈍重な衝撃が僕とサユを突き抜ける。気付いたときには、僕とサユは空中にビブラートの尾を引きながらプールの水面に向かって放物線を描いていた。「おおっ!」という称赞のどよめきを聞きながら、僕らは心躍る異世界に転生することもなくそのまま水中へと叩き込まれる羽目になった。

「決着ウウ——ツ!!」

両サイドで髪をお団子にまとめた女性体育教師の決め台詞じみた咆哮が蒼天を突き抜ける。なんだろう、やつぱり刑務所が似合う気がするんだよなあ。